明治三十七年六月五日發行
毎月一回五日發行
第三種郵便物認可

女學世界

第四巻第七號

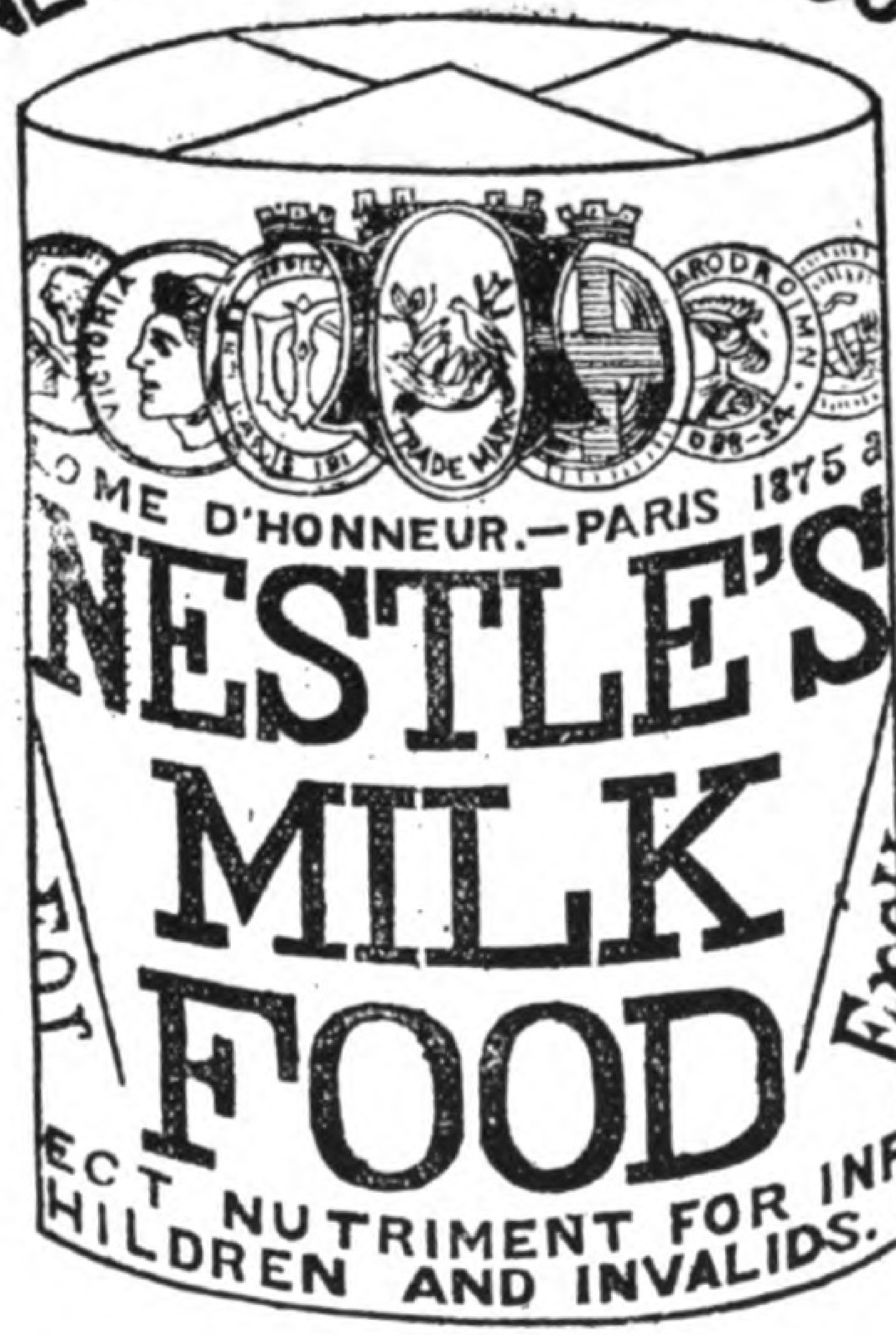

東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣奉希上候

女學世界 第四卷第七號 目次

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品

各國醫科大學、大病院、

醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

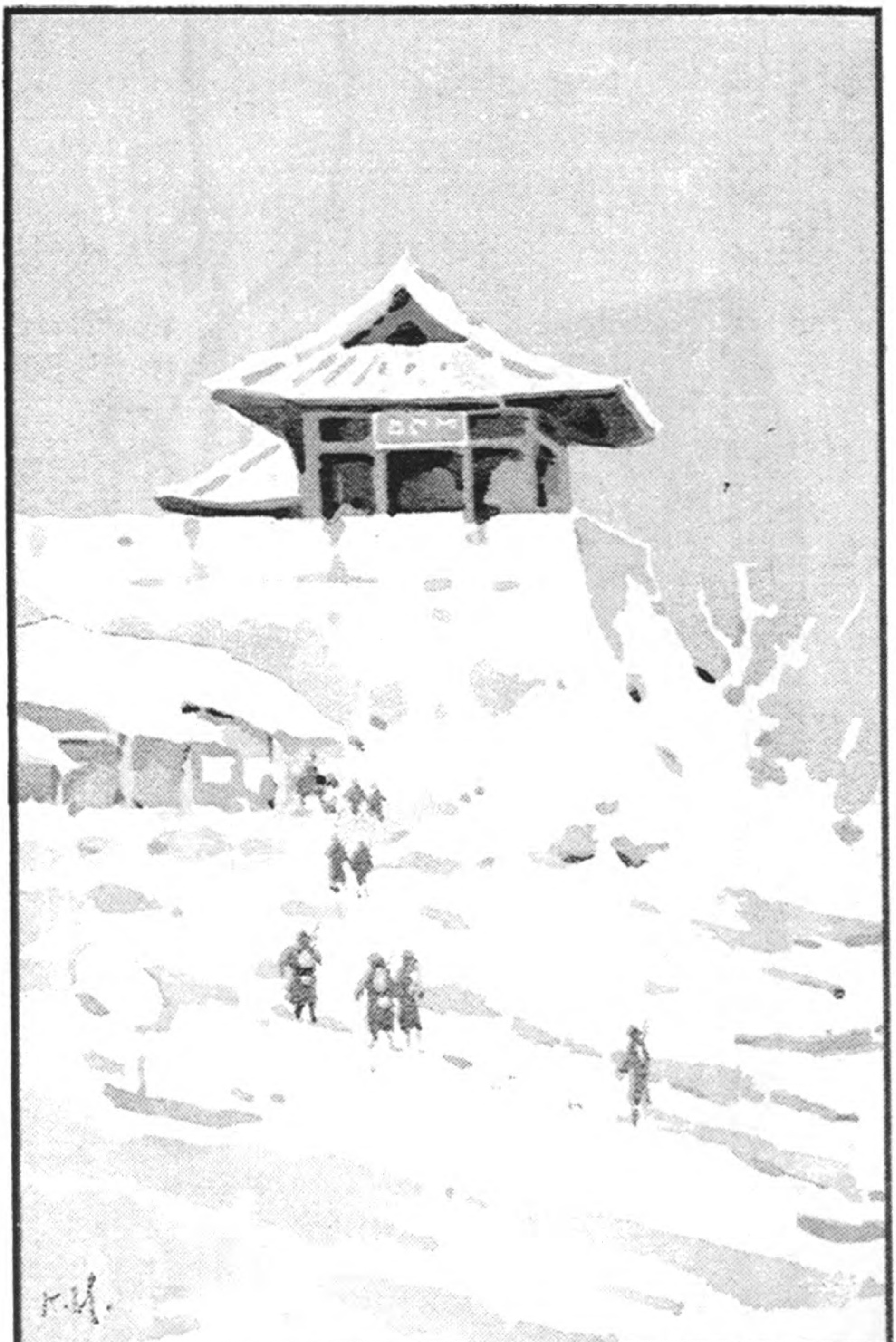
（全國洋食品店及藥舗にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

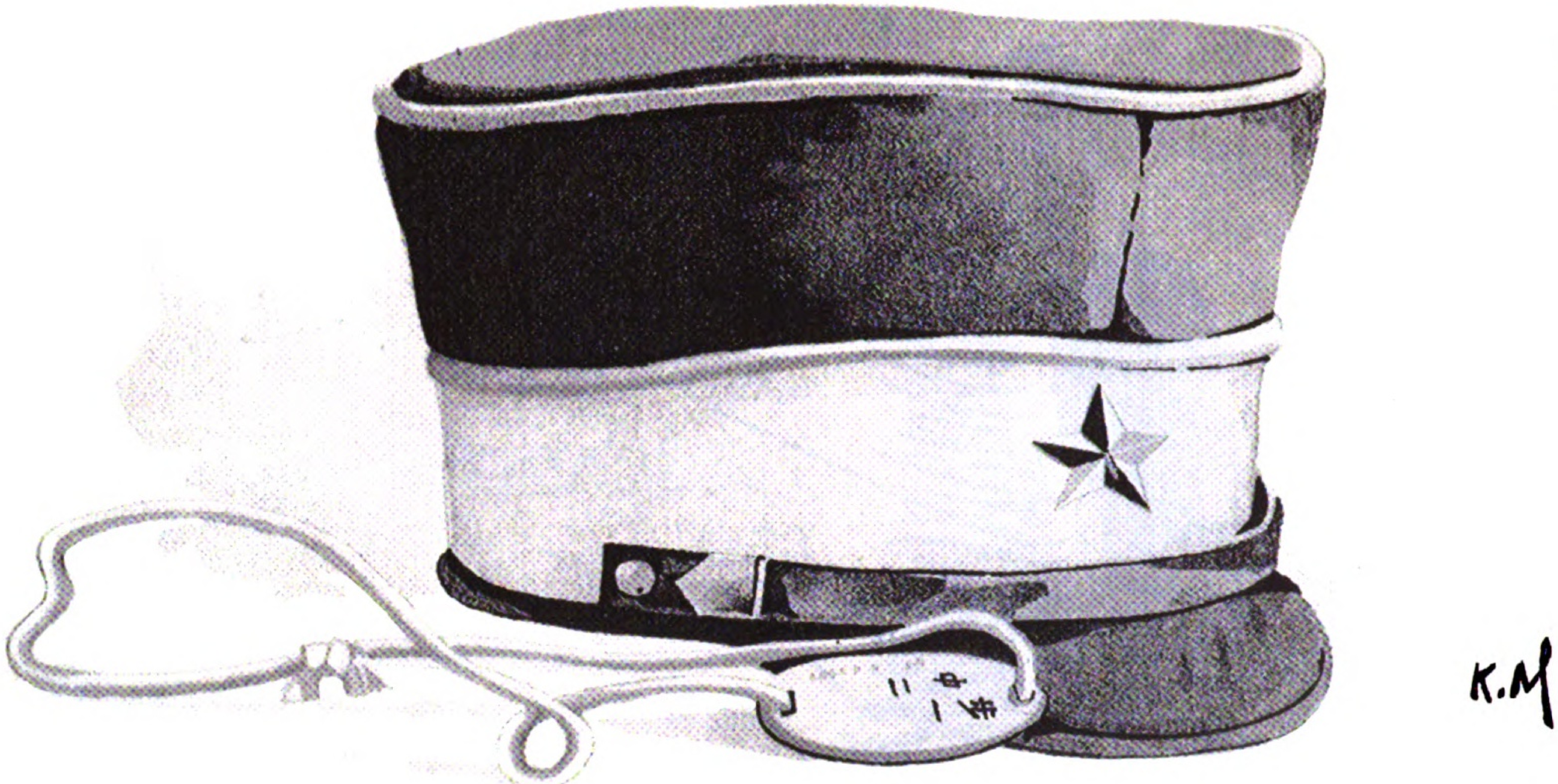
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

牡丹臺雪景



三宅克己氏筆

軍帽

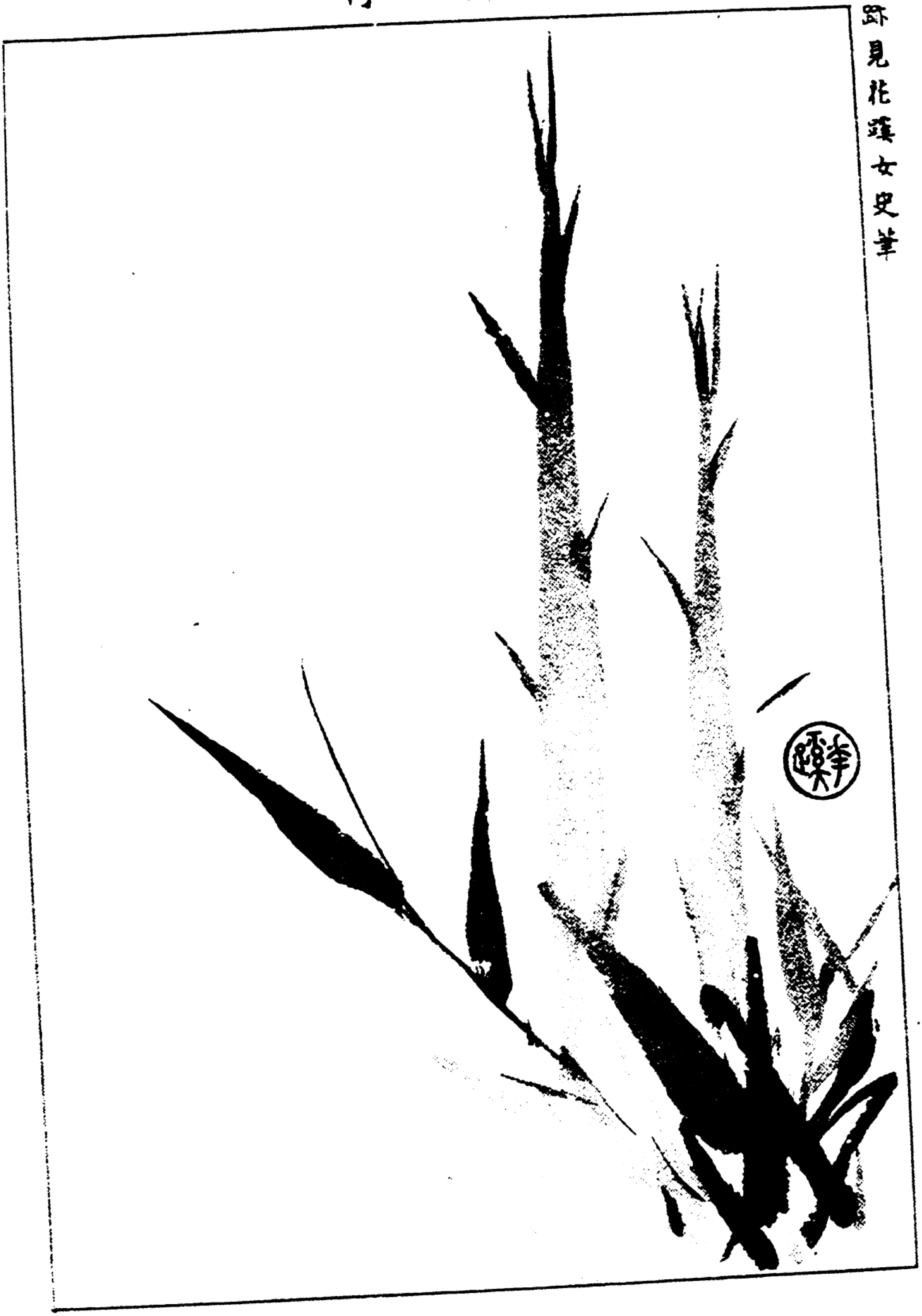


三宅克己氏筆

跡見花蹊女史筆



新竹



跡見花蹊女史筆

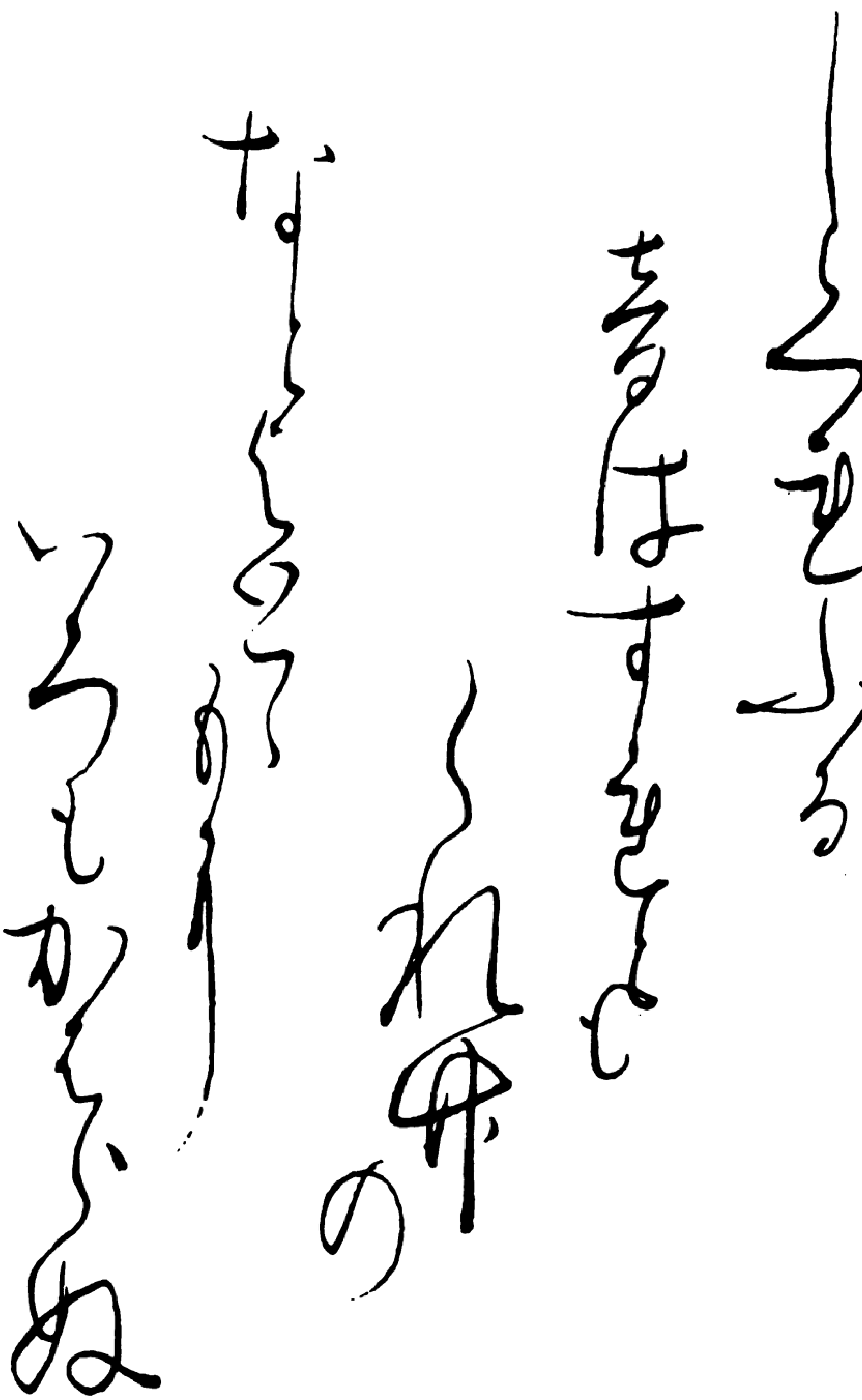
垣のうち乃なかに波のとし
多とるる子ナよ代まつ物かく
ぬりに海戦のさま思ひ
しのばれしにまさり日なく
夜よくや月傷み乃彼方

たもと野分ゆる人もなきと申に
てと流原おくらくゆへし給氏
ことある親者とは成常覚させて
しへたる人のまの佐伝へ給はて
ならさせる待給ふなるやのこと

延箏來抽鳴
鳳管盤根絛
點劃龍文

跡見花蹊女史筆

跡見花蹊女史筆



（甲の一）

（甲の二）

新治療薬 レウチス の 最新發見 THE GINEL

なると問はず非凡なる効驗あり 試に一劑を用よ忽ち偉大なる効驗あり

一劑八拾五錢 一劑壹圓六拾錢 貳劑參圓

藥名(ギーネル)本劑にリヨマチスの最新藥にして現今最も賞用せらる一種の有力なる新劑なり 右驗たる無効藥品の比にあらず

ギーネル と稱する

筋肉も リヨマチス と關節

無効賣藥と同視する勿れ

根治確証 わきが 治療薬

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清掃駆逐し根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ゐよ兩三週に用て苦惱を脫せよ

必ず全治して決して再發或は他病に變せず

丙價七十錢 乙價壹圓廿錢 甲價特製貳圓五拾錢

化學製品 色の白くなる 防ンドーコロン容液

本劑に貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新秘方奇劑にして流行の本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第々々に新陳代謝を盛ならしめ

皮膚を漂白するを以て如何程色黑き人もB印特製を用ゐれば白色艶美の容貌と男女共交際上最も必要の品なりA印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾參錢

らい病 新治療藥 ダービン

本劑は最近歐州諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして素人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有効確實なるを以て保證す 希ふ先づ試に壹劑丈けも用い見よ 必ず大効あり 壹劑廿日分三圓 二劑四十日分五圓 三劑六十日分七圓 郵券三錢送說明書進呈

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

太陽散 引風一切 造治新藥

風は萬病の基輕きとて打捨置く時は。諸々の恐ろしき病を起すこと少なからず。故に人常に此の。獨逸にて最近發見の貴重新藥を以て調製したる「太陽散」を備へ置き。機に臨み服用し以て後の難義を遁れ給へよ

價(四十包入五十錢 ●十五包入廿錢 ●七包入十錢 ●三包入五錢 ●郵送料各二錢

本舖 本石町大通角

合資會社 博愛堂 電話本局二八六番

肺病

千葉縣安房郡北條町

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵封入にて御照會あれ

川名助次郎

移轉

下谷區西黑門町廿三番地より府下荏原郡大森町中原百七十三番地へ轉居す

杉山常次郎

(甲の三)

●家●庭●の●良●友●

割烹大家 赤堀峯翁　日本女子大學敎授 赤堀峯吉　東京女學館敎授 赤堀菊子 共著

家庭十二ヶ月料理法

本書は著者が多年各女學校に於て實地に敎授せし日本料理法及菓子製造法を詳密に記載せるものにして普通一般の料理法は勿論日常の惣菜料理に至る迄各四季十二ヶ月に分ち家庭を主とし貴婦人令孃が實地に試み得るやう懇切に説明を施し又懷石料理、儀式的獻立、祝祭節句料理、漬物加減法、食物原料編、食品の説明及分析等をも示し且つ行文努めて平易なるを以て如何なる人と雖も一度本書を繙かば直ちに著者に親炙して傳授せられたると異なることなし

和裝美製全二册
上卷一册 金五十錢
下卷一册 金五十錢
郵税一册に付金八錢

新刊

龜屋主人 杉本新造著
増補日用 **西洋料理法**
洋裝全一册 正價金四十錢 郵税六錢

華族女學校敎授 小野鷺堂編并書
増訂 **女子手紙之文**
和裝全一册 正價金四十錢 郵税四錢

開坂 根正直著 正臣著并書
新刻 **筆のゆきかひ**
和裝全二册 上下各金四十錢 郵税各四錢

落合直文著 小野鷺堂書
女子消息 **雁のゆきかひ**
和裝全二册 上下各金四十錢 郵税各四錢

發行所 東京日本橋通一 大倉書店 電本四一四番

(甲の四)

最新農業書出版

農學博士 南鷹次郎先生校閱
農學士 今村猛雄先生新著

最新 蔬菜栽培書

全壹冊洋裝大判上製頗美本　口書コロタイプ版三葉
紙數四百餘頁　緻密精巧木版百三十六圖挿入
正價金貳圓　小包料拾錢

蔬菜栽培は園藝の一科なり、集約的農業なり、之が栽培は穀菽に比して頗る注意と熟練とを要す、而して種類の多き、莖葉根果需むる部分の異なるに從つて性質を異にす、加ふるに近時洋種蔬菜の船栽漸く多く、特殊の栽培法を施すべきもの等あるに關らず、之が解説を下したる書に乏しき時に當りて、此著あり、農界に貢獻する蓋し大なり、本書は編を分ちて、通論及各論とし、通論には蔬菜栽培一般の要素を説き、各論には記載する蔬菜七十餘種を詳細に解説して栽培の方法を示し、疾病の徴候、害蟲の習性を敍して、豫防驅除の法を説き、尙善良なる品種をも指示せるを以て、園藝家は左に書を携へ、右に鍬を提げて、實地の友となすべく、農學を修むるの士は、坐右に備へて參考の資に供すべく、復正に農業學校の教科書に必適せり、而して説明の親切丁寧、挿圖の緻密明晰なるは、此種の著書中比類少き一大良書なれば、速に購讀の榮を賜へ。

◎近刊農業書類◎

農學博士佐藤昌介先生校閱
農學士佐藤昌先生新著
最新農業經濟論

農學博士佐藤昌介先生序文
農學士増田貞吉先生新著
實驗肥料學大意

農學士梁田斌先生新著
最新作物害蟲篇

農學士大町信先生新著
最新稻作改良篇

發兌書肆　東京日本橋區本町　博文館
發兌書肆　東京神田表神保町　東京堂書店

(甲の五)

博文館創業第拾七週年紀念

☞見よ!! 我國民活動の新舞臺……☞

我が政治上、經濟上に於て、重大なる關係を有するは、是れ滿韓及西伯利亞地方にあらずや、我同胞が活動すべき舞臺は是れ滿韓及西伯利亞地方にあらずや、我百萬の精鋭劍光を閃かし砲聲を轟かすは、是れ滿韓及西伯利亞地方にあらずや、然れども其地未だ開けず其民未だ化せずして此等の地方に對するの研究久しく世人の注意を拂はれず、從て好個の著書あるを見ざりしのみならず、滿韓及西伯利亞なる大體の觀念を與ふるに足るものすらなかりしは、現下の一缺點となす所なりき

太陽臨時增刊 滿韓大觀

六月十五日發行

本書は滿韓及西伯利亞の歷史、風俗、人情より商工、政治等の關係に至るまで盡く之を網羅して簡明に叙述し、一讀該地方の我政治經濟に及ぼす由來と現狀とを了知せしむるに足るもの、今や時運は急轉して、該地方に於ける經營擧けて我國民の雙肩にあり、本書は啻に滿韓及西伯利亞地方に志あるものゝ指針たるのみならず、又我同胞の將さに活動せんとする舞臺の大觀、砲聲山河を震動し、風雲原野を捲くの地、利源滾々、長く我帝國の富を增さしむるに足るの地、將さに此書によりて、闡發せられんとす

☞見よ!!! 劍光砲烟の天地……☞

—(正價金三拾錢郵税三錢)—

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(甲の八)

東伏見宮妃周子殿下



（博進社工塲印行）

兒玉男爵の家庭



長男秀雄氏　令弟文太郎氏　次男定雄　三男友雄　四女鶴子
兒玉中將　夫人マツ子　令姉久子刀自　令弟夫人たゞ子　長女こし子　次女仲子　令婿芳雄
五男國雄　三女元子　六男八郎　四男常雄　七男九一

米國兒童の同情



米國サンライト小學校生徒マギー女史の一行を送る



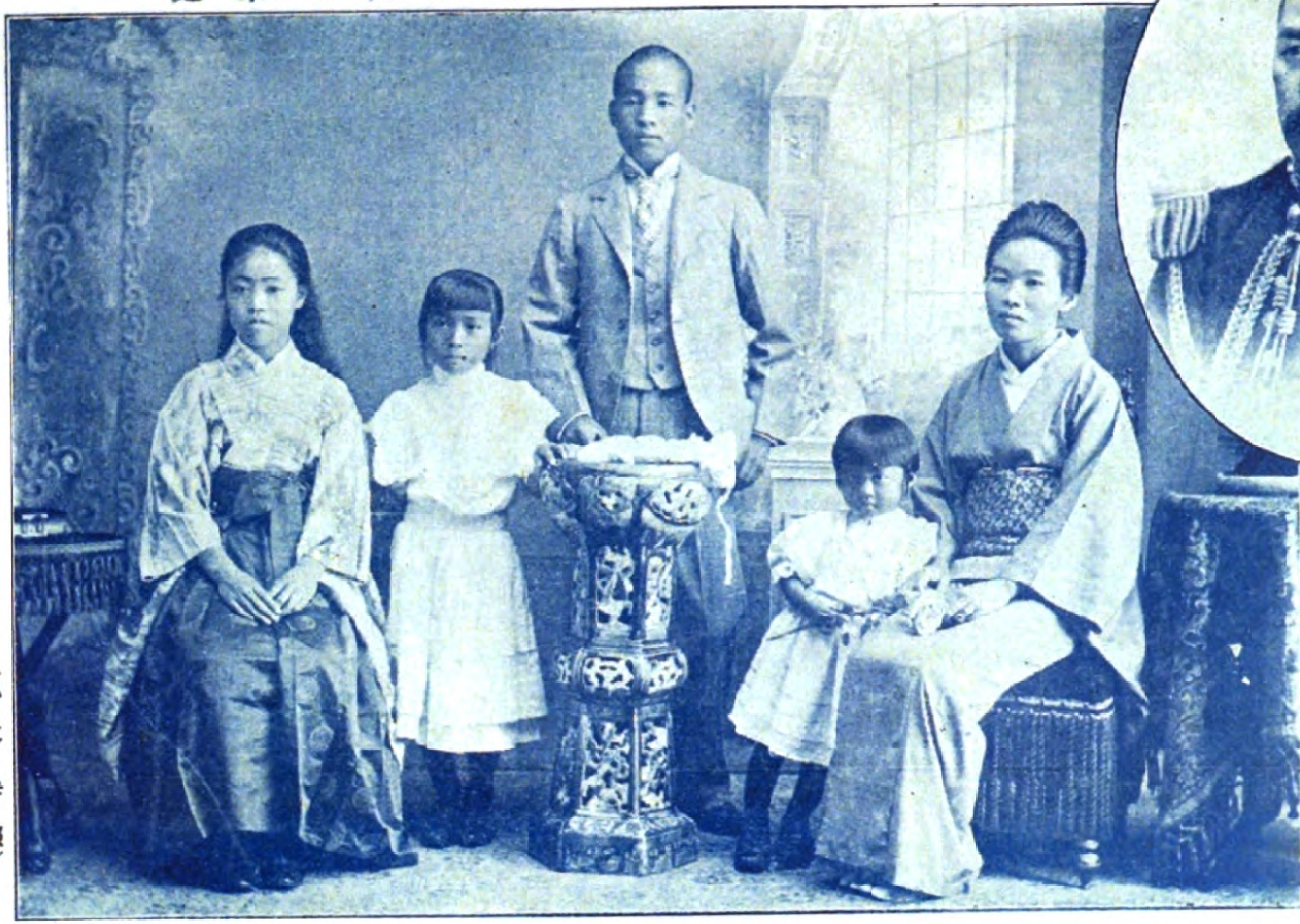
西本願寺裏方大谷籌子

時局判じ畫



この畫はどなたの身の上を書いたものでせうか讀者諸君當て御覽なさい當つた御方には先着三名に限り賞品をさし上ます

旅順攻撃の勇将武富大佐の家庭





（記事参照）

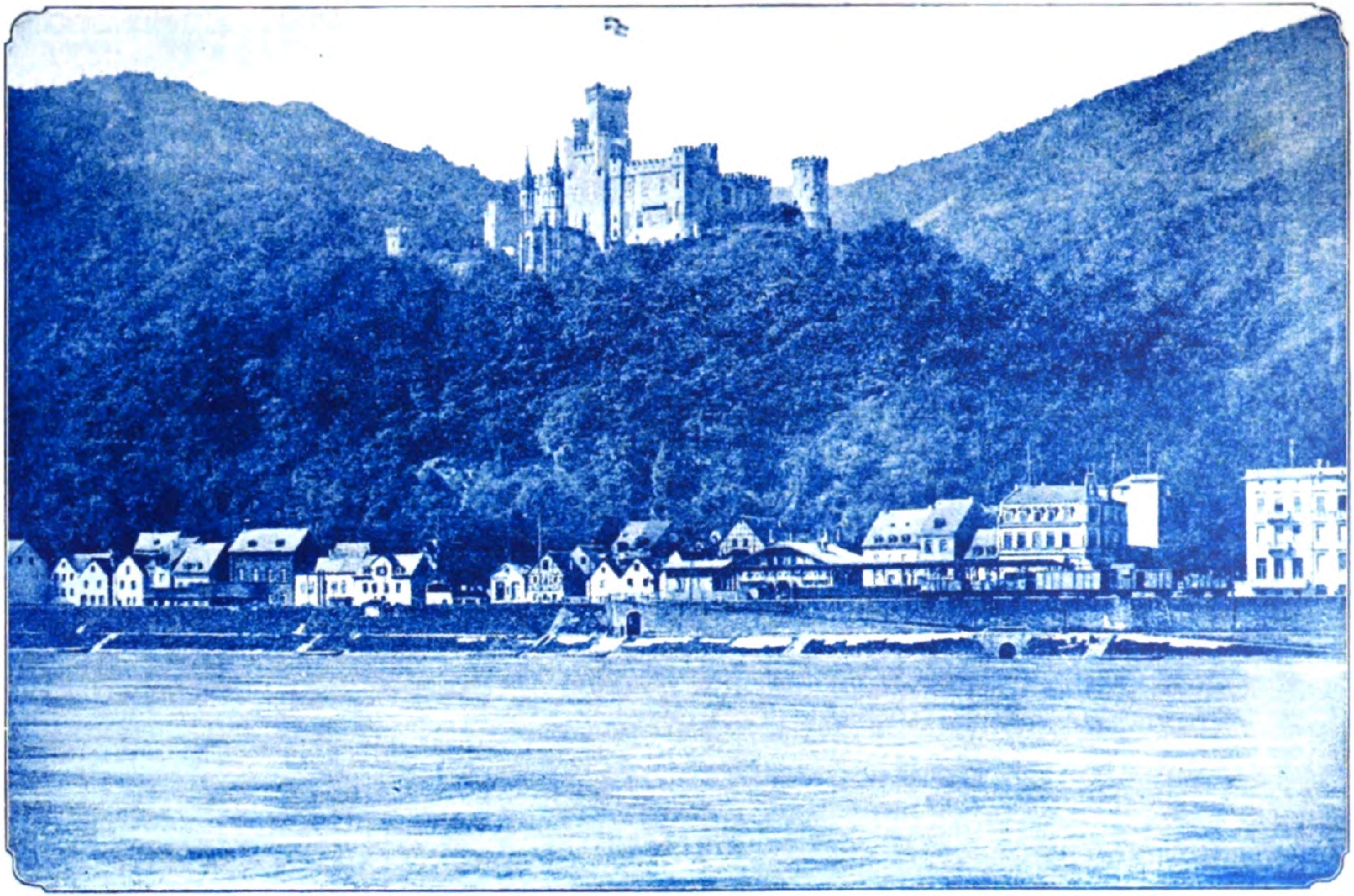
露西亞中等社會の家庭



旅順口駐在露國技師の一家族

社會欄(旅順口の避難)參照

歐洲風物



獨逸萊因河畔ストルチエンヘルス城

工業叢書

黑田政憲君著◉水及油　正價五十錢　郵稅八錢
市川工學士著◉陶器製造化學　正價六十錢　郵稅八錢
糸山工學士著◉機關車　正價六十錢　郵稅八錢
村瀬工學士著◉搆造强弱學　正價六十錢　郵稅八錢
重見工學士著◉工場管理法　正價八十錢　郵稅十錢
大島工學士著◉電氣工學一班　正價六十五錢　郵稅八錢

君島工學士著◉道路學一班　正價六十錢　郵稅八錢
矢野工學士著◉油類工業分析　正價五十錢　郵稅六錢
町原工學士著◉動力發生及分配　正價壹圓　郵稅十二錢
榎岸工學士著◉瓦斯及石油機關　正價五十五錢　郵稅八錢
井上農學士著◉釀造法一班　正價六十錢　郵稅八錢
佐藤　河井兩君著◉工業經濟　正價五十五錢　郵稅八錢

工學士　野津正之助君著

調帶及調繩

全壹冊　洋裝上製　金字入　正價　郵稅

近時工業の發達に連れ、人は漸く手工と離れて動力の供給と機械に待つに至れるは爭ふべからざるの事實なり、而して機械と機械の間に介在して動力傳達の媒をなすものを調帶及調繩とす、調帶及調繩の工業上須要のものたるは明なりといふべし、知らず此調帶及調繩は如何にして之を作り、如何にして之を取り附け、如何なる働きを機械に與ふるか、又は如何にして之を作り、如何に之を取り付くるによりて、最も良き調帶及調繩を得、又最も利便を計るを得へき乎、本書此點に付て說く詳密且引證甚た豐なり、工業に從事するものの及之に志す者の一讀せさるへからさる良書なり

伍堂工學士著◉工業用金屬材料學　正價六十錢　郵稅八錢
河原工學士著◉染色法　正價壹圓　郵稅十二錢
久野工學士著◉水理一班　正價六十錢　郵稅八錢
簑田工學士著◉硝子製造法　正價八十錢　郵稅十錢
淺野工學士著◉アルミニューム製造法　正價七十錢　郵稅十錢
齋藤理學士著◉工業用植物纖維　正價五十錢　郵稅六錢

增田工學士著◉船用機關學　正價六拾錢　郵稅八錢
久野工學士著◉實地土木工學　正價八十五錢　郵稅十錢
矢野工學士著◉繪具製造法　正價八十錢　郵稅十錢
町原工學士著◉紡績一班　正價八十錢　郵稅十錢
重見工學士著◉工業數學　正價九十錢　郵稅十錢

▲以上既刊洋裝上製四六判▼

(乙の二)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

全書新刊

第百十編

農學博士 横井時敬君著

稻作改良論

（近刊）

第一章 稻の概況
第二章 稻作天然要素
第三章 水田と排水
第四章 稻の品種
第五章 稻の撰種
第六章 浸種
第七章 苗代
第八章 本田の整地
第九章 移植又挿秧
第十章 灌漑
第十一章 除草
第十二章 施肥
第十三章 收穫
第十四章 稻作蟲害
第十五章 稻作と經濟

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

第百十一編

法學士 窪田隆次郎君著

工業政策

（近刊）

石炭に富み、勞力に富み、而して人は即ち敏捷練熟、しかも其賃金代價の廉なるは我邦の將來、工業國として興起すべきことを事實に敎ふるものにあらずや、我國民は農業を以て立國の基礎となせる舊夢より覺めざるべからざるなり、然るに其指導保護を爲すべき著書の乏しきは、豈に之を缺點にあらずとせんや、此書各種の自衛團体、督促制度、保護機關、補助的設備等に涉りて、工業政策を說くと、丁寧親切なり、經世愛國、國家に盡さんとするは素より生存競爭の活舞臺に於て、優勝者たるの地位を占めんとする士は、一讀を忘るべからざるなり。

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

區本町三丁目 博文館

（乙の三）

法學士 武田千代三郎君著（六月十五日發行）

理論實驗 競技運動

全壹冊

洋裝上製總クロース製
正價金壹圓
郵税十四錢

(乙の四)

武田法學士著

心身鍛練 少年競技運動

（全壹冊洋裝 插圖六十個）
正價金十八錢
郵税金四錢

本書は室外教育の理法に通曉せる武田先生が我帝國少年の爲みに何如にせば能く其心身を訓練して大國民たる實力を養ひへきやの問題を極めて簡明平易に解說せられたる空前の良書にして戰時少年の好讀み物なり

發兌元 東京本町 博文館

文學士大町桂月君著

軍國訓

全壹册洋裝袖珍
正價弐拾八錢
郵税四錢

一隻の烱眼、時勢の表裏を洞察し、日露戰爭の由來を明にするのみならず、日本の國是を説き、特長を説き、日本人の進路を説き、覺悟を説く、其説く所警拔にして痛切、行るに縱横靈活の筆を以てす、苟も國家の憂を解して、今後日本國の爲めに盡さんとするの士は、必ず一讀せざるべからざる好著述なり

學生訓

正價二拾錢
郵税四錢

桂月先生曩に道德實踐法の著ありて道德の大綱を説かれ今又此著ありて青年學生の學問と躬行とに資せらるゝ説く所奇警にして着實而も趣味ありて乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好模範たり學生諸君一本を備へて坐右の銘とせざるべからず教育家又參考の好資料なり

續學生訓

正價二拾五錢
郵税四錢

青年學生諸君の友となりて學藝上、實行上、教導し、忠告し訓戒するもの、學生訓是也。續學生訓出でゝ、更に一の益友増したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ卷の終るを忘る、苟も志あるものゝ机上此書を缺くべからず。

女學生訓

正價二拾五錢
郵税四錢

本書は家庭以外學校以外の女子教育家桂月先生が獨特の才筆奇警なる觀察を寓し趣味津々として讀て面白きが上にも女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂る眞に女子教育上の鐵案といふべく又女學生の指針たるへきものなり

發兌元　東京日本區本町三丁目　博文館

中學世界夏期增刊

世界十五大戰爭

六月廿日發行
正價二十錢
郵稅二錢

征露の旗幟一たび動いてより海戰に於ける我軍の連捷は早く已に世界の耳目を聳動し、而して陸上の大活劇亦方に鴨綠江頭にその初幕は開かれ、今や東亞の天地は永く後世に記憶せらるべき幾多大戰爭の活舞臺たらんとす。此際に當り世界に於ける古來の大戰爭なるものゝ歷史を知るは最も興味ある事柄なりとす。是に於て本誌は古今東西の著名なる戰爭十五を撰んで諸名流の起稿を請ひ「世界十五大戰爭」と題して、夏期增刊とし發行せんとす、收むる所の項目は下に掲ぐるが如し。

- ●ウオートルローの戰……鳥谷部春汀
- ●崖山の戰……久保天隨
- ●サラミスの戰……笹川臨風
- ●川中島の戰……西村天骨
- ●セバストポールの戰……藤澤古雪
- ●カンネーの戰……鹽井雨江
- ●昆陽の戰……宮崎來城
- ●トラファルガーの戰……長谷川天溪
- ●赤壁の戰……國府犀東
- ●セダンの戰……安倍北水
- ●アルマダ艦隊……横山健堂
- ●關ケ原の戰……松原廿三階堂
- ●垓下の戰……大町桂月
- ●バンカーヒルの戰……上村左川
- ●山崎合戰……鷹野止水

前掲の外懸賞軍歌數十編附錄として掲載せらる

（乙の六）

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

女學世界夏期增刊

婦人壯烈譚

六月十五日發行
正價二十錢
郵稅二錢

口繪 寫眞版
▲國威發揚 田内千秋君筆
▲王昭君 田内千秋君筆
▲軍國三妃殿下
▲新郎新婦 露國風俗
▲平和
▲無邪氣
▲米國篤志看護婦
▲軍人家庭 其一
▲軍人家庭 其二
▲軍人家庭 其三
▲軍人家庭 其四
▲戰場來信 福田參仙君筆

我が國民今や世界有數の大國を敵として戰ふ、出師二十萬、遼東の野到る處砲火の巷ならざるなし、是實に空前の大役にして又非常の時たり、この非常の時に當つて尋常の家事を營み得るもの偏に我が勇士壯烈の結果に依らずんばあらず、然れども國民的戰爭の裏面には婦人も又家に在つて軍務に役するの覺悟なかるべからず、本篇壯烈譚は以て軍國の婦人に資する處亦尠少ならさるなり。

●攝政太后征韓の威烈 大町桂月
●世界大戰婦人壯烈實話 松浦政泰
●王昭君胡國入輿記 香蘭女史
●佛國革命の名花 郎蘭夫人
●大阪城中の烈婦 岫雲小史
●カザリン二世皇帝 西村早苗子
●赤十字の活動 藤本夕颸
●戰國名婦の面影 大鷲子
●鐵血少婦ジョアンダーク 荒木嘯月
●振天府拜觀記 矢島錦造
●戰場の夕暮 村の人
●露國觀光記 女學記者
●旅順口の夢 大塚楠緒子
●蒙古襲來記 堀内新泉

發兌元 日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の七)

大日本地誌

第壹卷 關東

都市彩色地圖拾葉
寫眞銅版貳百餘圖
總紙數九百三拾頁
正價二圓五十錢
小包送料十五錢

總論

第一編 地文

第一章 地形
◎概說◎相摸◎武藏◎安房◎上總◎下總◎常陸◎上野◎下野

第二章 海洋並に海岸線
(一)相摸灣(二)東京灣(三)大平洋沿岸(四)海流並に潮

第三章 地質
(一)汎論(二)三波川系(三)古生大統(四)中生大統(五)新生大統(六)噴出岩(七)溫泉

第四章 氣候

第二編 人文

第一章 沿革
(一)先史時代(二)太古より寧樂朝時代に至る(三)平安朝時代(四)鎌倉幕府時代(五)南北朝時代(六)後鎌倉の時代(七)諸侯割據攻伐の時代(八)織田豐臣氏の時代(九)江戸幕府時代(十)維新以後

第二章 政治、宗教
(一)行政(二)司法(三)軍事(四)教育(五)宗教(六)交通

第三章 產業
(一)農業(二)林業(三)水產(四)工業(五)鑛業(六)商業

第三編 地方誌
東京府伊豆七島小笠原島、神奈川縣、埼玉縣、群馬縣、千葉縣、茨城縣、栃木縣

理學士山崎直方先生
理學士佐藤傳藏先生
共編

齊藤文學士、大日方理學士、大塚文學士、田山錄彌君、前田勵君、遠藤重男君 補輯

第貳卷 奧羽

石版彩色地圖八葉
寫眞銅版百七十圖
總紙數九百六十頁
正價二圓五十錢
小包送料十五錢

總說

第一編 地文

第一章 地形
◎概論◎磐城◎岩代◎陸前◎陸中◎陸奧◎羽前◎羽後

第二章 海洋並に海岸線
(一)太平洋沿岸(二)津輕海峽及陸奧灣(三)日本海沿岸(四)海流(五)近時に於ける重要なる地變—庄内地震、陸羽地震、三陸海嘯

第三章 地質
(一)汎論(二)始原大統(三)古生大統(四)中生大統(五)新生大統(六)噴出岩(七)溫泉

第四章 氣候

第二編 人文

第一章 沿革
(一)石器時代(二)佩玉時代(三)上古拓植彩色時代(四)中古豪族勃興の時代(五)鎌倉時代(六)南北朝時代(七)戰國時代(八)豐臣時代(九)德川時代(十)明治時代

第二章 政治宗教
(一)行政(二)司法(三)軍事(四)教育(五)宗教(六)交通

第三章 產業
(一)農業(二)林業(三)水產(四)工業(五)鑛業(六)商業

第三編 地方誌
福島縣、宮城縣、岩手縣、青森縣、山形縣、秋田縣

第壹卷第貳卷共來る六月十日迄の御注文に限り

特價貳圓拾錢

宛(外要送料)にて
高需に應じ可中以後
は斷然正價に復す

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の八)



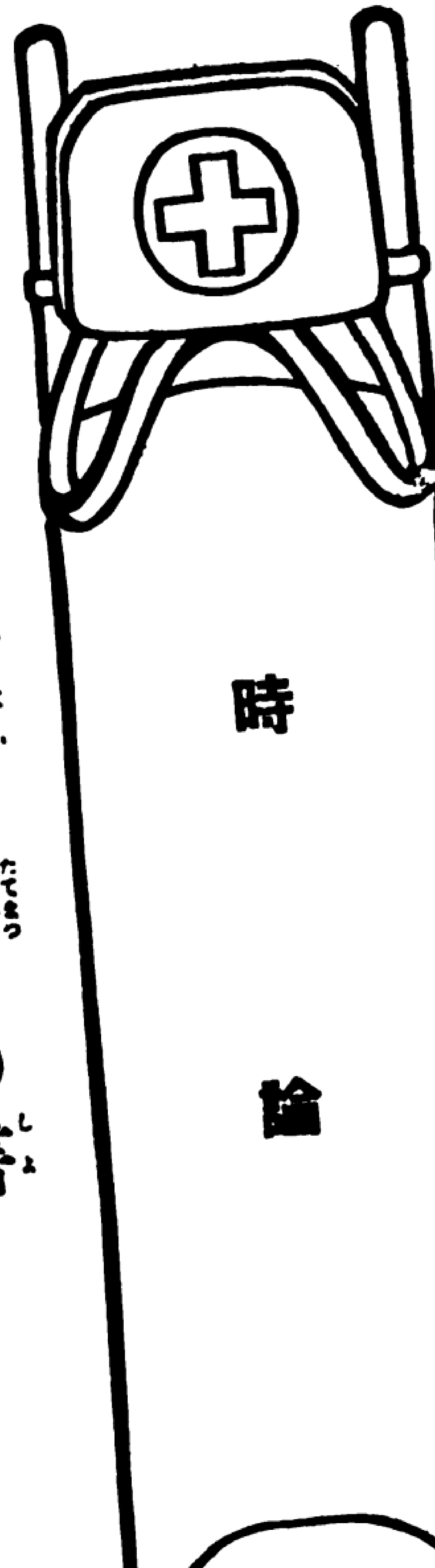
女学世界

第七號　六月五日發行

軍隊一日の糧米

日露交戰の端を開いて以來爰に三個月、戰鬪將さに酣にして遼東の平野至る所ろに砲火の殷々たるを見る而して我軍の敵地に侵入するもの今や十萬を以て數ふ、實に振古未曾有といふべし、我々は此の振古未曾有の大軍が如何にして活動し、如何にして全局の大勝利を博するかを見るの前に當つてまづその活動に要せらるべき後方勤務の一端を知らんと欲するなるべし、聞く軍隊十萬人に要する一日の糧米六百石なりといふ、六百石の米俵かなりと雖も之を俵にする時は千五百俵にして運搬するには毎日七百五十頭の馬匹を要す、單に米のみにて然り、副食物、並に被服其他の需用品を加ふる時は少くも一日二千頭以上の輜重馬匹を要せざるべからざるなり、之を十日に積り一ヶ月に積り引いて半年一年に積る時は其の量の莫大なる實に計るべからずして後方勤務の力の容易ならざる事推して知るべし。

この如く六百石の糧米は征戰軍唯一日の糧食なり。六百石の米一日を欠く時は作戰の上に戰術の上に至大の影響を及ぼすべし、兵勇なりと雖も糧乏しくしては戰ふ能はざるなり、然らば六百石の米は我々國民安危の繫る處ろとして、常に其の心に銘し、意に刻み以て一日も忘るゝなく、飽食暖衣して戰況を聞くものゝよろしく將さに反省すべき事なるべし。



露西亞皇帝に奉るの書

日本桑間の一女子敷島花子是に書を露西亞皇帝陛下に呈し奉る、皇帝陛下恙なきや否、今回の事妾實に言ふに忍びざるものあり。兵は兇器、戰は罪惡、濫りに動かすべからず、妄りに開くべからず、乍去弊國は元平和を貴び、貴國は常に侵略を主とせられたり、今回の事實に平和を主とする弊國の上に侵略を主とされたる貴國の壓力の横溢したる結果と言はざるべからず兵動かさゞらんと欲するも得べからず、遂に友好斷絶の悲しむべき狀態とはなりしなり。

今や戰酣にして遼東の野、渤海の濱、皆兵ならざるはなく、砲煙彈雨ならざるなし、近日九連、鳳凰、旅順の大敗、陛下の干城の空しく命を殞すもの幾千、眞に酸鼻の極と察し奉る、今日にして然り今後の事亦知るべし、妾之を懷ふて陛下の爲めに慘む事甚だし、思ふに陛下の國又妾の如きありて異域落命の將士に同情の涙を濺ぐもの多からん、戰士勇なりと雖も亦人の子なり、家郷父母あらざるなし、妻子親姻あらざるなし、故舊

知己あらざるなし、倘し今後幾萬の同胞徒らに傷き、徒らに死し、死して葬るなく、傷いて醫するなしと聞かば家郷肉親の人將た如何の情かあらん、懐ふに悲憤禁せざるべし、眞に是れ人生の大慘事にして又貴國の大禍なり、而かも是の如き大慘、大禍を招きたるものは何ぞ、畢竟するに貴國積年の國是たる世界侵略主義の致す處に外ならず、侵略主義の責罰の大なる又恐るべきにあらずや。

聞説く陛下は曾て世界平和の主義を唱へたりと、是れ果して眞か、是れ果して陛下の眞意なりしか、平和の主義倘し果して陛下の眞意なりせば陛下の同胞は此の如き大慘大禍を蒙らざりしものを。

陛下年少猶春秋に富み玉へり、過ちて改むるに憚る事なく、今にして戰の惡なりしを知り玉はゞ、君十善の心に立ち歸り、其の積年の國是を翻へし在外の將士をして速かに甲を解き兵を收め以て降を我が軍門に請はしめ以て信を世界に求め玉ふべし、冀くは貴國幾萬の將士をして異境に葬らざるの鬼たらしめざるを得て以て衆民の憤りを解く事を得べけん、謹で呈し奉る。

日本桑間の一女子　敷島花子

戰時の教育

棚橋絢子

我が日本軍が強大なる露西亞と戰つて、海陸連戰連勝の勢で打ち勝つ所以は抑も何で在ませうか、言迄もなく陛下の御威德と將卒方の忠勇とに由るのでありますけれども、深く戰勝の根本的原因を極めますると、畢

覺國民の精神的敎育に歸せねばなりませぬ、乍併、此の武强と、此の文明とを見て、敎育の効果既に擧れりと速断して安心してはなりませぬ。

のみならず今又國民の愛國心は燃ゆるが如き有様で、全國民は擧つて敵愾の氣をもて充たされてゐるのである、武人は劍を執つて起ち、學者は筆を執て立ち、又た財力ある者は財を献げて、飽くまでも文明平和の敵たる露西亞を膺懲さでは置かぬの決心である、婦人社會も亦た奮ひ立つて傷病兵の看護に、留守宅の慰問に、恤兵献金の募集に東奔西走して、國恩の萬分一に酬ひやうと努めて居るので御在ます、乍併、之を以て又國民敎育の効果擧れりと速断し、女子敎育の効果顯はれたりと速了してはなりませぬ。

此の際敎育家に向つて特に戒心を促さねばならぬといふのは、日清戰爭の當時は淸探といふ様な辭は聞きませんでしたのに、今度の戰爭に限つて頻に露探とか露犬とかいふ様な忌はしい言葉が世間に行はれて居ります是は何ういふ譯で御在ませう、十年後の今日は十年前に比して人心が頽廢した爲なのでせうか、浮薄に傾いた故ては御在ますまいか、之が果して事實とすれば、金甌無垢の我が歴史を汚すものではなからうか、敎育家たる者は茲に注意して、後來斯ういふ忌はしい不德の賊臣を出さぬやうに盡力して、此際一層敎育に力を効さなければなりませぬ。

然るに此頃聞く所によると、敎育團體の或る者は、恤兵献金醵出の爲めに幹旋し、又は慰問の爲めに奔走して居るといふ事です、是等の事は勿論善い事には違ひありませぬが、敎育團體の仕事としては如何のものでせうか、敎育の本務を忘れ、敎育の本領を沒却した行爲では御在ますまいか、私は其よりも矢張敎育其物を以て目下の時局に盡した方が宜しくはあるまいかと思ひます。それから、地方では經費節約の方針を誤つて、或は學級を減少したり、多數の敎員を解職したとかいふ様な話を聞き及びますが、此の縮少は軍國の敎育を阻害

するものであります、此の際一層必要であるべき國民敎育をして委靡沈滯に陷らしむるより外に何等の得る所なく、甚だ間違つた措置ではあるまいかと思ひます、私は今日敎育機關を縮少しなければ軍費がつゝかぬといふ程に日本を貧乏とは思ひません。

敵の大將マカロフの最後を御覽になれば大なる敎訓を得ませう、マカロフは世界に名を轟かした屈强なる勇將で、其の巧妙なる戰術は我が海軍の學ぶ所で在たとさへいふではないか、それが、旅順に於て日本海軍と戰ふや、豫て自分の主張した戰術は味方の露軍には殆ど施すことか出來ずして、却て敵の日本軍の行ふ所となりトウ〳〵彼の樣な最期を遂げて了つたといふのであります、これは詰る所部下の兵士に敎育が無かつたからです、之を以て見ても敎育の忽にすべからざることが分るではありませんか、

次に又、我が忠勇なる出征軍人が戰地より家鄕に送つた書簡を御覽なさい、勇壯活潑なる筆を以て戰況を報ずる一端には、愛兒の敎育に心配して居る跡が歴々として讀まるゝではありませんか、百萬の敵を物の數とせざる勇士も、愛子を思ふては有繫に淚を禁じ得ないのでありますから、托孤の任にある敎育者は此際一層力を盡して勇士の後繼者を造ることに努め、出征の父兄に滿足を與へねばなりますまい。斯ういふ譯ですから、何の道から言ても、平時戰時に拘らず敎育は決して忽にすべきものでは御在ませぬ。

婦人と美術

下田次郎

近來女子敎育の盛んとなるにつれて、女子の嗜みの爲め又は生活の爲めに美術を學ぶものが段々多くなつたこ

とは著しい現象である、それて女子の美術學校さへ出來、おまけに大繁盛で、學校は勿論、公園や野外に於て美しい女流の天然に對して彩筆を振ふ姿を見受けることも少くない、就てはこゝに女子と美術の關係を述ぶることは全く徒勞ではあるまい、しかし其關係といふても色々の見方かあるが、こゝにはたゞ心理上及ひ事實上からのお話をするのである。

美術とは何か、其起原及ひ發達は如何といふことはこゝに述ぶるの限りではない、しかし何の美術にも共通の活動が必要である、それがなければ美術はない、それは何であるか、想像である、そこて先づ想像とは何であるか、女子の想像は何んなものであるかを說かねばならぬ。

我々が昨日美しい菊の花を見て今日其色形大等を心中に呼び起すのは、經驗の再生、即ち記臆である、記臆は物の性質を經驗した當時の有りの儘に心に現はしてくれる、處が一人の、子供が川邊で遊んで居たのを見たと他の人にいひますか、その人は子供が水に落ちたと傳へます、傳へた人はまた子供を河童が水に引込だのを見たと傳へるそんな工合に段々行くと仕舞には飛んでもない話になる、しかし事實は子供が川邊で遊んで居たのである、それはどうしてこうなつたかといへば、想像が揑ねたのである、其他國際談判戰爭の時などには流言飛語が百出する、皆想像の生產物である、記臆は信實である、想像には翼が生へて居る。

然し乍ら想像の揑る材料は記臆の庫に納まつたものである、經驗した事柄である、我々は我々の影を飛ひ越へることが出來ぬ樣に、想像は經驗以外の材料を揑ねることはできぬ、たゞ想像は其事柄を記臆の樣に有りの儘に出さないで、これを勝手に結ひ合して現はすのである、たとへば想像は顏が猿、胴が虎、尾が蛇なる鵺を作り出した、鵺といふものは實際居らぬ、しかし其材料たる猿、虎、蛇は居る、鬼は居らぬ、しかしそれを作り上ぐる牛の角、虎の皮は有る。

想像の種類、想像を材料の範圍から分けると多方的と偏局的とにすることが出來る、多方的の想像とは想像が色色の方面にまわるので、趣味の多い、何んでも出來る人はかゝる想像を有つて居る、例へば十五、六世紀に居た伊太利のダ、ビンチとかミケルアンゼロとかいふ美術家は彫刻も畫も建築も出來た、十七世紀のドイツのライプニッツといふ人は哲學者で、言語學者で、神學者で、數學者で、物理學者で、歷史家で、法律家で、政治家で、外交家であつた、その一に達するさへ容易ではないのに、此人はこれらの皆に傑出して、各其專門家をまかす程の造詣を有して居た、かゝる人は多方的に働く想像を有つた人である。偏局的の想像とは繪なら繪、音樂なら音樂に限つて想像を逞しくするので、かゝる想像を有する人は一藝に秀でることが出來る。

次に想像を働く形に由て分けると、受動的(再生的)想像と能動的(構成的)想像とすることが出來る、受動的想像とは、身外に想像を促がすもの(刺戟)があつて、それに動かされて想像するので、想像される事柄が定まつて居るのをいふ、例せば小說を讀んで其人物光景を想像するが如きで、讀むにつれて其所々々の想像が附いて起る、能動的想像とは經驗した材料を色々勝手に結び合して自分が或物を心中に作りだす働きである、これに二通りある、その一は想像の生產物が自然に有り得るもので、一は自然にないものである、風景畫、人物畫、小說劇曲の如きはそれで、寫實でなくても、自然にかゝる風景、人物又は人世の變化は有り得る、然し乍ら音樂やお伽譚や建築は自然には元來無いのである、自然の摸倣ではない、寫實ではない、純然たる人間の想像の作物で、あんな節や、物を言ふ猿や蟹や、日暮し門は天然の何處を尋ねても有りはしない、一ツ目小僧、鬼千手觀音等はみなこの部類に入るものである、此外この二ツの折衷で、形は自然の摸倣ではあるが、其大さが自然にないといふ物を想像は作り出す、巨人小人の如きはこれで、たゞ自然物を大きくしたか少くしたかに過ぎない。

その分け方は何うにしても、すべての美術文學の作品は要するに想像の賜物である、人間に想像といふ働きがなかつたならば、此世は乾燥無味である、人世の曲折波瀾喜怒哀樂何物か想像の子にあらざる、想像の翼は輕く、飛揚は自在なり、光線の速力を以てするも、日光の我地球に達するには尚數分を要するなり、しかも我等の想像は太陽は愚か、三千世界のはてのはてにも刹那に達することを得るなり、況んや電氣蒸氣の鈍物をや、想像は能く武夫をして家郷遠征を想はしめ、明日の結婚に少女の心臟を鼓動せしむ、現實の世界に泣くの人は想像の世界に樂土を求め得べし、誰れか能く現身の乞丐が想像に王侯たるを咎むるものぞ、想像なる哉想像なる哉、もう現世に滿足を見出すこと能はずんば、我等は去て想想の鄕に遊ばんなり。

想像の大魔力を認めて、これを哲學に應用したるものがある、ドイツのフローシャンメル即ち是、彼れによれば宇宙の根本主義は想像にして、世界は大想像の作品なり、我等の想像はこの一部分のみ。想像は獨り美術の製作に必要なるのみならず、科學上の發明工夫にも必要である、ニュートンの引力說、カントの星霧說、ダルトンの原子說みな想像の生めるものである、されば敎育家ヘルバルトはシエクスピーアとニユートンは何れが多く想像を有せしかとの問を提出した。科學と想像の關係はこゝに言ふべきの限りでない、我等は直ちに進んで女子の想像に移らん。

女子の想像を支配する原因が三つある、一、女子の特有の性質より來るもの、二、女子の境遇、三、女子の敎育、即ちこれである、この中第一は先天的即ち女子に生れたるが爲めに來るもので、變へることは出來ぬ、第二と第三は後天的即ち生れ落ちてからの人爲の影響で、變へることの出來るものである。今この三つのものが想像の材料と想像の形式とに如何なる關係があるかを說かう。

女子と想像の材料、前には一寸申した通り、想像が其力を逞くする爲めには材料がいる、それで其材料が貧

少であるならば、如何程想像の逞しい人でも面白いものは出來難い、日本の美術だけを見て想像するのと、西洋のも見て想像するのとは、もし同一人であつたならば、多くの材料を有つた方が複雜な大きな想像が出來る譯である。

そこで問題は想像に使ふ材料を得るに於て、男子と女子は何れが都合の好い位置に立て居るかである。これに向ては何人も男子の方であると云うであろう。女子は昔は勿論今日でも男子よりは境遇が狹くて簡單である、ことに東洋の女子は押込め主義であつたから、家の外の事は何も知らぬのが多い、交際もしない、外へも出ぬから、經驗の範圍が狹くて分量が少い、敎育にしても左樣で、女子は男子だけの敎育は受けぬ、本も讀まぬ、即ち女子は境遇上及び敎育上想像の材料を得ることが男子よりも少い、不便になつて居る、女子の美術に進歩を見んと欲するものは先づ境遇と敎育とに改良を施さねばならぬ。

女子と想像の形式、境遇及び敎育は獨り想像の材料と關係あるのみならず、また想像の働き工合と關係がある玉磨かざれば光なし、人間の能力は、これを覺醒し、活動を促すの機會を作り出さねば役にたゝぬ、この機會を得ぬために、生涯實の持腐れで、立派な能力を眠らしたまゝ暗から暗へ持行く人が多い、境遇や敎育はこれを明るみへ出し、鍛ひ上げ、働かすものである、如何に繪心ある者でも、練習せねば立派な繪はかけぬ樣に想像の働きは練習に由りて或度までは進むものである、女子は男子だけ良く想像の練習をなすの機會がない。女子の美術製作が男子に劣る所以の一である、此點に於ても女子の境遇と敎育の改良は必要である。想像は身体の如く榮養鍛練を要するものである。

想像の働き工合と最も大關係あるものは、女子の生れ付きである、女子の想像は男子のとは先天的に違ふ、男子の想像は實物を離れて、遠く觀念界に逍ふ、即ち無形的(抽象的)で、理想的で、遠在的で、また哲學的であ

る、女子の想像は之に反し、寧ろ實物に執着し、身邊の近い物に就て想ひ、その物が愉快を與へるか苦痛を與へるかに由て束縛される、即ち女子の想像は具体的で、現實的で、近在的で、感覺的である、男子と女子とは想像の働き方が違ふ樣に、また興味の種類が違ふ隨て心に貯へらる、材料の性質が異なつて居る、男子の材料は寧ろ抽象的で女子は、具体的である、記臆に於ても同じ事で、男子は大体、筋道を覺へて居るが、女子は細かい所をよく覺へて居て、全体の見渡しが御不在である、男子の想像は輪廓だけのものを料理して實際と去ること遠きものを作るが、女子の想像は着色された實際的のものを作る、男子の想像は能動的で、材料の結び付け方が斬新で、破天荒のものを作り出すが、女子の想像は受動的で、材料の結び付け方が陳腐で、簡單で、同じ事を繰りかへして居る即ち女子の美術は摸倣的で、手本を見てその通りにかくことが旨い、松に鶴、菊に水仙が得手である。

女子の物言ひの早いのは、心中に浮ぶ思想の回轉が早い證據である、思想のまわり方が早ければ、想像の働き方も早い、隨て想像の材料の結び付け力が粗漏で、表面的となり、深い込み入つた結合が出來ぬ傾きがある。そこで男子の美術製作は創造的で新しい面白いものが出來るが、女子のは千篇一律で、版に押した樣で活氣がない、よく出來ては居るが何處かに種がある。これは繪でも音樂でも文章でもそうである。

勿論以上は大体論で女が皆そうであるといふのではない、敎育ある女子と無學の男子、天才のある女と役にたたぬ男とを比ぶれば、女の方が勝れて居るに定まつて居る、いや大多數の男女は平凡なもので、鈍栗の背くらべで、大した優劣はないが、上になると男女の特色が一層良く顯はれてくる。尤も今日の日本人は皆眞似師で創造的の働きある者は男子にも殆んと見當らぬが、美術界に於ても同樣である、美術の先生たる男子までが舊套を襲ひ、何派とか唱へて、一枚の葉を畫くにも、一寸撥をはねるにも傳來の型を眞似るといふ有樣であるか

ら、さうでなくても模倣性に富む女子がこんな先生に敎へられて、ます〳〵融通の利かぬ變な死んだ物を作り出す譯である、女子の美術の進歩を期する前には、男子のそれを改良せねばならぬ。

以上は心理學上から女子と美術の關係を見たものであるが、追つては事實の上から、これまで各種の美術に於ける女子の業績を調べて見ようと思ひます。

（完）

品性の感化

片岡夫人

私などの育つた時分即ち舊藩時代と異り維新以來殊に近來に於ては女子敎育の漸次發達して女子が爲すべき責任及び事柄は種々重大に且つ複雜になつて參りました爲めに社會に立つて働くことも亦家庭に在つて務めることも益す至難になつて參つたやうに思はれます。

そこで家庭上に於けるお話に就いても仲々至難であつて皆樣の爲めになる樣のことは到底及びませんが唯だ私の家庭に於て聊か經驗した丈けの事柄に就いて御話申ませう。

私などの考へでは女子は家庭に在つて取り分け何が一番大切であるかと申すと人の妻としては家を修め、兒を育てるのが大切と思はれます上流の家庭など は存じませんが中流以下特に下流の社會にありましては如何なる家でも多少の風波がある樣に聞いて居ります例令ば俗に云ふ水入らずの親子の中でも何にかに付けて風波は起るものですが其風波は何處から起るかといふに多分は所天の所爲からでもありませうが一つは亦其妻たる

ものゝ謹なみの無い處からだらうと思はれます、之れは妻たるものゝ一家を修める上に於て是非嗜まなければなりません、されぱとて所天がどんな惡いことがあつても默ッて居れば可いかと云ふに素より惡い所丈けは十分に注意もし忠告もしなければなりませんが、つまらぬ疑ひを起して風波を立てる樣のことは謹んで貰はなければなりません、世間に風波の立つ家の內容を聞くと多くは双方の疑が原因だとのことであります。

夫れから夫婦間や親子間で互にものを隱くし合ふ樣なことは無い樣にしなければなりませぬ、此等は取りも直さず一家に風波の起る原因でありますから是非無い樣にして貰いたい之れは獨り其時限りのものではなく、永久的に兒童の發達を害し、且つ子々孫々まで習慣的系統的遺傳性となるのであります私等の家は幸ひに宗敎に入つたお蔭でもあらうか夫婦相隱し親子相疑ふ樣のことは毫もありません、之れはつまり信仰上から出たので所謂宗敎に詐りのない事實です、是れ獨り夫婦や親子間斗りではなく假令門口に物貰いが來たからとて欺いて歸す樣のことはしません。

次には兒を育てる事、一口に子を育てると云へば何でもない樣でありますが之れは仲々一通りの世話ではありません、然し今日は完備せる育兒法も出來て差支はない樣であるが私共の兒を育つる時分などは仲々困難を感じました、父親の敎育は無論大切なことでありますが母親は始終兒供を離さぬ樣にして居るから總て母親のする事、爲すことは見眞似、聞眞似するのですから、母親の一言一行は直接に兒童の摸範となる樣になつて居ります、母親たるものは此責任を自覺することが肝腎で古から申す通り其兒が母親の胎內に居る內から兒童の敎育は必要で姙娠中は眼に惡色を見ず、耳に惡聲を聞かず心を穩かにして居らねばならぬと思ひます、况して產み出してからは洵に其感化は至大なものです。

先づ私の經驗上から申上げると種々な困難がありました殊に私など學問がなかつたからでもありませうが一

入困難を感じた次第でありました。

國々に依て種々なる習慣もあり又事情もありませうが私の國(夫人は土佐の人なり)なとで兒供が生れ落つると三歳まで母親が育てますが三歳から五歳までは大抵乳母の手で育てるのでありますから其乳母は夫れ相應に敎育もあり又見識もあるものを撰まなければなりませぬ、さればとて母親は一切關係しない譯ではありませんが乳母が育てる間にも母親が主として其家の資格に應して家法も敎へ行儀も習はせなければなりません、夫れだから乳母の育てるのを餘り干涉してもいけませんし又た放任してもいかぬと云ふ次第で此所一番母親の骨の折れる處です。

其所等から考へると今の幼稚園などは何所となく不完全の樣に思はれます、私が何時か幼稚園に參りましたが中流の人の兒も下流の人の兒も一樣に預つて居つて恰も玉石混淆と云ふ有樣で其敎育方法も亦一樣になつて居る樣に見受けました、成程國民敎育の基礎となるべき幼稚園のことであれば一樣の敎育方法でも差支ない譯ではありますが併しながら其預かつてゐる兒供の多數は下流であるから如何にも無作法で不行儀でありました此無作法な不行儀な風習が獨り下流社會の兒供にのみ止まれば差支はありませんが惜い事には漸次に中流社會の兒供にまでも感染するやうになつて參ります之れは素より幼稚園ばかりが惡いのではなくつまる處ろ其親達の惡いのであります、此等は專らその母親たる人に深き注意を願はなければなりません斯う云ふことは獨り幼稚園ばかりではなく、小學校でも往々見受くる處であります、現に私の孫などは或る學校に通ふて居りますが同じ學校に通ふ車屋の兒供の仕打を見習つて煎餅を買ひに行きたいとか餅菓子を買ひに行きたいとかいろ〳〵な惡弊を見習ひまして一錢や二錢を貰ひに來ます。さアこうなつて來ると誠に困ります、與へなければ意地汚く人の物を貰ふといふ樣な惡弊に陷ります此等は實に其家庭の不完全から來たのであつて已むを得ませんが學

校に於ても注意を周到にして成る可く之れを矯正する方針を取ッて戴きたいものであります。

勿論今日は總ての教育が進歩してゐて學校の方でも種々の點に就いて御心配になッてゐる樣ですが行儀作法の點に就ては一層の御注意を請はねばなりませぬ、私共の家庭教育に於ての困難と云ふのは重もに此所等であります。

扨てこれから世の中はおい〳〵世界を相手とするやうになッて參りますから將來歐米列國に對して一歩も讓らないやうな完全な高尚な國民を造らふとおもふには專ら此所等に注意して戴かねばなりません殊に今日既に內地雜居も許されて總ての點に於て歐米列國と競爭しつゝあるのですから將來完全な高尚な人物を造ると云ふことは今日我々世の母親たるもの丶大なる責任かと存じます、そうして世間の競爭の決勝線は體力よりも智力よりも第一に品性であります、是れ今の代及び後の代を通じて流るゝ潮流の泉源であらうと思ひます、そして其人物は如何なる處より出て參るかと申すのにそれは悉く家庭からであります、家庭は實に人間養成の根元でどんな人でも學校に居る間よりも家庭に居る間か長いのであッて、そして其見たり聞たりすることも多いのであります一体敎育は耳より入らずして目より入るといふ事があります、何程口で敎へても自然の間に見聞する事を習ふほど効能はないものであります家庭は實に小供の耳目を開け放した自然の樂園でありますから善惡是非悉く恰も樹木が日光の光を受ける如く全心にその感化を受けるのであります、されば我々母親たる者はお耳に注意を拂ッて置かなければなりません是れ父たり母たり寧ろ母たるもの大切な義務であらうと思ひます。

（右は故衆議院議長片岡健吉氏夫人の談片にして筆責は記者にあり、）

武士的家庭（下）

伯爵　大隈重信

明治維新の時に方つて、名高い豪傑連が四方に起つた迹を見ると、槪ね賢婦の家庭の敎育を受けた人が多い、豪傑や英雄は、偶然にして出るのではない、必ずや其家庭の感化に依るのである、尤も只其家庭敎育に依るのみでなく、或は血統遺傳の賜物、又或は其時代の感化もあらう、所謂時勢が英雄豪傑を生んだのかも知らぬが、兎も角も、封建時代の嚴格の家庭より、殊に賢婦の敎育の下に、偉大なる豪傑が起つたのは、疑ふべからざる事實である、斯くの如く我が邦の家庭は、總てが武士的であつて、戰に對する觀念は自然に養はれて居るのである、されば此度び我が邦が、容易ならぬ戰を開いたからと云つて、女子が殊更に騷ぎ立つ必要はない、平日からそれ丈けの覺悟がなければならぬ筈である、苟も武士的家庭に育つた女子ならば、戰に際したならば、曾つて自分等の祖先が、刄の下を潜つて、忠の爲め、義の爲め、生命を鴻毛より輕しとして働いた歷史を想ひ起すであらう、然らば縱へ少しく太平に慣れて、心が弛んで居つたものも、祖先より受けた感化は、自から己れを戒めて、直ちに戰時に於ける女子の本分を盡すといふ念を喚起するであらう、故に戰は男性的ではあるが、一面に於ては、此國の大事が、自から一家庭の間にも及んで、其影響は必ずしも鮮少ではないと思ふ。

夫れは國家が、今度の如き大事に際しては、國民均しく愛國心が勃興して、國難に殉ずるの精神が發揮せられる、と同時に起る感じは、死生の巷に立つて、奮戰激鬪する所の軍隊を慰むると云ふ事、又其軍隊をして後顧の憂なきやう、出征兵士の家族に對して扶助を與ふると云ふ事である、更に一歩進んでは、大軍が海を渡つ

て、長日月の間、戰をするに就ては、日々に數百万圓の金を費さなければならぬ、其金は如何にするかと云ふ事が、自然に起つて來る問題であるから、國民は一層心を盡して、出來る丈けの儉約をして、而して軍費の供給をして遺算なからしめ、出征の軍隊をして、十分に功を奏せしめ、光榮ある最後の勝利を得せしむと云ふ事になつて來る、殊に風雪に曝らされ、雨露に艱む軍隊の辛苦、困難を想ひ起せば、自分等も勞苦を分つ心が出て、如何なる困難にも耐へて、而して一方には、若し職業があるならば、十分に其職に勉め勵み、職業なき者は、內職であれ何であれ相應の勞働をして、而して一方には成る丈け夫れを消費することなく、愈よ經濟の上に、軍費の上に、一文たりとも補助を爲さうと云ふ心が起つて來れば、夫れが自から家庭に於ても、太平の末、幾分か奢侈に赴いた弊風を、この機會に矯めらるゝに至るであらう、總ての女性に免るべからざる缺點は、虛榮心である、之れあるが爲めに、兎角無理算段をしても外見を飾りたがる、富有な家庭のものは猶更らの事、贅澤品を買つて、價の高きを誇ると云ふが如き性質が多いのであるから、今度の國難に際したを機會として、宜しく自から戒愼して、其弊を改め、一に勤儉の美德を現はさなければならぬ、然うすると爲めに女性の弱點は抑制せられて、女性の長所たる忍耐力の如き、善良なる性質が却つて發揮せらるゝであらうと思ふ、即ち戰の爲めには如何なる痛苦をも忍ぶ、此忍ぶと云ふ一事は、男性よりも女性の方が餘程强いものであるから、平時の弊は矯められて、固有の天性の良點が發揮せらるゝならば、夫れは此戰の大なる賜物である、要するに今日の家庭及び婦人の困難は、取りも直さず、是れよりして將來一般の家庭の有樣が、曾つて嚴格なる武士的家庭——武士的家庭には又一種の弊風があるかも知れぬが、其弊を去つて、武士的家庭の最も長所の點を、愈よ完全に進めて行くといふとが、此戰が一つの動機となつて、總ての家庭の上に及したならば、婦人をして大なる働を爲さしむるに至るであらうと思ふ。

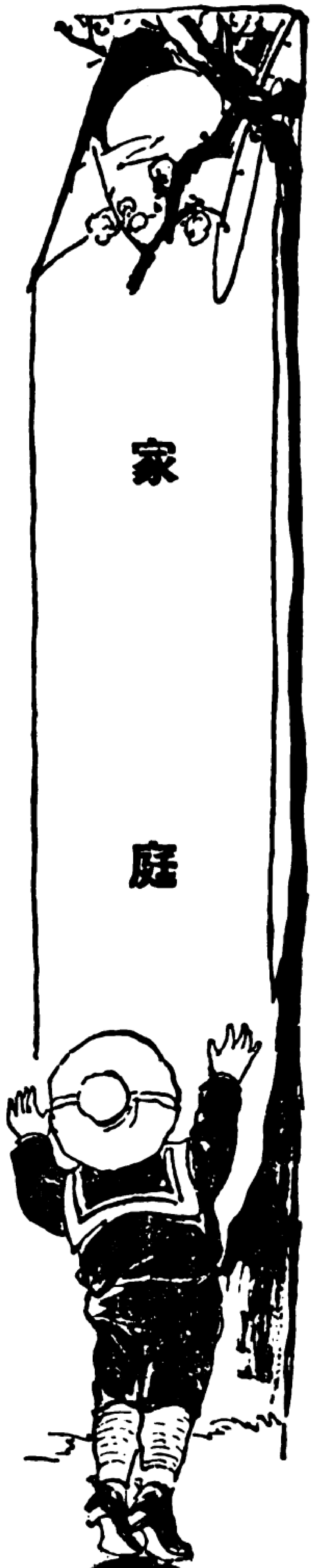
實に我が邦の如き國は、世界に殆んど類が少いのである、何處の國も封建を去ることが遠い、支那は殆んど二千年、最も古い——最も古いから腐敗した、歐羅巴も數百年を經過して居る、然るに日本は封建の武斷的弊害もあつたかも知れぬが、併し又封建の良風があつたので、此良風が、未だ全く消滅はしない、而して今や將さに移り變らんとする時である、而して此封建的、武士的の嚴格なる家庭の長所を喚起するには、丁度此戰が最も好き機會である、戰と武士とは、離るべからざるものであるから、劍を研いて起つ今日に於て、武士の家庭の困難なることが分り、武士の家庭の主人公たる婦人の力が、恰もこゝで試みらるゝ時になつたのである、一たび意を決するや、如何なる困難にでも打ち勝つといふ勇氣と、耐忍力とは、男子よりも婦人に最も多いのであるから、今や婦人は内に在つて、家庭の主人公たる本領を發揮すべき時である。

こゝに於て私は、近來社會の風俗が、廢頽したとか、紊亂したとか、種々の議論を聞くけれども、之れを矯正するには、坊主の說敎よりも、倫理の講義よりも、事實の戰、此戰に依つて、國民は非常に困難をし、軍隊は死生の巷に立つといふ、國家存亡の運命が頭上に臨む此時に於て、始めて良心が發揮せらるゝであらうと思ふ、で、私は今度の戰に於ては、國の名譽といふ點よりも、此戰に依つて國民の生活、或は一般の家庭に及ぼす所の利害、影響は、寧ろ大なるものがあらうと思ふ、何となれば國の本は個人である、其個人の本は何處に在るかといへば、家庭であるから、この家庭が健全になると云ふことは、國の上より是れ程大なる力はないのである、家庭にして健全とならば、風儀風俗、其他總てのものが健全となるのであるから、國の礎は自から鞏固なるを致すのである、如何に軍隊が強くとも、國が大きくなつても、其國の礎が薄弱では何にもならぬ、國家をして光輝あらしめ、國民をして品性あらしむるには、家庭——國の礎の最要素なる家庭が健全にして光輝あり、品性がなくてはならぬ、戰が勝つといふことは、一時の事であるが、國の風俗といふものは、

永久のものである、國の治亂、興廢、盛衰は、皆な是れから導かるゝのである、而して修身齊家といふ事が本になつて、治國平天下となるものであつて、今日に在つては、此戰といふ國の困難か根本となつて、是れより家庭に及ぼす所の影響を、能く利用すれば、愈よ良家庭が成立つのである、之れを事實の上に現はすのは、今日婦人の責任である、時局に對する婦人の大責任である、苟も今日の婦人たるものは、須らく顧みて其責任の大且つ重なるを思ひ、奮つて其大責任を盡さなければならぬのである、夫れには恰も男子が劍を提げて、千辛万苦、風雪を冒し、飢餓を忍んで、砲火の間に敵と相見ゆる決心と同じ決心を以て、家庭に力を盡すならば、必ずしも爲し難き事ではない、而して之れを成し遂ぐるに於ては、婦人の地位が一層高まり、婦人の勢力は、必ず增進するに相違ないと思ふ、去れば婦人の地位、勢力を增進せしむる點よりいふも、今日は逸すべからざる好時機である、此好時機に際し有爲の婦人は大に奮つて起つが宜しい、是は私が大に望む所である。（完）

マカロフ提督追悼式

式は先月十四日彼得堡の海軍省附屬教會堂に於て行はれたるが門外には陣亡軍人の遺族二萬人許目を泣き腫して打ち集ひたり白大理石を以て建築したる教會堂内には皇族を始め陸海軍軍人外交官等各嚴しき制服に身を固めて列席し會堂の二階は水兵等を以て滿たされたりマカロフ提督の未亡人がコンスタンチン太公の腕に倚り其子女を随へて悄然として入り來り皇族の側に坐を占めたるときは滿堂肅として水を打ちたるが如くなりき皇帝は海軍大佐の正制を着け最後に入御ありたるが憂愁の色は深く其面上に現はれたり皇后は亡英雄の追悼式に臨むの苦痛に堪へ得ざりしにや遂に見ね玉はず式の方に始まらんとするとき皇太后はマカロフ未亡人を抱擁せられたるが未亡人は即がて跪きて式の終るまで立たざりき希臘正教の崇嚴なる儀式に對しては何人も流涕を禁ずる能はず式中皇帝以下皆手に恭々しく燭火を捧持したるが式漸く進み、基督出でたりてふ讃美歌の悲痛の絶頂に達したるとき皇帝は身を玉座より下して更に恭々しく跪かれぬ會衆も亦跪きぬ而して嗚咽の聲は唱歌の聲と相和し人をして言ふに言はれぬ一種の感慨を起さしめたりウラヂミル太公夫人の如きは遂に堪まらず泣き崩れたり式終るや皇帝は自ら絶ね入らん許りのマカロフ未亡人を扶け起こして其手に接吻し且つ數分間これと語を交へ其子女とも握手せられたりと米國新聞に見ねたり、



家庭談叢
人間一生の食糧

女學記者

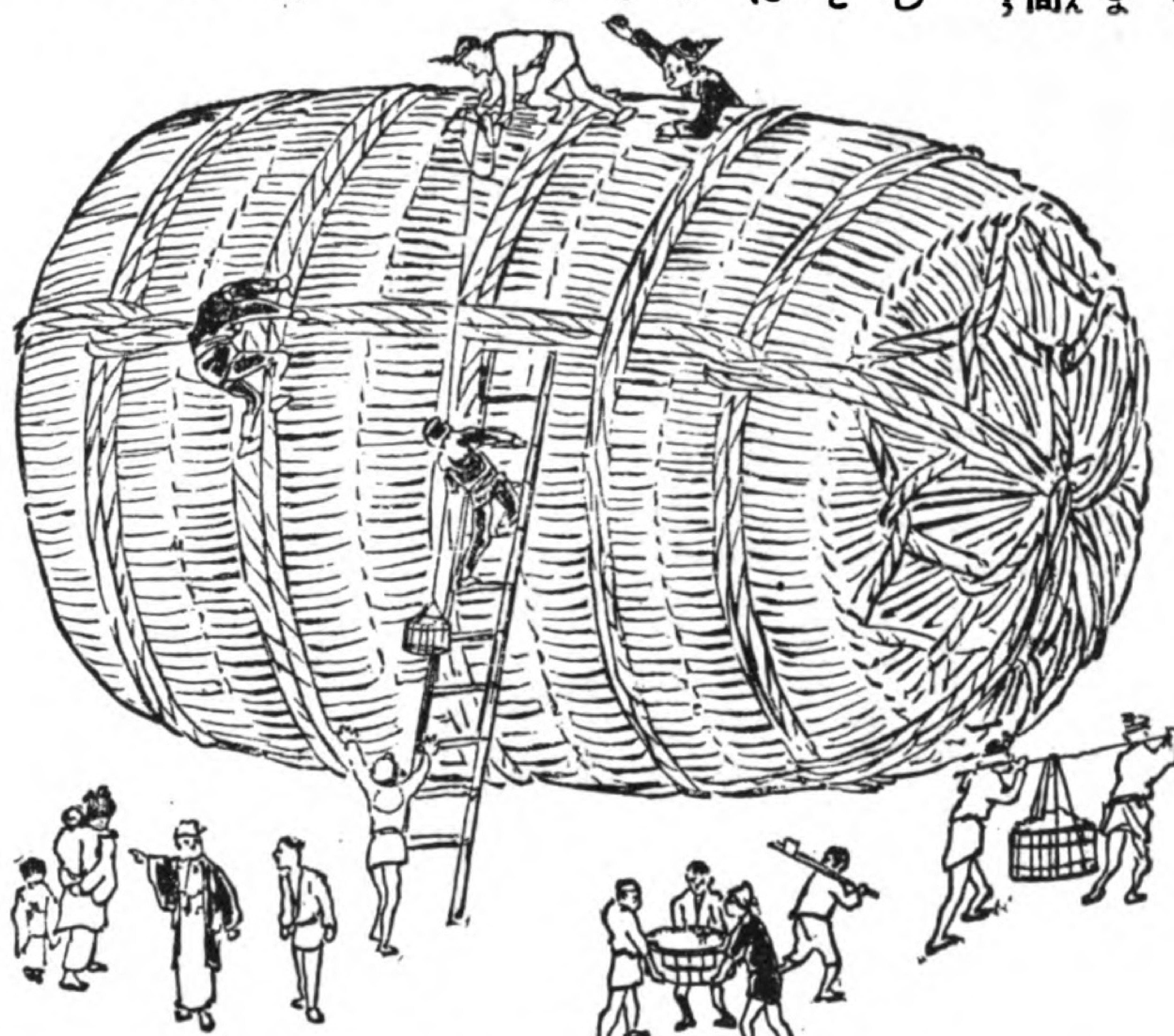
食は命の親だと言はれた通り實に人間は一日たりとも食糧なくしては居られません、扨てこの食糧は何うして得られるものであるか、皆人々の働きから來たものであるとすれば人の勞働は生活の約束と言はなくてはなりません、我々が一日に食ふ處一月に食ふ處、一年の間に食ふ處を知りまして、そして如何に多くの食糧が人間一生の間に費やさるゝかを得知る事が出來たならば甚だ面白く且つ有益であらうとおもひます。

さて記者は今回我が家庭に數學的の智識を弘むる一方便として人間生活上の統計を試みました。始めは食物、次は衣服、それから住居、段々と進んで日常の作業、行爲のあらゆる事柄に向ッて面白い統計を作る考であります。一体數學といふものは極めて無味乾燥なもので。1、2、3、4、5、若しくは+、−、×、÷、といふ様な符號的な記事は其向の學生には有益でありますが恨むらくは算數的智識に幼稚なる我が日常の家庭に向ッては唯頭痛の種となるばかりで折角の苦心も何の効力なくして了らん事を恐るゝ處からよし學問の目的には叶はずとも、多少物の分量容積を知りその計算の大体を悟る事を得たならば數の觀念も自から發達

しこ不断の生活に益する處があらうとの老婆心を以て企てた次第であります、そこでまづ第一人間一生の間に要する食糧の計算から調べて見ました。米、味噌、薪、炭といふ様な日用品は臺所に働らく下婢にも能く分かる事であらうとおもツて是等を材料とした次第であります。

▲物質の計算

人間一生の壽命は五十年と定まつて居る。勿論七十八十までも活きる人もあれば三十四十で死ぬる



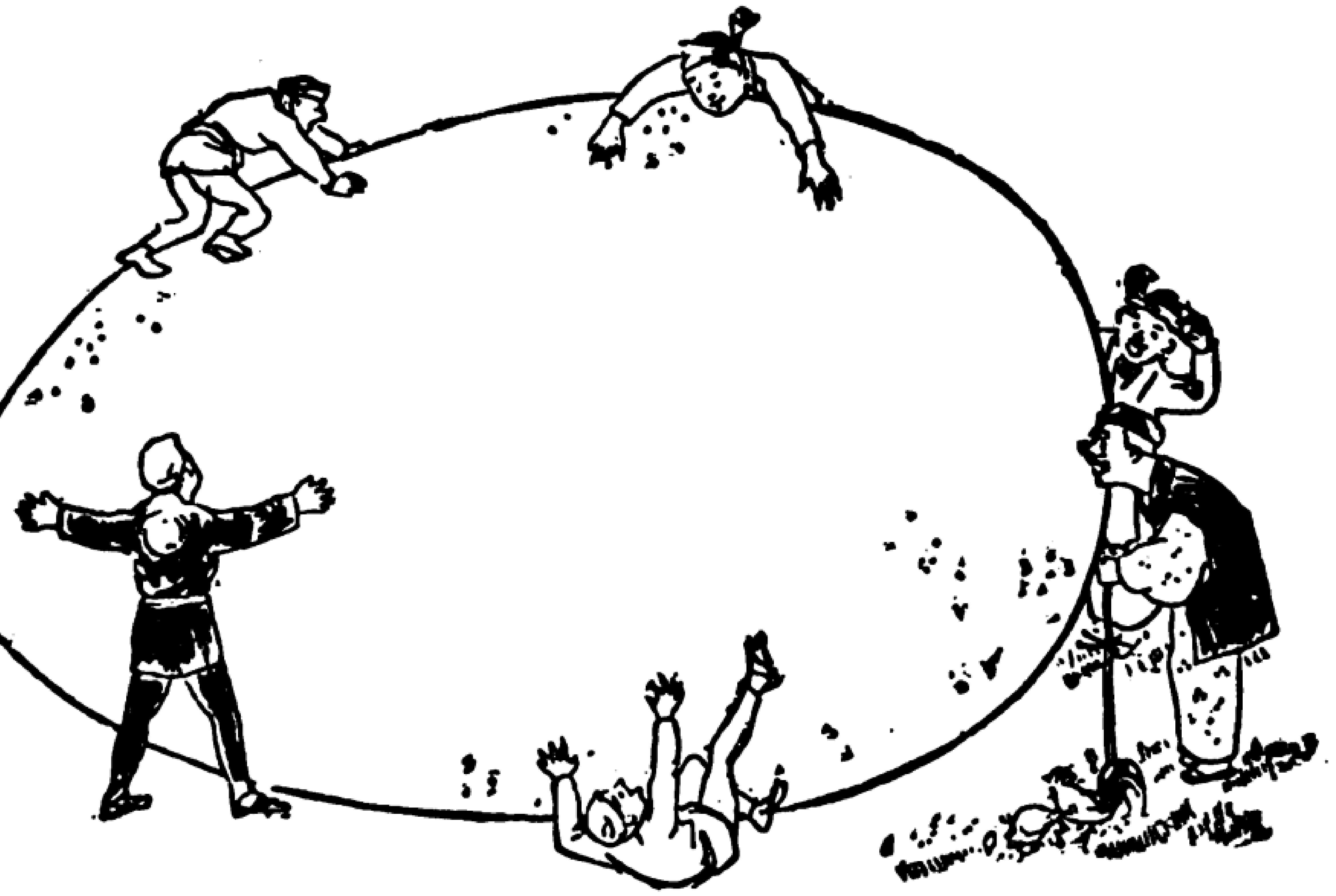
▲人間一生の間に食する米の容量

人もあるけれども、丁年に達した男女の壽命は平均して、四十九年といふ事である。即ち人生五十年は確かなる統計の示す處であるから是を標準して計算せねばならぬ扨この五十年の間に要する人間の食糧は何程であるか、普通日本人の食糧は米、味噌、醤油、魚類野菜等であるが、今是れを別々に統計して見ると。

▲米　一日四合として　七十二石
▲味噌　一日十匁として　百八十貫目
▲魚　一日二十匁として　参百六十貫目
▲醤油　一日三勺として　五石三斗餘
▲牛乳　一日一合として　十八石
▲鶏卵　一日二個として　参百六十貫目

▲野菜として一日百匁　千八百貫目
▲砂糖として一日五匁　九十貫目
▲菓實として一日十匁　百八十貫目

第一　人間一生に要する米七十二石は四斗俵として百八十俵、此量目は一升四百目として二千八百八十貫目、まづザット三千貫目となります、又大人一人の體量拾四貫目として大約二百〇六人の體量を合せたものと匹敵しますから、我々人間は一生の間に自分の體量の約二百六倍の米を食する勘定となります、扨又この米を運搬するには大八車一臺に十俵積むものとしても二十臺の車に滿載されるのである、それから又この七十二石の米を炊き出して一回のお賄いをしやうとおもへば一時に五萬四千人



▲人間一生の間に食する玉子の容積

のお客に供へる事が出來ます、即ち戰時に於ける三個師團の人員に一回の食を配つ事が出來るのであります。更らに又この米の生産に就ての計算をして見ますると頗るおもしろい第一これ丈の米穀を作るには何程の田地を用するかといふのに平均一反歩一石二斗として六町歩の地面を要するのでありります。即ち人間一生に食する米は普通の家屋六百軒建てらるべき土地の面積がなければ作られないのであります。

第二　人間一生に要する野菜は荷車一臺三十貫目として六十臺を要するのである。六十臺の荷車は當時一聯隊の輜重と見て大差はない實に驚くべき數ではありませんか

第三　魚類は山家の人は余り日用に費ひませんけれど都會の人は魚の外に獸鳥肉、鷄卵其他の滋養物を多く取りますから一日二十匁は寧ろ輕少です、それでも一生に積つて見ると三百六十貫目となります。目の下一尺の鯛を料理すれば正味四百目しか取れません、參百六十貫目の正味は正に九百尾の大鯛を要する事となりますから如何なる大漁の時があつても鯛を九百尾獲るといふ事は十艘や二十艘の漁船でもむづかしい。それから滋養物として我々が毎日採る處の牛乳及び玉子はどうであるか、日に一合づゝの牛乳が十八石となり日に一個づゝの玉子が三萬六千個となる、十八石の牛乳は屈强なる乳牛三百頭によつて僅かに絞り得らるゝ量三萬六千個の玉子は三百六十貫目即ち一人の約三十倍の量があつて大牛五六頭に比較する量であります。

以上は口中へ持ち込む處の食糧に就ての統計であるが更に又是等の食糧を料理するに用ゆる處の消費物即ち薪、炭、油又嗜好品として用ゆる酒煙艸などの方面に就て計算して見ると一段とおもしろい統計的現象が見出さるゝのであります。

▲薪	一ヶ年三十六把として	千八百把
▲炭	一ヶ年六俵として	三百俵
▲石油	一ヶ年一斗八升として	九石
▲酒	一日に一合として	十八石
▲煙草	一日二十本として	三十六萬本

千五百把の薪は三尺廻りの栗の木百本以上なくては取れません、十八石の酒は五尺の桶一本に充滿せしめた量で、三十六萬本の卷煙艸を直線に延長せしめると一萬二千間で里數に直すと正に五十五里で東京から箱根山を越へて遠江の天龍川迄の道程となる即ち人間が一生の間絶えず煙艸を吸ふとすれば東海道の半道を煙にして仕舞ふものと合點すればよろしいのであります。

▲大小の比較對照

一日五匁づゝの砂糖が五十年には九十貫目となり、一日に一合づゝの牛乳が十八石となる、皆さんは是れを聞いて如何に想像さるゝであらうか、物質的に深く注

意する人は其の差の莫大なるに仰天するでありませう。併し、一般の人が五勺と、九十貫目との差、及び一合と十八石との差をそれほど大層に見ませんのは數量の智識に欠乏した結果でありませう圖に示す通り五勺の砂糖は郵便袋の中に這入つても左程嵩ばらない位な量、九十貫目の砂糖は大俵で十梱以上となつて大八車に積むほどにもなりなす。又一合罎の牛乳は懐中へ入れても邪魔にならぬほどの小量ですが十八石の牛乳を湯に沸かせば五十人でも百人でも這入つて洗はれるほどの大きな浴槽に充たす事が出來まする、これで以て大凡の比較を見れば如何に大小の差の著るしきかを知る事が出來ませう。何にせよ、人間の一生は一日の一萬八千倍といふ數であります。この一萬八千といふ數を標準として



▲人間一生の間に消費する煙艸の容積

萬事に當つて計算すれば人生に要するすべての驚ろくべき數が顯れて參るのであります。

前述の如く人間の一生は一日の一萬八千倍であります一日は僅か二十四時間であるとはいへ諺に春の日の永き事を一日千秋とも申してありますが、一日ですらこの如くこれが一萬八千倍あるとすれば人の一生は實に永いものである事がわかり又實に貴重すべき價値のある事も知られるのである。一日に一里づゝ歩いてもこの廣い世界は一週される、一日に一個の事柄を覺ゆればあらゆる世界の事柄は了解し盡されるのである。然るに世間多數の人はこの價値ある世の中に生れながら敢て學ばふともせず知らうともせず、務めやうとも

せず日々迂濶々々と徒に日を送つて居るのは實に歎かはしい事ではありませんか、五匁の砂糖が九十貫目となり、一合の牛乳が十八石となる事を知つたならば少しは反省して見ねばならぬ事であります。

扨又一日に百匁の野菜は人間一生に千八百貫目となります、百匁の野菜はハンケチにも裹まるが千八百貫目の野菜は積んで山を



▲人間一生の間に食する野菜の分量

成し。梯子を懸けねば登る事も出來ません、一日に一本づゝ消費する薪も一生の間には千八百把となります一本の薪は指の頭でも動かせますが千八百把

の薪は木樵りが百人もかかつて深山の大木を伐り卸さねば作れません。この莫大な量を一時に眼の前へ出してこれが人間一生の總菜であも、これが人間一生の燃料であると言つても誰れしも信ずるものはありますまい。

(註)屈强なる男女の平均體量は十四貫目としてこの十四貫目の體格を養ふには日に何程の分量を食ふべきかといふに、米、塩、肉、菜を總計して三百八十二匁となる、即ち體量の約四十分の一と見て大差はない然らは一ケ月に食ふ分量は何程かといふに十一貫四百七十匁にして體量の約八割强である然らば人間は三十七日間に丁度自分の肉體と同量の食糧を取るものと見てよろしい、

▲人間一生の間に食する菓物の容量

三百六十貫目の林檎人体の二十五倍を顯はしたるもの也



▲百二十七匁三分　一回の食糧

▲三百八十二匁　一日の食糧

▲十一貫四百七十目　一ケ月の食糧

▲百三十七貫五百目　一ケ年の食糧

▲六千八百七十五貫目　一生の食糧

右六千八百七十五貫目を

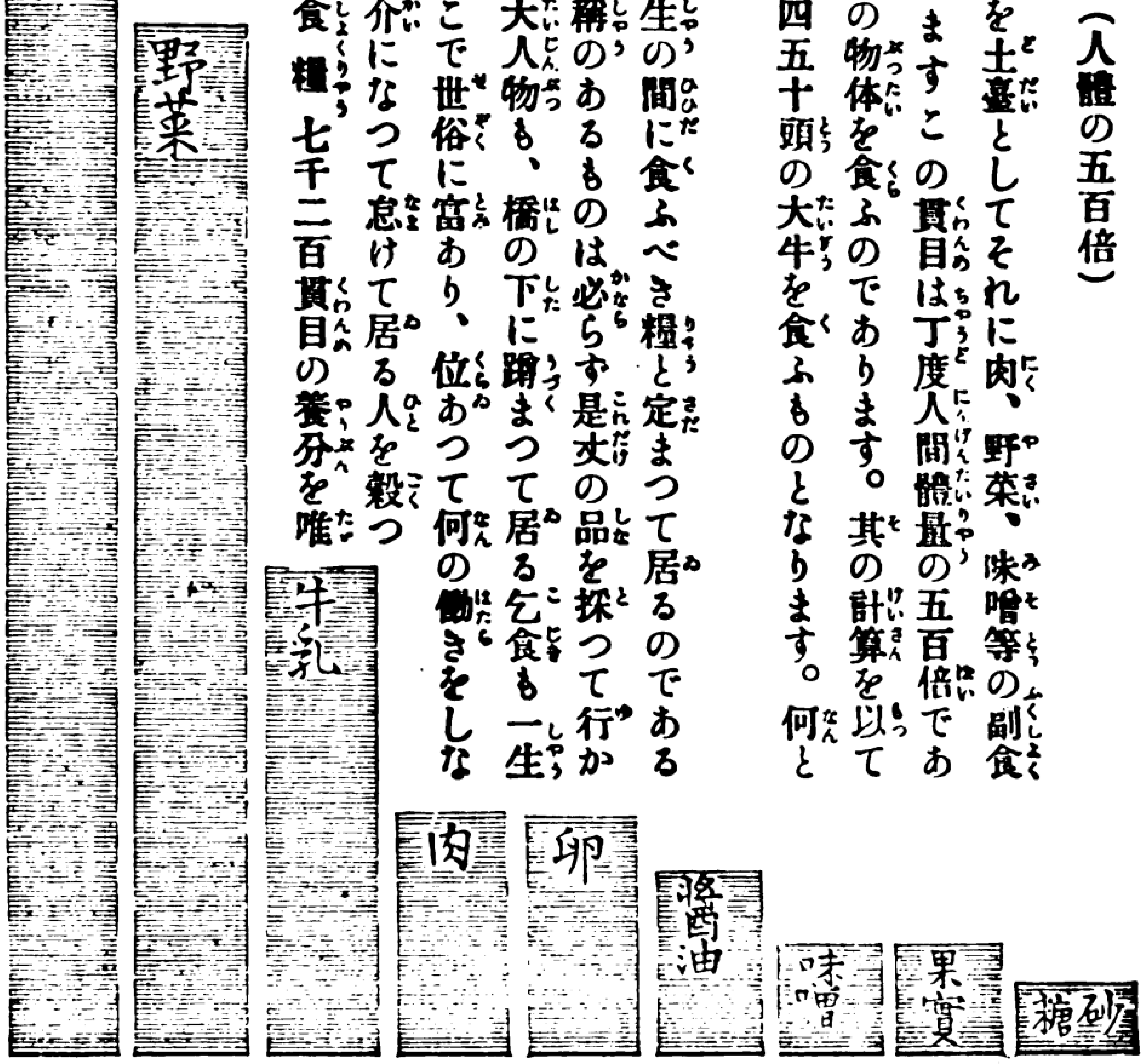
立方体に示せば圖の如し。

▲人體と食糧の比較　（人體の五百倍）

右の通り人間一生の食物、米七十三石約三千貫目を土臺としてそれに肉、野菜、味噌等の副食物を貫目にして總計すると約七千二百貫目となりますこの貫目は丁度人間體量の五百倍である、我々人類は一生の間に自分の身体の約五百倍の物体を食ふのであります。其の計算を以て若しも人間が肉食ばかりして居るものとすれば百四五十頭の大牛を食ふものとなります。何と驚ろいた次第ではありませんか。

以上五百倍の容積、五百倍の量目は人間一人の一生の間に食ふべき糧と定まつて居るのであるから上は王公から下細民に至るまで人間といふ名稱のあるものは必らず是丈の品を採つて行かねばならぬ。されば社會に千万人の働らきをする大人物も、橋の下に蹲まつて居る乞食も一生に食ふべき容積には少しの差もないのである、そこで世俗に富あり、位あつて何の働きをしない人を屍位素餐といつて嘲り、又不斷親兄弟の厄介になつて怠けて居る人を穀つぶしといつて罵るのも、つまりは自身の五百倍の食糧七千二百貫目の養分を唯徒らに食ひ潰して居るからの事であります。

▲米を標準として一生に要する各食物の量目を比較したるもの

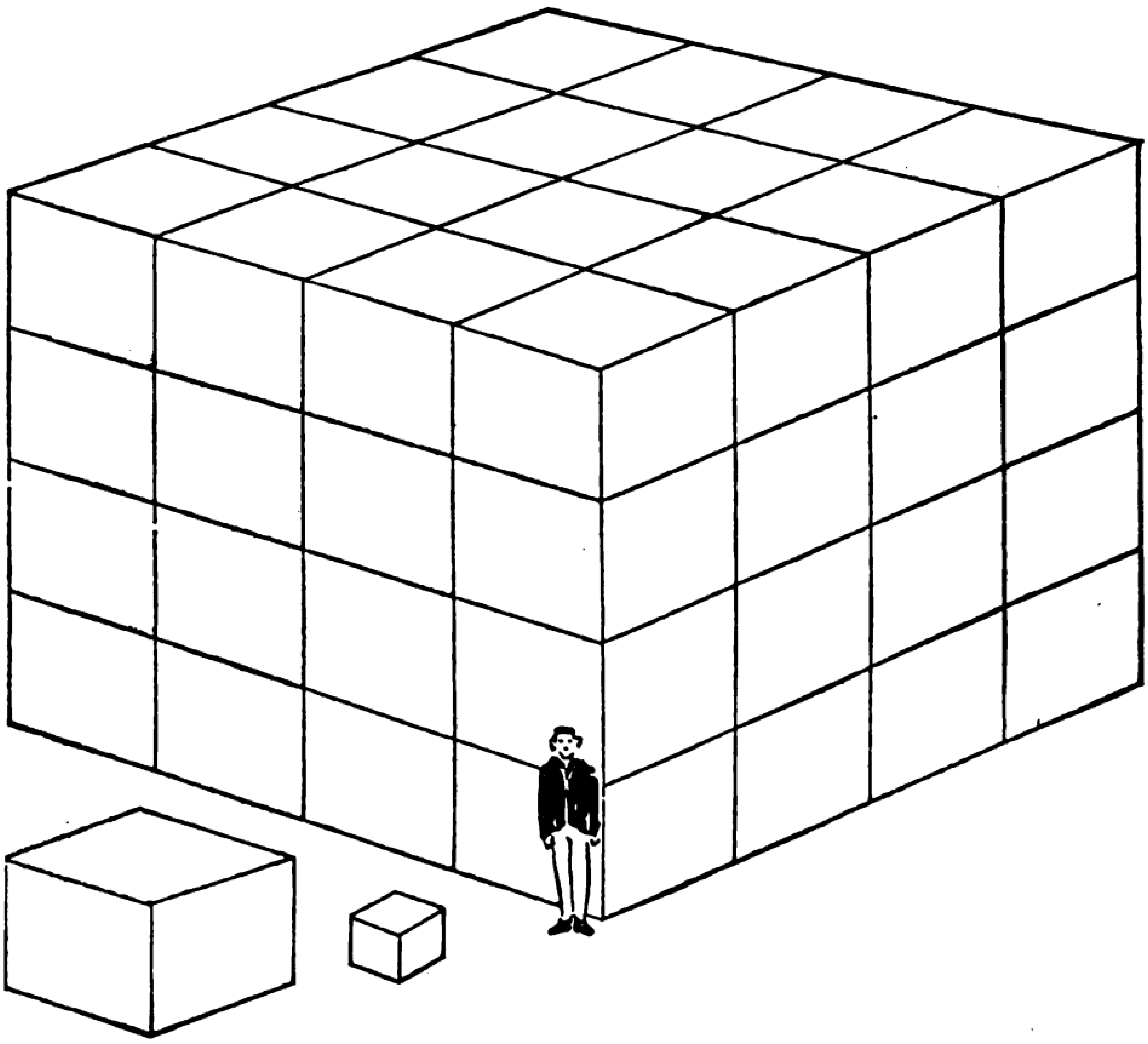


▲經濟上の計算（人間一生の食料五〇〇〇圓）

さて是までは單に分量に就ての計算でありましたがこれから少しく經濟上に立入ッて計算をして見ませう。

白米一升は今日の相塲で平均十五錢代へとして計算すれば七十二石は千〇八十圓となります、即ち人間一生の壽命の親たる米の代は千圓以上となる事が明かに知れました。又獸肉類は平均一斤三十錢魚肉は平均廿五錢今其

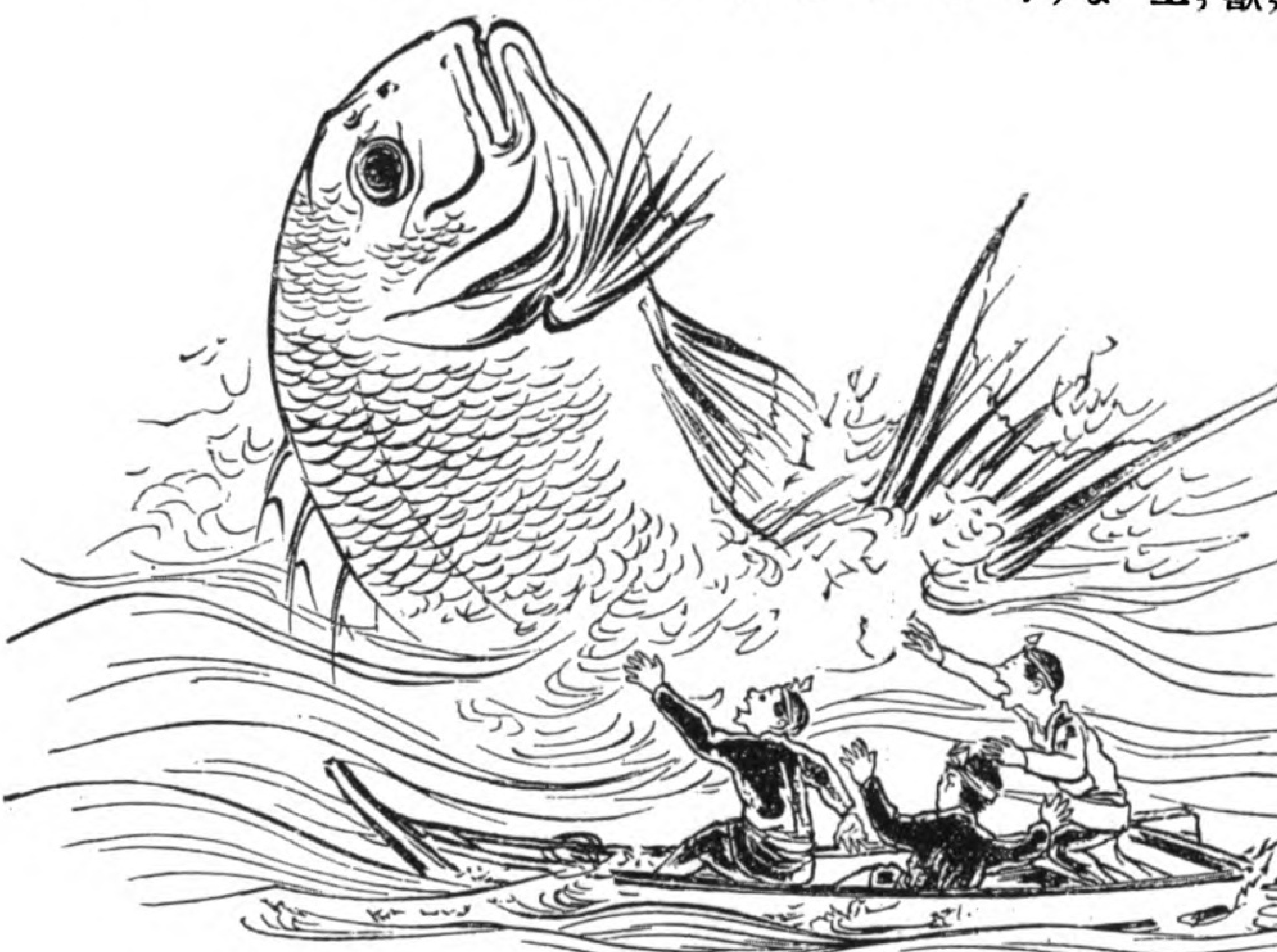
六十四年間に食す糧食全体の容積を立方体にて顯はしたるもの也



一ヶ年と一ヶ月間に食する糧食の容積を立体にて示したるもの

の中間を取ッて百匁二十錢としたらば適當でありませう、即ち人間一生の滋養物たる肉の代は三百六十貫目として七百二十圓となります。尤も是れは生活の程度によッて多少の差はありませうが、鯛とかすゞきとかのやうに比較的高價なる魚類を前記の計算によッて積て見ますと一尾七八十錢は相塲であるから矢張り、六七百圓の價を拂ふ事となります。尤も鯛の代りに鰈もあれば鯖もある、下ッて鰯

もあれば鰯もあるが。若し歐洲人の如く專ら鳥獸肉を需要すれば千圓以上となる事は明白であります。又三百六十貫目の牛肉を生牛に計算して見ると屈強の食牛十頭である一頭の食牛にて得る處の精肉は約四十貫として計算したものであります次に砂糖の需用は今日都鄙共に副食物の加味料となッて居るのみならず生活の上進に伴ふて菓子點心の加味料として需用するもの又頗る多く爲めに一ケ年に消費する額は約十五斤一貫八百目といふ數



人間一生の間に食する魚の容積

は都會に生活するもの、需用額として大なる相違はありません。これを代價に積ッて五十年に統計すると百圓となります。朝夕副食物を加味する砂糖、茶請に摘む菓子の加味料として既に此の巨額に上るのであるから實に人間の生活といふものは目に見へぬ處ろに金錢の棄るものではありませんか、其外、味噌、野菜、薪炭を一に現今の相場に積つて見ると大凡次の如くなります。

▲米　七十二石　千〇八十圓
▲味噌　百八十貫目　五十四圓
▲肉類　三百六十貫目　七百二十圓

▲牛乳　十八石　九百圓
▲鶏卵　一萬八千個　參百六十圓
▲野菜千八百貫目　百八十圓
▲砂糖九十貫目　九十圓
▲菓實百八十貫目　百二十圓
▲醤油五石三斗　百〇六圓
▲薪　千八百把　九十圓
▲炭　三百俵　百五十圓
▲石油　九石　十八圓
△計　四千六百七十六圓

即ち今日中等社會の生活に必要なる人間一生の食料はザット五千圓の額に上るのであります、右の内肉類、鶏卵、砂糖の如き滋養品を除いても四千圓内外の食料は日本中流の人の壽命の代價として仕拂はるゝのであります。



▲人間一生の間竈の下に燃やす薪の容量

我々日本中流社會の人は銘々必らず是れ丈の代價を世の中へ仕拂ふて我々の生命を維いで居るのであります。即ち單に人間必要品の代價として仕拂はるべき額であります、けれども若しこの外に衣服住居嗜好娯樂より段々奢侈の方面に入ッて計算したな

らば眞に驚くべき金額となるのでありませう。

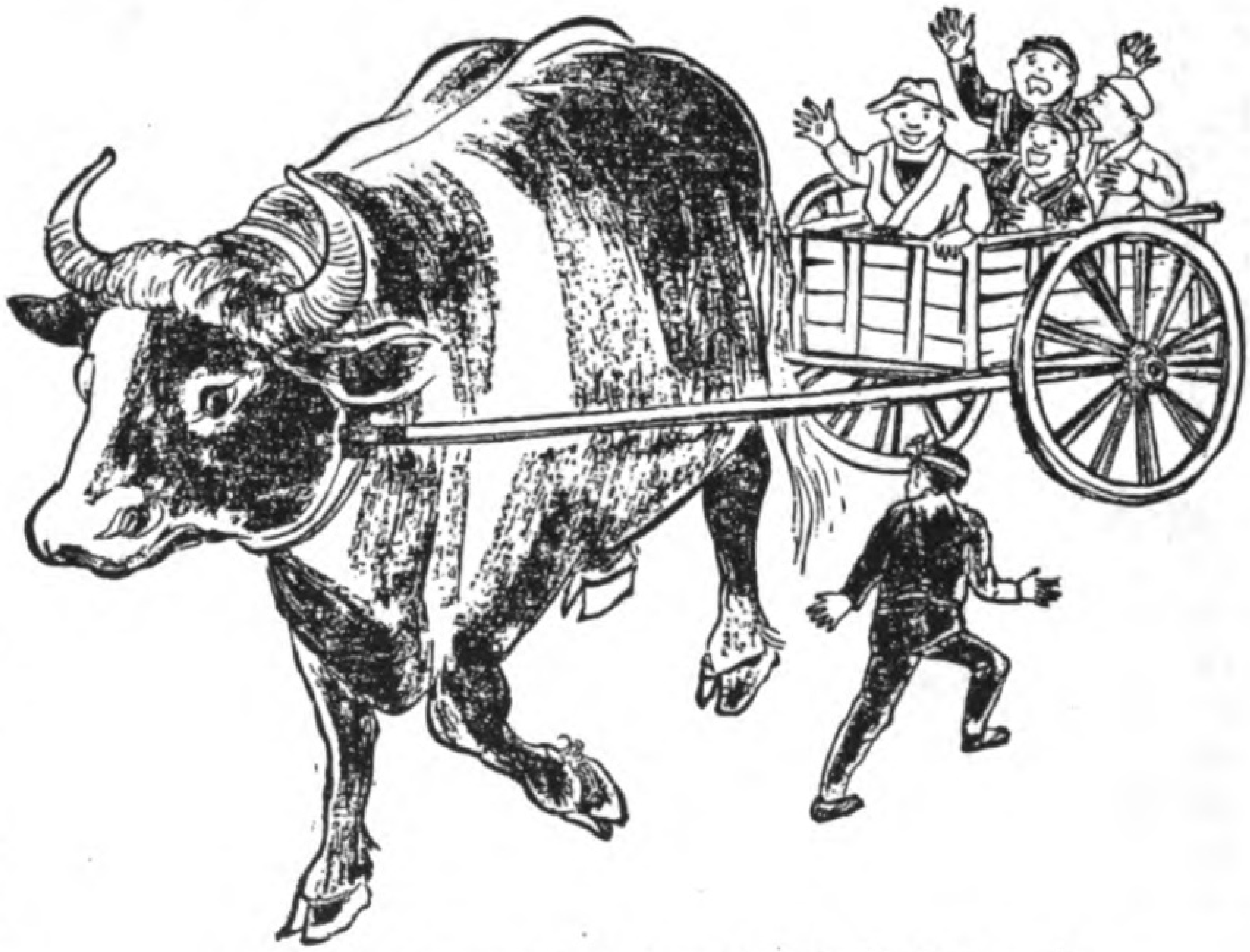
▲食糧に就ての教訓

米、肉、野菜、薪炭の料を總計して人間一生の入用は四千七百圓に昇りました、我々はこの大なる統計を明示されてこゝに如何なる教訓を得るのでありませうか、何は扨て置まづ今日家事經濟に志ある人はさし當ッて些末を捨てずといふ尊き教訓を得るのであります。人は天然物、人造物に拘らず、無益に物を捨てゝはなりませんが、既に四合の米が七十石になり千圓以上になると知りたらば人は經濟に重きを置かねばならぬといふ事を適切に悟ッて來る物の經濟を一生に通じて細かくしたならば一生に益する處は、莫大であるといふ事も悟るでありませう、そこで毎日無益に燃ゆる火、無益に流るゝ水にも注意して一々保存をするつもりになつたならば一生に通じて消費さるゝ衣食に就いて、どれ丈の無駄が省けるかといふ事も分るのであります　試に皆さんの家で毎日消費される一合づゝの酒、毎日消費される一本づゝの無駄な煙草を省いたならば人間一生には確かに二千金以上の價を剩す事が出來るのであります。又試に一家庭で日に十匁づゝの砂糖を省くとすれば、人一代の間には百八十貫目の費か省ける事となります、これを現今の代價に積つて見ると正さに二百圓となります。一家にしてこの通りであるから是を一町一村より一國一縣に及ぼして全國八百万戸五千万



▲晩酌一合五十年間の容量

人の上に計上すれば幾十億といふ數に上るかそれは實に驚くべき數でありませう、僅か一摘みの砂糖すらこの如くです、況んやこれを生活全体の經濟に當てはめて見たらば、嘸ぞ非常なものでありませう、且又物質の經濟を時間の上に轉じたならば更に大なる敎訓を得るのである。人間がもし毎日一時間づゝを活かして用ふるとすれば一生涯には正さに一万八千時日に直して七百餘日、彼是れ二ヶ年の歲月を活用する事となるのであります、二ヶ年の歲月を活用すれば如何なる大事業も出來ますする食物は寢ても覺めても食はねばならぬが、歲月はうか〳〵して居る間に空しく經つて仕舞ものです務めよ勵よと唯口頭ばかりで奬めても益はありません、そこで私はまづ銘々が日々食ふものの分量から計算して人の好奇心に訴へそして大に各自の克己心を促がさんと欲するのであります。

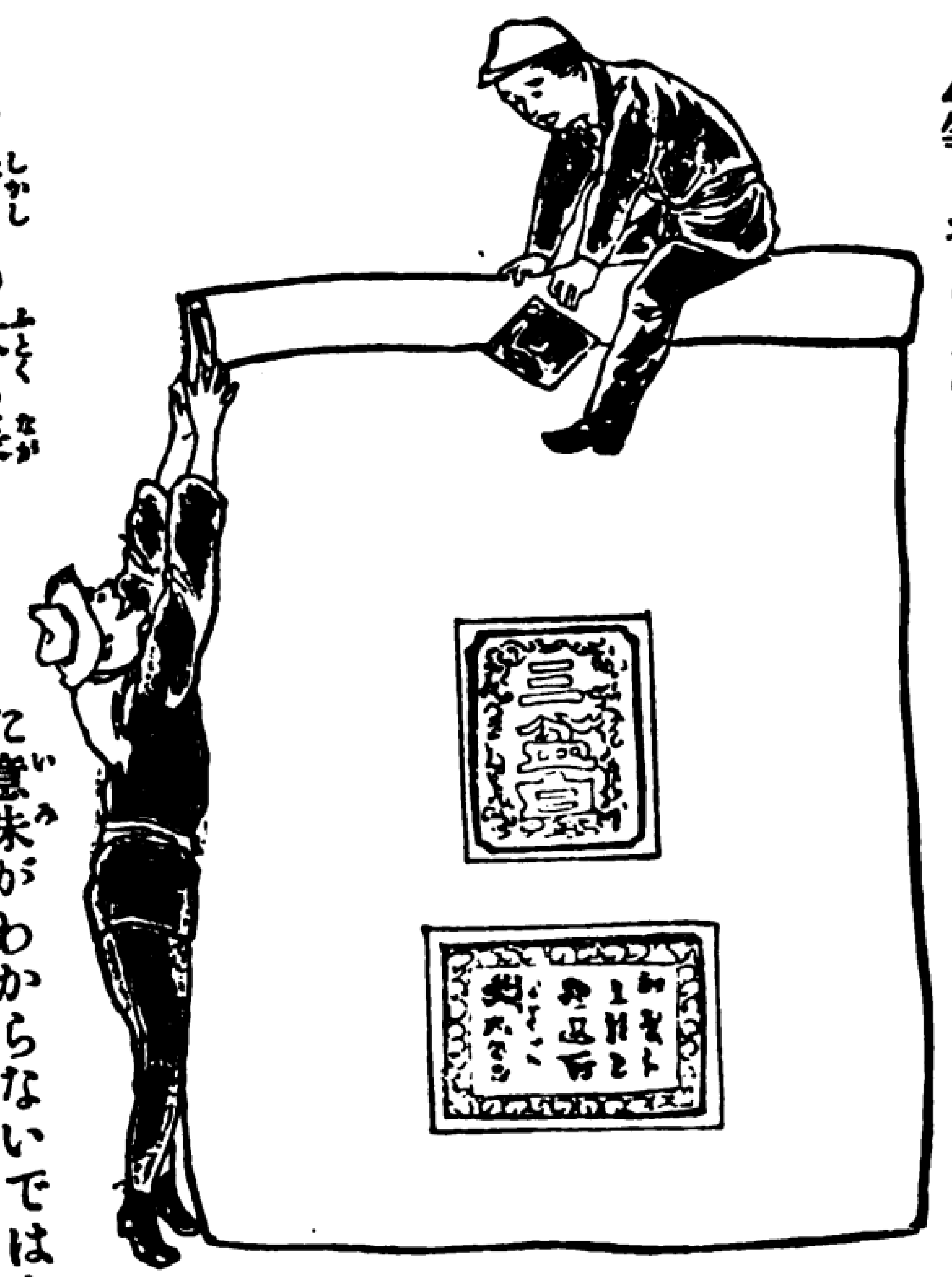


▲一日二十匁の肉一生に積つて大牛となる

▲人間と草木との比喩

再び說く一日四合づゝの米が人間一生に七十三石となり、一日二十匁づゝの肉が參百六十貫目となるのは明らかに統計の示す處であります四合の米はお孃さんの袂の中へも納りますが、七十三石の米は圖に示す通りで巨大な、俵となッて相撲取が十人かゝつ

ても動かす事は出來ません、若しこれを荷車で運ぶとすれば車力二十臺持ッて來ても足りません。又二十匁の肉は小さな西洋皿に盛ッて一片に過ぎないが、參百六十貫の肉は圖に示す通り巨大な動物となッて人間が十人も曳かれて行くのです何と驚くべき數量となるではありませんか、併し人間はこの如く多量の物質を其の肉體に吸集しつゝあるにも拘らず、五尺の體はいつまで經ッても依然として五尺、十三貫五百目の體量は何年經つても猶十三貫五百目しか太くも長くもなりません、併その太も長くもならない處が確かに人間の人間たる處で我が人生に大なる價値のある處ではありませんか、御覽なさい苗を植へた一尺の杉の木は十年經てば一丈になります、百年經てば十丈になります徑一寸の松苗傘の軸ほどの



▲等身の砂糖袋

樹も數百千年の歳月を經れば十尺二十尺の廻りとなッて幹に洞穴も鑿れるやうになります、併し是れは靈魂のない植物の常であるが併し人間は植物のやうに大きくならない代りに無形の智識の進歩道德の發達即はち人格の成長といふ事があります。これが實に人間の人間たる不斷物質的の食糧を取るべき大なる權利のある處ではありませんか、然るに車力二十臺で運ぶほどの米を食ひ、象の躰よりも重き程の肉を食ひながらその人格に何の進歩もなく發達もなくして空しく死んで仕舞ふとは何事でせう、それでは折角世の中へ出て來た意味がわからないではありませんか。されば人は植物の如く年を經て大きくならぬ代りに智識を弘め、道德を硏いて人格といふ貴重なる無形の分量を成長せしめなければなりません。是れいさゝか予輩がこゝにこの無味乾燥なる食物の統計を試みた微志であります。

一日醫者

糸左近

實問書を續々送られた中に、最も多く尋れてある病は、遺尿・腋臭・癜風・禿髪・母斑・無毛症・耳漏などであるから、今度は左に之を列記して見ませう、故に今後は右諸症に限り、返書を上げますまい。右諸症の中で、遺尿の外は、私の專門外でありますから、下手であると自ら信じてゐます、讀者諸君に察して頂きたいのである。

▲遺尿

れせうべん又は夜つばりとも云ふ

〔原因〕五歳から十五六歳までの營養不良な小兒に多くある病で、膀胱括約筋が痲痺れてゐるなどの故障から來るのである。生れてから、四五歳までの間に、親の育方が惡いと、これになることがある。即ち母親又は乳母が不性である爲に、其時を見計ひ、放尿せしめなかつた習慣が年を經ても容易に改まらぬのもある。晝は疊の上に洩れ放題洩れさせ、夜は襁褓をあてゝあるからとて、泣かうと閙かうと、其親が一向平氣で居ながら、後で其子を打擲するに至つては、第一母親の心から療治してかゝらねばならぬ。一定の乳汁なり、一定の飲食物を取つて居れば、便を洩す時と度數とは、大抵一定するものであるのに、疊や寢床に洩れさすとは、生地の無いことと謂はねばならぬ。生來痴鈍な者にも往々此の病がある。又長い時間排尿を忍ぶとこれになることもある。其他蛔蟲、腦病、脊髓病、痲醉劑中毒なども原因となることがある。十六七歳以上二十歳三十歳になつてから、始めて此症に罹るのは、大抵手淫過房に依るものである。高年になつてから有るのは、筋力が衰ふるからである。

〔病狀〕夢の裡に便所と心得て洩し、或は全く知らずして漏るゝのもある。又或は目が醒めるけれど、醒むるや否や間に合はぬのもある。最も重いのは、晝夜に拘らず、ジブ〳〵少し宛出るのがある。斯うなれば、迚も治る見込が無いと言つても可い位である。普通の遺尿症は、大槪就寢後一時間か或は拂曉に行るのである。

〔療法〕體質薄弱であるならば、言ふまでも無く强壯法

を實行すれば、遺尿は自然に治つて了ふ。親の育方が惡かつた爲に習慣となつたのは、其の習慣を破る樣に注意せねばならぬ。生來痴鈍な爲にあるのは、色々の方便教育、即ち懇々說諭を加へ、精神を興奮さす樣に導き、遺尿の無つた時は、大いに之を賞し、遺尿の有つた場合には多少の罰を加ふるといふやうにすれば、早晩全治するものである。蛔蟲、腦病、脊髓病、痲痺劑、中毒の爲に本病になつたのは、其の原因病さへ治れば本病も亦從つて消ることは當然である。手淫過房が原因となつたのは、大いに悔悟の精神を起し、專ら攝生を加ふれば、癒えぬといふことは萬々無い。高老の爲に來るは、是非も無き次第、子たり孫たる者は、恩を報いる時は、此の時なりと心得、度々襁褓を取り換へて差し上るなり、便器を奉るなり、御心に適ふやう、專ら孝道を盡すより外に仕方は無い。

兎に角午後二時頃からは飲料を嚴禁し、運動せしめて發汗を促すやうにし、滋養の食物を取らせて、體質の强壯を圖り、男ならば英雄豪傑の傳記でも聽かせ、女ならば貞女烈婦の行ひでも話して、精神を興奮せしめ、夜間屢々目を醒さしめ、或は右側臥とし、或は左側臥とし、時々放尿を實行せしむるが肝要である、又就眠二三時間前に背部から腰部へかけて冷水を注ぎ、或は冷水に浸せる木綿即ち襁褓樣の物を、陰部から肛門にかけ纒ひ、それを度々冷しては取り換へ、端坐せしめておくも可い、或は冷水灌腸も仲々効あるものである、此の樣に下部丈冷すのは、膀胱括約筋を收縮せしめ、且つ筋肉神經を銳敏にするのである。內服藥としては、

硫酸鐵　〇、一　　鞣酸　〇、三　　甘草末適宜

右十八丸に作り、一日三回食後二丸宛（即ち三日分の處方である）

偖左に余の經驗談を述べて、諸君の御參考に供へませう。

私の再從兄弟の娘十五歲が本病で、七八歲から醫療は言ふに及ばず、溫泉、禁厭、鍼灸、祈禱に至るまで、行ふたけれど効が無い。私も色々右に述べた療法を親

に勧め、投薬もしたけれど、何うも治らぬと訴ふ。そこで私は、これは何でも親が色々に氣が迷ひ、一つ療法を續けぬのであらうと考へたから、ちや宅へ引取つて療治して見ませうと、漸く親の承知を得、愈々實行に取掛つたは、今より六年前のことである。この娘は、体質中等以下の薄弱者で、十五歳とは言へど、乳房の發育も無ければ、勿論月經も無い、それは其の筈である、全体月經のあるものだといふ事も知らぬ位に、精神の發達もして居らぬのである。そこで私は何でも運動が必要であると思ひ、家中の拭掃除から、庭を掃くこと、盆栽に水をかける世話まで、悉く受持せ、食物は朝六時に牛乳二合を飲ませ、七時に普通の朝飯を與へ、十時頃にお茶を随意に飲ましめ、午飯には可成肉食を取らしめ、飲料を敢て禁せず、午後二時からは何と訴へても、湯水を與へぬことにし、夕食は淡泊な食物、例へば豆腐とか麩とかいふ副食物に定め、それから色々のお伽噺や烈女の傳など聽かせ、其の間に冷水に浸せる木綿を、尿道から臀部へかけ坐らせておくのである。それより冷水灌腸を行ひ、九時に右側臥に寢かしめ、十時半頃に起し、强ひて放尿せしめ、左側臥とし、十二時頃に又右側臥とし、午前二時に左側臥とし、四時に起して放尿せしめ、五時半に是非共目を醒さしむることに實行し、さうして賞罰を嚴にした、これは教育家に論せしむれば、批難も有らうが、兎に角、寢巻を汚す時は、其の寢巻の洗濯は自身に行はしむるは勿論、線香一本の火が消ゆるまで直立を命じ、放尿の無い時は、繪本簪或は櫛或は貯金など與ふることにし、其他秩序清潔の二德は嚴重に養成し、又睡眠中「目ざまし時計」など鳴らせば、起き上るやうな習慣を順次に躾けたのである。初の中は、甘い親の膝下に居たのであるから、冷水坐、冷水灌腸、午後二時からの飲料嚴禁などは、大いに厭がり、さめ〴〵泣いたれど、或は諭し、或は威し、當人よりも余の苦さは一通りで無い、親に戻さうかと思うたことも度々あつた、併し、日を經るに従うて、互に習慣となり、七八ケ月で、遺尿も止み、身体も肥え太つたのである。これから考へて見ると、

小人ノ如レキハ愛レスルガ子ヲ憎ム也君子ノ如レキハ憎レム子ヲ愛スル也

ではあるまいかと思ふのである。

家庭月令

六月＝小＝水無月

（一日）更衣……此日單衣に衣がへす、各呉服店にて夏物賣出す。（十一日）入梅……梅の實黄熟するてふ降雨期に入る。（十五日）武藏一ノ宮氷川神社祭、東京日枝神社祭禮。（二十一日）尾張熱田神社祭。（二十二日）夏至……一年中最も日長き時なり、日出四時二十五分、日入七時〇分。（三十日）大祓……各所の神社にてなごしの祓を行ふ、こは年のなかばの終に臨みもろもろの罪穢を拂ひ淨むるの神事なり、拾遺集に『みな月のなごしのはらへする人は千とせの命のぶといふなり』

（氣節）　上旬「芒種」下旬「夏至」。十一日より梅雨に入り、五月雨の降りみ降らずみ、萱の軒端の朽つるまで、幾日も鬱陶敷季節となる、俊成の歌に『さみだれはたくものけぶり打しめりしほたれまさるすまの浦人』とあるは、此頃の景色を詠まれたるものなり。時候は日増に暑さ覺ねて、肌え汗ばめは、表裕に單羽織、輕う裝うて、氷店の玉簾捲るもの漸う〳〵多し。

（農事）　農家の活動時期、上旬より半夏至にかけて田植に忙しく、田植終りて麥刈に移る。又た蠶は四眠の麥漸く繭めて繭を作るが故、之を搔き取り、搔き終れば直ちに桑の壓條に取りかゝる、其他二番茶を摘み、螟蛾を誘殺する等それからそれと多忙を極むる時なり、畑作にては稗、甘藷、藍の播種を初め、白瓜・青瓜、西洋ちさ、西洋莢豆の種まきなどにて、野にも山にも希望充ち滿ちたり。

（園藝）　椿、竹の植替によろし、前庭に花菖蒲を眺め、後園に薔薇を賞する、最も趣味深し。

（食品）　烏賊魚と新牛蒡のうま煮、新百合とひじきの金山寺和へ、冬瓜の葛溜、鰯と枝豆の三杯酢、シコ鰯のツミ入れ、鰺の酢ツクリ、蕪の新漬、いちご、夏蜜柑。

（行樂）　近郊に田植の光景を見物に行くも宜しく、溪畔に螢を狩るも面白く、清流の鮎狩、海邊の舟遊、何れも興深く、扨ては花園に赴きて、アヤメ、カキツバタの清楚なる姿、バラの花の艶麗なる形を品定めするも亦快ならずや。

（景勝）　菖蒲の名所は東京堀切、向島百花園、四ツ目植文・四ツ木。螢の名所は山城宇治、東京谷中螢澤・關口、押上堤。

（日曜日）　五日、　十二日、　十九日、　廿六日。

家庭科學

理科應用 家政廿四時

河西天放

朝飯が濟む、子供は學校へ行く、主人は外出する、妻君は奥用にかゝる前に後方付といふ隱れたる而して大切なる一つの仕事を濟まさねばならぬ。

▲洗ひ物の注意

瀬戸物の扱ひを大切にすべき事は言ふ迄もない。數多くの皿茶碗を同時に洗ひ桶へ入れてガチャ〳〵やる、これで損じが無いならば不思議と言はねばならぬ。汚れた器は先づ種類別けをして、一つ宛荒洗ひ清洗ひをし、洗ひ籠に伏せて水を切り、水の切れた時拭ひを懸ける。種類別けは勿論汚れ方の多少で、油氣の物は別に熱い湯、猶西洋風に石鹼を用ふがよろしい。肉食が盛になるにつれ、流し元に石鹼を用ふことは、遂には一般の事にならうと自分は考へて居る。

洗ひ物は、たとへば夏でも、冷水よりは温湯の方がよい。然し冬の嚴寒の朝など、あまり熱い湯を使ふと、『生し』の不十分な瀬戸物などはよく破れたがる。たとへばランプの火を急に大くすれば、火屋が破れたがるのと同じ理で、熱の爲表面丈か急に膨らむ爲、縮んで居る内部と釣合ひが取れず、此不釣合が破れの原因になる、釣合はぬは不緣の元と言ふた道理。氣を付けねばならぬ。瀬戸物や火屋などの『生し』といふことは、妻君方には大切の事です。

▲『生し』

ガラス類瀬戸物類を新に買ふて來たならば、之を鍋か釜に入れ、冷水を注ぎ、藁詰にして、火を燃き、ぐらぐら煮立てること一時間許り、そろ〳〵火を減し、焚落へ木炭を少し足して、成るたけ永くかゝつて冷え切るやうにする。かくすれば器は前よりはづんと丈夫になつて、破れ難い。これが即ち『生し』の法で、其道理

は、熱を與へて器の分子を動亂させ、さてそろ〳〵と冷して之を各適宜の地に落付かせる、適宜の地に落付いた分子は、以前よりは滿足して、不平が無いから、破裂し難い。と先言ふたやうな譯。西洋などで此類の器を遠く輸出する時は、大抵此方法を施すといふことだ。

此方法を施す時、若し詰物をかはねば、湯が煮え立つ時器が躍つて、打當つて破れる恐れがある。夫から、折角此經濟的方法を施しても、冷し方が急ならば、器の分子は却て前よりは無理に固定されて、「生す」どころか、反對の『燒きを入れる』ことになり、一層脆く破れ易くなるかも知れぬ。冷し方は徐々程宜しい。

瀬戸物ガラス器の『生し』には、只の湯よりは食鹽を少し入れた方がよろしい。

▲御釜の尻

鍋釜に煤炭をためて置くと、熱は之に遮られて、煮えが遲いのみならず、薪に損がある。何故なれば煤炭は固熱を導き難いもので、しかも煤の層の間には、一層熱を導き難い空氣が含まれて居るから、鍋釜の尻に煤炭の付いて居るのは、たとへば夏氷を鋸屑で圍ふやうなものと考へられる。

しかし鍋釜の尻を毎度奇麗に削つて、其上を砂で磨くのは、いかにもピカ〳〵光つて心持はよいが、矢張同じ損がある。何故といふに、すべて滑々して居る物、光つて居る物、白がゝつた物は、熱の吸ひが惡いといふ規則で、熱が來ても多分は其面で跳ね返されて、內部へ傳つては行かぬ。鍋釜の尻が此道理。だから、煤炭は掻き落したまゝ磨かずに、黒くザラ〳〵にして置くのが、一番科學の智識に適つて居る。

新しい土鍋や土瓶の尻へ墨を塗るのも同じ道理。

▲雜　注　意

庖丁出刄などの錆びたのは、荒砥で研いだ上を、細かい砥にかけ、刄はいつも十分に付けて置くやう。少しの錆は磨砂又は堅炭で結構。火箸などの錆は、土の中へ挿し込み〳〵すれば奇麗に落ちる。

流しや樽の外部などは、サヽラ又は砂で磨き、樽の內

部は、水と小石と粗砂を入れて振れば奇麗になる。ガラス壜の内部も粗砂が宜しい。散彈を使へば猶よいが、素人家の勝手元にそんな用意も要るまい。物を磨くに木灰は便利なもの、特に油氣はこれで大抵は落せる。石鹼で脂肪垢を洗ひ落すと同じ作用になる。

流し元に、洗ひ



物を載せる手輕の机を備へ付けて置けば至極重寶だ。

鍋釜の内部は必拭いで乾かして置くがよい。春の末から夏秋は、この注意が無いと錆びが來安い。庖丁も其通り。

食鹽は笊に入れて、下に苦鹽の受器を置くべし。買つて來たら、直

ぐ炮烙で燒鹽にして置けば、潮解ることが少い。

水桶には、後で蓋をする事を忘れぬやう。

水いぢりの後は、必ず手を乾いた手拭で拭くことに定めて置くべし。別けても冬など、濡れたまゝで居ると、荒れてひゞが切れる恐れが多い。

洗ひ物の後で、次の藥を少しづゝ手に塗れば、荒れやひゞを防ぐ奇効がある。極安い藥で、心安い藥屋で造へて貰へば、二三錢で一二年十分に使へる。之にグリスリンを混せても宜しい。

きめを濃やかにし膚の荒れひゞ
垢ぎれを防ぐ妙藥處方

一、苛性加里　一匁

右二合の水に溶す事

以上

後方付が濟んでから晝飯の用意にかゝる迄の二三時間に當て込んで置く仕事は、洗濯、張物、裁縫、染物、編物、刺繍、若くは器具の手入れ、汚染拔、書信、買物、訪問、時により人に由つて千差萬別ではあるが、何れにせよ、之を遺憾なく仕遂げるには、必ず相當の科學的智識を要すること言ふ迄も無い。以下聊か此等の二三に就いて述べて見やう。

▲洗濯のいろ〳〵

色々取纏めて洗濯にかゝるならば、先づ木綿物、麻物、絹物、毛物と分類した上を、更に垢付の少い白い物、垢付の多い白い物、色落の少い物、多い物とやうに分類して、成るべく湯と手數の儉約を心懸けねばならぬ。

木綿物の洗濯にソーダを使ふならば、先づ別の器に溶し、分量を加減して盥に移すべきで、若し塊のまゝ盥に入れると、布地を傷める恐れがある。ソーダよりは勿論石鹸で、洗濯石鹸は、嘗めて少しはピリリと來ても差支へは無いが、泡のよく出る堅いのを買はねば損だ。

若し垢のひどい物なら、釜へ入れ、石鹸を削り入れて、攪き混せながら半時間も煮、夫から盥へ出して洗ふに限る。洗ふのに日本流に手で揉むのは隨分つらい仕事で、美しい手をたこにするはまだしも、痛んで永くは

積かぬ。これには是非西洋風の洗濯板を使ふやうにしたい。三四十錢出して一板買つて置けば、永く使へて、一度に足袋の二三十足や單衣の十枚二十枚は苦もなく洗へる。

洗濯物を干すのに、日本風の竿も風流の物だが、西洋風の麻繩に留針は、一段手輕のやうに思へる。尤これで干すならば、乾いてから霧を吹いて疊み付け又は火熨斗をくれるのに、少し餘分の面倒を見ずばなるまい。



洗濯には水が大事で、若し硬い井戸水などを使へば、垢が中々落ちず、石鹸の利きも惡く、其上白い物も十分白くなり難い。硬い水とは、煮詰めて白い沈滓の出來る水で、これは石灰質の物だから、石鹸を横取りして、利きを薄くし、垢の落る妨をする。尤同じ硬い水でも、一度煮立てれば、石灰質の半分は、湯垢となつて沈澱むから、生水よりはよいが、殘り半分は沈澱まないから、どうしても上等の洗濯水にはならぬ。それなら洗濯にはどういふ水が一番よいかといふに、第一が天水だ。大桶に天水を引き、下の方へカランを付けて、捻つて出せるやうにして置いて、之を汲んで來て使ふに限る。天水は自然の大蒸餾器にかけた水だから、勿論石灰質の物なぞは持つて居ぬ、のみならず、空氣中にあるアンモニア瓦斯などを溶して來て居るから、此の働き丈でも垢を落す効がある。アンモニアで思ひ出したが、濟んでさへ居るならば、天水の代りに、池などの古い溜り水もよい洗濯水だ。腐水はアンモニアの樣な類の物質を含んで居る。特に毛物に至つては、此腐り水に限る。毛布などは、風呂桶か大盥の中で、此水を汲み替え〳〵踏んで洗へば、よく落ちる事受合ひだ。尤水の腐れ方が弱いなら、少しアンモニア水を入れるがよい。

西洋では、腐つた小便を以て羊毛を洗ふものもあると聞いて居るが、まさか真似は出來ますまいネ。本フラネル、メリンスなどの細い毛糸織や絹物には、ソーダは一切禁物だ。ソーダはかういふ動物質を溶すから、濃くなくともどうしても地を痛める。天水だけで落ちぬなら、上等の石鹸を御供ひなさい。猶硼砂といふ薬が地を痛めずによく垢を落す効があり、更紗友染などの彩色物は、鉛糖といふ薬を水に溶した中で洗へば、褪める心配が少い。若し鉛糖が無いなら明礬でも宜しい。

▲汚染抜きの事

半襟てがらなどの脂染みたものは、揮發油の中で振れば直ぐ奇麗に落ちる、揮發油は極揮發つて行き易いものだから、其まゝ懸けて置くか、遠火にかざせば直ぐに乾いてしまふ。火を引き易い油だから、火の傍で扱はぬやう。夫から一度使つたのは、棄てずに壜に入れて、よく栓をして、栓の上へ堅油か蠟でも塗つて仕舞つて置けば、又使ふことが出來る。

石油は揮發油のやうに揮發つて行かぬから、着物などへ石油を零したら、其上へ古新聞紙なり、日本紙なり、五六枚敷き、其上へ温灰を載せ、これを繰返せば大抵は抜くことが出來る。揮發油の中で洗へば猶手取早い。揮發油は動物質植物質の脂油を溶す如くに、同じ鑛物油の石油を溶す。

アルコールも脂を溶すから、脂垢を其中で洗へば直ぐに取れる。焼酎でも宜しい。エーテルなら猶宜しい。醫者は膏薬の膚へこびり付いて居るのなどを、エーテルを布へ付けるので造作なく拭き取つて與れる。同じ理だ。アルコールやエーテルは直ぐに揮發つてしまふから、後の手數は少しも無い。

硼砂と樟脳を二と一の割に混ぜたものを壜へ入れて貯へ置き、脂垢を落さうといふ時、小分して沸湯に溶して、其中で洗へば、直ぐに落ちる。猶汚染抜には、大根の搾り汁がよく利くといふ事だ。

汚染抜粉といふ物を造へて置けば至極重寶だ。何でもない、極上等の白土か白墨の粉を石鹸の水で錬り、板

と板の間へ入れて壓し固め、乾かしたもので、汚染を拔かうと思ふ時は、汚染の部を乾いた布の上へ廣げ、其上へ件の白土の塊を粉に削り懸け、其上へ薄紙二三枚載せて、火熨斗で壓す、大抵の汚染は白土に附着いて落ちてしまふ。

汚染によつては酢で洗へば落ちる。酸醤又は酸模の絞り汁で洗つて落ちる。これで色が殘るなら、其上を赤豆の粉で洗へば落ちてしまふ。

墨は中々藥では落ちぬ。墨は炭素で、炭素を溶す藥は無い。そこで器械的に飯粒で擦る。すると墨は段々之に取られて落ちてしまふ。一体石鹸が垢を落す理由の一つは化學作用だが、一つは石鹸のねば〳〵が器械的に取つて行くのだ。卵の白味の作用も器械的のものだ。絹物の汚染に卵の白味を使ふこともある。

血や膿汁などの汚染は、湯で洗つてはならぬ。湯では痕が殘りたがる水が宜しい。落ち難いならば。膠水で試つて御覧なさい。澁には白砂糖、稀には餡のぬめり、黄泥には生薑の卸し汁など、昔から色々の法が傳へてある。

單衣や手拭などを鐵釘へ懸けると、鐵銹が付いて中々落ちない。薄銹なら酢で洗へば大抵落ちる。頑固の銹ならば、先づ其部を濕し、二十倍の水に溶した木附子の粉を付けてよく揉み、半日置いて水で洗ひ、次いで石鹸で洗ひ、水で洗ひ、蓚酸の溶液又は酸醤の絞り汁を付けて揉み擦り、更に半日置いて水で洗へば、大抵は落ちる。こんな手數がかゝるを見るにつけても、裸釘へ白い物を懸けることは愚の至りで、懸釘は細竹(筆の軸の輪切)を、挿して打つべきです。

外套や東コートの襟垢は、板の上で石鹸を附けて刷子で擦つて、湯で洗つて乾せば宜しい。帽子は型が無いと、此法で奇麗にはなるが、形がこはれるから少々困る、一部分なら、甘く工夫したら、家で洗濯が出來やうか。

帽子の山などの折れ潰れたのは、鐵瓶の湯氣をくれゝば直ぐに直る。天鵞絨の毛の寢たのも此法で起すと何でもない。

▲布の地質の見別け方

布の地質は絹類毛類の動物質と、木綿類麻類の植物質とあつて、此等の見別けは子供も間違はないが、綿毛、綿絹などの相の子になると、隨分婦人でも引かけられることがあるから、見別け方一通りは承知して居らねばならぬ。

見別け方の一番手輕なのは、燃して見る法だ。動物質の糸は、火にくべると、一種特有のいやな臭ひがしてそろ〳〵と、卷き上りながら燃えて行き、燃え滓は質の疎鬆い炭だが、植物質の糸は、紙を燃したと同じ臭ひで、動物質とは非常に違つて居るのみならず、燃え方も早く、滓は白い灰か、若くは燃え易い炭だ。大抵はこれで見別けは間違はぬ。綿毛のやうな物なら、布の端をほぐして、糸を削つて、外圍と中心とを別々に燃して見るがよい。

藥を使へば、面倒な代り雜つて居る割合までキチンと見ることが出來る。之に色々あるが、ありふれた藥ならば洗濯ソーダ。之を濃く溶した中で煮て見る。すると絹や毛ならよく溶けてしまふが、木綿や麻は殆ど溶けずに殘る。相の子物擬造物は、これで見分けることが出來る。

薄い硫酸か、只の酢の中へ二三時間漬けて置いて、取出し、沸湯位の温度で乾せば、植物質は弱つて切れ易くなるが、動物質は何の變りもない。

人造絹は折角歐州で流行つて居るが、絹とは違つて植物質だから、見別けは直ぐに付く。夫に極燃え易い。が、こんな物はまだ我國には無いから、畢竟無益の話。屑絹で造へた帯地など、一寸見は本物と違はずに、價は極安い。隨分はめられそうな物だが、糸の捻りを戻して見れば、纎緯が短いから直ぐに看破れる。

△金魚の相場　風鈴の音色漸く快く泉水に金魚欲しき季節となりたり今年は氣候順當にて發育の模樣も好き方ゆゑ一般に其影響を受け殊に並物は安値なり昨今二年兒百尾に付き屑二十二錢位、和金三十錢前後より一圓位、琉金四十錢内外より一圓五十錢位、目高二十錢位にて金鐍は例の如く二十四五錢より十圓位迄の等差あり親魚中には一尾六七十圓に値するものもありとのこと又飾鯉は三十錢位變り鯉は六七十錢位。

戰爭と家事經濟

經濟記者

▲節儉と貯蓄

節儉と貯蓄の必要なることは、今更言ふ迄もない。併し今日の如き大事の場合に際しては、國民は非常の覺悟を以て、如何なる事にも費用の節約を試みると云ふ位ゐの氣で居なければならぬ。眞に必要である物の以外は、總て之を省くとも差支はないのである。よし塩を嘗め、粥を啜るとも、遠く萬里の外に身を捨て家をすてゝ遠征に赴いて居る人に較べたら、何の苦しいとも、切ないとも有りません。

それは儀式的に必要な事、若くは相當の修飾に關する事で、習慣上一朝にして廢することが出來ないと云ふ樣なものも、今日に於て決して皆無ではあるまい。けれども何が何であらうとも、此際である、如何なる習慣も、必要の爲ならば之を止めるの外はない、獨斷的に「止めました」と云つても、「それは不都合」と他から言はれる樣な時節ではないのだ。現に過日第一銀行頭取園田孝吉氏が、古金銀を日本銀行へ提供せよと言ひ出して以來、今日では金時計、金鎖、其他金と名のつくものを携へて居る者は、天下の阿呆であると謂はれる程にもなつた例もある。されば今日の事を利用し之を千載一遇の好機會として、今迄の習慣の上に一大革命を來さしめ、惡いものは絶對に打破すると云ふ方針をとつたら宜いではないか。而して是に關して、婦人の責任は殊に重大であります。

どうも婦人は虚榮心が強い、其の結果として奢侈の風習は、男子の方よりも女子の方から起つて來る方が、何れかと言へば多い樣である。その婦人が、古來家政を處理してゐるのであるから、どうしても消費經濟(支出)に無駄の多いことを免れぬ——所謂見えを張るとか何とか云ふ習慣も、直接生產(收入)の事に係らぬ女子が、家政を行つて居たからこそ盛になつたのではないか。勿論之を悉く女子の罪とするのは酷である、

けれども若し男子が家事經濟までも處理する人であつたなら、美と云ふ點に於てこそ缺くるともあらうが、經濟上から言つたなら、今少し利益のある、そして虚飾に乏しい社會が出來たでは無かつたらうかと思はれる。兎に角女子が、家事經濟を處理する任務をもてる以上は、そんな譏を受けぬ樣に、此際特に其の責任を重んじて、詰らぬ儀式的の事や、修飾に關することを成るべく避ける樣にして、然らずも前に述べた樣な譯からして、不知不識の裏に膨脹せんとする支出の高を出來るだけ節約すると云ふことに心を置かれたいのである。若し節儉と云ふことが、今日迄に充分行はれて居たのであつたなら、此際どれ程役に立つたかも知れぬ。或人は計算して曰ふ、今日國民が、各一人一日に金一錢づゝ積むならば一年には三圓六十五錢、即ち全人口に付て一億五千萬圓以上の資金を得ることが出來、軍費の如きは、之を以て其の大部分を供給することが出來やうと。一人金一錢、一家を五人とすれば總計金十五錢、一月に僅に金一圓五十錢である。全國平均金一圓五十錢の節儉を行ふ事は今日の槪して外觀張つたる家庭に於て、敢て必らずしも其の餘地がないと謂ふとは言れません。

尙ほ貯蓄の事に就いて一言して置きたいのは、成るべく死金を造くることを避けたが宜い。まづ今日の處では或は公債株劵の類を購ひ、或は銀行に持つて行き、又は郵便貯金などにして、夫れ〳〵相當の利子を收めてゐる者が多く、從つて國家社會は之を利用することが出來て、相互の爲に甚だ結構な事であるが、併し其等は多少纏つた金子なることが主であつて、零砕の資金に至ると、未だ〳〵家々の錢箱などに死藏せられ、若くは空しく費消せられて仕舞ふとが尠くない樣である、假令如何程少額の金錢であらうとも、大事にして之を貯蓄すると云ふ心掛けは、一家の主婦たる人の片時も忘れてはならぬ事です。

貯蓄した金は、時節柄それを以て國庫債劵の募集に應ずるのも可である。尤も今回のは、既に其の申込期が經過してしまつたが、尙ほ今後第二第三の國債發行

が有るとの事である、今回の國債は、當初一枚の券面金五十圓と云ふ事であつたが、間も無く改めて金廿五圓と云ふ事にした。そして其の拂込は數ヶ月に別たれて居たのであるから、隨分と零碎な資金でも之に應ずる事が出來たのだ。又勸業銀行の債劵は、今回五圓、十圓の最少額にまで及ぼす事になつたと云ふ。貯蓄を行ひながら、一方には國家社會の爲になると云ふ便利な法が開けて來たのだから、家事經濟を處理せん人は、須く充分の勸考があつて欲しいです。

▲遊食するの不可

節儉し、貯蓄して、及ぶだけ支出を減少せしむるの必要があると共に、又一方に於ては更に一家の收入を增加するの工風を講ずる事も必要である。今日の社會制度から言ふと、夫が一家の收入を造り、妻が之を支出する。專ら生產に從事するのは男子の方で、女子は其の所得を消費する方を掌る、斯くして家々の經濟と云ふものが成立つてゐるのである。されば女子は一般に直接生產の事に當らず、先づは安閑として遊んでゐると云ふのが、原則であるかの樣です。けれども今日の場合、飽迄其の如くであつて與れても困る。女子と雖も、亦少しは家の收入を增加せしむるの工風を講せよである。然らずんば節儉も貯蓄も、未だ其の眞意義に達する事が出來ぬ。イナ「遊んでゐる」と云ふ事は、男子であらうが、女子であらうが、又戰時であらうが平時であらうが、それは經濟上から觀ると一個の矛盾であります。

女子に職業が無いと云ふのは虛構で、昔から女子の或ものは、確に職業を持つてゐる。殊に下等社會の女子に至る程左樣で、例へば小商人の妻、勞働者の妻、農夫の妻、漁師の妻等の如き、皆夫に伴つたる職業、又は然らざるも女子獨占の職業、手內職の樣なものを持つてゐる。然るに中等から上等の社會に至るに從つて、女子が職業を持つて居らぬ、即ち更に獨立自營と云ふ心が無い樣に見える。勿論今日の時勢に於て、「女子は悉く職業を得よ」と云ふのは、稍や突飛の言論

であるかも知れぬが、敢て獨立した職業とは言はず、何か仕事をして、いとせめて自己の生活費に相當位ゐの收入をつくる工風をしたら、經濟上は勿論德義上から、將た女子の地位を維持する上から大に宜からうと思ふので、さは云へ斯くするが爲に、必らずしも不相應程に下等な職業を撰ぶに及ばず、中等又は上等の處にも、女子の爲すべき仕事は澤山あるであらうと思ふ。

併し或る新聞紙は、此際女子に內職をせよと勸めた蓋し日本人殊に其の女子は、天性美術工藝の事に巧みであるから、何物かを製作して、外國の博覽會になりと出品して、其の利益を收めたら何うかと云ふのであつた。是も工風である。又今日女學生などで、靴下の類を造つて、軍隊に贈つたのがある。こは必らずしも軍事費を献納する代りにと云ふ意味でもあるまいが、吾人は矢張何かの吉兆として之を歡迎するのである。眞に吾人の慾を言へば、願はくは是等の美擧をして、戰爭に際した一時の現象たるに終らしむること勿れ、今日の事をば好機會として、女子が皆職業に就く――即ち遊食することを止むるの端を開いて欲しい。

戰時には物價が騰貴する、そして家事經濟に影響しては、購買力の減少と云ふことになる。收入の價値は幾許か下る、支出の額は自ら增加しやうとする。それに軍事費の負擔などゝ云ふ餘計な入用も出て來る。節儉も必要になるし貯蓄も大切になる。そこで又女子も何かせねばならぬと云ふ仕義に立ち到るのです。

要するに、家事經濟が戰爭によつて蒙る影響は尠くない、而して恰もそれが、一國の經濟が戰爭の爲に蒙る所のものと似てゐる、家事經濟は殆ど恐慌を來さんとするのである。けれども若し家事經濟を處理するの人が、此の場合、充分の心得を以て事に當るならば、禍災を變じて幸福とすることも出來ぬのではない。即ち戰爭の爲に、今迄爲し難かつた惡習慣の打破が一朝にして行はれ、節儉、貯蓄の風習は大に改まり、一國の女子が皆獨立自營の志を起すに至らば、寔にこれ邦家の萬々歲、家庭其もの、女子其ものにとつての大益得たることは言ふ迄もない。畢竟戰爭が單に害毒に過

ぎぬものとなるか、それとも双手を擧げて歡迎すべき一新革進の來る機會となるかは、一に家事經濟を處理する人の心得如何に繫つてゐると謂つても差支ないのであります。

（完）

痲疹と種痘の注意

小兒醫者

痲疹は一度煩ふと二度は致さぬ病氣で、大概小兒の時に病つた人が多いから、大人には自然罹る事が無いと云つても宜い位であります、病氣の性質は非常に傳染爲易く、流行性感冒の樣な工合に、一家の内に一人發生すれば必ず他の兄弟に傳染つて免れる事は極めて稀である、流行性感冒と違つて居る點は流行性感冒は何回も罹るが痲疹は一度罹つた者には感染しない、痲疹に罹て難澁をするのは咳の出るのと咽喉や鼻が惡く成る事で、一體此病氣は極危險な病氣であつて小兒は之が爲に肺炎を發して殪れて仕舞うやうな恐れがあり、又鼻から耳へ病氣が移つて耳の病氣を惹起したりする事が屢々ある、而も最も怖るべきは此病氣が發する時か或は其の病後に結核が起つて來る事であります、古來痲疹とは人の熟知して居る病氣であるから、自然人の耳に慣れて怖れない樣に成つて仕舞つたのであるが、之は以ての外の義で、重體に陷らせずとも濟む場合にも取扱ひが輕忽なために重い容體に成つて取返しのつかぬことが屢々あります、斯う云ふ事は人の母と成つて居る人は餘程注意しなければならん、病氣の強い時分には熱もあるし、咳も澤山出たりするから誰も注意して居るが、熱も散じ咳も殆ど出ないと云つて宜い位になると大概平癒したものと思ふ人が多いが、之が抑〻失策を起す多くの原因に成つて居る、凡て傳染病は病勢輕重に係らず全治した後にも容易には身體の血液が發病前のやうに回復しないものだから、當分の内は身體の抵抗力が著しく弱つて居る、夫故外觀は全治した樣に見えても內實は却々爾うで無い、其時分に平日の通な取扱ひをして早く新鮮の空氣を吸はせた方

が宜からうと云ふ様な事から外へ出したり、又身體が不潔であるから早く湯に浴れやうと云ふ様な事をする人があるが、之が甚だ惡い事で、爲めに麻疹を再發したり、麻疹でなくとも氣管支加答留を強く起したり、又たは肋膜炎を起したり、其の他種々の重い病氣を惹き起すのであります、此種の出來事は麻疹の流行毎に數次實見するのであつて、其都度種々注意をするけれども、母親達の耳には容易に入らぬと見えて、何時も同じ手ぬかりがある、麻疹が發したら母親は注意をして病中は勿論病後と雖も充分長く保護をしなければ成らぬ、何の家でも沐浴を急ぐのが第一に宜くない入浴は何時でも出來るから而う急ぐには及ばぬ事と思ふ、又どうせ一度罹るものならば、麻疹は幼年の時に罹つた方が善いと云ひ、大人に成つてからは槪して幼年の時よりは病勢が強く成ると云ふ說もあるが、これも或る點までは理屈があるが、併し麻疹を小供にさせると云ふ事は餘程考へなければ成らぬ事であつて、流行時期に由つて順良なる麻疹と性質の惡るいのとあるから、其邊も餘程注意をしないと却つて大患を殘す事になるから第一に小兒の其當時の體質は麻疹に罹つても堪へ得るや否やと云ふ事、又其當時の流行の麻疹は性質が順良なるか否かと云ふ事を聞糺さなければならぬ、只一も二もなく一度煩た方が利益であると云ふ點にのみ注意したのでは誠に危險である、極く極端の例を擧げると、私共の小兒は麻疹に罹つて居るからと云つて殆と平素の風邪の様に思つて醫師にも連れ行かぬと云ふ事が下等社會ばかりでなく總べての事を心得て居らるゝ人の中にも多くあります斯くの如きは以ての外の話であつて實に危險千萬である、兎に角一の傳染病であれば輕症にもしろ醫師の監督を受けて看護すると云ふ事は最も必要であらうと思ひます、次に種痘の事をお談し致しますが種痘の時期に就ては種々說がある大體に就て云ふと何時種ても差支無いのである日本では多く春と秋とに於て種る様ですが、只氣候が好いとか或ひは地方なんぞで都合が好いと云ふ様な點から定めたのであつて、別に春とか秋とか種痘の爲めに善い

時期であると云ふやうな事は無い。時期と云ふ事に就いてお話をすれば小兒の健康の狀態を見る事が一番大切である、即ち其小兒の健康が其當時種痘に堪へ得るや否やと云ふ事を確める事が一番肝要な事であります、尙一つ注意すべきことは其當時麻疹とかインフルエンザなどの流行して居るかなどの事も能く察して、若し右の樣な病氣が有る時であつたら延ばした方が宜からうと思ふ。一年の中で夏季は汗の出る時であつて殊に小兒は種々の病氣に罹り易い時であるから、盛夏の時は見合せた方が宜しい、小兒が健康な場合でも齒の生へる時分は注意するが宜しい、何故と云ふに齒の生へる時分は小兒が種々の疾病を惹き起し易い時であるから、此時は成るべく避けるがよろしい、併し右は總べて天然痘が流行しない時であつて、若し天然痘が流行し始めたと云ふ場合に於ては總べての條件は取り消さなければならぬ、何故と云ふのに此時の問題は若しも猶豫をして居つて天然痘に罹つたらどうするかと云ふ重大なる問題が起つて來るから、其場合には大概なら種た方が宜しからうと思ひます、初生兒には何時種ても善いと云ふ事に成つて居ります、或る論者は生れて直ぐ種える方が宜しいと云つて居ります、其說に從ふと生れた以上は何頃何時天然痘が流行るかも知れないから直ぐ種えた方が相當である之れは却つて小兒には危險が無いと云ふ事になります、成程私も或る年の天然痘が流行り始めた時分に、生れて僅に二週間或ひは十日位の小供に種へて見たけれども、何の危險もなかつた、少數ながら私の實驗に依ると極く小さな小供でも種痘から起る熱などは強く無いやうに思ふ、寧ろ私の種た場合には熱が低かつた、尤も之れは極少數の實驗であるから確たる事は云はれないのであります。

梅雨中の衣食住

梅雨の季節となるにつれ、家庭にて種々注意すべきこと多し、今その一二を擧れば

▲衣服　雨勝にて洗濯の出來ざるは云ふまでもなく、濕氣を含みて、かび易く、大切の着物に斑を生じ、その質を損ずるなどは單に不快を感ずるのみならず、健康上甚だ宜しからず、されば、汚物あると心つかば以前によく調べて晴天の日を待ちかまへ洗濯すべし、さなければ日に乾し、後悔なきやう豫め用意を整へ置くべし、雨梅中はフラネル、紀州ネルなど毛織物など尤もよし、また此季節には下着、シャツ等の類を多く用意し置て取りかへを怠るべからず、寢卷など最も然り。

▲食物　これは直接の病源となるものなれば注意の上にも注意すべし、殊に毎日、じめ〳〵の天氣にては不斷壯健の人も心地あしく覺ゆるものなれど、三度の食事も何となく進まぬものなれば、主婦たるものはなるべく消化よき滋養品を擇び、且つその調理法に、深く心を用ひて一家の團欒を樂うすべし、さてこの時節には自然運動も少きものなれば、消化にはよく注意し、たまには麪包とか麥飯とかを用ふるをよしとす、又小供の食物なども餅菓子の如きは餘り與ふべからず、少しの不注意よりチブス、赤痢、マラリヤ、脚氣、胃、腸カタル、等の疾病を引起すものなり。

▲住居　部屋の隅、臺所の流しなどを清潔にすべきは不斷なれども、殊に梅雨の時節には丁寧にせざれば思はぬ結果を來すものなり、臺所の戸棚などは誠にかび易きものにて食物を入るゝ所なれば毎日ならば最もよし、さなくとも一二日隔に熱湯をもて拭き常に清潔を保つべし、又便所なども掃除をよくし石灰、石炭酸、臭氣止などを撒りをくべし。

▲下水　夏期に至り下水を攪き廻すは良しからず晩春又は初夏の中に十分掃除を爲し疏通を計り置くべし夏の温度にて總ての有機物腐敗分解し易きは臭氣を發するを以て之を知るべし夏期に至り掃除を爲すは所謂盗人を捕て繩を綯ふものなり此腐敗臭氣は即ち細菌（小さき虫）の作用に因て起るものにして傳染病の原因となるものなり、漫りに攪き廻すよりも寧ろソツト爲し置き水を充分に流す方安全なり時々往來の兩側に滯泥

を上げありて通行の際臭氣鼻を突くが如きは危險なり決して文明國の爲すべき事にあらず歐洲の都會の下水は地下に大なる暗溝を設け(人が立て步ける位)便所の不潔物も下水の汚れも皆な之を外に現はす事なく遠方に運ぶ仕掛なり日本も早晩之を設けざるべからず記者は世人の水道を先にし下水を後にするは頗る誤れる事なりと信ずるなり。

▲蚊　は木多き所にも生ずれども水なくむば發生せず殊に蚊は下水を以て己の鄕里と爲す下水に蓋を爲すときは蚊發生せず故に東京にても日本橋、京橋には蚊棲息せず之に反して下水を開放しある所は其跋扈甚しく本所深川其名所たり然るに歐洲の都會には蚊殆どなしロントンの如き殊に然り此蚊と地震多き爲め西洋人が日本に來るを恐るゝもの多し蚊は單に刺すのみならず蚊の種類に依りマラリアを人に傳染せしむ抑々マラリアの原因は小さき動物なるが蚊に因て人に傳へらるゝは事實なり然れども蚊のみを以てマラリアの唯一の原因とするは誤れりマラリアは空氣及び飲食物に因ても起るものと知るべし

▲蠅　は不潔極まる動物なり其不潔物に群集し其足を洗はずして直に吾人の食物に來るを思へば其危險言ふべからず宜哉不潔なる所蠅多く蠅多き所、傳染病多し、赤痢流行地を巡廻し牛馬多き所必らず赤痢多きを見たり是同じく蠅に歸すべきものにして牛馬多ければ蠅多きに因るなり。

▲蚤　は未だ直接の害は之を認めざれどもペストは之に據て傳染するものゝ如し兎に角蚤多きは其場所の不潔なるを以ても知るべし。

入梅中に注意すべき食物

梅雨中は黴菌の傳播尤も甚だしくして食物を腐敗せしむるの力は寧ろ盛夏中にも勝れり依て今其二三に就て心得を示さん。

▲刺身　は頗る消化し易く病人にも好き食物なれども只夏は生水との緣、切れざるがゆゑに注意を要す、魚の肉も爼も庖丁も皆沸したる水にて洗ひ之を作らば

赤痢、コレラ、腸チブスの最中に之を食するも差支なし多くは是言ふべくして行ひ難きがゆゑに流行時には先づ之を避くるの安全なるに若かず、奇なるは刺身を食する事は西洋になく東洋も我日本の民ばかりなるが如し支那人は勿論韓國人も「さしみ」を喰はず牛肉を稀に生にて食するも「ハム」の如くにして食す（牛肉は昔より食せり絛虫は少きが如し）尤も鱠として酢に痛め食するはあり。

▲菓實　は夏の良き食物にして便通を良くし養にもなるものなれども未熟のものは嚴禁せざるべからず西瓜甜瓜等は下痢を起し易し瓜其物が病毒を含むにあらざるも下痢を起し易きもの換言すれば腸をいたむるものなるがゆゑに瓜其物に罪なくとも此が腸の疾病の誘因となるなり故に赤痢の流行時には之を用ゆべからず

▲野菜　素より良し只生にて食するもの即ち大根おろしの如き傳染病流行時は注意せざれば危し大根を沸し冷したる水にて洗ひ之を作らば差支なし。

▲漬物　も同一にして之を洗ふ水は沸したるものを用ゆれば安心なり尤も此の如き細事にまで注意を要するは痢軍來襲の時とす無時泰平の時に漫に疾病を恐るゝは良しからず。

▲豆腐　は極めて良き欠點なき滋養物なり貧民は下手なソップを作るよりも之を喰ふべし餘り硬く煮詰むべからず湯豆腐最も良し然るに煮たるものは多く冬の食物なり夏は兎角奴豆腐となすの傾きあり豆腐は內部に病毒決して存在せずといへども之を貯へ又は入れある水は赤痢其他の流行時には危險なり故に是非奴豆腐となすならば沸し冷しの水にて流し食すべし。

▲雪氷　は飲食物を冷すに用ゆべきもの我國の如く氷其物を喰ふは甚だ下等にして且つ不衞生なり雪、氷其者には病毒なしといへども是も豆腐と同じく氷水を作る際用ゆる所の水に注意すべきなり同じく沸し冷しの水を用ゆべし。

和洋混合 一品料理

（芝公園日本女子美術學校割烹科教案）
井上善右衛門

三月五日

一白魚 前盛いも フライ
一かき
一道明寺よせ
一照り煮
味噌煮海老

▲白魚　は鹽水へ漬け箸にて壹本づゝはさみあげ、ざるへだし置、魚の目へ串をさし布巾にて水けをふきとり胡椒をかけメリケン粉に玉子を付パン粉を付串のまゝあげる、用ゐるとき串の際ゟ切出すべし。

▲かき　は布巾にて水をふき鹽胡椒をかけ、メリケン粉を付置き玉子を付又メリケン粉を付、玉子を付パン粉を付て、揚るときはころもがぬげすかきも大きくなるゆゑ二度付る也。馬鈴薯の皮をむき、ゆでる、鹽を少し入れる、皿へあげ醤油にてあげ、是を前に盛べし

▲道明寺　は極上等壹合へ砂糖七十目、水壹合五勺入是をわかし煮立て道明寺へかけ、鍋へ蓋をし五分間して、上下にまぜ置、五分間置布巾をぬらし、是にて丸く巻置べし青きなこを付ころがし冷し小口より切用ゐるべし是は口取物菓子代りによし

▲味噌海老　日干海老を煎り味淋酒砂糖鹽少々入れ唐辛を切ざつと煮て是を笊にてこし、唐辛をとりすて、つゆへ海老を入れ煮るべしつゆのつまるまで煮るべしさて其後さまして罌粟の實をふりかけ用ゐるべし是は小皿物猪口によし。

三月十二日

一ヲムレツ
一海老しん生　わん盛
一白魚　花菜
一衛生あめ

▲ヲムレツ　肉をこま〲に切りスープだしにて煮る、鹽粉升を入れ玉根ぎこま〲に切りバタにていた

め、鹽胡椒を入れ、肉とませる、玉子二ッ三ッわり、よくませ、肉のだしつゆを少々入れ鹽胡椒入れませ、フライ鍋にサラダ油を引き、是へあげ肉を入れはしにて肉をませかへして燒肉壹斤へだし五勺にて煮る。

▲海老しん生　海老の皮をむき、せわたをとり庖刀の平にてたゝき、よくたゝき、鹽を入れすり鉢へ入れすり、だし煮きりを入る、是を半月に取り鹽湯にてゆでる、そのつゆへ漬置てよし。

▲白魚　は鹽水へ入れ壹本ツヽはしにてはさみあげ、大白魚は頭尾を切り少々鹽をして置ざつとゆでる也

▲花菜　は根を四ッ割にしてゆでる水へ取、下煮して用ゐる、又からしあへのときは水へ取ず、ざるへあげさまし割醬油へ漬置てからしあへにする。

▲衛生あめ　はかんてんをよく煮とかし、砂糖を入れ煮つめ水あめを入れ煮とかし、箱へうき粉をふり、是にあげてさまし上にもうき粉をふりて用ゐるときうき粉をふり切るべし、ジヨタンに入るべし切小口少々かたまるまで置べしかんてん一本へ水二合五勺砂糖百目水あめ十錢にてよし。

四月九日

一タライハシ　西洋もの
一白魚鹽蒸　向皿口取物によし
一ピーナッツケーキ　洋菓子
一金糸橙　口取物

▲タライハシ　馬鈴薯の皮をむき、ゆでつぶし、玉子白味をませ鹽胡椒を入れ鳥にても肉にても切たゝき、玉葱をバタにていため、鹽胡椒を入れ肉へソップを入鹽胡椒鍋に入れざつと煮葱をまぜさまし皿へいもをならし三分ほどのあつさに皿へのし、是へ肉を入、布巾をひろげいもをのせ、皿にてぬきとり、是を肉の上にのせかぶせ庖刀にてならし、皿のまわりへいもにておひを付玉子の黄味をいもにぬり天火にて燒べし。

▲白魚鹽蒸　魚を鹽水へ入てはしにて一本づゝさらへならべ、頭尾先を切りすて、鹽少々ぶりかけ置、竹の皮を敷蒸すべし十分間蒸皿に盛、のりを燒き是をかけ出す、是はさうす三ばいす橙酢にて用ゐてもよ

し、是は向皿、口取物によし。

▲ピーナッツケーキ　南きん豆の皮をむきすりこわし、玉子二つ黄味斗り砂糖七十目よくつぶしすり、白味をあわを立ませる、メリケン米三合五勺にてませ、豆とませる天火にて焼くなり但し用ゐる豆壹升の事。

▲金糸橙　皮を薄くむきとり是を極のせんに切るべし、水へ入置き三四度水をかへ湯にてゆでる、水へ漬置しぼりあげ、酒味淋鹽砂糖にて煮るべし煮あげ、カンに詰置用ゐる節さつと煮る、何ケ月置てもよし。

四月廿七日

一フチートソール　洋食
一昆布壽し　口取向皿物
一きんかんてり煮　口取
一ピテーパア　洋食物

▲フチートソール　かれい平目中骨をトリ、鹽少々ふりかけ置玉葱二ッに割、小口切にしてバタにていため、鹽胡椒にて味を付小海老を皮をむきバタにていため、鹽胡椒で味を付葉芹こま〳〵に切て少々入れませ魚の身を布巾にてふきひらき是にのせ、魚の身にて包み天火に入て焼火のとほりしを見、魚の上に玉子をゆでうらごしにかけて魚の上にかけ、葉芹こま〳〵に切て上にかけ又天火へ入ざつと焼べし。

▲昆布ずし　青こんぶをよくゆで、かつほだしにて煮、酒味淋醤油砂糖を入れよく煮魚は何にても三枚におろして引薄切にし、鹽をふり置酢へ漬昆布を二ッに切て是に魚の身を三四切のせて小口より巻き箱に入ておすべし是は口取、向皿物によし。

▲きんかん　薄皮をむきたてに庖刀の切目を入てゆでる、水へ漬ゆでゝたてにつぶし中のたねをとり、水へ漬蒸籠にて蒸すべし鍋へ酒一ぱい水三ばい砂糖を四はい鹽三夕入れて煮る、下火をよわくすべし。

▲ピテーパア　莢豌豆を青ゆでにし、笊へあげ、フライ鍋にバタを入れ鹽胡椒入れて味を付け煮るべし、莢豌豆は青きを用ゐるべし。

季節 精菜のしをり

▲素麺の澄し汁

まづ素麺をゆがき（湯を煮立てその中へ素麺を入れ一吹吹きたる時少し水をさし、暫時蓋をなし、都合三回吹かせて湯でるなり）後水に晒らし汁に入れて煮るなり、あしらひは葱と油揚を入れ又は鯛を焼き入るれば之を鯛麺といふ。

▲薩摩汁

雞肉（若しくは牛肉にてもよし）を半斤計こまかく切り水一升位にて二時間許煮てスープを作り同時にこんにやく、にんじん、椎茸其他何品にても菜類二三品を細かく刻みて煮る、別に白胡麻を煎り擂鉢にてよく擂り前のスープを少しづゝ入れてとかし肉と野菜を共に入れ大丼に入れ紫蘇蓼唐がらしなどきざみ皿に盛り各々食卓に出し茶碗に飯を盛り右の汁をかけ香料を添へかきまぜて食すべし、夏には鰹のだし汁にて半ぺんを賽の目にきりて入れるなり。

▲ちさの芥子酢

ちさの葉を葉切にし青梅を薄くむき細く刻み、よく交合せ芥子酢かけて食す但し芥子酢は砂糖と鹽とにて加減すべし。

▲胡瓜の酢もみ

胡瓜を二つ割にし種子を去り薄く刻み鹽少し振りかけ擂鉢に入れ揉みて之を搾り、さて後酢の中に入れて攪き廻すなり、但し酢の中へ砂糖と醤油とを少し許り入れても宜し、又瓜の中へ紫蘇を打込み又何魚にても酢に浸したるものを入るなり、若し精進ならば白胡麻をいりて擂鉢にて擂り其中へ酢と味淋醤油を入れて溶かし、その中へ胡瓜と細かに刻みたる油揚を入れて攪き廻すなり、青瓜白瓜も亦同じ仕方と知るべし。

▲鮑の水貝

生鮑を四分ほどの角に切り鹽をふりかけて暫時置きさて之を丼に入れ冷水に浮かし、酒の肴とすべし、あしらひには海松をよしとす、又あわびを貝より離すに

は鹽を貝と身との間より入れて其周圍を撫で廻し置き又其上面の平の處にも鹽を摺りつけてよくその滑りを去り、さて後その貝と身との間よりわさび卸の柄をさし入て之を離すなり。

▲南瓜の胡麻あえ

青き南瓜の皮をむき、五分四方の角切にし湯でゝ黒胡麻を煎り摺鉢にてよく摺り酢と砂糖とを入りてよく摺り南瓜を小皿に盛り胡麻酢をかけて出す大なる南瓜は總菜にし若き中は上等の料理にあしらふなり。

▲隱元と生麩の煮しめ

生麩を程よく切り醤油砂糖に鰹節を入れ甘からく煮るなり隱元はあと先の筋を取去り湯でゝ麩を煮たる煮汁に醤油砂糖をたし加へて煮るべし。

▲茄子の龜甲燒

皮のまゝ二つ切にし切目に粗く横たてに庖丁を入れ鍋に胡麻の油を引きて煎り燒にし、生姜醤油をかけて食す。

▲初夏の浸し物

茄子の胡麻びたし（茄子を薄く切りて胡麻醤油につける）せんまひの芥子醤油（せんまひを揃へ切りてから醤油につける）莢いんげんの山椒醤油、（茗荷の子の胡麻醤油、（茗荷の子を二つ切にして胡麻酢につける）

▲茄子の阿茶羅づけ

茄子のへたを去り一夜鹽壓して之を酢と醤油とを合せた中につけるなり但し之は壺の中にどふづけにするなり、茄子は花落の細かなるをよしとす。

▲厚燒玉子

玉子匙に一杯煮だし半杯、醤油玉子の五分の一砂糖少し一人前に付玉子三つの割にしてよくかき廻し燒たる時玉子を入れ蓋をして火を載せて上下よりやくべし、皿にもり大根おろしに醤油をかけ之を添へて出す也。

▲夏のなます

夏は黒鯛、すゝきなどよし、鱸を三枚におろし皮付のまゝ刺身に作りまた板にならべ布巾をかけその上より沸湯をかけ而して後冷水をかけて布巾を去り茄子の皮むき堅に二つ割にして湯でゝ又堅に二分位の厚さに切

り少ししぼりて皿に盛わけ酢味噌も片わきへ付べし。
蓼味噌の作り方は蓼の葉を水にてよく洗ひ、細かに刻み摺鉢にてよく摺り味噌を入れて又よく摺り酢と砂糖を入れて後裏ごしにてこすなり。

臨月 食品献立の種類

東京女學館　牧倭文女

▲夏の部

	朝	晝	夕
第一日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 好によりパン少し入るゝも可なり	牛乳 飯湯
第二日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 スープ
第三日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 生玉子	飯湯 牛乳 うどん
第四日	粥(軟きもの) 牛乳 スープ	粥(軟きもの) 牛乳 葉牡丹實物	粥(軟きもの) 牛乳 鰺實付
	以後食後にジャムを用ゆるも可なり		
第五日	粥(軟きもの) 牛乳 半熟玉子	粥(軟きもの) 牛乳 かしわ實付	粥(軟きもの) 牛乳 せいご實付 でんぶ
第六日	粥 牛乳 生玉子	粥 葉牡丹實物 吸物(麩、摘菜)	粥 牛乳 ゐんぎん實物
第七日	粥 牛乳 肉羹汁	粥 牛乳 鯖實物	粥 吸物(麩) したびらめ實付
第八日	粥 牛乳 馬鈴薯實物	粥 鰺實付 扁豆實物	粥 牛乳 かしわ實物
第九日	飯(軟) 牛乳 半熟玉子	飯(軟) 吸物(きす) 鱚實物 でんぶ	飯(軟) 牛乳 鰺鹽燒

右の内吸物は皆すまし汁なり

此後二十一日までの食品を二季に分たば左の如し

◎春、魚類にては鯛、鮃の如き淡泊なるものを刺身、煮付、吸物、鹽燒等に料理し野菜類にては小松菜、三ツ葉、をひたし、吸物のたねとなし、馬鈴薯、豌豆、積、かいしは等を煮物となし麩を吸物、煮物となし、牛乳、肉羹汁を用ゐ互に食品を交じへて用ゆる方宜しかるべし。

◎夏、魚類は鱚、せいご、したびらめの如きを吸物、煮付となし、夏の末より秋にかけて鰺あり、そを吸物、煮付、鹽燒となして用ゆ、野菜類には摘菜あり吸物のたね、ひたしとなす其の他の食品は春と同じなり互に

交じへて用ゆべし。
四季共に食品を種々に取り交じへて食用に供する方よろしかるべし夏、秋、冬にも刺身を用ゆる方よろしけれども鮪、鰹の類はわろし、若し前週間に魚類の肉類に勝れたる時は後の週間には肉類を多く用ゆる方よろしかるべし、而して野菜類はたえず肉類と共に用ゆる事必要なりとす、香辛料、酒類等は忘れても與ふべからず、
でんぶなどは四季を通じてよろし、食後煮たる果物即ちジャムを用ゐて可なり。

▲秋の部

	朝	昼	夕
第一日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳
	好によりてパン少し入れても可なり		
第二日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳
第三日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 生玉子	飯湯 牛乳 肉羹汁
第四日	粥(軟きもの) 牛乳 肉羹汁	粥(軟きもの) 牛乳 鉄煮付	粥(軟きもの) 牛乳 鰺煮付
	以後食後にジャムを用ゆるも可なり		
第五日	粥(軟きもの) 牛乳 半熟玉子	粥(軟きもの) 吸物(鉄) 黄雌鶏煮物	粥(軟きもの) 牛乳 馬鈴薯煮物 でんぶ
第六日	粥 牛乳 豌豆煮物	粥 鰺煮付 菜牡丹煮物	粥 牛乳 吸物(鰺・摘み菜)
第七日	粥 牛乳 生玉子	粥 積煮物 摘菜ひたし	粥 牛乳 馬鈴薯煮物

▲冬の部

	朝	昼	夕
第一日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳
第二日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 生玉子	飯湯 牛乳 スープ
第三日	飯湯 牛乳	飯湯 牛乳 生玉子	飯湯 牛乳 肉羹汁 うどん
第四日	粥(軟きもの) 牛乳 半熟玉子	粥(軟きもの) 牛乳 かさご煮付	粥(軟きもの) 牛乳 馬鈴薯煮物
	以后食後にジャムを用ゆるも可なり		
第五日	粥(軟きもの) 牛乳 肉羹汁	粥(軟きもの) 牛乳 菜牡丹煮物 でんぶ	粥(軟きもの) 牛乳 吸物(こち) ひたしもの
第六日	粥 牛乳 豌豆煮物	粥 積煮物 吸物(鉄)	粥 牛乳 鳩付焼(敲きたる物)
第七日	粥 牛乳 生玉子	粥 かしは煮物 半熟玉子	粥 牛乳 菜牡丹煮物 でんぶ

右の中吸物は皆すまし汁なり

秋、魚類にては鰺、鉄の如きものを吸物、煮物などになして用ゆべし其の他は春夏の食品とかはりなし。

冬、魚類にてはこち、かさご、めばるの如き品を吸物、煮付となすその他は春と同じなり。

（完）

庭の小草

麻軒

▲先頃棚橋絢子刀自を訪れし砌、同刀自の申されけるやう、物の順序は必しも一より二に及ぼす可からず、時としては二より一に逆に施すとの却て利なることあり、例へば夜着蒲團を押入に納むるが如き、心なき者は疊む順序に從つて、夜具を先に入れ、次に蒲團を上げて之を夜着の上に載すれど、思ふても見よ、夜着は元來体の上に懸ける物なれば、輕くて柔くてフワリとしてこそ寢心地快きなれ、さるに斯の如く夜着を下積にすれば蒲團の壓力によりて平たく硬く押潰されざるを得ず、故に之を納ふには先づ夜着を疊み、次に蒲團を疊み、扨て蒲團を納ひ、夜着を納ふの順序にせざる可からず、是れ寢具を納むる最良の法なりと、思ふにかゝる事其他にも猶、多かるべし、一家を整理する人々の辨へ居るべきことなりかし。

▲又た同じ刀自の申されけるは、物の置場所は常に記臆せざる可からず、入用生じて其物見當らず、之を捜すに多くの時間を費す位なら、寧そ新に買ふに若かず、由て物を置くには其物と置場所との關係を深切に考へて後にすべし、一糸半錢たりと雖、無意味に仕末す可からず、意味有る所には必ず記臆ありと。

▲世に名物道樂と云ふものあり、東京人に殊に多しとす、渠等は來客を待遇す茶菓子を初め、己が三度の食膳にも名物を載せて舌打鳴らすを無上の樂とせり、例へば菓子は風月、岡野ならでは甘からずとなし、壽司は與平、松の壽司ならでは旨からずとなし、蕎麥は麻布の更科、天麩羅は銀座の天金、鰻は竹葉、大國屋、神田川ならでは口に合はずとなし、煮豆は玉木屋に限るとなし、茶は日本橋の山本より取寄せ、仕出しは青物町の躍金、神明の大野屋に注文し、食麭包一斤求むるにも態々銀座の木村屋まで下女を走らすの類なり、此の道樂は延いて日用品の上にも及ぼし、反物は三井、大丸ならでは意に適せずとなし、小間物は松田か大西ならでは流行に後れるとなし、下駄は浅草の香取屋な

らでは穿き悪しとなし、足袋は中川屋、靴は研槍屋、洋傘は仙女香にトヾメを刺し、頭に着ける油は田所町の井筒が良しと、何ぞの買物にも名代の商家に車を飛ばすを快とし、此は何處で買へり、其は何某で購めたりと揚言して憚からざるに至る、沓の沙汰といふべし。

▲注意すべきものは煙草の火なり、落ちては疊に燒焦しを拵らへ、飛んでは着物に燒穴を穿けるなど、其他いろ〳〵の失策を仕出來すものなり、余の友なる某、新橋より横濱に至る汽車中にて、吹殘しの煙管を叩くを忘れて其の儘煙草入に突挿し懐中せしに、程經て乘合せし人のケナ臭しとて騷ぐに、漸う〳〵心付きて懐中より前の煙草入を取出せし所、こはそも如何に豫て煙草入の隅に入れ置きたる一圓紙幣二枚、あはれや眞白の灰と成り居たり、それでも猶ほ札の形を保ちて文字の所などかすかに讀み得しなれど、頓て風の當るやボロ〳〵に化りて跡方もなく散り失せたりとぞ、其人歸りて余に懺悔したり、氣を附くべきことにこそ。

▲此頃電車内に喫煙禁止を掲示されてより、乘客公德を重んじて飮みたき煙草を我慢するやうになりたり、近距離を乘る客は兎に角、品川より上野に至る間の如き、一時間半はタップリ費なれば此間を辛抱する、煙草好には隨分難儀なるべし、さるに人々自ら戒めて敢て犯すものなし、是れ素より餘儀なくされたる少時間の辛抱なりとはいへ、我慢すれば我慢せらるゝものぞかし、此の習慣を生涯に及ぼして一生を我慢する亦た何ぞ難き事あらんやと、われ熟々思ひぬ。

▲其の筋の御注意によりたんつばを吐く事、先づ電車内に禁止されてより、次で夜席に及び、湯屋、蕎麥屋等にも吐壺を備ふるに至れり、公衆衛生上誠に結構の事と言ふべし、願はくば一般の家庭に在ても衛生に意を用ゐて、庭の隅、椽側の隅に此の設備を置かれんことを、但し家庭に在ては其筋の干渉を俟つに及ばぬこと、言ふまでもなし。

▲人の家は玄關の樣子と取次の仕方とによりて善くも悪しくも推量らるゝものぞかし、先つ頃玄關構嚴し

き家に、受取る物ありて參りしに、女中出で來て申すやう、遠方より態々御越ありし事とて何共御氣の毒ながら、又の日にして下されませぬか、實は奥樣唯今御晝寢中にて……御起し申しても宜けれど、さありては御立腹が恐ろしければ……と賴むやうに言ふに據なくて歸りしことあり、聞けば此家の旦那樣は御身分ある方にて、殊に今は軍國多事の折とて御職務に多忙を極めさせらるゝといふに、其の奥樣は家に在りて、樂樂と日中の睡眠を貪り玉ふこと是の如し。さりとは苦苦しきことと言ふまでもなけれど、內輪の恥辱を外に漏らす女中の言樣も亦た一層苦々しからずや、謹しむべきは玄關の辭令にこそ。

▲勝手口の御用勤むる商人なぞと申す者は、同じ樣に諸處方々に入込みて、甲家乙家の善惡美醜を見比べるものなれば、構へて彼等に心せよとさる老刀自の申されし事ありしが、此頃余の家に新屋の男用聞に來りて何呉と語り行きし話の序に、勝手元のきたなき家に限りて、御勘定もきたなしと言ひたり、余は之を聞いて老刀自の言のわれ等を欺かぬを知りぬ。

▲開戰以來質素儉約を專ら奬勵したる結果、勤を忘れて儉をのみ事とし、殆ど喰はず飮まずの境遇に甘んせんとするものあり、岐阜縣下の或郡の如きは、此際米や麥は勿体なし、木の芽や草の葉を喰ふべしとて、加盟する者三千人、之が救濟策に困じたりといふ、其の志は嘉すべきも其の恐や笑ふべく、儉約の弊も是に至て極れりと云ふべし、思ふに儉約せんと欲せば先づ大に勤勞せざる可からず、勤勞なき儉約は人を餓死に陷るのみ、故に勤と儉との割合を定めて七分三分と爲せば過なからんか、即ち一日壹圓を稼ぐとすれば、其內三十錢を剩す位を極度として儉約すべし、要は儉約するよりもヨク多く勤勞するにあり。希くば勤と儉のハキ違や分量違なからんことをこそ望ましけれ。

▲火鉢の緣を撫でたり、五德を磨いたり御盃を奇麗に拭いたりする樣な嫁は却て家の爲に成りませぬと或る八釜しき姑の申されける、此言甚だ酷の如く聞ゆれど、味へば一面の眞理を含むぞかし。



女子師範の寄宿舍

幽溪女史

▲假入學――▲寄宿舍――▲寄宿舍の規則――▲寄宿舍の構造――▲風呂場――▲三月間――▲二年生――▲三年生

女子師範學校の寄宿舍の狀態、これは私が三年間起臥して居りました、懐しい第二の故郷で御座ります。

私が同校を出ましたのは、最早十年前の事で、時勢は日に月に進歩して行きますから、是れを今日の狀態と比べましたなら、大いに相違の點もありませう、又都會は都會、地方は地方で、同じ師範學校の寄宿舍でも其國風や、土地の習慣で隨分相違もありませう。

▲入學

私が師範校附屬の小學校を出ましたのは、十五歳で年齢が足りないから、直ぐと入學することが出來ません、一年間は自宅で勉強してゐて、翌年の春、入學試驗を受けましたが、幸ひ及第致して、母君と一緒に師範校の門を潜りました。十六年の間、ついぞ他人樣の中に――這入たことのない身でしたから、此時は何となく小な胸が波立ちまして、嬉しい樣でもあり又怖しい樣でもあり、受附で給仕に案内されて「新入生控席」といふ大きな張札のある間へ入りました。

すると、彼是三四十人の新入生が來て居て、何れも

首を垂れて慮はし氣に席に就てゐます。私も心細く思ひながら皆樣のなさる通りにして居りますと、各新入生の父兄方は、待間の徒然を、打解けてさま〴〵の物語をして居られます。軈て一人殖え、二人來、新入生も定員の六十名だけ揃ひました。彼是すると九時の鐘と始業の喇叭とが鳴りました。するど寄宿の方からドヤ〳〵と人の足音、これは上級の生徒諸姉が授業教室へ赴むかれますので、この應接室は硝子窓ですから、通りすがりに、私達の方を見て、何事か囁きつゝ行きました。

又扉が開きましたので、ハッと胸を轟しますと、給仕が先に、後から舍監の先生が御入來になッて一と通り父兄に御挨拶があり、それから氏名點呼――一人一人名を呼びまして名簿に記入され、さて『應接試驗をしますから』と仰言つて、新入生のみを連れて二十四間に十八間の講堂へ行かれました。暫時控へて居ると、一人、一人、別室へ呼ばれて、軈て私の番になりましたので、おづ〳〵進んで參りますと、其處には男子の先生が四人控へて居て、

『貴孃は何ういふ考へで、本校へ來られましたか。』と嚴かに尋ねられました。私は一大事の場合と臆せぬ樣に、

『ハイ、普く子弟を敎育致します爲に……今日から御校で普通敎育に關する一般の學科を學びます決心で參りました。夫れ故、校中に在りまする以上は、校則を嚴守し、身を愼み、業を磨き、幸ひに卒業致しますれば嚴肅に子弟敎育の任に當ります、三ヶ年の服務、二ヶ年の義務年限中は、例へ何の樣な事が御座いましても、敎育界から身を退かぬことを盟います。』と、漸つとお答へを致しますと、

『宜しう御座います。彼方へ。』

と仰言いましたので、私は吻と息を吐きまして、元の室へ復りました。

應接試驗は此樣簡單な問答で了りまして、前の控席へ控へて居りますと、校長がお出でになり、受持の男女の敎諭の方々を御紹介されまして、此處で始めて正

員三十名、（新入生六十名の內、半分は補充員で、正員に缺員が出來た時は入舍を許されるもの）だけ假入學を許されまして。私も其中に加へられ、是れから寄宿舍の生活をすることとなりました。

▲寄宿舍

寄宿舍は都合十五室、その室は十二疊づゝで一間の押入があります。是れより前、假入學を許されますと、舍監から室割を示めされたので、新入生は各自自分の荷物を其割當てられた室に運びました。其處で、一室には二名づゝの割合です。それから此室の故參の方々へ是れから後のことなど、くれぐれも頼むと申した樣な挨拶を致し、席に就きますと、前から居らるゝ方の中で一番年重な方が室長をして居るから、机と本箱とを貸與されました。かくて荷物は押入に、履物は各自の名の貼つてある下駄箱に入れる、漸落着ましたものの、同室のお方も未だお馴染がありませんので、手持無沙汰でした。

申し落しましたが、私の這入ましたのは第一室で、此室は舍監室の直ぐ隣りですから、大層氣の置ける、皆樣がお嫌いなさる所だソーです。（是れは後から伺つたので御在ますが）。

所へ母君が來られまして、同室の方々へ私の身の上を宜くお頼みになッて、此室を出て行かれましたので、



女學生の新髷（一）

正對十二分前額を七三に見る

私は其後姿を見送つて居りましたが、思はず氣の弱い涙が落ちました。而して母君と一緒に歸り度樣な氣がいたしました。すると突然に喇叭が鳴りましたので、驚いて涙を拭きますと、晝食の報せなのでした。それから室長に連れられて食堂へ參りますと、早や三年生、二年生を始め全体の生徒が集つてゐます。

其室、其室に分れて對ひ合つて座りますのですが、中央は三尺の板疊で、一人のお膳には茶碗、小皿に澤庵が二切、お菜はお魚の切身に切干大根でした。皆樣も私も手を膝の上に乘せて、畏つてゐますと、殘らずの生徒が揃ひました時に、當番の舍監先生がお出でになり、同じ樣にお膳につかれ、皆樣をずーッとお見渡しになつて『召上れ』と仰言います。皆樣は『戴きます』と禮をして、箸を取るので御座います、此時、私も同じ樣に箸を取りましたが、何だか胸が一杯になつて碌々戴けませんでした。

御飯の代り目は、室々から一人、自分の組の室の御飯を盛る役になるのです。又、盛つて頂く方は、其盛る方が自分の分を盛る迄待つてゐますので、盛る役の方は、自分のを盛つて了ひますと『召上れ』と言つて禮をしますすると、盛つて頂いた方も同じく禮を致しますので、此樣にしますのは一杯毎なのですから隨分煩はしく、始めての方の眼には異樣に見えるのであらうと思ひます。

此御飯を盛るのは新入生の役なので。此日の御飯は、新入生を迎へると申すので、赤の御飯でしたが、私達新入生は、其お志を伺つて嬉しう思ひましたのでした。御飯が了りますと、お茶碗とお皿とを殘してお膳は各自の名が張つてあります戸棚へ了ひ、食堂を出ます時に又お禮をして、各自の室へ歸るのです。

▲寄宿舍の規則

御飯が濟みますと、室で、室長から室の規則を讀んで聽かされましたが、大略左の通りなのです。

一、一室内は五人乃至六人を一組となし、内三年生一人を室長として、一室内の取締をなさしむ。

二、離床は五時、六時人員撿査、七時半朝食、十

二時晝食、五時夕食、五時半より六時半迄運動時間、七時より八時半迄默讀、九時人員檢査、九時半消燈、入浴は隔日（但し夏時は毎日）

三、寄宿舍內の取締、人員檢査等は凡て三年生中一週交替にて、一名週番を爲す。

四、炊事規則は三年生にて一名、掛長、二年生一名副掛長となり、一週間交替にて順次受持、其一週間は各自にて献立をなし、舍監の許可を得可し。尚其一週間は、經濟の凡べてを爲すべし。

五、室內の掃除は、室長を除きて二年生一人、一年生一人にて爲すべし。土曜日には一室內總掛りにて、其室內の大掃除を爲すべし。



女學生の新髮（二）

正對七分前額二入に見る

六、外出日は日曜と木曜、日曜日は午前七時より午後五時迄、一々出發帳へ記入して出づべし。木曜日は三時より五時迄、同伴簿にて二人以上出づべし。但し買物に限る。

七、入用の品は紙に記し、金子を添へて室長に申出づべし。室長是れを纏めて週番に申出で、週番は寄宿舍內を一と纏めにして舍監へ申出づべし。

八、病氣の時は、室長より週番の手を經て舍監へ申出づべし。

勿論官費ですから、總べての事が嚴重であらうとは、

豫て入學せぬ先から覺悟を極めて居りましたが、さて嚴かに此八ヶ條の個條書を讀み聽かされた時は、父親なしの、女親の手一つで甘かされて育つて來ました私に、辛抱が出來るか何うだかと、實は危みまして、心細い感じがして參りました。

▲寄宿舍の構造

寄宿舍全體の構造は、木造の日本家屋で、一棟に長く、椽側の長さは、夜分など廊下を歩きますのさへ薄氣味の惡い程でした。

椽側の直ぐ前が中庭で、四季の草花があるけれど、私の入學しましたのは春の最中でしたから、海棠の花が眞盛りで、其花がしつとりと露を持ちました風情、何とも申されません。中庭の向ふが附屬の運動場で、高い板塀で仕切られてゐます。裏庭は男生の農作場で、此處も可なり廣う御座いますし、折からの菜種の花が、黄金の蓆を敷き詰めた樣に、一面にずーツと、暖かい風が戰々と吹いて、何樣に宜い心地でしたらう。私は寂しい、悲しい、心細い思ひも忘れて了つて、ひらひらと菜の花に舞つてゐる蝶々に見惚れて居りますと、丁丁丁と番木が鳴りましたので、喫驚して振返りますと、それは入浴の報せなのでした。『サア、お湯に參りませう』と同室の上級生に導かれました。

▲風呂場

へ參りました。着物を脱ぐ所がありますから、其所へ上級生のする樣にして、流しへ下りますと、東京の男女兩方の流し場を一つにした程の廣さで、湯槽の大きさは三十人は這入られまするソーです。

私は宅へ居た時でも、自用の風呂場が御座いましたので、滅多に洗湯へは參りませんでしたから、此樣に多いこと風呂へ、おめしになつたのを見たことがありませんので、唯モウくわつと逆せまして、碌々湯槽の中へも這れず、そこ〴〵に上つて了ひました。

後で聞きまするると、お互にお脊中の流し合ひもありそれは主に新入生が、上級生のお脊中を流すのだソーでして、私は何も心附ずに先へ上つて、惡いことをしたと悔みました。

▲一年生の苦痛

選拔試驗が了つて、本入學を許される三四ヶ月間は、新入生の爲に最も辛い時で御座います。俗に辛く悲しいことを涙の乾く間がないと申しますが、眞實に其通りで、是れは決して學校ばかりでは御座いますまい。總べて新參者は何業に限らず辛い思ひをしますのですが、世間不見の私は熟々辛いこと丶思ひました。

入學の日は、夕方の御飯が濟み、運動も濟み、軈て八時半になると默讀も了りましたので、是れから人員撿査があります迄、小聲でお話しなんぞ致すのですが、私の室は悉皆で五人で、室長さんは、何だか無愛嬌な、氣味の惡い方で、二年生は俐巧々々した、話し上手な、氣の置けない方、今一人は底意地の惡相な方、後の一人は私と同じ新入生で、同じ附屬（小學校の事）の出ですから仲がいゝのでした。此樣我儘な觀察をしながら無言で、隅の方へ小くなつてゐますと、九時になりましたので人員撿査があります。

舍監は提灯をお持になり、いゝとつ端にお立ちになりますと、それと相對して週番の生徒が同じく提灯を持つて立ちながら、第十五室の端から一室、一室と順次に撿めて、最後は私の部屋となりました。それで人員が合つてゐますと、週番から『宜しう御座いま



女學生の新髮（三）

側對十分前髻四六に現はる

すと、舍監へ申上げる、舍監が承知になれば、週番を始め一同で禮を致し、人員撿査を了るのですが、それから舍監は小使に番木を打たせ、週番と一緒に寄宿舍の內外を見廻り、火の元などを調べるのです。其間に、私達は徐々机などを取片附けて、臥床を設くる支度をするのですが、昨夜迄は人に敷かせたものを、今夜からは自分のばかりか、他人の床を延べなければならないのです。而して暗黒な農場の中に、一棟飛び離れてゐます遠い、怖しい、便所へ皆樣と御一緒に參り、室へ歸つて來て、室長の枕に就くのを待つて、『お睡みなさいまし』と禮をして、臥床に這入るのです、程なく消燈喇叭が鳴りますと燈火は消されて、何の室も闇の手に支配されて了ひました。

軈て五時、起床の喇叭が鳴りましたから、臥床を飛び出でまして、手早く夜具蒲團を押入へ了ひ、今朝は私の掃除番なので、二年生の一人の方と、叩きを掛け、掃き出した後を雜巾掛をして、皆樣の櫛箱を出して置きますと、室長や、他の二人の方は其間に嗽手水を使つて歸られ、女の嗜みですから髮を撫でつけたり、又は解かして結ひ直したりしてゐられますから、其間に顏を洗ひ、髮を撫でつけて、敎室着と着替へて、袴を穿きましたけれど、まだ櫛箱が出してあつた儘ですからそれを片づけ、彼是しますと朝の人員撿査です。それが了へると朝御飯で、お菜は筍の汁に、燒海苔、漬物でした。けれども昨日と同しで胸が痞えて少許も頂けませんでした。

八時に始業の喇叭が鳴りますと、室を出てそれ〴〵敎室へ參りますのですが、寄宿舍から敎室迄の道程が一町半あります。而して其途中で遇ひます上級の方々には、一々叮嚀な敬禮をしなければなりませんし、例へ同一のお方に何度お目に懸りませうとも、其都度、やつぱり御挨拶を申さなければならないのです。それも一度や二度なら辛抱が出來ませうが、何十度、何百度も重なりましては、頭惱が重くなります、腰が痛くなります、敎室に早く行き度、實に泣き度くなる程辛いのです。或方が勘定をなすつて、新入生は一日に七

十二度お辭義をすると仰言つたソーですが、噓の樣で決して噓ではないので御坐います。

其上私達を蹴落さうといふ競爭者が教室に居るのです。それは通學生——補充員なので、それに負けては無論なりません。本入學を許される迄は、少しも油斷がなりません。一年生の授ります學科は、倫理、教育學、理科、動物、植物、鑛物、數學、漢文、國文、文法、作文、習字、圖畫、體操、女禮、裁縫、音樂、遊戲等で、午前八時から午後三時迄なのです。

授業を了つて寄宿舍に歸つて來ますと、上級の方も歸つて來て、早や教室着を不斷着に替へて、其脫ぎからしは室の隅へ出したまゝとなつてゐます。それを皺を伸して疊んで藏ひ、それから自分の着物を着替へて疊むのです。すると又聞えない樣な、聞える樣に、『お湯が飲みたい』と言ふのです。汲んで持て行きますと、今度は髮を解いて結ひ直さうとしますから、『私が』と後ろへ廻つて、ふけを落して、叮嚀に何遍も梳いて、夜會なり、英利斯銀杏なり、お好みのものに取上げてあげます。其相間に何處そこ迄とお使までしなければなりませぬ。それをしませんと盆槍だとか、氣が附かないとか、横着だとか隨分思ひ切つた皮肉なことを言れますので、ハイハイと從つて居らねばなりません。



女學生の新髮（四）

注視七分前額七三に見る

元より是れは十年前の事でもあり又地方の學校であつたからでもありましたらう。

女には兵役の義務といふものはありませんが、新兵の時には古参の兵隊から随分酷い命令を受ることがありますソーで、私は、此師範校の寄宿舎が女の兵營で、新入生は新兵同様なものだと思ひまして、辛抱して傍ら必死の勉強をしてゐますと、月日の經ちますのは早いものでして、辛い、悲しいと思ッてゐます中に、七月が参りまして、選抜試験となりました。其試験の一週間は、炊事當番の掛長は頻りと滋養分になるものをお菜にして下され、室長は『補員に負けてはいけませんよ』と力をつけ、試験のこと何くれとなく注意を與へられます。萬事が斯ういふ鹽梅ですから、義理にも合格しなければなりませぬ。私達も死んだ氣になッて、一心不亂に勉強しました。その効あッて本入學を許されました。

それから漸次馴れて來まして、始めの様に辛く思はぬ様になり、軈て其月(七月)の二十六日から暑中休暇となりまして久し振で歸宅(最も其前に日曜の外出はありましたが)いたしまして、外界(寄宿舎では、校外のことをすべて外界といつて居ります)の夜の景色を見ました。

▲二年生の氣樂

翌年試験があつて、二年生となりました。また私達の後へ新入生が参りましたから多少は樂が出來る様になりました。一体、一年から三年迄の間に、一番暢氣なのは二年生で、一年生の様に泣くやうな辛い思ひもしませんければ、三年生の様に責任の地位に立たず、お菜の叱言、舎監や先生の噂さを申上げて、何うした、斯うしたと勝手なことを言ひつゝけてゐました。

明日邊、臨時試験がありさうだと思ひますと、『散郊』を言ひ立てますと賛成者が續々ありますから、直ぐと三年生の週番の許へ参りまして、舎監に願つて下さいと頼みます。而して許可され丶ばよいが、萬一行けません時は、週番の無能を唱へて攻撃するのです。それから又許されると市内學校の参觀、博物採集、圖畫の

生などの名の下に、どし／＼出掛るのです。

▲賄の献立

かくて三年生となり、室長となり、週番となりまして、二年生の我儘に弱らせられたり、炊事掛長にもなりました。昔泣かされたものが、今は人を泣かせば泣せられる地位になつたのです。

炊事費は生徒一人前八錢（最も是れは十年前の事ですから、今は物價の騰貴と共に、相倍位に殖えましたでせう）で、それで小使の日給から、米、薪、炭、醬油、酢、魚類、野菜、漬物迄調へなければなりませんので、なか／＼苦しう御座いました。注意して約しくしなければ足りません。その足らぬ勝の所を儉約しまして何程か殘して後の掛長へ渡さうといふのですから、なか／＼大体ではありません。私が掛長をして居りました時の献立の寫がありますから、お目に掛けませう。

	朝	晝	夕
日	菜の汁　海苔	煮肴	さしみ　つみいれすまし
月	煮豆	今出川豆腐	牛肉
火	筍汁　奈良漬	餡掛豆腐	焼肴
水	鶏卵　海苔	里芋煮付	葱の木芽あへ
木	葱の汁　鐵火味噌	刺身	とろゝ芋
金	鶏卵　海苔	はんぺん、ふ	牛肉
土	つゝみ湯葉	煮肴	ごもく　おひたし

先づ此様なものです。それは一週間毎に代へるので、其都度舍監の許可を受けるのです。それから寄宿舍内の役割を擧げませう。室長（三年生）週番（總生徒の取締三年生）炊事掛長（三年生）同副長（二年生）等是れだけで、此他に掃除番などがありますが、役割といふ程のものでありませぬから省きます。

まだ寄宿舍に關する事では、天長、地久兩節に生徒

の催し物、月一回の談話會、暑中休暇、三年生が卒業前は、教生と言つて附屬小學校で生徒を教へて、實地練習を爲す事、二、三兩學年の學科、炊事場の事、お茶拵への苦しみなど、なか〳〵ありますが、餘り長くなりますからきりあげて置きます。

（をはり）

逗子紀行　女學生の旅

茨城　貞子
間宮　冬子

かげらふ燃ゆる春の日、一日閑を得て友人兩三名と相州逗子に遊ぶ、時しも四月の初め、天氣よく、暖にて汽車の内ながら早や何となく心ひろくまた見ぬ逗子の濱邊をいろ〳〵に想像して、彼の不如歸の小説の中にある海岸は如何にや、岩の彼處の不動尊は今も猶眞にありやなど、樣々の空想胸に充ち〳〵て漸くステーションに着く。

景色よき處としてこそ名高けれ、風流なる人の行けばこそたつきの道もなし得る處なれば、市街と名付くる程のものはなく、停車場より一丁程行きたる兩側に休息所ありて、うで玉子時折の果物、菓子など商ひ、宿屋の如きも二三軒見うけたり、己等は兼ねて頼み置きたる百姓家へとこゝろざし人力車雇ふて荷物など乘せ、あたりの景色を見がてらに歩みつゝ行く、街は一筋にて牛肉屋、菓子屋、八百屋など並びたるは、鄙には珍らしけれどさすがに女學生風したる我等を見ては物めづらしくやありけん目を峙てゝ打眺めり七八丁行けば最早家並まばらにて、道の兩側は皆田畑のみ、藁ぶきのくづれかゝりたるが、彼所にも此所にも建てり、一寸出づれば直に鼻をつく如き都にのみ居れば、かゝる天然の風景の却つて珍らしく、彼所の檣の内に咲きたる緋桃の花一しほ美しく目立つて見ゆ、かすかに百姓の野良歌うたふ聲のきこゆる外は、何の音もなく、春風そよ〳〵と我袂をひるがへすばかり、田舍は斯くも靜に平和なるものよと、又今更の如く懐しく、慕し

き心地す、人家はなれて又四五丁、行手にゆる〳〵流るゝ川あり、東京に居てはつね〴〵川らしき川を見られねば、これをしも更に珍らしき様眺めき、橋の名は田越の橋とぞいふ、之を打渡り川に沿ひ、左に行けば、此所に藁ぶきの大ひなる家あり此邊にて豪家にや流石軒高く母屋離座敷納屋など建並びぬ我等の頼たる家も、逗子では相等の物持なりしとの事に、如何なる處ならんと想像しつゝ、やがて敎へられて行きたるは、同じ藁屋にて、入口に鮭鍬など置かれたる農家なりき。



女學生の新髪(五)

側對注視顏貌皆五々に見る

この家の女房出て迎へお客様方は裏へ廻らつしやいとの事に、母屋の横を過ぎ行けば、此所は表に似ずさつぱりとしたる椽側なり、殊更に避暑に來る人を當に建たるらしき一間に案内せられたり、其所には美しき長火鉢ありて、鐵瓶に湯も心地よくわき居れり、まづ〳〵と荷物おろし、袴をぬぎ、顔など洗ひしが此所に初旅の何とて云ひ知らぬ心地して、友達打より、漸く落付きたるは午後の四時頃なりき。

椽より前面を見るに、一町位迄は平地にて、桒の花など美しく咲きたり、其向ひは直に險しき山にて見上ぐる計り、頂上には畫に見る如き格好よき松、峯つゞきに生び茂り、山の中程に少さき鳥居一ッ寂しげ

に立てり、何か祭られてあるならんと、例の好奇心むらく＼／と起り、友を進めて行かんとすれど疲れたればとて賛成する人はなかりき。

かくて風呂も出來たれば、おはいりなされと宿の神さんの案内に、流石は誰れ彼れと讓り合ひて果てしなければ、去らばとて我先思ひ切つて、恐る＼／出掛くれば、うす暗き名ばかりの湯殿に、下には青苔一面に生へたる樣凄まじかりき、吾等の來たる爲にも有らんか新しく拵へたる板敷目立ちて見ゆ、漸くに着物をぬぎ、怖わ＼／、下り立ちても、猶ためらひながら、思ひ切つて湯舟の中に入るや否、パチンと何かはじけたる樣な音して自分の入りたる風呂の底がドサンと拔けたり、アッと驚き、片足外へ出す間もなく湯は皆流れ出でたり、まあ何と云ふ事ぞと自分は呆氣に取られて只茫然と流れて行く殘りの湯を見つめたるばかりなり、其内に早よき頃と後の人々衣類脫ぎすて來て見れば此仕末にいづれもこれはと云つたぎり顏見合して言葉も出でざりき例の笑ひ上戸の一人後でくす＼／笑ひ初めしかば笑ふところにあらずとおもへどをかしくなりてばた＼／露のしたゝる手拭さげしまゝ斷りに行うと云ふものもなく体を拭く湯もなくなりてぶる＼／震へながら漸く着物をまとひぬ。

かゝる所へ湯の加減きゝに來たる神さん、この有樣に驚ろき果は大笑となりしが幸ひ隣の家にお湯の沸きしとの事に斷る譯にも行かず、ぞろ＼／出掛けて行けば之は又何と云ふ事か、風呂桶が庭の眞中に有つて、圍いもなければ、障子もなきに一同又々呆れたり。(以上冬子しるす雅俗折衷文、以下貞子しるす言文一致)

逗子の朝景色

見ず知らぬ他の家に來るや、早々飛でもない滑稽を演じたのでお神さんが膳をはこんで來ても、何だかきまりが惡く、我々の爲に特別に注意する氣で、鰹など入れておかづを拵へて呉れましたが其醜い事、魚でも野菜でも味がわからない位、併し牛乳だけは葉山の御用邸に納めるものとか、自慢するだけに誠に善良なもの

であッた。

夜になつては折々母屋の方で話聲がする外は、きみの悪い程静で、女三人寄つて姦しき筈なれど誰一人高聲に話すものなく頗る大人しい、定めし御退屈で有ふと澤山の小説本を貸して與れました自分は最も小説ずきで有る故、何より嬉しく、手近に有つた弘齋居士の「櫻の御所」を開いて所々飛び讀みを始めると其内に緋縅着たる小櫻姫が手勢引連れ、田越の川を打渡つて云々と書てある其田越川とはつい此前の川ではなきか、あゝ彼の川を美しき姫が渡つて行きしかとそゞろ昔の事思ひ出されて、彼の悽然として立つて居る裏の松山は定めし當時の目覺ましき戰振りを覺えて居るで有う、若し山にして靈あらば幾多旅人の好奇心を滿足せしむべく昔を語るで有うと、其内に夜も漸く移り行くので、一同床に就きましたが、自分はいろ〳〵と懷古の情胸に充ちて、眼はいよ〳〵冴へ渡り、生憎に響く松風の音が一種の哀れを添へて夜半過る頃までまんじりともせられませんでした。

ふと目を醒して見ると、早や友達は皆起き出でゝ顏を洗つて居る、朝日がうら〳〵と障子に映つてまばゆきばかり、扨は朝方になつてぐつすりねこんで、寢坊したのかと、家の人々にきまりが惡く、こそ〳〵と大いそぎで顏を洗ふと、

女學生の新髮(六)



個對注觀髻幹著波現はる

もうすぐ朝飯、さすがに田舎は朝起きと見える、ふと障子の外を見ると、都ならば御隠居様とも云はるべき此家の爺さんが、鞋ばきにて何やら梯子の様なるもの脊負ひ、畑に出て行く處である、大方芝でも刈りに行くので有うか田舎の人は勉強家よと何に付けても感づるばかり。

思ひ立つて、破れかゝつた草履借りて濱に行く道を教へて貰つて出掛けました、例の感慨深き田越川に沿ふて、下ると海に近く橋の上より見れば五寸ばかりの魚が澤山泳いで居る、向ふの方で漁士が岩に引付いて居る鮑を取つて居る、橋を渡ると直ぐ養神亭と云ふ料理家兼業の宿屋が有る、これは逗子で一番の旅館、横須賀の軍人達はよく遊びに來られるそうです、此家の裏を抜けると直に廣々とした海である、自分は海と云ふものは品川の泥海より外に見た事が無つたので、先其ひろく美しいのに氣を奪はれた、底の砂の數迄讀まれる様な美しい水の遠淺で少さな浪がざぶりざぶりと白泡を嚙む様、づうつと入江になつて居て、遙向には名高き江の島がかすかに見える、右の方は赤き岩の切岸上には松が青々と茂つて居る、左の方は立派で而も風流な別莊がちら〳〵と見えて、葉山に行く道が岸に沿ふて付て居る、時節が時節故避暑の客とてはなく、極く靜で、自分達より他には邊りに人も居ない、耳に聞くものは遙向ふから靜かに寄せて來る漣々浪の音のみ、又右手の海岸には柴の折戸の風流なる家は少なく、多くは規則正しき四角な西洋館のみ、定めし外國人の別莊で有ふ、子供が五六人遊で居ました。

濱傳ひに、美しき貝珍らしき海草などひろひ、小さき魚など追廻しつゝ、次第に進んで行くと、遂に濱はつきて切り立てたる岩の中途に細き道が九十九折について居る、不如歸にあるのは果して之であると、彼の不動尊を眼當に岩を傳ふて行きますと其嶮呑な事、右手はつかまり所もなき崖、左手は洋々たる海、一足踏みはづせば青々とした水に呑まれてしまふので、而も所所飛び越えなければ行かれない様な處、先に目的が無つたなら確に引返したので有たろうが、彼の浪さんが

涙の跡を尋ねんものと云ふ好奇心は、幾度か滑なる岩に足を取られんとしつゝも終に目的地迄達せしめました、見れば瀧と云ふも水涸れて僅に細き白銀の糸の垂れたるばかり、四坪ばかりは地上平にて、瀧の側に岩を切り拔きて屋根となし、一坪程の處板を張りて奥に不動尊が祭ッてありました、誰が供へたのか種々の草花の大方は萎みて、首垂れてゐました、誰云ひ合さねど一種の感に打たれて少時無言でありました、側を見ると此邊の岩は極く軟で容易く削らるゝ樣です此處に來た人の仕業でせういろ／＼の性名を英語或は漢字にて書付けられてあッたいざ我等も又來た折の思出にとて、各棒切もて名前など彫り付けました、果して今も消へずに有や否。

女學生の新髮(七)



挿畫十二分額上波動を見る

浪さんの腰掛けたる岩はどれか知らねど、手近を拂つて少時休で居ると、春の海の終日のたり／＼かなで、其穩な事うらうらと照す朝日の心地よき事など、なか／＼筆にも口にも盡されず、自分達は未だ曾て如斯平和な愉快な時に逢うた事は無かつた遠慮の要らぬ友達と、心配し切つて居た試驗も首尾よく濟んだのとでした。

ひろひ集めた貝を撰り分けたり、手近に咲て居る草花を摘んだりして、眞に無邪氣な五ッ六ッの幼子に立返

つた氣で、罪もない事語りながら、時の移るのには少しも氣が付きませんでした。

旅宿のくさ〴〵

もう歸りましようと一人が云ひ出したので、漸く立ち上ると、初めてお腹の空いて居るのに氣が付きました、元來し道を傳つて濱でも道草取らずにづん〳〵と前の橋を渡ると、付き當りに名物二子饅頭と書てあります、昨日から菓子と云ふもの一ッも食べなかつたので、急に食べて見たくなり、名物に甘いものなしと知りつゝ、十五錢丈買つて歸りました。

家に歸るともうちやんとお膳が並んで我等を待ち顔、空腹の折に不味ものなく、午房の辛く煮たのも平時になく有難かつた、夫から例の饅頭を出して三人寄つて遂く大方平げてしまつた、母屋の方の障子が明いて居るのでそッとのぞいて見ると、今日は舊の雛祭りで流石田舍は固いもの曾祖母さんの代からと云つた樣な隙いのが麗々しく古毛氈の上に裝飾つてある、すると間もなく、お神さんがほんの雛祭りの印に搗いたのですと、て持つて來たのを見ると、黑あんのよもぎ餅の其大きな事實に驚くばかり、一ッ食べたらもう嫌になる樣なのを三ッ四ッづゝつけてある、之には流石甘いもの好きの自分もうんざりして三ッは平げたがあとの一ッは何しても喉咽を通り越さなかつた、夫から籃一杯ひろつて來た貝を、そろ〳〵とより初めました、中に一際大きな美しい法螺貝を自慢らしく家の人に見せると婆さんは驚いた樣な顔で此邊で其貝を持つて居ると病人が絶へぬとか、お產が重いとか云ふて誰もひろひませんのでありますと、さも心配相に早くお捨てなされと本氣になつて云ふので、つまらぬ迷信をと思ふたが、逆ふのも大人氣ないと、そのまゝ捨てゝしまひました。

もう明朝は歸らなければならぬので殘り惜しくせめて今一度彼の景色よき海岸に行かんものと、又もや連れ立ちて行く、見れば夕やけの雲美しき五色に海の面を染めて、雄大なる事、風稍立ちて浪高くなりましたが、一しほの眺めで何時迄見ても飽く事なく斯くて永

久に此濱の漁士ともなりて、世を安く送りたらば如何に樂しからんなど、語りつゝ過去りかねて沖の方いよいよ黒ばみ行く迄漂て居ました、夜になつてから昨日よりの事一纏めに書き綴り取り散したる荷物片付けなどして跡は例の雜談に夜をふかしました。

朝は早くと兼ねて頼で置たのに其處は田舍の人の呑氣さ時間などには少しも頓着しない、鮮魚や鮑を都への土產にと買はして置いたのに夫すら今から行て來るのだとの事、もう一番汽車が出ると云ふのにまだ歸つて來ない遂におくれてしまつた散々あやまらしてスーテーシヨンに行くと後から亭主が息せき走つ

女學生の新髷(八)



反對七分後側髮毛を見る

て來てつまらぬものだがとて、まげものに入れたもづくを一ッづゝ呉れました自分達は幾つても見たもの丶種々親切にして呉れましたので厚く禮を述べて又來る時を期し遂に歸途につきました。

汽車が横濱に着た時大方の人が下りるので自分達も乘代かと思つて大きな荷物を抱へてあはてゝ人人の間を分けて漸く一番後れて外に出て見ると下りた人は皆外に出て行く、而して他に乘代へる樣な汽車もないので出口の係員に聞くと之は東京迄直行です、もう出るから乘るなら早くお乘りなさいと、云はれにので、自分達は大きに狼狽て丶後振返つて見ると、今や車掌は笛をな

らさんとして手を擧げて居るので何の考へる暇もなく、彼の長いプラットホームをかちや／＼と走ると、汽車の窓から首出して皆が笑つて居るので一層きまりが惡く早く／＼とあせるどたんに一所に括つて置たもづくの繩がほどけてがらがらと落ちたと思ふと口がとれて中からぞろ／＼と溢れ出ました夫でなくてさへ笑つて居た人々は是に至つて一時にどつと鬨の聲を擧げた併しもうひろつて居るひまが無いので、其まゝ跡をも見ずに丁度開いて居た室に漸く飛び込みますとピーと一聲直に發車した後で掃除に困るだろうと窓から覗いて見ると役夫達が集つて此方を見て笑つて居た自分達はあんなきまりの惡い目に逢つたのは前後に始めてで今も時々話し出しては腹を抱て笑ふ事で、も一ツをかしかつたのは乳屋の若い者が朝夕乳を持つて來るのにわざ／＼椽側の方迄廻つて來てはそツと自分達を覗いて行く事と、歸る支度をする時に二八水の付け殘りが有たのを邪魔になるからとてさも勿体らしく神さんに之を付けると色が白くなると受合だとて與へました處お神さんは大ぶ黒い顔で有つたので大悦びで鍋炭だらけの顔にいきなり塗つて居た事です。

女學生の日用文

近藤正一

田舍の花嫁と云ふ俚諺あり、これはその蕪雜粗笨なる容貌に强ひて臙脂を裝はへる無恰好を晒へるの警語なり。余は今日の我が女學生のものする文章の調子が何處となくこの田舍の花嫁流にあらざる無きかを疑ふ。素より今日の女流の文章が悉く然りとは云はず、中には得がたきの名文もあらむ、或はこれを古今の文壇に押し出しても恥づかしかるまじき大家もあるならむ然れどもその多くは余の所謂花嫁的なるものなり。女性の文章は男子の文章よりも優麗典雅の趣味を要すべきは云ふまでも無し、その風姿容貌が既に男子よりも優しき天性を表示し居るのみならず、その心もその言葉も男子に無き所の佳麗の質を有すれば、その發露

たる文章の秀麗なるべきは寧ろ自然の性情と云ふべし。

されば其の纖麗優美なる筆に依つて寫し出された錦心繍腸は、源氏物語枕の草紙の類となりて水茎のあと鮮やかに世界文壇の花として千古に推重さるゝも誠にゆゑある事なり。月花の美を感じては之を筆にし、華奢風流なる貴族的の生活を見ては之をかきつくる如き、所謂美文に屬すべきものは、讀む者に深き感興を惹き起さしむる必要あれば、文飾も、彫琢も、字句の配置も素より吟味せざる可からず、然れども日常有用の事柄を記するの場合、別て書簡を認むるが如き時に、如何に女性の文章は流暢優美を貴ぶとは云へ、無用の雅言閑文字を臚列して、強て古文の體を學ばむとするが如きは余輩の断じて採らざる所なり。

女學生の新装（九）



反對十二分髱髻變の構造を見る

源氏物語、枕の草紙は素より名文に相違なかるべきも、若しこの調子を以て物品の注文、貸金の催促状などを認むるが如きことあらば、恐くは滑稽の譏を免れ得ざるべし。あまり文飾といふことに凝るが為に文章に贅語、冗句を多く臚列するは、國文を專攻する人の往々罹り易き通弊にして、余輩殊にこれを當今女流の文章中に於て見る、この作文上の弊害は既に屢々先覺の士の矯正を唱ふる所なるにも拘

はらず、今日に至ては愈々その病弊の重体に陷れるものあり。今其の一例を擧げんに、

さいつころその御許様へかし侍りける黄金なむ、今に御もたせも爲させ給はぬこそ心ゆかず覺えはべる、今日やかへし給へる、明日なむおこし給へると待ち渡れるも、いつもうつせみのむなしきことのみなりぬるぞ、かへすがへすも口惜しふも、いきどほろしうも覺えはべる、いまばかりのゆきかひもあまたゝび重なりてこれを數ふればおよびもつかれはべりける、あはれそのかみを思ひ玉へ、つかの間の只しばしとこその玉ひて持ち行き給へるにあらずや御許様のつねにあげつらひ玉へるかみながらの道とやらむにもかなふべくもあらずなむ思ひ侍べる、せちにねがはしきは、このふみよみたまへらむには、やがてたゞさまにかへりごとにそへてさきのこがねなむそへて返し給はれかし、あなかしこ

又

先頃注文し侍れる夜會服今に御つかはしなきため、ほと／＼こうじ侍る、是非に來る二日の夕くれつ方迄にぬひたちし終て給はれ天長節の用にあはずしては十日の菊になむある、あはれ人々を心ふり起して成しとげ玉はれよ

嗚呼滑稽も玆に至つて極れりと謂ふべし。前文は某夫人貸金督促狀にして後の文は目下某校に通學し給へる令孃が洋服裁縫師に下されたる名文なり、加之事は最近の事實なりと云ふ。

斯の如きは僅かにその一例を示したるに過ぎざるも、これに類する妙文は恐くは何れの女學校に於ても、日日に習錬されつゝある所なるべし、書簡文にして斯の如くなれば、紀行、日紀類の作文が如何に多くの閑語、贅句を書き列らねて、扮飾を競はるゝかは決して推知するに難からず。

余は或る女學校の生徒の作文に就て、その文章中より形容詞と雅言なるものを除り去りしに殘る所僅に十分の一に過ぎざりし事ありし。作文の要は達意にあり、無用の扮飾は文章の累たる事を忘るべからず、古人

は辭達而止とさへ云ひしに非ずや、余輩日常の書簡文に於て殊に然るを覺ゆ。文章の秀麗なるは愛すべし、典雅なるものは更に之を愛すべしと云へども、こはその事柄にも由り場合にも由る事なり、徒らにその扮飾を爲さむが爲めに日用の書牘に迄源語、枕の草紙を摸擬するは、恰も十二單を着して八百屋の店先へ買物に行くと異る所なけむ。

文章は時代に由て甚しき變化あり、百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふも遊びつなど歌ひし時代は、その文章も自ら悠長艶美の趣味に富るならむ、又た公卿も武家も兵器をとり甲冑を帯して戰場に雌雄を爭ふ戰國時代は其の文章も自ら尚武殺伐の氣を帯るならむ、こは源語、榮華の如きより源平盛衰記、太平記などを比較對照せば明らかに知ることを得べし、若し文章は時代の反響にして、加之もその時代の潮流に從ふものとすれば、明治の今日に於て二千年以前の古文に模擬せんと苦心するの愚や、寧ろ憐むべきなり。

女學生の束髪(十)



反對十分美なる下襟を見る

余は又、女學生間に流行する一種の言文一致調の書簡文を見たることあり、文中、あゝして下さいな、こうして頂戴な、いつてよ、いやよ、などゝ云へる言葉の外に雅言や、古語を交へたる怪文にして、その亂調蕪雜なるは、明らかにその氣品人格の野卑なるを表して

餘りあり、若し文章は時代の反響なりとの語をして誤りなしとせば、今日の我女流の文章之を何とか云はむ。要するに、今日の如き新舊思想の未だ調和せざる時代に在ては、社會の萬般が多く亂調たるを免かれざるが故に、その餘弊は惹いて文章の上に迄も及べるならむも、彼の徒らに文飾を事として優長繁縟に流るゝの弊は、一は國文國語の教科書中に十二單流の文章多きが如きも、蓋しその一原因たらずんばあらず、彼の國文讀本なるものを見るに一二年級に在ては暫く通俗的なるが多しと雖も、上級の生徒が習讀する卷冊中には枕の草子、榮華物語、若しくは之に類するの雅文、多きを占む、故に一般に、なむありける、侍る、流の所謂世間に耳遠き文章ならざるはなし。

余は頃日女子用國文讀本の註釋を試みしに、尤も平易に、尤も簡明を主として筆を取るも尙一ページに十數個所若くはそれ以上の註釋なかるべからず、只多くの文章中に於て細川潤次郎、福澤諭吉の兩先生の文章に至ては一ページ中僅かに一二個所、多くも三四個所を註すれば充分なり、貝原益軒先生に至ては時としては全文に註釋を用ひずして可なる文章多し、然も如上の諸先生の文章は天眞流露の裡に自ら莊重典雅の趣きあることを思へは徒らに粉飾を施して作文の極致とするの誤なることを知るに餘りあらん。故に余は世の女生徒達がその作文に無用の辭句雅言を陳列することを止め、質實達意を主として作文の道を習練されんことを望む。

暹羅の女學校

暹羅國皇后陛下の御思召に依り盤谷に設立せられたる女學校は本邦より招聘せる女教師安井武の一行去る二月十四日同地に到着せるを以て愈々客月四日開校の運に至れる由同校は校名を皇后女學校と稱し校長には皇太子殿下の秘書官長ルアンアピラツク氏之に任せられ生徒の現員十八名（豫科及本科各九名）孰れも同國貴顯の子女にして其中元陸軍次官の姪皇太子侍從武官長の女外一名は現に宮中に奉仕中なるを特に皇后陛下の御思召を以て就學せしめられたりと云

歴史談

悲風凄雨 斷頭臺の露

菊池雪子

(佛蘭西皇后マリ、アントアネットの事)

澳地利の宮殿に一もとの姫百合うるはしう咲き出でたるは、ある日佛國の玉の臺に上げられていとたふときゝ居のみ名を後世に留めてんためなりけらし、されどたかきみ位に上らせたまひたるをこよなき譽と思ふはこれぞ不幸のはじめにして、忌はしき、情なき死を斷頭臺の上に遂げたまふべかりし禍の端なりける。うまれつき、(天性)ならはし(習慣)など、とかう評せん人のあるべけれど、とにかく、たれかは同情の涙の露をこの花のへに注がざる。

一千七百五十五年十二月二日、皇女マリ、アントアネツト、ジヨゼフヰヌ、ジヤンヌ内親王はヴヰエンスの宮殿に生まれたまふ、父君は澳太利皇帝フランツア一世にして、母君は有名の女帝マリ、テレスにおはしき、さても姫宮は宮殿の奥ふかう、冬ごもりの梅の花のごといまだ春のゝどやかなる風に誘はれたまはぬ蕾の花の末たのもしき十五の御年、佛王ルイ十六世がいまだ嗣子の王子ときこえまつりし時妃殿下に迎へられたまふ約成りて、いともまばゆき支度調へさせ、行列練りてパリに入らせたまふことゝはなりぬ、市の賑ひ、民の喜びえ言ひつくされず、その日の經營は市長ブリサツク仰せ付られしが、途上の人霞のやうに集ひて歡びあぐる聲高らかに御車近かうに來りて姫宮のあでやかなる御姿見入るゝを指して恭々しう申けるは「おゝみそなはせたまへや、二十万の民は殿下を渇望し奉りぬ」と言ひしとき、姫宮はあはれゆかしの我民よとおぼされたまひけんかし。

御中いと睦まじう四年を過ごさせけるに、即位の式あ

りて后の御位に上らせたまひ、月に宴し、花に歌ひて、たれ憚るものとてもなかりしかば、やう／＼近臣に忌まれ王弟よりは媚を言ひかけられたまへり、風にもまれず、深窓にのみかざされし美しの花にしおはせば、傲りたる御姿、偏れる愛、輕き性質などありたれどさりとていぢわるき御心はつゆおはさざりき、されど反對する徒は后の眞心をも知らで、日に／＼騒ぎ立ちたりけり、后は愛嬌したゝる美しき御姿もて日に／＼遊興をのみ好ませたまひたりき、間もなくいかめしきヴエルサイユの殿をよそにしてトリアンヌの殿に移らせられ、こゝを樂しき庭と定めて、身のあやうきも知らぬ蝴蝶の花に狂へるがごと、寵臣にかしづかるゝをただうれしとばかりおぼされたりき、時には羊追ふ賤の女に擬装して宮中の演劇に交らふなど、貴き人のもの啓するを厭らひて、諌めを顧みずなりたまひぬ、されば日々怨を重ぬる人々の后の動作を伺ひ居るともつゆ心にしたまふことなく、都の劇場にさへ屢行幸せられたり。

深閨の裡に育ちたまひし習ひとて自愛心深かく、傲多く、嘲弄の氣風さへ人の目に立ちしかば、宮中の怨と市民の恨とを一身に招きたり、國庫はます／＼乏しくなりゆくとも、寵臣權を弄することはげしく、國難をたゞ空吹く風とおぼされしなれば、民等憤りて王室を恨み、后を誹りて路に歌たひ、誹謗の書を途に販きけるもこれより起りたるなりき、國母とも仰ぎ奉りたりけんをもろ聲に「澳地利の女」と呼び囃したりき。

波浪の怒るより速かなるは公衆の憤怒なり、惡黨は陰謀を企てゝます／＼國庫の亂るゝまゝに打捨て、これを後日の證として、后を罪に陷れんとせり或は商人宮中に候らひて、價百六十万圓の衿飾を進め參らせしに、后とを却けて仰せたまひけるは「その寶より軍艦二艘造らば御國の益ならむ」と、さるに、數月の後かの男またしも宮中に參りて、后の手跡になぞらひし書付を示し、品物の價を請ひ求めければ、后いみじう驚かせられ、しばしがほどものをも宣はざりけり、やがて王に奏したまひければ、裁會に下だしかの男を糾したる

に、まつたく陰謀なりし事あらはれて、彼は獄に繋がれぬ、后の清き御心は空に晴れたれど、これより斯るわざするもの引きもきれずして、あはれなるかな、讒はつひにまことゝなり、后の不幸はこゝにその端緒をひらきぬ。

王子を生みまつりてより、后は王を蔑にし政に與り力ある宰臣去りければいよよ權を專らにし、財をば私樂に費したまへり。これ后の不德と知られぬ。

もとよりかゞやく皇室に生まれ、侍臣侍女等にかしづかれたまひて世の憂をつゆだに知りたまはねば、かゝる幼時の感染は年月すぐるともなほ消えやらずして自然行爲にあらはしたまふに至れり。



▲梅雨の節　▲たや菓子が猫に化けた

漫なる后は王を陵ぐこと度度なれば、王室と人民との不和起れり、講和の策參らする者ありたれども、后は王に勸めてそを容れしめたまはざりき、さればいよいよ人の憎惡を買ひたまひて陰より口汚なく罵られたまふに至りぬ。

民黨ヴエルサイユに押し寄せ、王と后とを捕へたれば柔弱なる王はいみじう恐れ慄きたまへど、后は泰然と

して縛に就きたまひぬ王妹、王子、王女をも共に寺院に幽し奉り、后の女官ランバルは内親王の首を斬り竹に貫きて窓外より后に見せしめたり、こを見て后色を失ひ、氣絶えければ、王と王妹とは手を盡してやうやう蘇生せしめぬ。獄中には王をはじめ一族の方々はみな集ひて語らひ居たれど監守きびしくなりゆきては相見るだにえせざりけり、一千七百九十三年一月二十日、最後の別を告げんと王の來られしはまこと斷頭臺に上らんためなりけり。

かけまくも賢き君王を弑し奉りて、一揆もいさゝか靜まりたるに、王子を立てんとまたしても騒ぎ立つものありければ、后は食堂に玉座をしつらひ、王子をルイ十七世と仰ぎまつり、君主に對する敬禮を盡したまふ、暴徒これを聞きまた后と王子とを隔てしめんとしたり。

酷き徒來たりて王子を奪ひ去らんとしけるとき、母后王子をしかと抱き叫びて「王子を我より奪はんとせば、まづ我を劍もて刺し殺せ」と氣も狂はんばかりなりき、王子はそれより情なき靴師シモンといふ惡徒が呵責に苦しませたまへり。あはれ世は暴徒の亂す處となりて、一國の政治は亂民の手に歸しぬ、八月八日后はコンシエルジウクの監獄に移らせたまへり、あゝ我が運命は盡きけるよと、思し召さるゝにも一しほ王子、王女が御身の上おもひやられて、御心を惱ましたふぞあはれなり。

玉樓に住はせられ、美食に飽れし后の宮、いまや獄吏が持ち來たる粗食に甘んじ、積れ衣の垢付きたるを着たまへど、針とるわざをし戒められたれば、淺猿しの御姿にぞならせたまひける。

十月十四日后は被告として裁判に呼び出されたまひぬ、理なき訴せられても怖るゝみ氣色なく、いとけ高き風采はむかしのごとくにして、備への椅子によりたまひぬ、烈しき御心の痛に御髪の毛さへ俄に霜おきたるやうに白うなりたれど、なほ御顏ばせの美しさは失せやらざりけり。

「汝の名は」判事は問ひぬ。

「墺地利のマリ、アントアネット」と皇后は仰せたまふ。
「身分は」
「我は佛王ルイ、カペの寡婦なり」と涙も見せず應する色もなく仰せ給ふ、
「年は」
「三十八才」
雲井を照らして后の宮とあがめられしを、むなしう下僕の前に引かれ、侮辱せられたまふことのいたはしさよ。それより后、王を誘ひて外援に應せしめ、みづから内亂の主謀となりて朝野を騒がしたりなど、なき罪を訴ふる者あまたあり、こはいかにもして后を死刑に陥れんと、口々になき罪を申立てけるが、つひに后は婦人の資格だになき腐敗したる女よと罵られ給ひたりき。
あゝ悪むべき讒謗にかてゝ加へて、へベルなる者あらはれ來たりて、訴へける其言葉に后は幼主を後見して政を專にせんとしたりとありしかば、后は聞きてあまりの讒言に惘れ果て、公衆の前に御手さし延べ、異心込めて聲たからかに仰せたまふやう「こゝに在す人々はいかに」と



△梅雨の節

（けふも降るかしら）

叫びたまひぬ。されど暴徒等はこそもて、后を死罪に處せんと決定しければ、后は獄屋に歸らせたまひて、王妹エリザベツト内親王に御手紙認めさせたまひ別を告げ、二人の御子を依頼せられたり、文の中には父王がいまはの御言葉心にきざみて、讐な復したまひぞ、姉は弟を愛し、弟は姉に從ひたまへなど、情こめてぞものせられぬ。

褻れたる頭巾衣服などの皺押し延ばして后の宮は終りの裝ひ用意こまやかにせさせられ、見惡からず出で立たせんとおぼしたまひぬ、白き御頭巾の黒きリボンにて飾られたるを、いつしか房々したる御髮の毛みじかに切らせたまへる御つむりに冠らせられ、御上衣は白う、御裳は黒き木綿にして御袖先を黒きリボンにて結びたるさまは、まこと后の御うちにも、いと優美に見受けまつりぬ。嗚呼天か命か、上帝情なし。

かくて獄を出たまはんとしたるとき、つね／＼屏風の外にて監守せし獄吏に仰せたまふ「民は途にて我を害せざるか」と問はせたまへば「いかなる害をも加へまつらじ」と恭々しう啓したりき。

亂民共は枯れたる草、藁すら敷かざりし荷車やうのものに后をうち乗らせまつりぬ。

后の御顏はま白にしてしかも靑う、艶やかなりしむかしのおもかげ消え失せたれど、なほも高貴なる御姿して、胸のさわぎだにあらはしたまはで、懼るゝみ氣色なかりけり、首斬りの男は、后の御兩手をうしろに括りたる繩のあまりをたゆたに搖がしつ、いま一人はこれに副ひ、帽を手にして、車中の片隅に立てり。

いまや斷頭臺に上らんと、后は踏みゆく足もと死路に近う辿るまゝに、思はず階の上にて斬首人の足踏みたまひければ、

「おゝ失禮せしよ、知らざりつるをゆるしたまへ」と仰せられき。一千七百九十三年十月十六日正午十五分過ぎし頃、あはれ幸なき后の宮は敵をもゆるす御心もて、ひたすら神にすがりて靜に此の世を去りたまひぬ。かつては、まばゆき御冠を戴かせたまひたるうるはしき御首を鎗の鋒先に貫きさして民衆に示されければ「共和政事萬歲」の聲四方にむらがりぬ。（完）

史上の日本婦人

塚越停春

「金剛石もみがゝずば玉の光りは添はざらむ。人も學びて後にこそ誠の德はあらはるれ。時計の鍼の絶間なく、めぐるが如く時の間も日影惜みて勵みなば、如何なる業か成らざらむ。」とは、忝くも皇后陛下の年少士女を戒めさせ給ひたる御歌に非ずや。趙家連城の璧も未だ琢磨を經ざる間は徒に荊山の石なりき。如何なる天才と雖、教育なくして克く天才の光華を發し得るものはあらず。教育の貴重なること實に陛下の御戒めの如く然るなり。生れて文明の時代に遭ひたるものは、何人と雖人生の門出に先づ學ぶ所なくむばあるべからず。

▲王朝の名媛

倩ら上代の事を惟るに彼の有名なる光明皇后の如き、首として教育の力に藉りて其才華を煥發し給ひたるもの、后は天資の聰慧と体貌の姝麗とに加ふるに、漢學佛學の教育を以て其人物を成就し給ひ、志を物を濟ふに存し、聖武天皇を助けて大に佛教を興し、悲田院施藥院を置きて天下の飢病を養療したりき。而して后の教育が如何に豊かなるものなりし乎は、其書を善くし文を屬し、或は考妣の冥福を祈りて金字一切經律論を手寫し、願文を製して毎卷の後に書し、或は帝の爲に自ら願文を製して珍寶、玩好、御帶、牙笏、弓箭、刀劍、樂器等を東大寺に納れて供養したりしを觀ても、之を知るべし。

嵯峨の檀林皇后橘嘉智子も、天資に加ふるに教育の力を以てし古來有數の國母と稱せられたりき。后は甞て其弟右大臣橘氏公と謀りて學舍を設け、以て其子弟に經書を習誦せしめり。所謂學館院是也。而して后の皇女正子亦姿容美に、貞婉にして禮度あり、嵯峨帝及び后（即ち嘉智子）の鍾愛する所となりて、豊富なる教育を受け、一旦淳和の皇后となるや、同く古今の明

皇后たりき。又嵯峨天皇の皇女にして交野女王の生む所たりし有智子内親王に至ては、教育の力殊に優に、頗る漢史に渉り、兼て善く文を屬し、年十七の時詩を賦したる女秀才なりしが後加茂の齋院となれり。加茂齋院は實に内親王より始まる。

又平安朝の中期晩期に在りては、婦人の文學的將た遊藝的教育は盛に行はれ、名媛才女の輩出したること、人の知る所なり。試に其一二を擧ぐれば、帝村上の宮中に在りて、弘徽殿の皇后藤原安子は、相當の教育を有し、帝の政務を贊翼して匡救する所多かりき。齋宮女御徽子女王は、最も和歌に長じ、宣耀殿女御藤原芳子は、容貌絶艶、車に上て其末尙柱下に委するの長き黑髪を有し、琴書を善くし。古今集を暗誦して一たびも錯誤せずと稱せられたり、而も此くの如きは獨り村上の宮中のみにあらざる也。此の前後に於て參議篁の孫、出羽守良眞の女に小野小町ありたり。彼女は實に篁の孫女たるに耻ぢざる教育を有し、千古の女詩人として世に知られたり。伊勢守藤原繼蔭の女に伊勢あり。彼女は亦父母の愛女として相當の教育を受け、小町が凄艶なる歌体を以て千古の女詩人たりしに對し、彼女は淸麗なる歌体を以て同く千古の女詩人たりしものなり。

攝政藤原道長の妻倫子に仕へ、稱して右衞門と曰ひ、後大江匡衡に嫁したる赤染右衞門あり。才思ありて和歌を善くし、嘗て藤原公任が中納言を辭せむと欲し、當世の名儒紀齊名、大江以言をして表を作らしめしも、意に稱はず、更に之を匡衡に屬す、匡衡家に還て苦心色に露はれたるに當り、彼女は聞て、公任が矜飾家なるを察し、勸めて盛に其閥閲を述べ、以て微く沈滯の意を露はさしめしに、公任果して大に悅び、遂に其文を用ゐたりき又大江雅致の女にして和泉守橘道眞に嫁し、道眞歿後は上東門院に仕へ、後丹後守藤原保昌に嫁したる和泉式部あり。亦和歌を善くし、嘗て播州書寫山の僧性空上人に贈りて『くらきよりくらき道にぞ入りぬべき、遙に照せ山の端の月。』と曰ひたりき。和泉式部の女に有名なる小式部内侍あり、亦和歌

を善くして上東門院に仕へ、赤染右衛門の女には江侍從あり、亦和歌を善くせり。伊勢祭主大中臣輔親の女には伊勢大輔あり。又上東門院に仕へて和歌を善くし、其初めて宮に入るや、たま〳〵人ありて櫻花を献じ、關白道長側に侍し、筆研を彼女に授けて和歌を題せしめしに、彼女は直に筆を乘て『いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな。』と歌ひ、爲に深く其才敏を稱せられしと傳ふ。此等は何れも一種の專門的教育を受け、之が結果に由りて世に知られたるものなり。



▲入梅の節

學生の通學姿

紫式部が「源氏物語」五十四帖を著したるに至ては、婦人作家として日本文學史上に於ける千古の誇りなり。平安朝三百五十年の

文學界は、之に由りて寂寥ならざりし。而して彼女は此の千古の著作をなすが爲に、殆と遺憾なき教育を受けたるものなりき。蓋し彼女は幼より慧敏にして、人の書を讀むを聞き、輙ち能く之を暗記し、父式部丞藤原爲時に深く愛せられ、常に之を撫して汝をして男たらしめざりしを恨むと曰はしめたりしもの也。去れば彼女に對する教育は十分に之を施し、遂に彼女をして能く和歌に長せしめたるのみならず、博く和漢の舊記に渉り、兼て朝廷の典故にも通ずるを得せしめたりき。帝一條の中宮上東門院藤原彰子は、『この世をば吾が世とぞ思ふ、望月のかけたることもあらじと思へば。』と歌ひて貴盛一世を傾けたりし法成寺攝政道長の長女にして、福壽を兼ね備へ、文詞を好み、婦人の才華あるものを擇び、引て之を左右に置き、彼女も亦時に候し、嘗て爲に「白氏文集」中樂府二卷を授けたることありき。

式部が藤原宣孝に嫁して擧げたるの一女に賢娘あり。太宰大貳高階成章に嫁し、後一條帝の乳母となる。狹衣物語」の著者大貳三位是也。

紫式部と名を齊うして同く平安朝の女文豪たる淸少納言あり。肥後守淸原元輔の女にして、才學に富み、一條帝の皇后藤原定子（關白道隆の女）に仕へ、香爐峯の雪の故事を以て天下に知られたりしもの。其著「枕草子」は實に「源氏物語」と並ひ傳ふるに足る。後世白河樂翁は紫女を以て櫻花に比し、淸氏を以て梅花に比したりき。

勅取の梅樹に『勅なればいとも畏こし、鶯の宿はと問はゝいかゝ答へむ。』の歌を結ひつけたりし紀貫之の女あり。周防守平繼仲の女にして後冷泉の宮人たりし周防内侍あり。陸奥守藤原倫寧の女、關白兼家の妻、右大將道綱の母にして、「蜻蛉日記」の著者たる藤原倫子あり。

▲鎌倉時代の女流

下つて鎌倉時代に至り尼將軍北條政子の如きに至ては地方豪族の家に生長し、遊藝的教育は之を受けたるも

の非ざる如しと雖、後年天下の後見たるに及び「貞觀政要」を國字譯となさしめ、以て之を讀みたりと傳ふるを觀れは亦全く無學なるものに非ざりしや知るべし、又賤しき侍女ながらも、源義經の妾靜の如きも『吉野山峰の白雲踏み分けて入りにし人のあとぞ戀しき。』と歌ひ、『ありのすさびのにくきだに、ありてのあとは戀しきに、あかで別れし面影を、いつの世にかは忘るへき。』と吟したりしと云へは、是亦一種の教育なきにはあらざりしに似たり。又楠正成の妻にして正行兄弟の母たる彼女は、天下後世の稱して賢



▲入梅の節（またころびましたな）

母良妻の標本となす所なり。

▲戰國時代の才媛烈婦

元龜天正の戰國に在りても傑出したる婦人か教育あるの婦人なりし一例は細川忠興の夫人を見ても之を知るに足る。彼女は基督教を信じ、洋書を讀み、洋文を學び、羅甸文若くは葡萄牙文を書き得るまでの教育を有し當時の外國語學生たりき。彼女が宣教師カスペートに贈りたる書中、予をして佛教を放棄せしめしはも

と人力に非ず、予をして正路を知らしめしは久しく祈願したる天主の洪恩に因れり。且天主の仁恩を以て予の昏冥を救助せられし以來、其敎に非ざれば、決して天堂再生の方を得べからざることを確知す、寰宇壞頽し、海陸變遷、万物消滅に至るとも、予は天主の恩に由りて確乎として安全を保つべし。』との語ありしと云へば、彼女が信仰力と學力との如何に見るべきものありしよ。

近世淨瑠璃作家の鼻祖にして「十二段草子」の起稿者と稱せられたる小野お通の如きも、詩歌琴書に勝れたるものなりき、讃州白峯寺藏する所お通自筆の書翰と云ふもの果して彼女の手跡なりとせば、其筆力の秀健なるのみならず、其行文の妙亦彼女の才學を察するに足る。

折ふしのうつりかはるにぞなほ戀路なんやる方なき。長閑なる日影に、雪の下草萌出るも身の上ならずや。霞み渡る夕間暮こそたゞならね。夢ばかりなる手枕に、青の葉の殘る鳥の聲、耳なうがち、鐘の音むな碎く、きぬ〴〵の、袖に宿る有明の影の涙にかすまぬかは、そぼ降る雨にたれこめて、春の行衛も知らぬにぞ、人の戀しさも世のつらさもさらなり、朧月の覺束なきに、梅の匂ひの通ふも、人の面影にもやと怨さゝれず。花はひとしほ愛づるものゝ、けんに濫くも淡くもおのがじゞ色を爭ふほど、ひとり見こさんもいと口惜し。青葉に成り行く空の、花立花に香のみ渡り、卯の花の咲き亂るゝころ郭公の窓近く來啼くにぞ、見果てぬ夢も破れ、涙を催しつゝもれられぬわざなれ。あふぎは人のかたみとて取かはしても嬉しきものなれどうら表なんあれば、また手にだに取られず。七夕まつるにこそ逢ぬつらさはまさり行く。夜寒に成るほど、雁の聲に枕淋しく、床凄まじう、ねられぬまゝに月のみぞ心をば惱ませ。荻の下葉の色つくを見るにも、人の心のうち何とかや、露ばかり哀れなるはあらじ、おきもあらず消ゆるためしなど身のたぐひにや。とりあつめて秋のみぞこよなふ物憂しや。冬枯の空、木の葉散りしく庭の荒れはてゝ、霜のかゝれるさまぞ、とわれぬ程のうき身知らるれ。雪の朝に君を還す、是非なくも又なく戀しきものなれ。降り積る日の寒さには、又隔てなくさし向ひ盃とり、越し方行末の事長へに物語りせしこそ、物事は忘らるれ。埋火のもとに硯をならしつゝ、思ふ程の御事は書きもやられぬ筆のすさみも、冬の夜のみまぎるゝかたなく思ほゆれ。つく〴〵と一歳の過ぎ行く苦しさや。戀に朽せぬ命のためしさしも知らるれ。

　世をばげに渡るものからうき舟の
　　よるべもなみに身は流れつゝ。

むもつきはてらし。しかくとわけ見へ申まじく候。御すいりやう、あしき事のみ御なだし下され候べく候。

又嘗て歌あり、『つれ〴〵とふりにしあとを思ふにも、袖こそぬるれ五月雨の空。』

▲幕朝の閨秀才人

近世期に入りて、婦人は全く社會表面の位置を退き、去て深窓に蟄居するを其本色となしたるより、良妻賢母として成功したるの婦人は其人に乏しからざると共に、一個の人として成功したるの婦人に至ては、復た平安時代の當年の如く盛なること能はざりし也。而も猶全く其人なきにあらず。



▲入梅の節

名にし負ふ近江聖人中江藤樹の母の如き、天性思慮ある婦人なりしのみならず、又多少の教育を有し、佛教を信じ、其兒の人物を成功せしむるに、彼女の力與て大功ありし。

熊澤蕃山の妻矢部氏いち女は、深く良人の感化を受け少なからず學ふ所ありて、其妻たるに耻ぢざる行ありし也。彼女が臨終の際の如き、大人君子も及び難からむと欲する高尚なる臨終をなしたり。

備前の學者湯淺常山の母瑠璃子は、岡山藩瀬隈陳良の女にして、相當の教育あり、夫に嫁して著名なる良妻賢母たりき、彼女は

常に其兒を戒むるに淸女簾を搴ぐるの古逸話を以てし婦人にして猶此くの如し、男子たるもの才學なくして可ならむやと之を勵ましたりといふ。

俳人西島某の妻は、雪夜其夫が一小者を俳會に具し去らむとするを見『我子ならともにはやらじ夜の雪。』と吟じ、以て其夫をして其夜の出會を止めしめ、豐後の一農婦は、夫妻の間一子を有したるに拘らず、彼女の夫が强て彼女を逐はむと欲するを悲み、乃ち歌ふて『すれ〳〵の中に花さくとくさかな。』と言ひ、忽ちに夫を感悟せしめたりき。

土佐の野中兼山の女婉子は、谷重遠に學で經史に通じ詩を賦し、和歌を作り、重遠をして一詩を作つて之を稱せしめたるものあり。嘗て親戚衣笠氏の女の嫁ぐを送て誨訓の文「朧夜の月」を作り、又歌を詠じて『夜半もまた杉の木の間を漏る月に行人たどる逢坂の山』と曰ひ、詩を賦して朝倉三月暮、山綠野花稠。草舍飛レ春地。柴門閑レ日幽。弟兄汎涙眼。父母存ニ心頭一。空去高官念。恰伴小蝶遊。」と曰ひき。

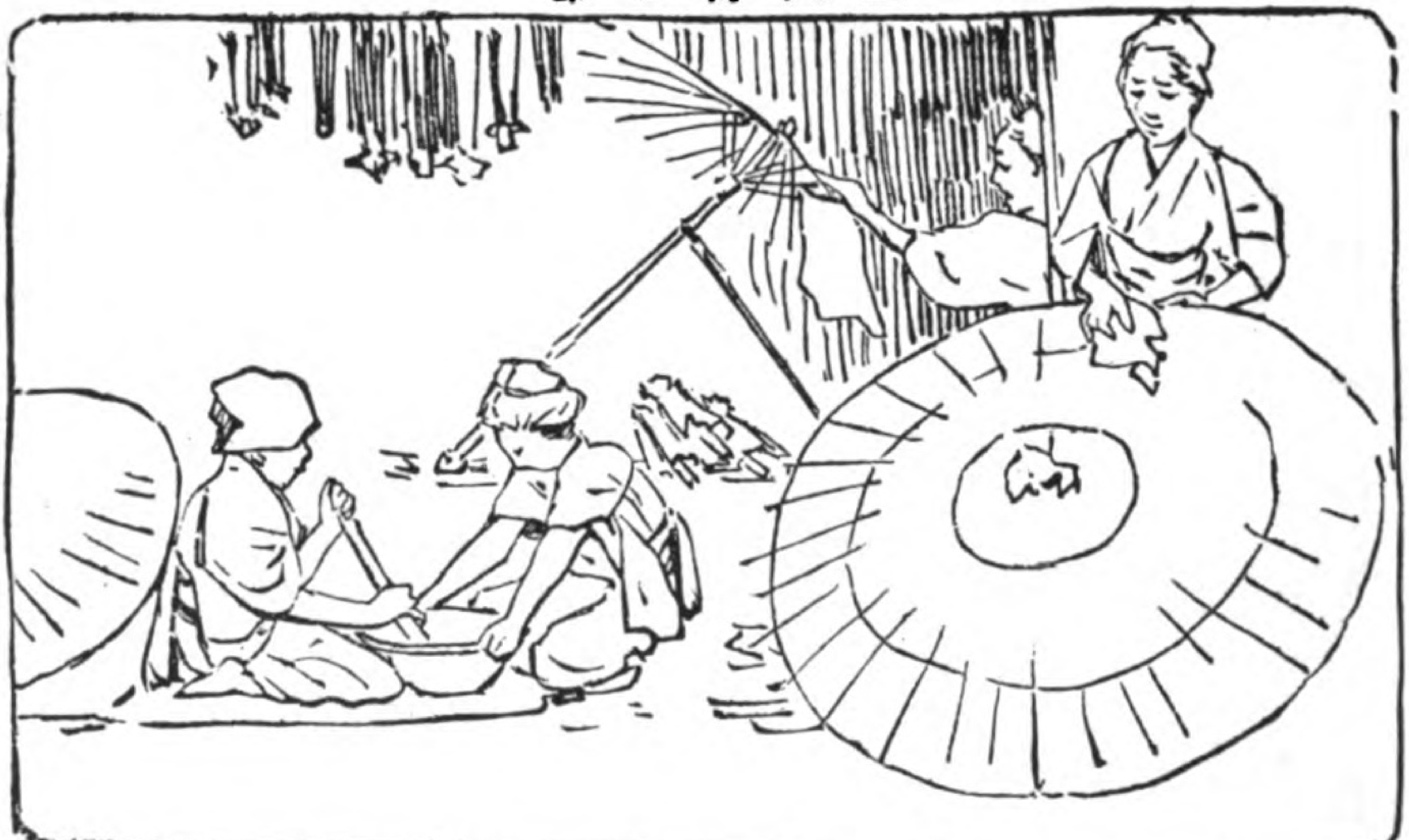
貝原益軒の妻江崎初女は、字を得生、號を東軒と曰ひ經史に通じ、文墨に嫻ひ、世に賢夫人として聞こえたるものたり。益軒好で勝地を遊觀し、遊觀する每に之が遊記を作る。而して之が遊記は多く、彼女の內助に成ると云ふ。

我が解剖家の祖先として高名なる醫家山脇東洋の母飼井氏は、性端嚴にして、善く書を讀み、大義に通じ、子を敎ゆるに義方を以てし、恒に東洋及び其弟淸水敬長をして書を樓上に讀ましめ、吃飯行厠の外は樓を下るを許さず、弟兄爲に日夜憤勵して學に從事し、終に各一家をなせり。

讚州丸龜の井上通女は、夙慧にして能く書を讀み、詩歌を作り、年十八にして江戶に行くの途上「東海紀行」を作り、海上の波高きに逢ひては、『しるべせよ、波間を分けて行く舟の心しられぬ八重の汐風。』と詠じ、波櫓聲を聽ては『乘レ寒一葉浮。倏忽過ニ他州一。風響驚ニ鄕夢一。波聲動ニ旅愁一。蒼々天與レ水。浩々月如レ流。枕レ袖蓬窓裡。不レ能ニ只自羞一。』と歌ひ、武田信玄の玄孫、葛山內記

の女にして、武田壽庵の妻たりし總女、大休了然尼は才辯ありて禪機を得、詩歌を巧にし、書を善くし、死に臨て『六十六年秋已久。凜々月色向レ人明。莫レ言那裡工夫事　可レ熟松杉風外聲。』と賦し、六歲の時、『雪の朝二の字〳〵の下駄の跡。』と歌ひて名を知られたる丹波柏原の田捨女は、長して北村季吟に和歌を學び夫を喪ひて僧盤桂に就き剃髮せむとするに當り、和歌を詠じて『秋風の吹き來るからに絲柳、心細くも散る夕かな。』と曰ひ、西岡惟中の妻たる勢州松坂の園女知鏡尼は、松尾芭蕉が彼女を見て『白菊や目

▲入梅の節



傘の繁昌

に立て見る塵もなし。』と吟ずるや、之に脇して『紅葉に水を流す朝月。』と曰ひ、或は歌ふて『ある程のだてしつくして紙子かな。』と曰ひ、或は歌ふて、『負ふた子に髮ねぶらるゝ暑さかな』と曰ひ、或は歌ふて『夜嵐や太閤樣の櫻狩り』と曰ひ、晋其角の女弟子秋色は、年十三にして花を東臺に觀、清水觀音堂畔の櫻を詠じて、『井のはたの櫻あぶなし酒の醉。』と曰ひ、『蕣につるべ取られて貰ひ水。』の句を以て天下に記臆せられたる加賀の福島千代女素園は、俳諧を盧元坊に問ひ、乙由に學び、書を英俊明に習ひ、其歌ふ所

眞情の流露を以て世に名高かりき。此等は共に一種の教育を受けて名を成したるもの也。

池野大雅堂の妻百合女玉瀾か、亦書を善くし、和歌に長じ、殊に巧に蘭菊を描き、時人之を伯鸞孟光（唐の文人夫婦）に比したりしは、人の知る所の如し。近世の詩人梁川星巖の妻張氏紅蘭か、亦此の夫にして此の妻ありと稱せられたる女詩人なりしことも、人の知る所の如し。

賀茂眞淵の女弟子中、鵜殿よの子は、和歌に長じたるのみならず、漢學者鵜殿孟一の妹にして、兼ねて漢文漢詩をも作りたりき。幕臣土岐頼房の妻筑波子は、眞淵が稱して彼女の歌は王朝の女房の口つきありとなしたりしもの也。伊勢屋平右衛門の女倭文子は、嘗て母に隨て伊香保の温泉に往き、之が紀行「道ゆきぶり」を作りたりき。

荷田在滿の女に民子あり。蒼生子と稱し、淸水濱臣をして稱して、羽倉氏三代家聲をおとさず、蒼生女の如き女丈夫さへ出て來ぬるは珍きことなり。と曰はしめき。

仙臺には只野綾子ありたり。彼女は江戸の人工藤平の女にして、眞葛尼と稱し、和歌和文を善くし、「獨考」、「奥州はなし」、「磯つたひ」等を著し、瀧澤馬琴、村田春海等をして其才學を驚かしめき。

荒木田麗女は紫山と號し、好で和漢の書を讀み、「池の藻屑」、「月の行方」、「山の井」、其他を著したりき。就中「池の藻屑」は、「増鏡」の後を續きて下慶長の初に至る約三百年間の歷史也。

小田坦蓮月は、名を誠と云ひ、京都智恩院の坊官伴左衞門の女なりき、而して彼女が近時の女詩人たりしことは、今更繰返すまでもなし。其『宿かさぬ人の心をなさけにて、おぼろ月夜の花の下ふし。』と云ひ、『山里は松の音のみ聞きなれて、風吹かぬ日は寂しかりけり』と云ふか如き、以て彼女の詞才を見るべからずや。

以上は固より婦人が教育の力を藉り、殊に專門的教育の力を藉りて、成功したるもの丶數例に過ぎず。然れども教育の力が如何に婦人を成功せしむるに効ある乎、殊に專門的教育の力が、如何に大に婦人を成功せしむるに與て効あるべき乎は、之を知るに難からざるものあるべし。（完）

支那婦人小話

田村松魚

▲晉の代には隨分亂暴なことをやつたものである。日本で名器を破壞した爲に其女の指を切るといふ話や、例の皿屋敷の話などもあるが、彼の晉の政治家石崇は來客があると大衆の美人に酌を取らせて賓客を待遇するのが自慢なので、若し客が酒を飲んで仕舞はないと、其酌をした女を斬殺したといふが、實に酷を極めた話である。或時友人の王敦が石崇を訪ねた時、どうしても酒を飲まないので、其酌に立つた女を三人まで斬つて了つた。其後王導が石崇も石崇だが、卿さへ酒をのめば左樣いふ慘酷なことも始まらないのだと、敦を責めると、王敦は澄したもので、酒を飲まないのは自分の勝手だ、女を殺したのも石崇が勝手に殺したのだ、何も卿に關したことではないと、平氣で答へたといふが、石崇の殘忍よりも寧ろ此の王敦の言葉が冷酷人の胸を刺すやうに思はれて、如何にも此時代の人情が察せられて心を寒うするのである。

▲矢張り前の石崇の事で、崇の愛して居た美人が十數人居た。平生沈木香塵の屑を象床の上に布いて、愛する所の美人に其上を踐ませるのだ。そして其足跡が附かなんだものには褒美として眞珠百珠を與へるし、若し足跡の附いたものは忽ち食物を減らしてその體力を輕くさせたといふことがある。で此の美人共は兩細骨輕軀にあらずんば那百珠の眞珠を得ず、と歌つたといふ話、隨分美人を養成するに力を盡したもので、全く眞の國色を作るには此れ位の奬勵法をせねば完全な美人が得られないかと、石崇の豪華を驚くと同時に馬鹿馬鹿しくも思はれるのである。

▲唐の詩人伯樂天に二人の妾があッた。一人は樊素と云つてこれは、歌が上手。今一人は小蠻といふ女で、舞が上手であつた。樂天の詩に櫻桃樊素が口、楊柳小蠻が腰。といふ句があるが此の二妾の事を詠じたもの、今の日本の詩人などに愛妾を置いてそれを謳歌するや

うな意氣はないやうに思ふ、呵々。

▲唐の喬知之が妾に碧玉といふ女があつた、頗る美人で、歌舞に極めて妙を得て居た。所が武承嗣といふ男が碧玉を借りて、とう〳〵如何しても喬知之に還さないので、乃ち綠珠怨（この綠珠といふのは前に述べた石崇の妾の名だ）の詩を作つた。其詩が甚だ悲哀を極めたものである。曰く、君を辭し君を去つて終に忍びず。徒らに勞す秋を掩ふて鉛粉を傷む。百年の離恨高樓に在り。一代の容華君が爲に盡く。と斯う詩を作つて碧玉の許に送つた所が、それを得た碧玉は悲しさやる方なく、その詩を帶に挾んで井に身を投げて了つた。誠にあはれな話で、碧玉といふ女が可愛想で、そゞろ同情の涙が催されるのである。

▲日本にも女房孝行といふのがある。支那には殊に女の豪傑があるから、細君の尻に敷かれる亭主が多かつたに相違ない。梁の柳惔といふ人は矢張り此の女房孝行の一人で、非常に細君を怖がつた、所が此の惔は大層妓樂が好きなので、家には大勢の侍女美人が居るから妓樂をやつて遊ばうと思ふけれど、細君の角を生やすのが怖いから妓樂のある時でも碌に顏を上げて見ることが出來ないのである。

所が僕射といふ官の張稷といふ男、これが大の細君の氣に入りなので、惔は妓女の歌舞を見たい時には何時もこの張稷を呼んで樂を奏した。すると細君の御機嫌も好いので、其時ばかりは惔は少し大びらに妓女の樂を見ることが出來たといふ。隨分惔といふ人は意久地がなさゝうに見えるが、日本の家庭にも往々これに類する事がないではない。尊丈其所の新聞種として每く每お目にかゝる事が無きにしもあらずだ。

▲女は嫉妬の深いのが持前て、敢て怪むに足りないのだが、下の話の如きは風變りで中々面白く思ふ。梁の元帝の妃の徐妃は餘り美人でないので帝の寵愛も少ない。で、いつも嫉妬の炎に身を燒いてゐる。口惜しくて堪らないから何か帝に當て附けて腹癒をしやうと思つて居ると、丁度元帝は一目が眇であるので、或時帝が自分の室へ來られた時、徐妃は半顏丈けお化裝

そして出迎へた。すると元帝は怒るまいことか、不屈千萬といふのでとう／＼徐妃を殺して了つた。

▲晋の賈充の妻の郭氏といふのも非常な嫉妬婦で、自分の子が父の顔を見て笑ふので、父は子が可愛いから、子の頭を撫でると、乳母と良人とが怪しいと云つて乳母を鞭で撻き殺したといふ。（乳母が子供を抱いて居るから子の頭を撫で、愛する時には自然乳母に近づくので、それを兎や角云ふのであらう）此等は嫉妬の頂上で手もつけられない話である。彼の呂后が戚夫人を惨殺したなどは寧ろ此れよりは平凡な話だ。



▲梅雨の節（川どめ）

▲一寸と愛嬌のある話は、唐伯偕とその弟の仲偕とは顔から姿から實に能く似て居て、何れが兄か弟か分らぬ位であつた。或時、仲偕の妻がせつせとお化装をして、大めかしにめかし込み、兄の伯偕を見て、自分の良人と思ひ、良人や、今日のお化装は能く出來ましたか、もし、良人、髪は旨く結へましたかねえ、と嫣然

笑つて問ひ掛けると、兄さんの伯偕は眞面目に、俺は伯偕だよ。と答へた。細君大に赤面をして其塲を逃げ去り、やがて暫時して、また伯偕を仲偕だと思つて傍へ寄り沿つて、良人、先刻わたしは大失敗をしましたよ、兄さんを良人だと思つて……。といふと、伯偕は又眞面目な顔をして、俺は矢張り先の伯偕だ。と答へたので、細君は重々の失敗、吃驚敗亡したとは餘り粗怱しい話だが、併し一寸とありさうな話で、滑稽小説などの種にでもなりさうだ。

▲次の話も一寸と短篇小説の材料にでもなりさうな話である。

有名なる晋の顧愷之といふ男、繪を描くことが上手であつた。隣りに美人が居たので、繪師のことだ、いろいろと戀を仕掛けたけれど、如何しても自分の心に從はない。で、失戀の極は怨恨となり、可愛さ餘る憎くさの思ひに堪へず、女の姿を壁に畫て、その胸のあたりへ棘の針を刺して咀つた。すると女は俄に胸が痛んで仕様がない。其所で愷之は實は斯う〳〵であると、實情を明かして、遂に女を口説き落した。そして針を去ると胸の痛は頓に療つたとある。繪師の戀とか云ふやうな物語になりさうだが陳いものだ。

▲南唐の孫晟は司空の官である。いつも食事をする時には、几案を設けないで、妓女に茶椀や皿などを一つ一つ持たせて自分の環に坐らせ、そしてこれをお膳の代りにしてこれを肉臺盤と名づけたと云ふ。隨分贅澤な事である。當時の豪華を爭つた人は多くこの肉臺盤の眞似をして自ら得たりとしたといふ。彼の楊國忠の肉陣、肉屛風と同一の話である。

▲燕里の季之といふ男の細君は一寸と小作りの色白、容子の好い女であつた。浮氣な性だものだから、近所の若者と私に媾曳をしてゐたのを、知らぬは亭主ばかりと思ひの外、季は早くもそれと感附たので、どうかして證據をつきとめ、奸夫を引捕へて吳れやうと或日私に隱れてそつと窺いてゐると、果して若者がやつて來て、女房の室へ這入つて、門を閉めて了つた。で、季は此所だと頻りに門を叩くと、女房大に狼狽し、

サア、大變、良人が歸つて來た、如何したらよからうとまご〳〵してゐるので、若者も驚きながら何處か逃げる窓はないか、と問ふ。窓はないと答ふ。それなら孔でもないか。サア、その孔もない。では如何して逃げやう、と大騒をやつてゐると、不圖女房は壁に布の嚢が吊つてあるのに氣が注いたので、仕方がないから、あの嚢の中へでも這入つてお出で、といふので若者を其中へ入れて、嚢を床の側に懸け、若し良人が踏み込んで來て、この嚢はと尋ねたら、それは米だと、欺してやらうと、相談を爲し、漸く氣を靜め、故意と澄し返つた顔をして門を啓て亭主を入れた。すると亭主は其所此所を探し



出征の留守宅

あまりな責て家計な責く

て見たが一向人らしいものも見えぬので不思議に思ひながらも、猶よく〳〵探して居ると、床の側に大きな嚢が懸つて居る。怪しいと思つたから手で觸つて見ると、堅くて重い、で、いよ〳〵此れだな、と女房に此嚢は何んだ、と荒々しく問ひ詰めた。女房は先刻から怖さに氣も轉倒して急に何と答も出ぬ。サア、此の嚢は何だ、云へ、云へ、と息卷荒く問ひ詰めるので、嚢の中の若者は事露はれては一大事、と思はず嚢の中から聲をあげて、俺は米だ、と答へたので、すぐと分つて了まつた。亭主大立腹、若者を挨殺し、女房をも殺して了まつた。當時の人が此の噂を聞いて、昔石晉に言ひ、今米燕

に言ふ、と大笑をしたといふ。一寸と此頃の三面種にありさうな話で、落語にもなるのが可笑いのである。

▲至正十三年の冬、王の軍江を渡つて天臺といふ處に攻め入つた。軍中に千戸といふ士があつて王氏の妻を掠奪した。その夫の家は臨海といふ所にあつたのである。此の女は中々の美人であつたので、千戸はこれを自分の妻にしやうと舅姑を殺してしまつて、無理に其意に從へよと責つたが、心の確な女であつたので千戸の言を納れなかつた。さて翌春千戸は軍を驅つて北に進み、嵊縣の清風嶺といふ所に來た時、女は悲しさやる方なく、自分の指を嚙み切つてその血で以て石上に詩を題した。

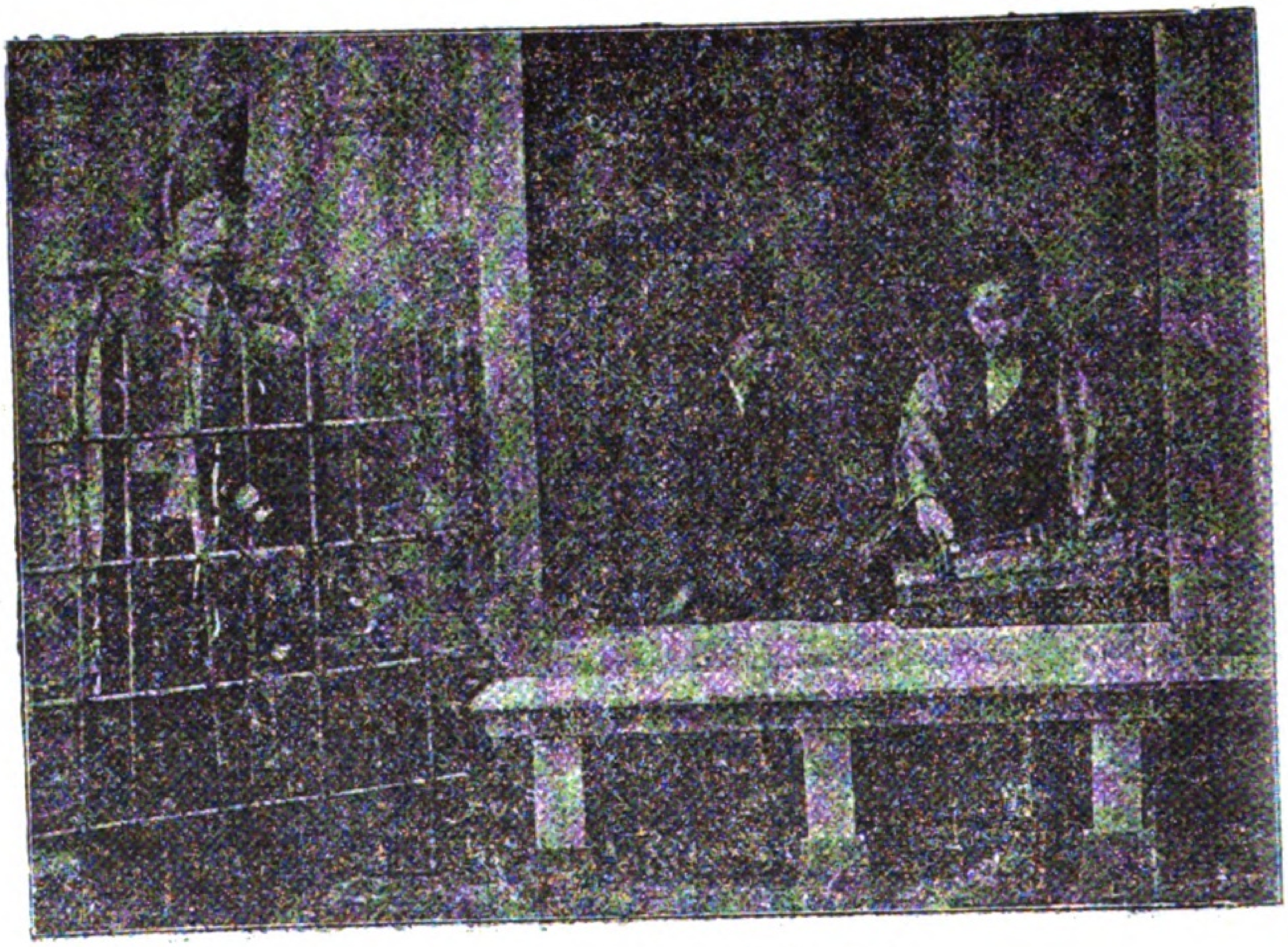
君王無道にして妾災に當れり。女を棄て兒を抛つて馬を逐ふて來る。夫の面を知らず何の日か見えん。妾が身此に去る幾く時か回らん。兩行の珠泪頻りに偸に潸る。一片の愁眉鎖して開かず。今夜淸風江上の月。存亡の二字甚だ哀哉。

斯う寫し畢つて崖から身を投げて死んでしまつた。其後此の詩が雨の降る日などには殊に鮮かに讀まれたとやら。至治の年、官これが爲に一つの廟を立て丶其婦德を表したといふ。まことにあはれな次第である。世には男勝りといふ女がある。女は其賢なることが一寸と人目に立たぬが、隨分世には女の豪物が處々に潛んでゐることであらう、次の話は我邦の一豐の妻の賢なるよりは猶美しい譚である。

苑逵が陶侃の家を尋ねた。丁度思ひ掛もないことで、苑逵を饗する爲に何の御馳走も出來なかつたので、陶侃は心配をしてゐる。すると侃の母が云ふには、唯客を御止め申して置け、わたしが能いやうに計らふから心配をさるなと云つて、自分は髮を截つて髢にこしらへ、それを賣つて幾金かをこしらへ、それを以て酒肴を調へて、甚だ盛大な饗をなし、從者等にまでもそれ／＼心附をしてやつた。所が丁度其晩大雪で如何も馬に秣をやることが出來ぬ、其所で臥床の薦を拔いて、それを剉んで秣の料とした。その心盡しの一條を聞いた逵は、母の心を嘆賞して、ア丶此の母でなければ、

此の子を生むことは出來ぬ珍らしい女だ、と心から其氣丈な心に敬服したのであつた。後逵は京師に歸つて侃の才德を吹聴に及んだので、自づから侃の出世の緒となつたのである。

▲大夫韓朋の妻は有名の美人であつた。康王がこれを見初め、遂に掠奪してしまつた。朋はそれを怨んで自殺をした。其後妻は王と一緒に臺に登つた時、自分の身を思へば悲しさやる方なく、思迫つて臺から飛んで死んでしまつた。その時遺書を帯に遺して、何卒ぞ自分の屍を良人の墓と一緒に



東京成蹊女學校の假装會

合葬して呉れとある。けれども王は怒つて、その墓を別々にして了つた。所が兩人の墓に梓の木が生へて、所隔てゝゐるにも係はらず、その根は地下で一緒になり、枝は空で絡み合つて鴛鴦がその樹に來ては悲しさうに鳴いてゐるのは恰も兩人が薄命を訴へるやうで如何にも悲哀であつた。で當時の人はこの鳥を韓朋夫妻の精魂だと云つたとある。美しいあはれな物語である。

（完）

扇の説

小川直子

扇といふ物を見るに其形たるやみやびやかになつかしう優美なる器にしていにしへより末廣と稱へかはぼりと呼びなして男女諸共に明暮手ならしてめであへる習ひにて祝日(いはひ)といへば冠の着初めあるは婚禮の儀式などには必贈物としけるなりけり又常には扇合よ何くれと智恵くらべの樂みを盡し手にとりかざすにしも其手つきのよしあしをあげつらひて扇をかざし給へる手つき女にてあらまほし又扇さしかくしてなども有てめであへるは如何なる故にかとつく〴〵考ふるに實に此扇こそ五常の道に叶へりともいひつべけれ如何といふにある人のいへる事あり其調にいはく

扇なるかな〳〵炎暑には涼風を出だし嚴寒には火勢を助け朝には神拜をとゝのへゆふべには燈の虫をしりぞけしかのみならず出ては頭上の日影をおほひ入ては背のひだを正し物さしに代りて長短をはかり篩にかはりて塵を拂ふ晝は蠅夜は蚊ある時は舞の手ぶり人をたすくる業にのみ骨を折るといへどもみづから其功にほこらず一毫の私なきは仁といふとも可ならむ然して要(かなめ)を守る事堅く違るまに開かむとする時は身をやぶれども違はざるは義也裏おもてに折目正しく大小の骨其位置を亂さゞるの禮ありおのづから此理を知り是をつとめて忘らず是則智也信也無心なりといへども扇にして扇にあらざる扇なし人にして人にあらざる人何を以て世にたゝむ嗚呼あふぎなる〳〵ある人の歌に

裏おもてなければ人にあふかれて
ときに扇の風ぞすゞしき

かゝればこそ古へよりめであふがるゝも理りなめれされば人として五常の道を守らざる者は此さゞやかなる器にすら劣るといふとも可なるべしあはれ今の世を見渡すに仁義の道を重しとせず只才智のみを好める人多ければ中には表裏の違ひ甚く斗の人なきにしもあらずかし歎かしといふとも言の葉たるましうこそあはれ願はくは世の君だちよ眞の物を見るにつけても心を深く止めつゝ其物の善き所をとりておのれを磨く龜鑑とし給へよと思ふがまに〳〵いひつゞくるは僻者ひとりゐるがなりければ猶かへし〳〵いつもながら道ある方へ導かむといまゝか筆をとれる也けり

談叢

通俗科學 紅花の話

農學士 中角桃村

皆様が日常召します臙脂に就て、お話致しますのも、一興と考へましたので……。婦女の副業に、家庭園藝の上に紅餘る紅花を栽培し家政處理の餘暇〳〵に興味と利益と智識とを得られる爲め其栽培法をも御話します。

▲沿革

紅藍花は黄藍、紅花、くれなゐ（呉藍）の別名が御座いまして菊科に屬してゐる植物で御座います。葉は薊に似て居て、色は橙黄色、原産地は多分印度であらうとの事。

世界に於て紅花を栽培して居る國はいと〻多く、支那を初め、亞細亞諸國は勿論。埃及等で培て居ます。取りも直さず日本は其産國の一なので、されど日本では紅藍花が良く出來る土地は少なう御座いまして、羽州最上、山形等が先づ上品を産する部でせう。そして伊賀、筑後の産はこれにつぎ、伊豫の今治、播州、攝津が又た之れに亞ぐのです。

紅藍花は染料中一番貴いもので物を染めるに、使ふのです、『京は三條紅屋の娘』と歌ひ囃す通、京の名物は紅で、紅藍の製法も京都は一等巧妙です。だが近頃は外國紅花との競爭の爲めに、栽培も衰へた樣で、やつと栽培法と製造法の改良とで命をつないで居る始末。

▲種類

紅藍花の莖は一尺、高きは五六尺、中位は二三尺で、外國でも大小二種があるさうです。日本も猶且外國の樣に形に依て種類分を致して居ます。

山形で栽培する者には三つの種類が御座います。

一、薊牡丹　莖が能く伸びまして收穫量も多く、刺が

が多く、收穫の時なんかは指を傷ける事が御座います位、種子の色は白く、栽培家はいと少なう御座います

二、大占牡丹　此種の莖は前の物に比らべて小さく、從つて收穫も少い。併し丁寧に栽培せば良く繁りますから之を栽培する者は澤山です。種子の色は灰白色。

三、小占牡丹　紅藍花を栽るには收穫量の多いよりも品質の佳良に注意せねといけませね。即ち小占牡丹は、莖低く、收穫量も少く、殆んど前種の半分位で御座いますが、品質が佳良故、一般に栽培する人が多う御座います。種の色は茶色です。

▲播種

肥沃の土地に栽培するのが普通です。今西南の暖地にて栽る法をお話致しましやう。

紅藍花を栽培しますには肥沃の地を耕やして其際施肥し、秋の末に成て十分に土地を攪き廻して畦を作り十一月の初めより十二月に跨がつて下種致します。種子量は一反歩につき六七升。

種蒔する前には種子を一晝夜酒に浸しますのが普通で更らに種子の一升に木灰一升、肥沃土二升（園土）を混せ合はして蒔ます。

畦の底には〆粕又は堆肥の腐熟したものを入れ、能く切り混せて、種を下すのです。種蒔が終ますと、此度は上へ薄らと土を被せるのです。地方に依りて覆土せない處も御座います。元來此種子は野鳥が嗜好ますから苗の成長致します迄は十二分の保護が必要です。苗が二寸五分位に太きく成つた時に鷄糞、干鰯、油粕の粉にしたものを施ります。施肥しますれば直ぐに薄く覆土する事が必要です、紅藍花は人糞なんかは至極不適當で、之れを施りますれば葉が萎みます。だから、栽培家はとれに注意なさいまし。

▲栽培

發芽の後は除草中耕を行ひ、叉間引を行うて距離を五六寸に致します。さすれば五月下旬か六月の下旬位に花が開きます。

以上は暖地に於けるお話ですが、山形では開花期七月上旬。

▲山形法

山形に於ける紅藍花の栽培法ですから、山形法と命名した譯です。

全体この邊では其の年〳〵の種子を使ふので、今年收めた種子を來年蒔きまするど、餘り勢が強ふて葉やら莖が成長して花が附かないと云ひ傳へてゐます。だから其の年に採取した種子は翌一月水に浸して播種の前に取り出して蒔くのです。或は十一月頃より四五十日水に浸して播く事も御座います。又今年の種子を翌々年蒔く事も御座います。又其年に採收した種子を直ぐ其の年の十一月に蒔いて冬



期寒氣に當てる事も厶います。

此法は年に依て雪の爲めに充分に良結果を呈せぬ事が御座います、通例は三月上旬、能く耕して、二尺二寸の畦を切り、其中央を六寸位踏み、之に油粕を施し、まだ其の上人糞を布き、少し土を覆せて後種を蒔くのです。播種終ればすぐ土を被せる事も、又溝の泥を注ぐ事も御座います。十四日經ば發芽致しますから、發芽した後五日に間引をして株間を二三寸にするのです。そして間引は前後三度位、致します上に土を四五度根元に寄せるのです。

花は一莖に十乃至二十、平均十三四、着て居るのが普通です。

山形地方では根本に豆類を蒔いて、花を摘んだ後の莖を取つて豆を主栽し、又た一畦ごとに他の作物を作る事が御座います。紅花は風の爲めに傷み易い故密に植えるのです、若し一作切りなれば竹か梢で支柱を作るのです。さすれば風の害に罹りませぬ。

▲收穫

紅藍花栽培の目的は染料を取る爲ですから、管理保護は成る可く丁寧にするのが肝心です。

紅花は夏に成て熟するのです。即ち收穫期前になると花の先が傾いて、垂れる、之れを摘み取るには朝露のまだ乾かぬ前に摘のです。さすれば操作が非常に平易である計りでなく、品質がよくなります。

收穫の適徵は花の過半が紅ゐに變た時花が充分に開いたとて、たとへ花瓣の先端か傾いてあるとて、まだ紅を帶びないものは、熟期の早い證。

紅藍花を收穫するに、全圃の花の紅色になるのを待て居れば早く開いたものは、次第に色があせ、漸次品質が惡くなりますから、全圃五分の三がその適徵を呈する時摘み取るのです。紅の花は初め黄色で段々紅色となり、後には暗橙色となるのです。

開花中、特に收穫期前の降雨は大に品質を害しますから、萬一雨が强い時は適期に關せず收穫する樣になさいまし。

一反歩の收穫花瓣は凡そ三十貫匁、これを乾して紅花餅にする時には其の量普通十分の一となります。種子採取は花が咲いて居る時に良い形の株を撰んで、これに印を附け、收穫の時に殘して置いて凡そ半日後に採取して濕氣のない所に俵の儘貯へて置くのです。鼠の害に罹り易いものですから、注意をなさいまし。雨の多い年は種子が腐て採集し難い故年々種子を多少用意して置く樣にして置くのは至て安全の方法。西洋では、紅藍花の種子から食料、燈火用の油を搾りとります。

▲賣買

紅藍花を賣買するには三ッの方法が厶ります。

一、花を乾して直ぐに賣る法。

二、花瓣を擂鉢で擂つて賣る法。

三、紅花餅とする法。

の夫れ〳〵で御座います。

紅花餅は一袋で、五百目御座いまして、この六十四袋を一駄と申して賣買して居ます、價格は毎年同一では御座いませぬけれど、大抵上品一駄の價は二百圓、下品の同價格は六七十圓位。紅花を餅に致しますに萬一雨が降た時に收獲したものであれば大桶に水を入れまして花をば七八分目位に詰め、兩足にて三十分位踏んでから布袋に入れ之れを壓搾して黄色の汁液を出して、殘つた花を直ぐにねかすのです。(ねかすとは、麹を醱酵せしめて、黴の生ずる樣に土間等へ積み重ねて置く樣なもの)東北



方では侖臺を製へます、其の形は丁度疊臺の樣に四隅には七八寸の足を付け、巾は三尺、長は六尺、中は空虚で二本或は三本の横木が厶ります即ちこの横木の上に竹の簀を載せ、更らに呉座を布き、それに黄汁を除いた紅花を五寸位の厚さに積み重ねて、一桶の水を注いで、斯樣なものを澤山並らべて侖室へ入れる。侖室へ入れると毎朝一回外へ出して一桶の淸水を注ぐのを忘れてはいけませぬ。なせ斯く灌水するかと申せば、これは黄汁を去る爲で、厶いまして成熟する時日は種類の異ると、溫度と、時季とで異います。だけれども早きは一兩日晩きは五六日。侖方が過度なれば黒色を帶び紅の收獲は少し不足です。十分侖したものは餅として之を乾すか、又は其の儘乾すのです、餅と申せば能く侖した

ものを、枇杷の實大に丸めて壓し潰して扁平したもので、形が恰も錢の樣です。だから、或は、呼んで錢形餅と申します。（餅の製法は何れ製造の部で詳記するつもり）

西南地方の寢し方は前に申し上げたのと同じです。けれども、餅は直徑三四寸の山形のものは前の樣に先づ黄汁を除いてから寢室に入れ流水に浸して更らに黄汁を去りて太陽に乾じ、充分寢さない中に徑一寸厚さ二分位の餅として、此餅を寢かすのです。そして寢す法と申せば、巾三尺長さ六尺位の、木框を製へて中へ蓆を布き、これに水を灌いで濕らしめ、四五寸の厚さに餅を積み並べ、後蓆を被せて平等に踏み付け、被せた蓆をも濕らすのです。斯樣に一框に餅を詰ますと、其の上に又餅を入れ、斯くして五框をつみ重ね、毎朝水を注いで餅に作た花が柔かく指の先で捻て黒色となる迄積んで、置くのです。さすれば、大抵二日位も係りますが、三四日も罹る事が御座います。前の樣に寢し方が熟しますと濕つた蓆をとり、乾いた蓆を被ひて框を倒にし下の濕つてゐる蓆を取りて乾いてゐる蓆と代へそして太陽に乾してから販賣致します。

▲臙脂製造

臙脂の製法は前述の如く吾國では西京が最も巧みで御座います。だから上品をも產出致します。要するに臙脂の製法を述ますには紅花の採集方法より紅餅の製法を述る事は順序上必要の事で厶りますが、それ等の事に就ては、前已に其大畧を述て置きましたから、此所ではそれを省く事と致します。

さて臙脂の製法の要旨は、紅花瓣の中に含有せる黄色素を成る可く取り除く樣に致すので御座います。それ故に已に述ました紅餅の製造の時にも成る可く黄汁を取るに勉めると述たのはこんな理由なのです。即ち黄色素を、成る可く多く取り除けば除く丈け、品質佳良なる臙脂を得るので御座います。それ故に其の製造法に於ても種々あります。だが最も普通に行はるゝ方法のみを述る事にしませう。

紅餅を三日間程水に浸けて置きますと軟らかくなりま

すからそれを搗き砕いて布袋に入れて、水に浸して、尚ほ殘つてゐる黃色素を浸出せしめるのです。それを數日間放置した後で、臙脂を分離するので御座います。

分離する方法は化學的作用に依るので厶います。即ち紅花の紅色素は「アルカリ」液には溶解し、且つ酸類には沈澱する性質がありますから、その理由に依りまして臙脂を製するのです。即ち前の布袋を灰汁の中に入れますと灰汁は「アルカリ」性ですから、臙脂は次第に溶解するのです。それ故に灰汁は紅色になります。そこで其の溶解せる液に酢（多くは梅酢を用ゐるのです梅酢は清潔であつて且つ其酸性が強いから）を入れて「アルカリ」性を中和させせますと、紅色素は沈澱しますその沈澱せる物を取る爲めに麻苧又は棉布等を入れて吸收させまして、それを又灰汁に浸して揉んで紅色素を溶解せしめ、酢を加へて沈澱せしめるのです。充分沈澱しますれば上澄液を靜かに傾けて取り去り、沈澱のみを布袋に移して壓搾しまして含有せる液汁を搾出し終にそれを煉つて、精製しますれば、純良なる臙脂を得る事が出來ます。

▲洋紅

歐洲臙脂の製造法は少し日本の法と異つてゐますが、其の化學的作用と應用とは少しも異ゐは厶りませぬ。即ち紅花を炭酸曹達の稀薄液に入れまして、その紅色素を溶解するのです。それを棉布に吸收せしめましてそれに稀薄なる醋酸か若しくは硫酸液の中に入れて紅色素を沈澱せしめるのです。この棉布を又稀薄なる炭酸曹達液に入れて揉み洗ふです、さすれば紅色素は又溶解しまして棉布は白色となりますから棉布を取り去りまして、その汁に稀薄い醋酸或は硫酸を加へて、紅色素を沈澱せしむるのです。それを數回繰返して丁寧に洗滌しまして大なる陶器製の板の上に乾燥せしめるのです。之れを洋紅と稱へるのです。

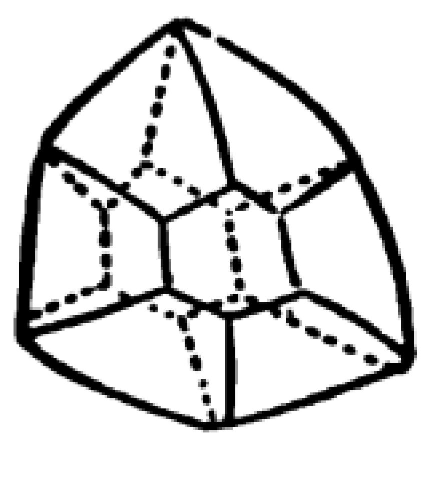
洋紅は薄く層に布く時は金綠色の光澤を帶びて甚だ奇麗なものでございます。それを溶解すると鮮かなる紅色を呈するので餘えんばかりの霜楓も及ぬ位。（完）

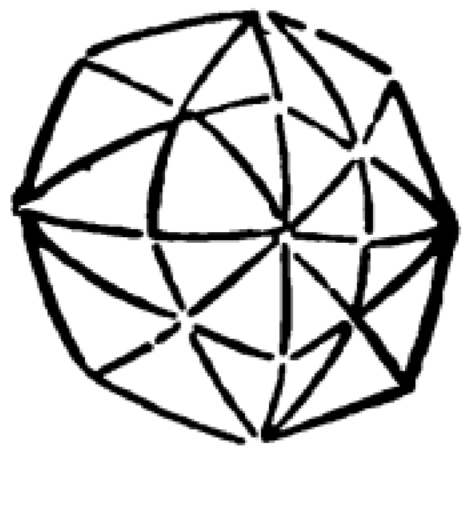
寶玉叢話

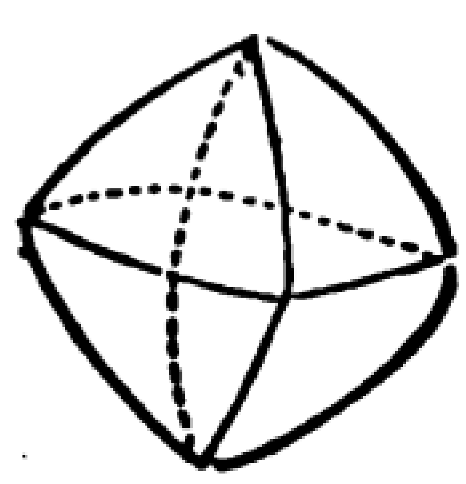
金剛石の話

松琴女史

世の中にありとあらゆる物の内で、一番硬いものは、何でせう。言ふまでもなく木よりも金の方が硬い、金よりも砥石の方が堅い、砥石よりも金剛砂の方が硬い金剛砂よりも金剛石の方が硬いので、万物中尤も硬いのは金剛石で御座います。甲よりも乙が硬いと申すのは、乙で甲に疵をつける事が出來ると云ふ事であります。ですから金剛石で擦つて、疵のつかぬものはないのであります。







皆様御存知の通り、金剛石は寶石で御在ます。寶石と申すものは、色の奇麗な事、硬い事及び光澤の麗しい事と云ふ三要件を備えて居らねばなりません。例令硬くとも色合や光澤が美でなければ、裝飾品にはなりません。又色合がよくとも、硬くなくては細工をする事が出來ませんから、裝飾品とはなりません。序でに寶石の名を列記して見ますと、

一、金剛石。ルービー(紅)。エメラルド、(綠)。貴蛋白石(色々)、黃玉。スピネル。アメシストベリール、(紫)、風信子玉。電氣石。

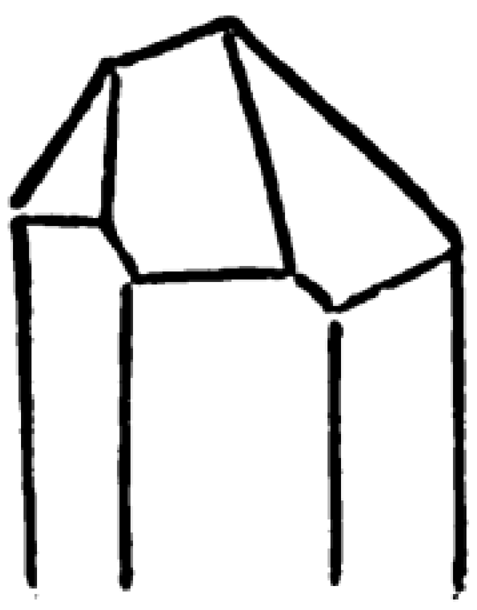
二、火蛋白石、硬玉、軟玉、拓榴石、蛇紋石、水晶類、等で、第二類は半寶石と云ふので、價も一般に第一類より廉く、其性質も劣つて居ります。金剛石は古くから知られて居りましたもので、趙氏の連城璧の如きは夜光と云ひましたから、或は金剛石でありましたかも知れません、露國の女王カザリンの御物であつた金剛石は、鳩の卵程ありますそうで、元と印度の佛像の中に鏤めてあつたのですが、擾亂の際に盜まれ人手を轉々して終に御物となりましたのだそうで、其光澤の立派なのと又大きいので有名であります。印度產の金剛石は、一種の奇觀がありまして、晝日光に曝して置いて、夜闇中に措き

ますと光を發すると申しますから、佛像等へ鏤めて置きましたならば、其神聖を増すのにはよい手段となりませう。

金剛石の產地は、當今では、先年戰爭のあつた南阿非利加のトランスバール、オレンジ國、及岬地方に出ます。ブラジル。印度のガンジス川等は、古多量を產した土地であります。

一体金剛石は、川の床か、又は昔川でありました地方から出ます。又岩石の間に介在して居る事もあります。

一寸南阿の金剛石產地の樣子を申しますと、トランスバール。ブリクワランドウエストといふ、有名な金山の傍で三十哩周圍の間所々に至つて低い小山がありますが之が金剛石の出る山で御座います。是から金剛石を掘り出しますのには、鑚と槌とで岩を破碎しまして、夫を運びまして、便利な處で更に細かに碎いて、其中から金剛石を撰り出しますので、御座います。此處から出ますのには、立派な形をして居りますのは少なう御座いますが、八面体(第一圖)か又は眞圓いのが多くあります、品位は第二位以下ですが、多量に產出致しますので、今日世界の金剛石は此處の產が多いのであります。



ドウヒール鑛山で、西暦千八百九十七年より千八百九十八年迄二年の間に七百五十六基瓦(二百貫目計)產出しました。其價格は三千六百万圓に當りますので、金二十噸の價に相等します。金一匁を五圓としますと、金剛石一匁の價は百圓となります割合で御座います。併此直段は璞の平均直段で御座いまして、大きい金剛石は小さいのよりも割合に高いので、例令ば重さ二分の金剛石が二十圓でありますと、其倍四分の金剛石は倍の四十圓でなく、四倍八十圓となりますので御座います。六分のは二三六十圓でなく、二九の百八十圓となりますので御座います。

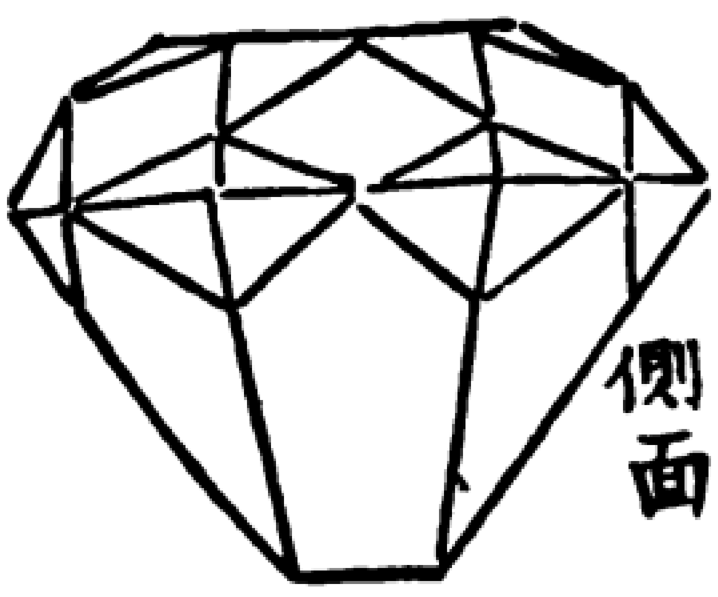
石の塊から金剛石を取り出しますには、人足を多數に使ひますが、貴重品の事で御座いますから、一粒迄

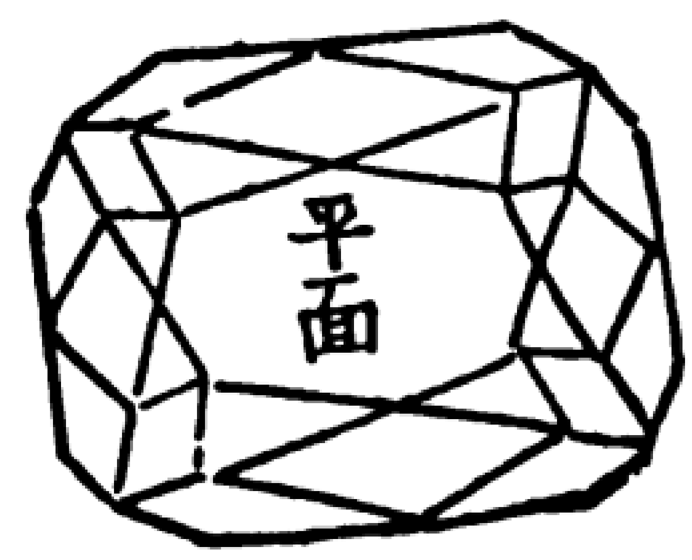
まれても大損になりますので、監督は非常に嚴重にいたして御座います。

其他の地方で、昔の川であつた、砂利混りの土地から金剛石の出る事もあります。之は砂金を採ります時と同じ樣に、其土地の砂利を掘取つて、水でゆり、下に沈んだ部分を取りまして、再び之をより、金剛石を拾ひ出しますので御座います。印度で昔多く出ましたのは、箇樣にして採集せられたもので御座います。

砂利に混じて出ますのは、無疵の者は少なう御座います。何れも其角が磨り減らされて、面が曇つて居ります。

璞の金剛石の形は、先づ次の樣なのが多いのであります。金剛石でなくとも、鑛物と稱せられますもの、內にはある規則正しい形をして、山から顯はれるものが在ます、例令水晶は、圖の樣な形をして出ます。鑛物でなくて氷砂糖でも明礬でも規則正しい形をして居るものであります。金剛石の色は無色透明なのが、最も純粹なので、白。黃。柑黃。綠。碧。褐、又時として黑色の事もあります。赤や綠で透明なのは稀ですから尤も貴重せられませうが、色が濁つて半透明でありますと、其直段が下ります。結晶して居ないで黑い不透明な金剛石は、尤も劣等なので、裝飾用にはなりませんが、併し万物中の尤も堅いと云ふ處から、工業上種々に用いられますが、玻璃切りとしては、至極適當なので御座います。


側面

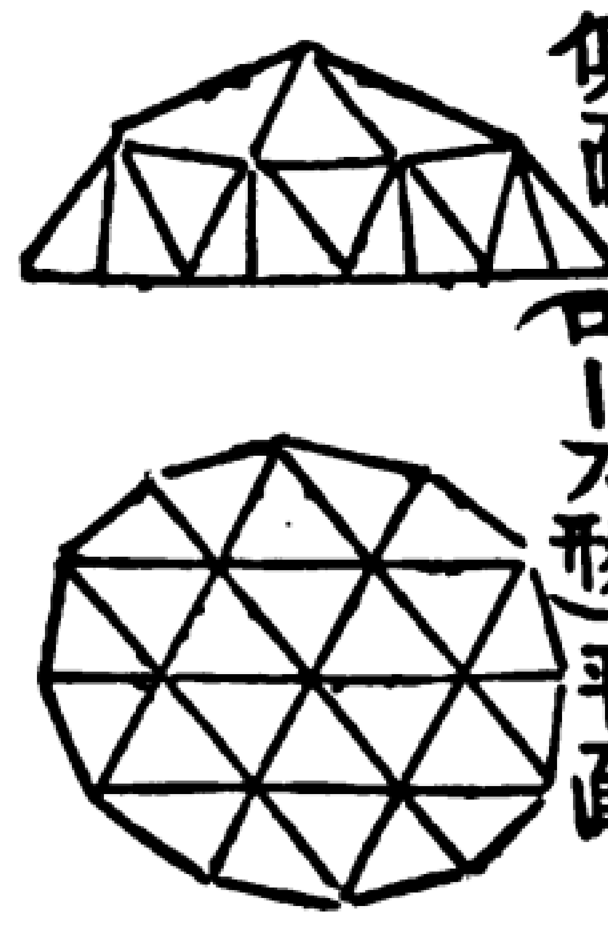


かくして山元から出ました璞は、歐羅巴へ來て加工せられ裝飾品になる樣に琢磨せられます、古來有名な琢磨工の居る地は和蘭であります。

ダイヤモンドは二つの形に琢磨せられます。即ちビリヤント形とローズ形の二ツで御座います。鑛石が大きい時分には、ビリヤントに致しますが、之は出來上りが立派で御座います、併し磨き耗りが多いので、小さな金剛石には施こされませぬ。ローズの方はへりが少なう御座います代りに、ビリアントに

比しては美しくありません。

扨て、で皆様の御不審になりますのは、ソノ様な固いものを何で磨くかとの事で御座いませう。夫は一寸考へますと六ヶ敷御座いますが、何でもない事です。金剛石を磨きますには、金剛石を用いますので、粗悪な金剛石の細粒や又磨き屑で氣永に磨りまして、巧妙に數多の面を作ります、其面の作り方も勝手に作る譯ではなく、なるべく光線を反射させる様に角度を持たせまして、面を刻むので御座います。



寶石は、一体に輝きますもので御座います。氷と玻璃とを比べて見まするに、玻璃の方が輝いて見えませう。外部から光が物に當りますと、其一部分は其物の中に入り込みますが、一部分はハ子返えされますもので、其ハ子返されました光が人の目に入りますと、其物がソコにあると云ふ事が知られます。若し全く光をハ子返さないものがありますと、其物がアルカないかも知る事が出來ません。奇麗に拭いてありますガラス窓等は、見ます方角によりまして、ガラスがあるかないかわからぬ様な事があります。

夫とアチコチに光を澤山ハ子返しますものは、輝いて見えますので、研かれた金屬は一体に光線をハ子返します、すき透る物でも多く光線をハ子返すタチのものがあります、此タチは氷よりもガラスの方が多く、ガラスよりも寶石が一体に強く、寶石中でも金剛石が一番強い次第で、つまり是が金剛石の閃く譯で御座います。

ソレで御座いますから、イクラ他のもので、金剛石のマガイを作ろうと思ひましても、第一に硬さが違ひますし、第二に輝き工合が違います、それですから此點から眞僞の鑑定が出來ます。

金剛石は何物であるかと詮議をして見ますと、實に意外で御座います。金剛石は純粋の炭素であると云ふのであります。つまり吾々が日常用ゐて居ます木炭や又石炭、鉛筆の心になつて居ます石黑と一家親類で御座います。成程アンナ黑いキタナイ物と、寶石の王様で

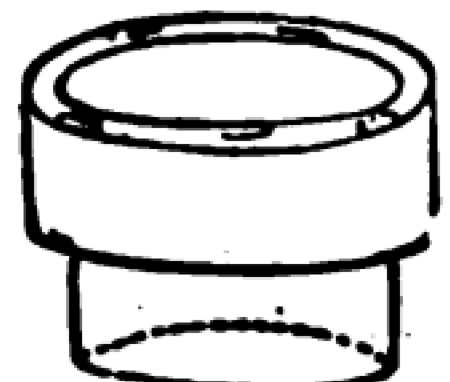
ある金剛石とが同物から出來て居るとは、鶴と鴉とが兄弟であると云ふのと同じ樣ですが、化學は其同物である事を證據立てます。

炭は焚きますと、炭酸瓦斯と云ふ瓦斯になつてしまいまして、跡にマヅりもの丶灰が殘ります、石黒も同樣で御座います。

併し是は通例の仕方では焚えません、金剛石も强熱にあはせますと、黒色の塊に變はりまして、夫からもえて炭酸瓦斯に成つてしまいます。それですから、三者とも炭素から出來て居りまして其成立工合が違ふて居るのであると外思はれません、「見カケによらぬ者とは」人許りに用ゐる諺ではありません。

裝飾用として金剛石は、前申し上げます通りで御座いますが、粗末のでトチも裝飾にならないのは、別に使ひ途があります、夫は深い井戸を堀るに用ゐられるので御座います。

井戸と申しても、水を得る爲めではなく、地層を見ます爲めに穿ちます、深い孔の事で御座います。例令て申しますと、此土地の下には石炭がありはしないかと、他の方から大抵見當が附きますと、大仕掛に地面を穿ちます前に、徑五六寸許りの孔を、五六百尺乃至千尺以上も穿ちまして、仕事をしても引合ふかドーかを確めますので御座います。ザット其樣子を申ますと、良い鋼で出來ました丸い筒の底の緣へ、黒色金剛石を嵌め込みます、此筒が一番大切なもので御座います。



錐冠

夫へ長い筒を取り附けまして、金剛石のある方を地盤に付けて、其管をクルクルと回しますと底の當つて居る地面丈けが、輪形に切れまして、管は地中に入り込みます、地面も上皮は土ですが下に行きますと、砂利やら、砂やら、粘土やらがありまして、それから下に行きますと、堅い岩の、書物でも重ねました樣に同種異種互ひ違いに層積して居ります。

併し如何な硬い岩がありましても、金剛石の硬さには叶ひませんから、管の頭で磨られますと、環狀に切られて管の中に長い石の棒を殘します。此棒を適當な仕掛で地表に引上げて見ますと、何の岩層か何尺其下か何とチャント明かに判ります、此仕掛を金剛石試錐と申します（完）

科學談叢

塵埃の話

竹蔭女史

都會家々の軒の下には必らず塵埃箱といふものありて朝夕家の隅より湧き出づる塵を埋めらるゝ事なるが今この塵埃に就て一條の科學談を爲すべし此塵溜箱、この中には、骨と、襤褸と、硝子の碎片と、貝殻と、葱の根と、灰と、紙屑と、破れたるもの、腐りたるものばかりなり。とは、百人中の九十九人までは曰ふべけれども、此塵を問屋に持行かば、中より幾十圓の金子を見出すべし。若し能く問屋的の目を開きて凡ての塵を見たらんには、詩人も學者も皆この廣大無邊なる塵埃の功德に驚ろくなるべし。

塵の爲に幾多の人は死せり。然れども亦この世に萬一塵なからんには、雲なく、雨なく、霧もなく光もなく隨つて樹木なく動物なく、遂に太陽の光線をも見ることを得ざるに至るべし。

塵埃とは何なりや、又何處より來るものなるや、おもふに家の内にては、朝夕の箒先より、家人の衣服より障子襖間の開閉より、小兒の玩弄物より、夜具、敷物、縫物、書物、すべてものが之を作るの原因とならぬはなし。我等が身體に於ても、健康にして生活する以上は、蛇や蟹と同じく身の皮は次第に剝け代るゆゑ、其身の皮の剝去るとき、搔くとき、衣服を着更るとき等、常に塵の一部を作りつゝあるなり。而して此塵の多くは、機械仕掛あるもの即ち有機物なるぞ不思議なる。虎列拉の虫、風邪の虫、黑死病の虫、肺病の虫、大抵の病氣には、バクテリヤと稱する一種の虫あり。此虫常に此不潔なる、暗黑なる、人の呼んで塵と稱するものゝ多分を占めをるなり。

塵の中にも、輕きものと、重きものとあり。輕きものは浮んで空中に揚り、重きものは下りて疊の上より、床の上、物品の上等に積る。晴天のとき、太陽の光線の入りたる室内を眺むれば、其室は如何に綺麗に掃除の行屆きありても、必ず舞つゝある無數の小さき塵を見るべし。又久しく据置ける簞笥、長持等を移動せしむ

るときは、其後なりし處には、綿の毛、毛布の毛、髮其他何とも判明らざる小さき屑の積りあるを見ん。是れ知らざる間に出來つゝある塵の積れるものなりと知るべし。

家の中にある塵も、家の中のみにて作られしものにはあらず、殊に繁華なる市中等にては、車の摺合、下駄、足駄、靴の踏跡。風の吹く折、凡て塵を作りて家の中に吹込むなり。其證據には、祖父の時代には角ありし玄關の敷石が、孫の代までには、下駄の摩擦によつて丸くなるを見ても人間が萬物を破壞するの一斑を知るべし又西印度のホワイトチヤーペルといふ處にある堅固なる花鋼石は、四十年の間に、誰觸るゝともなく三寸許減りたりといふ。其他井戸側の石の下女の袖に觸れて減り、手桶盥の類の、用うる中に減りて緣の低くなるなどは親しく人々の踏る所なり。是等はすべて人事の力の驚くべき、例證にして塵埃製造の一大作用たるべくされば塵の中には、石もあり、鐵もあり、紙もあり、布片もあり、毛もあり、千差萬別、殆んど分つべからざるなり。今試に磁石を家の內に置くときは、塵の中の鐵氣は、悉く引かれて之に吸付くべし。此れ重き荷車の輪より、馬の蹄鐵より、貴婦人の指輪より、庖刀より、釜鍋より、ペンの先より、大工道具より、少しづゝ減りては空中を飛廻りつゝありしものなり。

以上は塵埃を人の作る方面より說明したるものなれど、これが天然の力より作らるゝものも亦多し。塵溜箱に頭を入れて一々之を檢ぶるときは、蓋し其證據を見るに難からず。自然に風の持來る木の葉、貝殼、虫の死體。此等を除くとするも、彼の雨、霜、雪等が、忙しく岩の上を打ちて穴を作り、屋根の瓦を敲きては煙硝の如き細粉を作り、川の水が石を摩しては角あるを丸くし、海水は貝を碎き、風は木を打ち、恰も百萬の兵士が絕えず働きつゝあるが如く、目下日露戰爭の中心となりたる滿洲鳳凰城の附近は元と朝鮮の古き都なりしが今日に於ては殆んどその遺跡なしといふ然るに往々地下數十尺の底より種々の遺物を發見することありといふ、學者の說にこの邊は蒙古より吹き來る風

によりて塵埃を持ち來り年々二分づゝ土地を高めつゝありといふそれが爲め二千年前の石碑が地下數丈の下に埋れたるなりといふこれ天然が塵埃を作る一證にしてこの强力なる働きを續くる世界の塵の製造者は一時一刻も休むことなきなり。

扨て今この塵埃に就て有益なる科學者、萬有學者の想像說を紹介せん抑もこの世界は元と一の無機物にして鑛物の塊たるに過ぎざりしに何時の程よりか植物の種子が他界より移り來りてこの世界に苔の如き植物を生じそれより漸次種子交換の作用によりて種々の植物を成育し今日遂に鬱蒼たる大森林を成すに至れり、扨又この如く鑛物の世界に元より動物の生息する理はなかりしも森林生じて幾千万年の星霜を經てより生命ある動物を生ずるに至りしもその元は矢張り他界より塵埃風移の作用によりて他界より移り來りて遂にこの世界に生育し同じく種子交換の作用によりて種々なる動物を生ずるに至り遂に人類をも產するに至りしといふ。この如く塵埃は實に天地萬有を風化するの一大機關にして萬衆生育の根元を成したるものなりと知るべし。

通俗經濟 貨幣の話

江口操舟

さる處に雪子と呼ぶ少女あり、其母常に以爲く、『雪は財產家へ嫁りたい』と、其所以を問へば答て曰く、『金さへあれば一生安樂に暮らされます』と。か﹅る考を有てる婦人は世に多かるべし、是れ果して誤りなきや。今左に之を說き試みん、

（一）必要品の金と變せし場合

昔、西洋の或國に貪慾限りなき一人の君主おはし給ひけり、その性質とて最と貨幣を好み玉ひけるが、或時神に祈りて自己の手に觸るゝ物は、總べて金となるべき樣願を懸けたまひけるが、神德いやちこにして能く其望を逵し給ひ王の左右にあるもの悉く黃金となり金光燦爛として眼を驚かせりされど忽ちにして其喜は苦痛と變せり。王は居室を出でんとして戸に手をかけ

しかば、戸は忽ち金と變じたりければ開閉自由ならずして、室外へ出づること能はず。據なく王は席へ坐せんとしてその身を座布團へ觸れ給へば之れも又忽ち金に變じたり。この如くして王は住居に不自由を感せしが、王は又衣服を着換へんとせしに、襦袢上衣は忽ちに又金となりしかば王は寒さに堪えずして頗る困却し給ひぬやがて又王は食事を爲給はんとしけるに御膳に供へし飯も菜も汁も忽ち金と變はりて何物をも食すること能はざりければ王は殆んど餓死せんとし給ひけり王如何に金銀を好み給ふとも斯の如く衣服、飲食物より家屋、什器に至るまで皆金と變じては如何とも做し樣なく殆んど困却して遂に再び神に祈つて其願を撤へし玉ひしといふ是れ元より一個の架空談に過ぎざるべしと雖も、能く金銀の價値を解釋し得て痛快なりといふべし、蓋し金銀其物は直接に人々へ幸福を與ふるものにあらず、貨幣は幸福の目的にあらずして唯だ幸福を得るの一手段たるに過ぎざるなり。

（二）貨幣の職分

貨幣は其本能に於て二個の職分を有せり（甲）交換の媒介（乙）價格の標準是なり。交換の媒介とは、物品を授受するに當り、物と物とを交易するは、甚だ不便なるが故に、兩者の間に立ちて其媒介をなすと云ふ。例へば簞笥一棹と衣服一着とを交易せんとするに當りて幸に兩者の價格相等しければ、容易く授受せらるべしと雖も、若し僅少にても價格不同なれば交換は行はれず故に貨幣は二者の中間に立ちて、其便宜を謀るの用を勤むるものなり。

次に價格の標準とは尺にて反物の長短を計るが如く貨幣にて價格の程度を知るを云ふ。例へば書籍代八十錢時計代三十六圓五十錢と稱ふが如し。若し貨幣なければ、諸種の物品は、幾何の價格を有するものなるや、こ其度合を知る事能はざるべし、故に貨幣は物價を計る尺度にして恰も酒を量る桝、又は輕重を知る權衡と同樣の職務を有し、量目に於ては、斗、升、合、或は、こ貫、斤、匁と云ひ、貨幣には、圓、錢、厘の名稱を附したるものなり。

(三) 無形の富

價格を有するものは、總べて富に屬す。之を大別して有形物、無形物の二種とす。有形物とは形体を成せる有價物の總稱にして、家屋、織物、机、指輪、米穀、地所等なり。無形物とは目に見えざるも、價格を有するものにして、信用、智識、技藝、腕力、權利等の如し。今、例を擧げて之を說かん。三井呉服店の番頭、職を辭して別に店を開き、一錢の資產なくして商業を始め、三井より賒けにて浴衣百反を仕入れ、或は朋友より無抵當にて資金を借り、或は取引先へ三ヶ月后拂の手形を發行せり。斯くして有形の財產は一物も無しと雖も能く盛に商業を營むを得、是れ無形の信用あるによるものにして、此信用を富と稱ふ。之と同じ理由により、敎師の學術、細工人の技藝、玉乘の藝能、車夫の勞力、相撲取の体力、書肆の版權、專賣特許權の如き皆無形の富なり。空氣、日光、景色、水の如きものは、通常一の交換價格を有せずと雖も、特別の場合に於ては價格を生ずる事もあり、例へば水に就て言はんに、或旅人が夏日山を越ゆるに當り、日暑く咽喉渴きて堪え難き時あたりに谿川もなく、なか〳〵に難澁なりし折柄偶々通りかゝれる獵夫の一罎の水を持てるありしかば旅人は必要に迫まられ、遂に十錢の銀貨を投じて其水を貰ひ受けたり即ち水の價格なり又空氣の如く元より價なきものなれど、彼の海底に沈みて働く潛水夫の如きは常に器械を以て供給する場合あれば空氣も又金錢の價値あるべし又日光は、地下の暗室に居住する倫敦の貧民などには金錢の價格を生ずるとありといふ。要するに、有形無形に關はらず、凡て價格を有するものは皆富にして、貨幣も又無論富に相違なしと雖も、唯だ其の一部分のものたるに過ぎざるなりされば、貨幣以外に有形、無形の富は極めて多し。彼の博識なる學者、又は巧妙なる美術家の如きは假令厘毛の金錢なしと雖も常に夥しき無形の富を有せりと云ふべし。

(四) 人生最終の目的

人生最終の目的は幸福にあり、世の職業は千種萬様に

して各々異りと雖も、其期する所は皆此の一點に歸着すべし。而して此幸福は人によりて同じからず。文學者は傑作を著はしたるを以て、慈善家は貧民を救へるを以て、國務大臣は國家を治めたるを以て、女子はよき家庭を作りたるを以て、敎師は克く人を敎育したるを以て、老母は子孫の壯健なるを以て、各々幸福を得たりとなす而して又其場所及び時代により差違を生ずる事あり。或は幸福の永遠に繼續するものを欲し、或は瞬間に終了するものを欲し、或は高尙なるものを欲し、或は下品俗惡なるものを欲する等種々異なると雖も、要するに何人も之を得んが爲めに絕えず、汲々として活動し老若男女を問はず人間生ある限り一瞬一刻も休止せざるなり、彼の官吏の官省に出勤する、美術家の審美を觀ずる、商人の利を營む、生徒の學校に通學する、皆之を目的とせるものにあらざるはなし。

（五）　貨幣と幸福との關係

人は多くの場合に於て、貨幣により幸福を得べしと雖も、又之によらずして、幸福を得ること多し。例へば田舍の農夫の如き、山翠りに水淸く、天國とも稱ふべき地方に於て、近隣故舊、最と睦ましく、淳撲なる風俗に生息して安意なり現今は都會に人口密集して都門生活を爲すの人、塵影の喧しきに堪へずして夏季に至れば纔々金錢を費して閑靜なる山野に居を轉ずるありこの如きを見れば即ち田舍の人は居ながらにして此の閑靜を樂み人生の樂趣を得るがごとし、彼等は美味珍膳を食はずと雖も美味珍膳にも勝る身体の健康あり。彼等は玉殿に住ひ錦繡を纏ふて人に誇る事能はずと雖も玉殿錦繡にも勝る精神上の安慰あり斯の如くして彼等は「高い山から谷底見れば瓜や茄子の花盛り」を歌ふて樂しみ「夕顏棚の下凉み」を味ひて悠々として長壽を保つを得べし。金銀なく富貴なしと雖も、幸福は却て王公にも勝るといふべし傳へ聞く今の土耳其國王は萬乘の尊貴に居り玉ふも精神常に不安にして深夜熟睡し玉ふ事能はずといふ、要するに人生最后の目的は財產に非ず幸福なり。然るに世の人金の爲めに心勞して「貧より辛きは無し」など叫ぶは間違つた話なり。

戰 爭 雜 話

(熟語使用法練習)

Between two fires

旅順港は全く孤立で、兩方に敵を控て居ります。
Port Arthur is completely isolated and is *between two fires.*

To be between two fires＝前後に敵を擁して、前虎後狼。

To bide one's time

提督は辛抱して、魯國艦隊を擊つべき時の到るを待つでしやう。
The admiral will patiently bide his time to attack the Russian fleet.

To bide one's time＝好機の到るを待つ。

To bid fair

日本は世界の最大强國の一つとなる望みが十分あります。
Japanese *bids fair* to be one of the greatest powers in the world.

To bid fair＝期して待つべし、十分に見込あり。

To bite the dust

其爭鬪で兵士が多く死にました。
Many soldiers *bit the dust* in the combat.

To bite the dust＝戰死す、斃る。

To bite one's lips

自分の軍隊の全敗の報に接し、クロパトキン將軍は非常にくやしがつて居ます。
Receiving the report of the complete defeat of his army, General Kuropatkin is *biting his lips.*

To bite one's lips＝唇を喰ひしばる(忿怒嫌惡等の情をあらはす)。

To blow one's own trumpet

傲慢なる露國新聞紙は、しきりに法螺を吹き立てゝ居る。
The boastful Russian press is *blowing his own trumpet.*

To blow one's own trumpet＝高慢な事をいふ、自讃自賛す。

會　話

Hana.—Don't you think Dr. Mcgea and the party of American nurses who have come to take service for our sick soldiers, are so kind and brave?

花子．日本の病兵を助けるって態々アメリカからお出でになったドクターマッギーの御一行はマー何と云ふ御親切でソシテ勇ましい方々でしようネー。

Kimi.—Why, of course we feel so thankful that we do not know how to express our gratitude toward those kind ladies!

君子．ホントにネー、アンマリ有難くて何と御禮を申してイヽカ此感謝の情を述べる辭はありませんわネー。

Hana.—Yet I think though we can not do like those ladies great work, but 1 do believe we also can give some kind of help for our country.

花子．私達にやァトテモ彼の方方の樣な立派なことは出來ませんが、デモ何かしら御國の爲になる事が出來るだろうと思ひますワ。

Kimi.—O yes, you see, at some girl's school, they are sewing the soldier's under-wears and some girls are knitting great many pairs of stockings after their school hours.

君子．エー出來ますとも、ごらんなさい諸方の女學校では學科の終つた後で兵士の下着や靴下なぞをたくさんこしらへて居るじやありませんか。

Hana.—And as you know even the princess and the ladies of our high ranks are making lots of nice bandages so earnestly.

花子．ソレカラあなたも御存じの通り各宮樣の妃殿下を始め貴婦人方が熱心に澤山な綳帶を造つて居らしやいます。

Kimi.—Yes, we see and hear so many noble deeds and kind works are done even by our dear little children too.

君子．ソーですネー、ソレに私等よりモット小さい小供達迄御國の爲め色々立派なはたらきをして居ますからネー。

Hana.—Yes indeed, though we are only young girls, yet our patriotic spirits are shown in every way.

花子．デスから私達の樣な年の行かない女でさへ愛國心にみちて居る事は種々のことで知れて居りますよ。

Kimi.—How do you think our brave soldiers will feel when they know, what we are doing and how we are so anxious to give some help and try to encourage them in thus hard duties?

君子. 私達がコーやつて御國の事を思つたり又戰地で苦勞して居る方々の何か手助けでもしやうとして居るのを聞いたなら兵士達はマー ドンナ 感じがするでしやうチー。

Hana.—Why of course, they will feel so happy to know that even girls have "Yamatogokoro," and they will fight with brave and noble spirits to the end!

花子. ソリヤーあなた、女の子でさへそれ位大和魂があると云ふとを聞たらドンナに嬉しく賴母しく又それに耻ぢない樣にドンナニ勇ましく戰ふか知れやしません。

ヴィクトリア女皇（前號のつゞき）

The Princess did not spend all her days in the grave old Kenshington Palace. Sometimes she was at Claremont House, sometimes she went to the sea-side, and might be seen running races on the sands like any other happy little girl, or looking through the telescopes of the old coastguard man at the ships far away over the deep blue sea.

As the Princess grew older, the people of England became more and more sure that the Princess Victoria would one day be their Queen; and when she walked on the pier at Brighton, or on the sands at Ramsgate, many would come to see her, and look at her with loving and admiring eyes. But the little girl did not know the reason of this, nor could she understand why more

姫君は莊嚴なる古きケンシントンの宮殿でばかり、いつも日をお暮らしなさるのではなかつたのです。時々はクレイアモントの御殿に居られ、又た海岸の方へも行かれました。そして他の愉快げな娘たちと同じく、砂の上で競走をしたり、または老人の見張番の望遠鏡で、深い綠の海をはるかに見渡して船を御覽になるのを、お見掛けした。

姫君が御成長なさるに從て、英國の人々は此ヴヰクトリアさまがいつかはその女皇となられるだらうといふ事を益々確に知るやうになりました。そして姫君がブライトンの埠頭や或はラムスゲートの砂原を步るいて居られる時には、多くの人々が見に參りまして、皆な敬愛の眼もて拜するのが常でした。しかし幼き姫君は之は何故だといふ事を御存知なく、また姉君よりも自分を、なぜに人が多く注

notice was taken of her than of her elder sister, the Princess Feodore, who was the Duchess of Kent's daughter by another husband, and who therefore could never occupy the throne of England.

But her wise mother carefully kept from her the fact that she might one day be the Queen of England, until she thought that it was good for her little girl to know it.

Wherever she went the young Princess won the hearts of the people of England; young and old, rich and poor, came out to see her, and seeing her they loved her.

But there was no place to which the Princess liked to go better than to the Isle of Wight. She used to stay at Norris Castle with her mother, and many a pleasant drive they had together to all the lovely spots in the beautiful island.

The Princess never forgot those happy days in the Isle of Wight, and many years after this, when she was Queen of England, she had a sea-side Palace built for her in the beautiful island. It stands looking over the sea, with lovely terraces reaching down to the shore, covered with bright flower-gardens, fountains, and beautiful statues.

目するのか、といふ事もお分りにならなかつたのです。姉君のフィオドーア內親王はケント公爵夫人の先夫のお孃さまでその爲め英國の王位に登ることは出來ないのでした。

しかし賢き母君は心を用ひて、少さきお孃樣にそれを知らせても善いとお考へになる迄、姫君はいつかは英國女皇になられるといふ事柄を、お孃樣には秘密にして置かれました。

お姫樣は到るところ英國の人望を得、若きも老いたるも富める者も貧しき者も、皆お見かけ申さうとて出て參り、人々は見て此姫君を愛しました。

しかし姫君が行く事を最も好むで居られた所はウヮイトの島でした、母君と御一緒にノリス城に御逗留なさるのが常で、この美しい島のなかのすべての樂しい場所へ共に愉快にお出掛けになりました、

姫君はワイトの島での此愉快な日の事を決してお忘れなさらず、此後幾年も經てから、英國女皇となられた時、此美しき島に濱御殿をお建てになりました。それは海に臨むで居て、岸迄なぞひにとゞいて居る愛すべき築山があつて、それには一面にはでやかな花園や泉水や、また所々に美しい影像などがござりました。

(以下次號)

實地應用 裁縫手ほどき

本身女物

▲積方　九寸幅の布を用ひ、袖丈及び身丈を知りて總丈を求む、

○寸法　袖丈一尺八寸　身丈四尺一寸

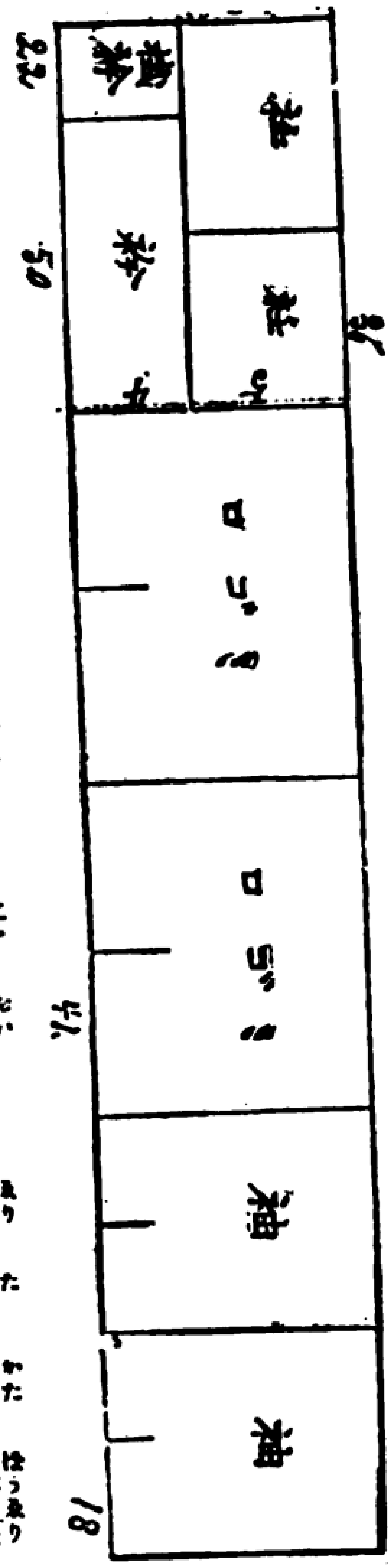
袖丈一尺八寸を四倍し、身丈四尺一寸を四倍し、又た四尺一寸より襟下五寸を引去り、之を二倍すれば七尺二寸、即ち襟衽にして三丈の八寸となる、之を用布の丈とす、

▲裁方　用布三丈〇八寸の内より袖の丈七尺二寸を裁ち又た身丈四尺一寸の四倍一丈六尺四寸を裁ち、二分して重ね合せ、之を二つに折り、襟肩二寸五分を切り開く、殘り七尺二寸は衽及衿となるものにして、之を五寸幅に落し、二つに切れば三尺六寸となる、即ち襟丈なり、又片端の四寸幅の切より、襟丈の五尺を裁ち殘り二尺二寸は掛襟となる。

身丈四尺一寸

袖丈一尺八寸

總丈三丈〇八寸



袖丈　18×4=72

身丈　41×4=164

41−　落　5×2=72

72+164+72=308用布

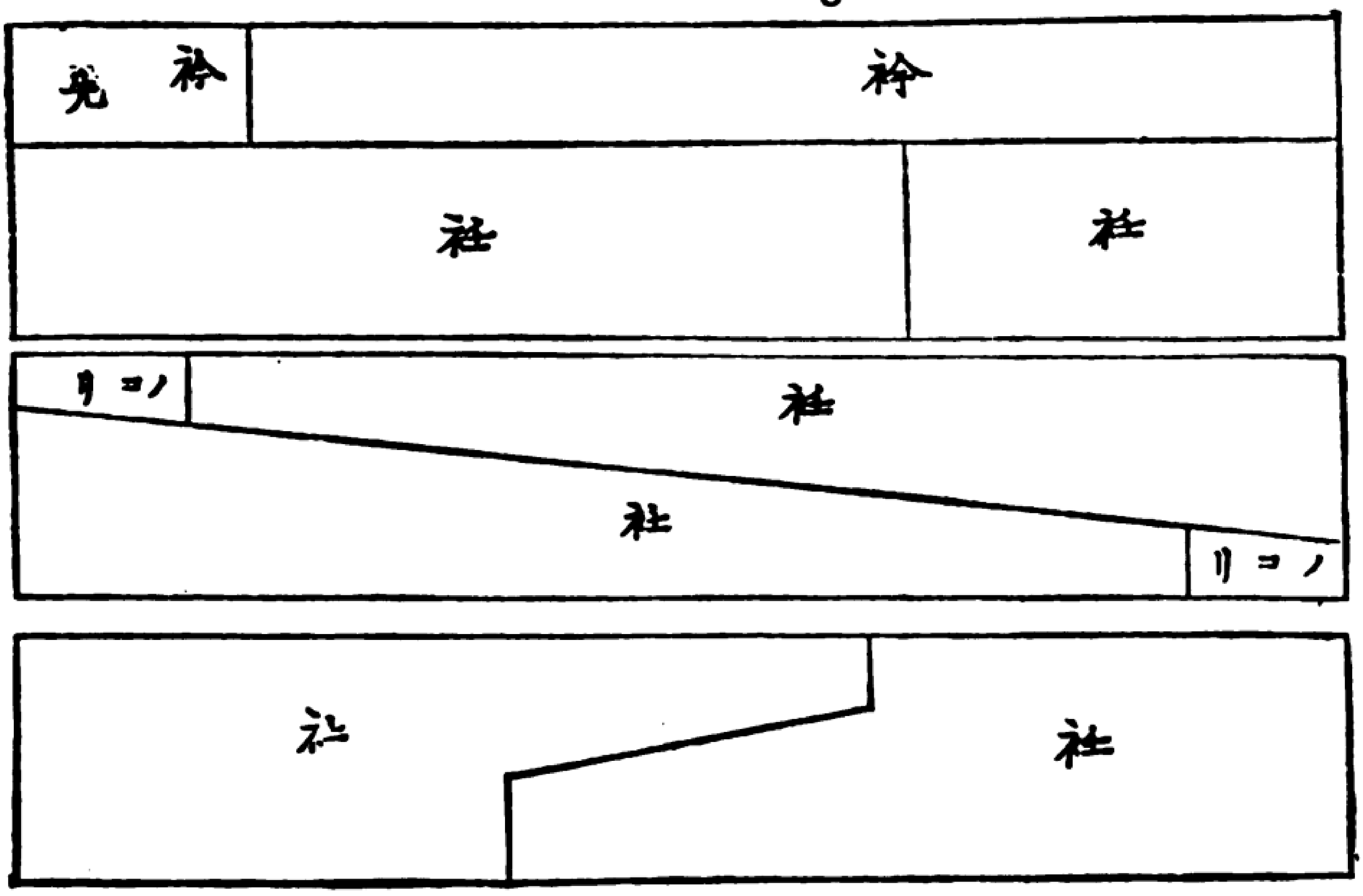
茲に掲げたる襟の裁ち方は棒襟と稱し、最も普通の裁方なれど、若し布丈寸分ならざる時は、左の三種の方法による、「一」下前繼、「二」柳裁、「三」鉤裁又た釣裁ともいふ。

下前繼は襟幅及襟幅に應じ布を縦に裁ち、襟の方より上前襟を取る、殘りは下前襟として丈足らざるが

故に襟を取りたる殘りを以て、下前の上部にて繼合はす。柳裁は圖の如く斜に裁つ法にして、若し襟幅廣きを要する時は鉤裁とせざるべからず、此の二つの裁方によれば左右一方の襟は裏返して用ゐざるべからざるが故に片面布にては行ひ難き法なり。

(注意)鉤襟を裁つには表襟は布の表を出して之を下に置き手前の右の端より褄下の寸法を計り、向側の右の方へ左よりの長さを取る、裏襟は之と反對なり。

▲標の付方　袖の標付方は表裏共に四ツ身と異ることなし、身頃も亦た表を内にして二枚揃へ、襟肩より丈を二に折り、裾口を右に、脊を手前にして下に置



き、脊の標を付け、次に山の標を付け、丈を計りて袖付及び身の八ツ口の標を付け、次に後身頃の左の方へ起し、前幅、抱幅及襟下の標を付くべし、身頃の裏も亦た表と同様になし、幅を五厘控へ、丈は表より衽の二倍長く標すべし、若し丈長き時は肩にて上をなすなり、襟は裏襟二枚を重ね下に置き表襟も亦た二枚重ねて衽二倍重ねて其上に置き、襟幅、褄下、合褄の標を付け、剣先は襟幅三分一の所へ標し、之より合褄の標と褄下の標まで定木を宛て、標を付ける、又た襟は裏を二ツに折りて、下に置き、表の襟も同様にして、其上に正しく置き、山袖及袖幅の標を付けるなり。

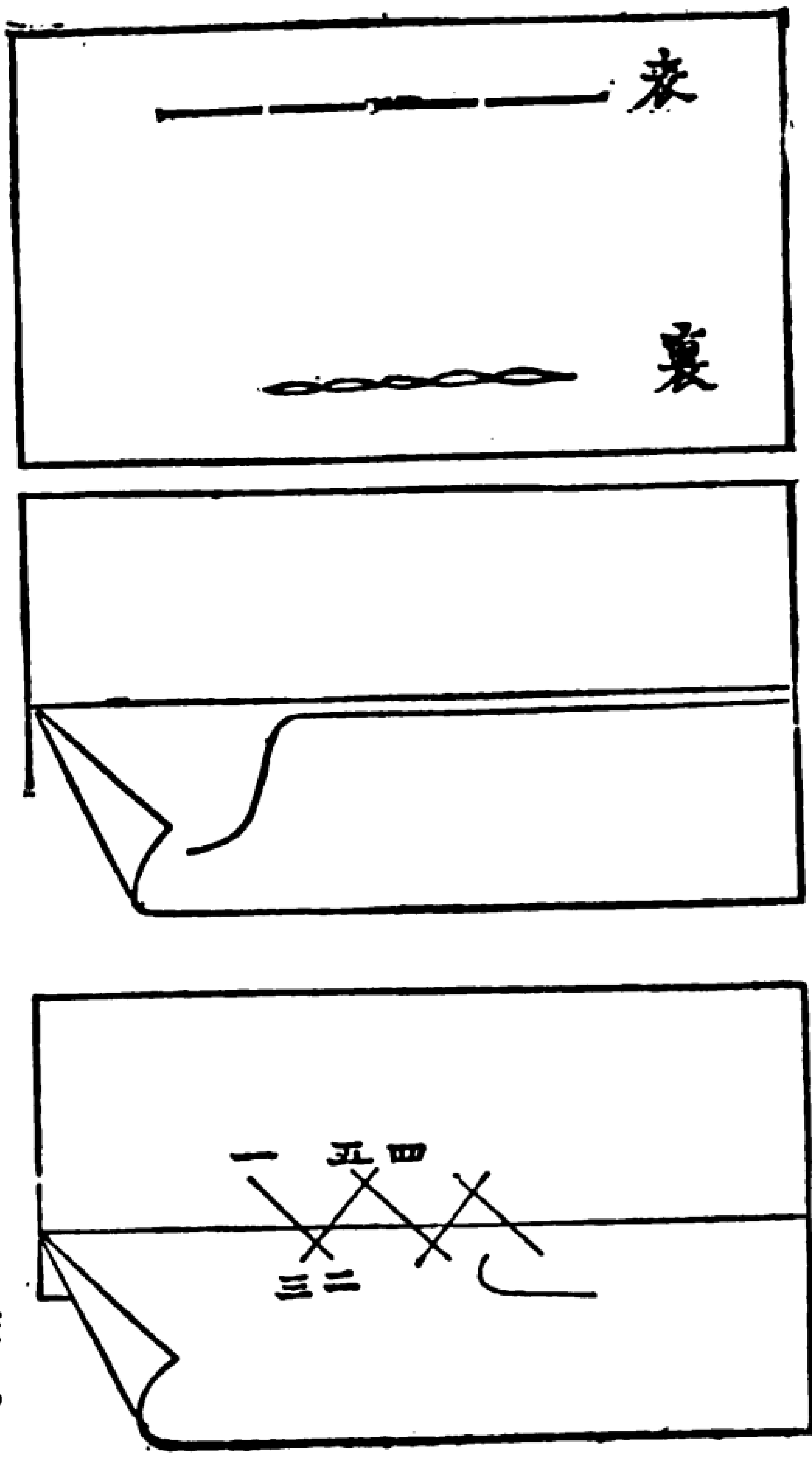
衣類畳み方心得

着物を畳むには先づ左の手にて右の袖下即ち脇の所を持ち、右の手にて同じ縫筋の裾口を持ちて下に置き、皺を延し、次に襟肩より袖山の通りを正し、左の手にて右の襟下を持ち、右の手にて袖口を持ち、襟の縫目に従ひ、襟を手前の方へ返す、左の襟は向へ返し置きて、三ッ襟を前に伏せ、左の襟下と袖口とを持ちて、右の襟下と等しく重ね、次に左の袖付と裾とを持ちて、脊縫より折り、襟より裾までの縫目を真直になし、且つ両方の脇を揃へ、左の袖は袖付の縫目より向へ折返す、而して后、左の手を襟先の通し身頃の所に当て、右の手にて裾を持ち、左へ折返し、折返したる裾口と袖付とは左の手にて持ち、右の手にて折りたる端を持ちて、共に向へ返し、右の袖は左に習ひて折返し、畳み終る、但し綿入なれば裄の潰れぬやう、肩より先へ出して置くべし。

衣服の各部に於ける縫方の種類

△袋縫　裁目の解け亂れざるやうにする縫方にして最初表より淺く縫ひ、引き返して又た裏より二分位に縫ふを云ふ、襦袢及び單物の袖下に用ゆる縫方なり。

縫方の圖



△伏せ縫　風呂敷、前垂等の如き裏なき物のハギ目に施すべき縫方にて通常に縫ひたる后、端の方を縫ひ、

伏せて絎け、或は縫ひ付けるを云ふ。

△返し縫　通常の縫方と異りて、二分前へ出して、一分後へ返へし、又た二分進めて後へ返へす、圖の如し、即ち「一」より拔きたる針を、「二」へ刺し「三」に拔き、次に「一」の穴に刺して、「四」に拔くなり、一名之をカンセイ縫と云ふ。是は袖口下、合羽襟、脊縫の上下、其他要所に用ゆる縫方なり。

△半返し　大体返し縫と同樣なれども唯だ返し方の異るものにして、即ち一分五厘前へ出して、五厘後へ返し、又た一分五厘出して、五厘返へすなり、用ひ所も略々返し縫と同じ

△罌粟縫　是は布の表より上下を共に掬ひて、二厘程後へ返し、又た掬ひては返へすものを云ふ。此の縫方は容易に解けざるやう、且つ縫目の表に能く現はるゝを厭ふ所に用ゆ。

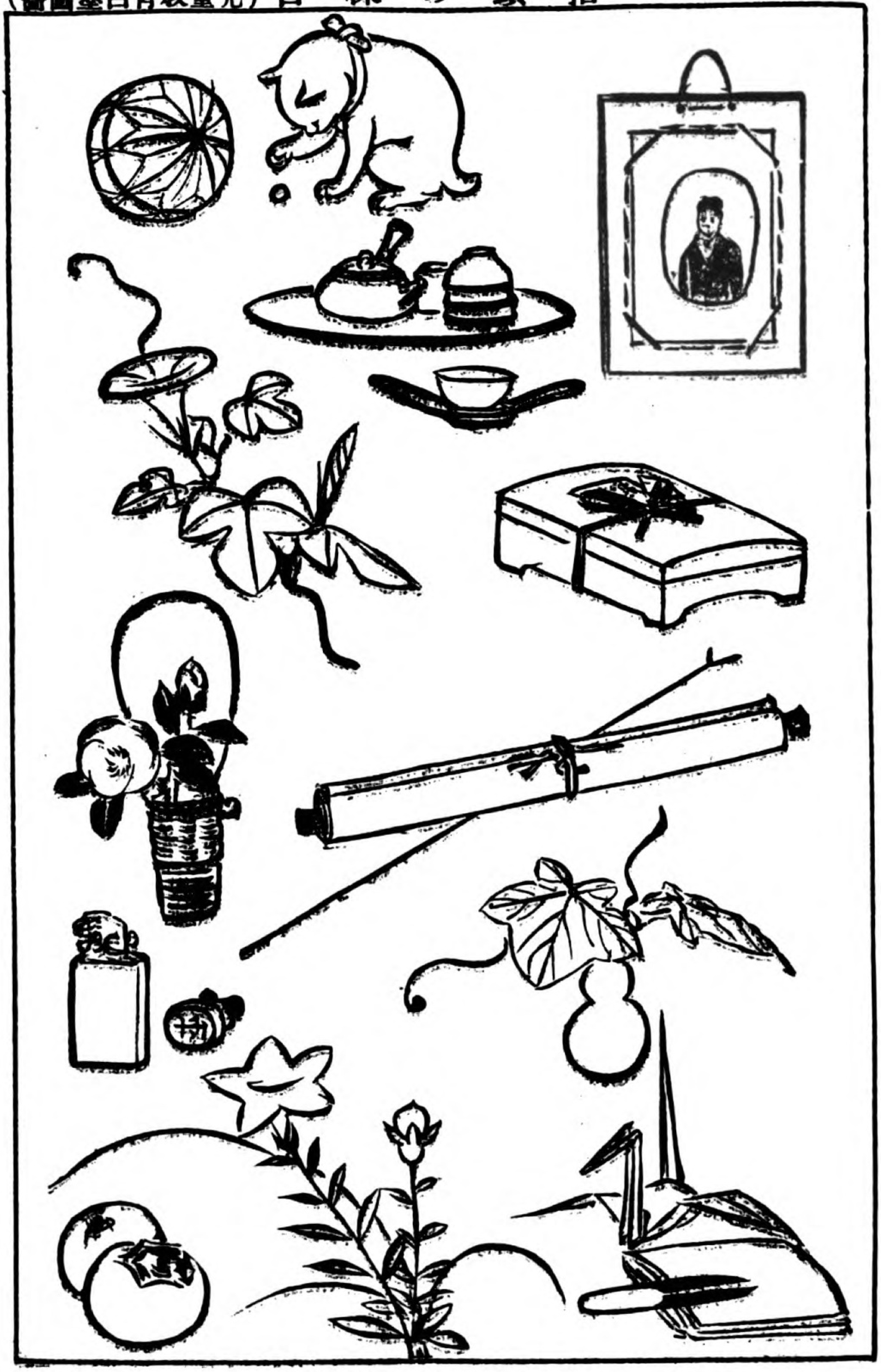
△千鳥掛　是は總て延縮を生じ易き所に施して、之を防ぎ、又は厚き品の折目の起きぬやうに掛くるものにして、他の縫方と異り左より右へ縫ひ行くなり、即ち圖の如し、「一」より拔きたる針を「二」より刺し、「三」に拔き、「四」より「五」と順次斜に糸を掛け、左右の針足を揃へ縫ふなり。

△躾掛　躾け糸は縫ひ目の押へ等に用ゆるものにして並躾、隱躾の二種あり、通常の着物にては、袖褄下、裾口に掛るものなり。

●女子と職業

女子職業の種類は、近來に至り著しく增加するに至りたるが、今帝國生命保險會社內に於ける女子執務の成績を聞くに、最初は單に試驗として二三名の女子を使用せしに、其結果良好なりしかば、今日にては約三十名の多數に達し、猶は漸次增員せんとの計畫なるよし、女子の年齡は大抵十六七歲より二十歲前後を多數とし、其利益の要點は、第一女子の多數は獨立の生活をなすもの少なければ、其給料低廉にして一日二十七八錢より三十五錢に過ぎざること、第二女子は男子に比し法外の希望なきを以て、其職務に忠實なること、第三清潔を好み萬事に細心周密なること、等にして、若し他の保險會社に於ても、女子使用の途を擴むることとなれば、一は會社の經費を節し得ると共に、女子獨立生活の方便を與ふることゝなり、社會上利益する所少からざるべし云々と、同會社重役は語れり。

指頭の練習 (兒童教育白墨圖書)



指頭の練習（兒童敎育白墨圖畫）



社會

旅順口避難の婦人

露國ミハイル、セルキー夫人談
海軍少佐F　T生譯

日露の關係は二月六日に斷絶して八日の夜から九日へかけて第一回の旅順海戰の有つたのは皆樣先刻御承知の事、さて旅順に居た露國の婦人は大抵十日の朝逃出しましたが、これも其一人で海軍少佐セルキー夫人の引揚談、露國の新聞に出てゐたのを譯して見ました。

丁度出立の日は怖ろしい吹雪でございまして、寒い北風が颼々と吹くのでございます、宅から停車場までは餘程道程もございますし、辻馬車はありませんし、誠にもう困つて了ひまして、漸く停車場へ來たのが朝の六時頃でございましたらう、切符を賣る口は既う一杯の人で、皆掻くやうにして窓の開くのを待つて居るのでございます、さア彌賣出すとなると、宛で喧嘩のやうな騷で、辛と切符を求めまして乘込みましたが、其汽車はダーリニイ通ひの小さな汽車で、狹くは有るし、寒くは有るし、皆が風呂敷包やら鞄やらを山のやうに持込むから通路も何も有りは致しません、辛と場處を看つけて風呂敷包の間に押潰されさうになつて小さくなつてゐましたが、それでも南關嶺へ參つたら、――、南關嶺といふのはダーリニイ線と哈爾賓線との分れ道で、北行は此處で乘易へるのでございます。ですから其處へ參つたら如何にかならうと存じまして辛抱して、南關嶺へ着きまして、子供の手を引張るやら、荷物を抱へるやらして、皆ぞろ／＼プラトフオームへ出まして、寒風に吹曝されて多時待つて居ります內に、ダーリニイから汽車が着きました、で、それへ乘らうと存じましたら、何の車も／＼人が一杯で到底も乘れません、それでまた乘つて來た舊の車に乘ること

になりまして、此度は場所を取るのが宛で戰爭で、婦人達は責て小兒だけは滿足に坐らせたいから、人を撞飛ばしても場處を取らうとしますしね、ドタバタ、ガタピシ、ワイ〳〵いふ中で、何だつて其樣に壓すんですよ、小兒が潰れッ了ふぢや有ませんか、通して下さいッてッたら、通して下さいなね、ッて泣聲になつて喚く人も有るやら、それは大變な騷ぎで、辛と驛長や車掌の世話で銘々場處を取つたのでございます、奉天までは軍人の方が澤山でございました、皆御用で旅行を爲さるのださうで、活潑な其御樣子を見ますと私共迄が氣丈夫になります位で、皆さん大層御親切になすつて下すつて、何ぞ事が起りますと、能くお願ひ申しては捌いて頂きました、一度かういふ事がございました、皆が神經過敏になつて恟々してゐる最中に何でも此列車の内に日本人が婦人の服裝をして乘込んでゐるので、それを探偵中だといふ噂が立ちましたから、私共は人が這入つて來る毎にきよろ〳〵顏を覗て露西亞の人でないとお話をするのも薄氣味惡く思つた位でございます、さうすると隣の車に乘つて居らしつた誰家かの奧さんが何だか戰々して這入つて入らしつて、私の向ふに變な人が居ますよ、何だか箱を手に持つて、それを大事さうに覗詰めては心配さうな顏付をして、時々ビクッとしては四方近所を顧盻して、どうも變な樣子ですよ、と仰しやつたから、さア皆が心配し出しました、如何か爲すつて下さいッて士官の方にお逼り申すと、貴女方はえらい勇氣が有るの何のッて初めは茶かして居らつしやいましたが、あんまり皆が達てお願ひ申すもんですから、そんなら念晴にッて、往つて聽いて下さいましたら、その變な人といふのは矢張尋常の商人で、箱の中には、ほゝ、灰色の石鹼に手拭が入つてたのでございます、それから海拉爾の停車場に着いたのは夜分と云つても未だ宵の内の事で、兵隊の乘つた列車が二タ列車も駐まつてゐましたが、ふッと喇叭の聲がすると、誰だかソラ非常喇叭が鳴つたと云つたので、皆がワッと云つて總立になりましたが、能く聞いてみると、それはナニ尋常の「集まれ」の

喇叭だつたさうで、事後で考へると噴飯ほどでございますが、其時は、貴方、此胸の處が、どんなに波を打ちましてねえ……

鐵道守備隊の士官さん達の御家族方も澤山お歸りになりますので、途中で車を一つ繋ぎ二つ繋ぎする中に、哈爾賓に着きました頃には車の數は總體で三十五臺になりまして、之に乘込んだ人數は千八十人尤も多くは御婦人に小兒衆でございます、晝間の中は皆きん力んで居らつしやいますが夜分になりますと悄氣て、お仕舞ひなさいまして、汽車がトンと何かに撞着つて進行が遲



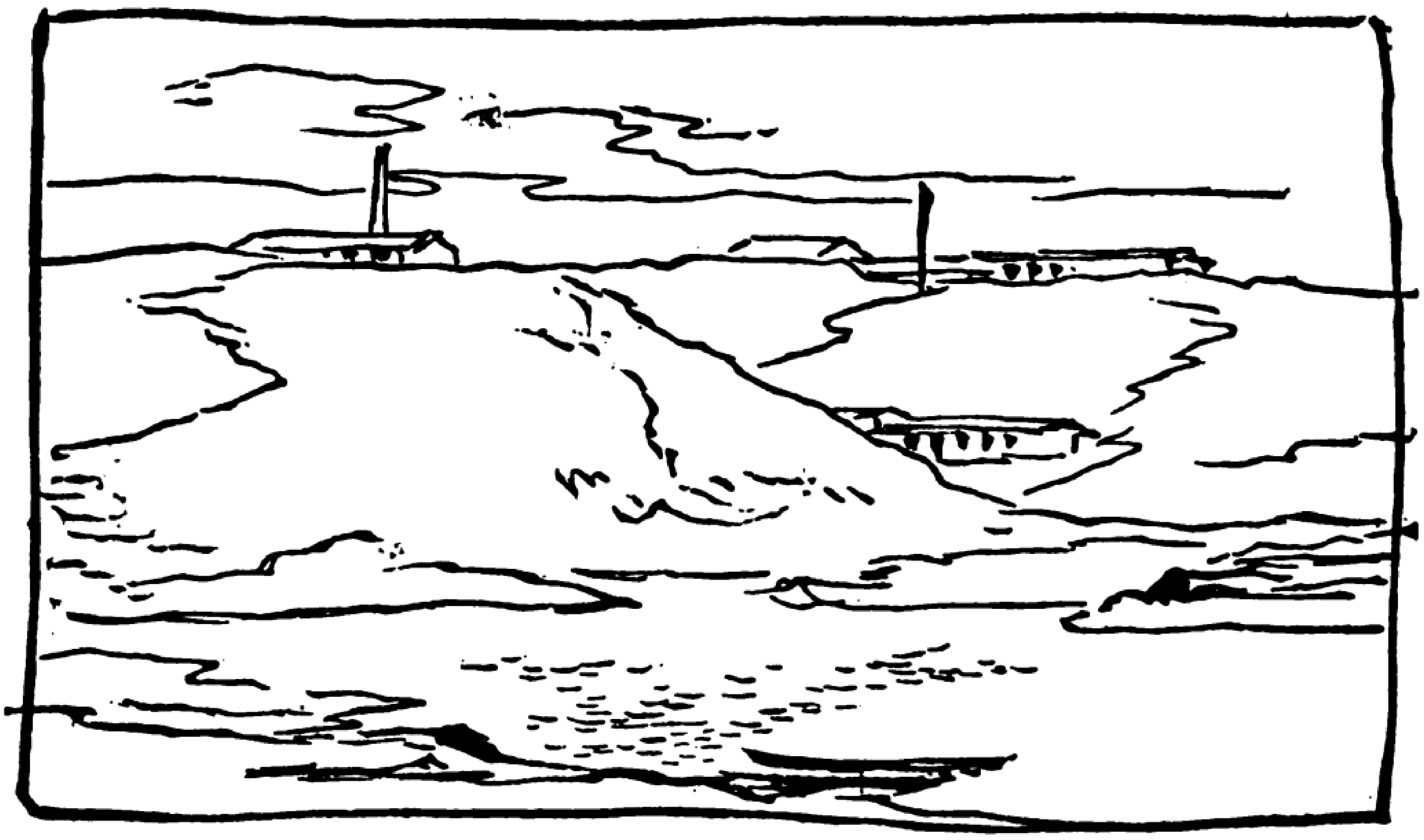
旅順街道

りでもしやうものなら、車掌は駈出しますし、警衛の爲め乘込んだ番兵も降りて參りますし、何だか囂々と騷がしく成りますけど、車外は眞暗で何が何だか判りませんから、皆ハツと思つて車を降りて、何です、如何したんです、と尋ねてみると、ナアニ何でも有りません、機關車に一寸故障が出來たので、と聞いて漸く安心するのでございます、車の内は狹くて汚穢て寒うございまして、外側は寒さに冱て了ひますし、窓ガラスからは露が垂れるのでございますギツシリ詰込んだもんですから、手荷物を載せる上の棚へ

まで、婦人の方が上つて臥て居らつしやる始末で、下は勿論風呂敷包に鞄で一杯で、その間に一ト抱もある大きな枕に寄懸つて、小兒を抱いた婦人の方が小さくなつて臥て居らつしやるといふもので、足搔が附かんのでございます、晩は燭火が點きますが、薄暗い厭な燭光だもんですから、風呂敷包の山を越すのは大變な骨折で、おや〳〵セルモピレーの峠を越すやうだ、なんぞつて戲言仰しやる方も有りましたが、短氣な方になると、これは誰の荷物だ、亂暴にも程がある、此樣な處へ此樣な物を置いて人が怪我したら如何するッて小言を仰しやいますけど、其樣な言を聽いてゐる者は有りません、手々に勝手に巣を作つてゐるのでございます。

それから食物には誠に不自由を致しました、東清鐵道の停車場は皆小さな停車場で、食物と申してもほんの少しばかし外用意が無いもんですから、ビュフェー（停車場の食物屋）はいつも大混雜で、先づ大きな停車場に着く前になりますと、皆藥罐とお皿の代に紙と、かう二つ手に持つて、着いたら眞魁にビュフェーへ突貫しやうといふので立てゐるのでございます、皆ビュフェーへ行くのを突貫するんだッて申してをりましたが、それは眞個に突貫するやうで、皆が我勝に搶飛し押返し〳〵て聲々に、カツレツを下さい、珈琲を、麵包を、ッて喚き立てるもんですから、ビュフェーの亭主は呆氣に取られて了つて、其樣に押しては店が壞れて了ひます、順々に願ひます、ッて大きな聲で申しますけど、沙漠の中に呼ぶ聲とは彼でございませう、何の役にも立ちません、何しても、貴方、一晝夜も飲まず食はずに居る人もあるのでございますから、女だつて男だつて、食物に有附けるとなつたら、遠慮會釋は有りません、焦燥たさうにお皿代りの紙を突出してゐる其上へ料理番が不潔らしい手でフライヽング、パンのカツレツを摘み出して載けて與れるのでございます、いろいろ滑稽なお話がございます中に、誰家のか男の方でございますが、辛との事で何だか御馳走を容れたお皿を分捕にして、微笑しながらドツシリ腰を卸して、さア

是から食べやうとすると、今迄ツイ傍に在つた麺包と甘さうに揚つた馬鈴薯が見えないので、これはツと云つて眼を圓くなさるではございませんか、それから又誰家のか負けん氣の奥さんが、ピュフェーでお魚を幾枚か買つて、傍に人が一杯居るものですから、左の手で尻尾を摘んで高く擡げて、右の手で勘定をしやうとしてゐると、誰家のか大膽者がヒヨイと手を出して引奪つて了つたもんですから、奥さんの手に殘つたのはお魚の尻尾ばかりといふので、さア大騒ぎ、お魚の奪合が始まつたところへ、立派な紳士が、災



旅順口の背面

難さねえ、貴方、何かピュフェーへ買りに入らしつたんでせうが、呀といふ間に戰利品にしやうさせまいといふ其お魚を顔に打着けられて、口の周圍が食はん〳〵になつたおや有りませんか、平生なら警察沙汰になる所でございませうが、何にいたせ、貴方非常な場合でございますから、銘々自分にばかりかまけて、なかなか人様の事どころではございません、寒いのと飢餓のは誰も同じ事で御座ますもの、あ、申すことを忘れましたがマンヂウリヤ停車場までは、他に車が無いもんですから、皆三等で參つたのでございま

す、マンヂュリヤへ參つてみますと、彼處に五百人も人が居りましたらう、皆二晝夜も車を待つて居るのだと申す事ですから、如何なる事かと思ひましたら、それでも驛長の心配であれからバイカルまで參る間は特別室へ入れて貰ひました、尤も一室に婦人ばかり八人詰込まれたのではございますが、それでも結構だと思つて參りますと、途中で幾個か軍隊輸送列車に逢ひまして、兵隊に日本人の話なんぞして聞かせて、お金も少々遣しましたが、皆元氣で勇むで居りました、でバイカルへ着きまして、無事に湖水も渡りましたが、些とも風の無い日でございましたけれども、寒暖計は三十五度だつたさうで、湖水の中程に立場のやうなものがございまして、其處で三十分も休みましたらうかしら、それを込めても四時間ほどで渡り切つたのでございます、

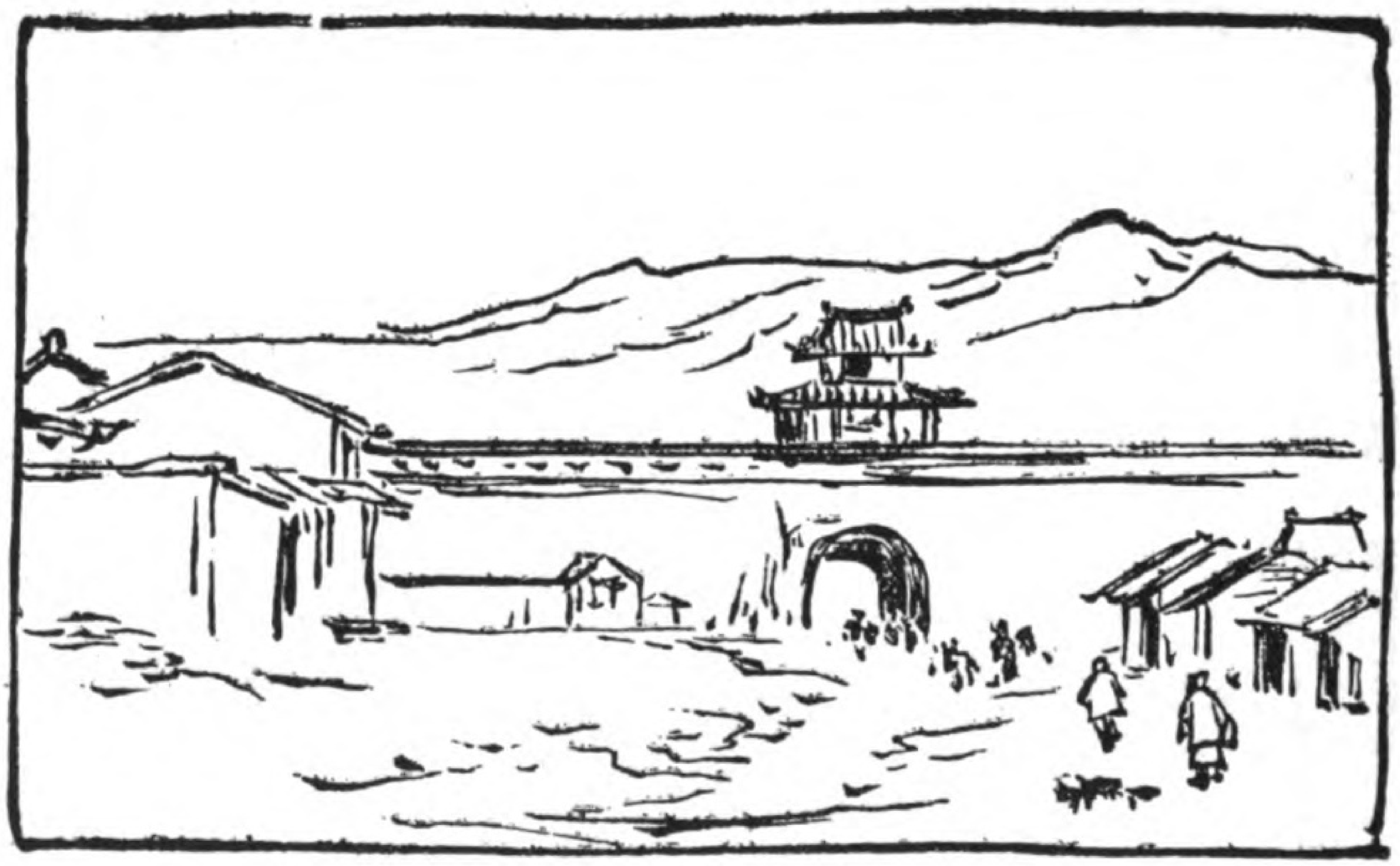
途中で二人お産をなすつた方がございまして、小兒乘が三人死去りましたが、これはお寒いので風を引いたのを打棄つて置いたからだと申すことで、誠に種々難しい辛い想を致しました、尤もイルクーツクから此方は幾分か便利も叶ひましたが、さて無事に懷かしい故鄕へ還つて安心したかと申せば、却々然うは參りません、旅順に殘つた良人の身の上も案じられますし、これから先は如何なる事かと存じますと、誠にどうも心配でなりませんのでございますよ、ハイ。

戰雲譚海

摩劍生

▲指頭の血潮に決死の願書を染め出して、二度までも港口閉塞の壯擧に加はりたる、三笠艦乘組の勇士林紋平氏に、約婚の少女あり、其名を節子と云ひ、岐阜縣土岐郡土岐村字名浦なる小栗助七の長女なり、芳紀僅に十五才にして高等女學校の四年生なるが、紋平氏の父存生中迎へ取る約束ありたるをもて、節子はいたく未來の良人たる氏を慕ひ、出征の砌は互に袖を別つに堪へかね、後の紀念にと寫眞を取交し、變らぬ面を肌

の寫眞に拜し參らせて、凱陣の早からんことを願ひ居たるに、開戰後間も無く氏の許より一個の包物届きたるより、解く手遲しと開き見れば、こはそも如何、己と同じ心に秘藏して呉れる事と思ひたる寫眞を情なく戾し來たりしにぞ、一旦は驚きもし、怨みもしつれ、有繫教育ある身のはしたなき振舞はせず、寫眞の裏に『卅七年二月六日正午戰爭開始に付不用』と認めあるを見るに付け、良人が凜々しき決心の程も推量られて、今は只管手柄あらはさん日を待ち居たる折しもあれ、



金州城東門內

殊功を立てたる趣通知ありたるに節子の喜び一方ならず、縱しや現世に連添ふ期のなきにしても、此の名譽ある軍人の妻と定められたる身は、他に後指差されぬ程の教育を得たしとて、昨今頻りに學業に勵み居らるゝとなん、さりとは殊勝の事にこそ。

▲第三回旅順閉塞の砌江戶丸の指揮官として港口深く乘入れ、敵彈に腹部を射られて悲壯の最期を遂げられし高柳少佐の夫人まし子は、芳紀僅かに二十三、良妻の聞え高く、同僚の羨む仲らひなりしも、良人出

征ありて後は郷里佐賀に歸りて姑君に仕へ、良人に代る孝養怠りなく、一死を國家に捧げたる軍人の身の生還は期せぬとはいへ、心には無事の凱陣を祈らぬとてはなかりしに、鴛鴦の契淺くして、旅順の港口に千歳不磨の偉名をのみ殘して、身は綿津海の藻屑と消えたる事、若き夫人の御身を思ひ參らせては、御痛はしの限りぞかし、さて此の悲しき訃音夫人の許に達するや、兼て覺悟や定め玉ひけん、取亂す景色もなく、衝と起ちて鏡臺の抽斗より剃刀取り出し、房々として丈にも餘る緑の黒髪惜氣もなく斷たんとしたるを、姑君は物蔭より窺ひて、周章しく走せ寄り、剃刀持つ手を押へて和女の厚き眞心は能く見えたり、今は仲々其志を止めんとはせざれど、女の髮の毛を斷つには法あり、能く洗ひて後にこそと昔の人の敎へもあればさまで急ぐことかはと老の眼に涙浮べて諭したれど、夫人は頭を振りて『母上の御言葉に背き參するにはあらねど、旣に夫在さぬ今となり、片時もかくてあるは本意に候はず、洗ふも梳るも誰が爲に粧ふものぞ、仲々に斷切てこそ心安く候へ』とて留むるも聞かず、根元よりフッと切りて其儘亡き少佐の佛前に供へ、朝夕回向に怠りなしとぞ。

▲海軍少尉陰山英榮氏は第四十八號水雷艇に乘込みて大窰口の掃海に從事しつゝありし際、俄然敵の機械水雷に罹りて艇と共に一身を國家に捧げたる勇士なり、氏は土佐の產にして性頗る轄達、殊に小兒を愛せり、曾て舞鶴鎭守府に在りし當時、餘部町の旅舘旭舘といふを上陸の折の下宿と定め居たるが、同家に直三郎と云ふ十二才の紅顏少年あり、氏は此の少年を愛して恰も友達の如くに交り、打連れて靑松白沙の間を遊び歩き、或は嘻々として自轉車を乘廻すなど隨分無邪氣のものありしと、出征前、其の乘艇より直三郎に遣せし書狀に『直さん、此間はありがとう、學校は毎日御べんきよだろうネー、それからねー、おつかちやんにねーお賴みしてねー、僕に送つてくれたまへアノねー肉とねー卵とを、澤山に及ばんからねー、港務部の小蒸氣に賴むで、それからねー別の手紙をねー、おはる

さんにやつてください、左樣なら』とありしを見ても、如何に二人の交情が親密なりしかを知るべし、斯る間柄なれば直三郎は少尉の出征後酷く淋しがり、氏が九年前の書生時代に撮映したる寫眞を机上に飾りて只管凱旋を待ち居たる所、同艇が沈沒せし日の十二日、何の動搖もなきにハタと大事の寫眞の倒れたるより、直三郎は不思議に思ひ、オヤ寫眞が自然に倒れた、陰山さんは死んだのではないかねと偶然言ひしが、此の言果して事實となつて翌日訃報に接したれば直三郎の落



金州城附近

膽愁傷大方ならず、早速家人をそゝのかして寫眞に香花を手向け、小さき手を其前に合せては懇ろに供養し居るといふ、あはれ涙こぼるゝ優しの振舞ならずや。

▲九連城の役に名譽の戰死を遂げたる堤中尉が生前家鄕に送りたる書狀の端に

惜まれて玉となりつゝ摧けよな　瓦となりて世にあらんより

大君の爲と思へば降る雪の　中にほゝ笑む梅の花かな

といふ二首の歌あり、是れ武人としての覺悟を歌ひたるもの、遂に玉と摧けて千

載の下其の死を惜まる、吁、壯なる哉。

▲雲州松江より出でたる後備騎兵に原田義一郎といふものあり、氏は出發の前日郷社賣豆紀神社に參拜して武運長久を祈念し、其の足にて菩提寺に赴き、住職に面會し、今度の從軍生きては還らじと存じ候へば存生中戒名を玉はりたしとて懷中より白木の位牌を取出したれば、住職も其心の雄々しきに感じ直ちに墨摺り流して「中正院宗顯日義居士」と記して渡しぬ、氏大に喜びて是にて思ひ遺すことなしと筆を執て更に其の裏面に

　數ならぬ露の命も時を得て
　　御國の爲めに捨つるうれしさ

と書き付け、武者振勇ましく出陣したりとなん。

▲さる老刀自を訪れたる折、田中宮相が「勿忘」といふを題にて詠せられたる歌なりとて示めされたれば、讀むに、

　勿忘の歌七首　　光顯

もしほもてわがせゆとりし國土を
　うばひさられし遺恨わするな
國のため家をも身をもわすれつゝ
　たゝかふ人を夢なわすれぞ
眞心のあかきしるしの旗とりて
　おくりし人のなさけわするな
死にかはり生ひかはりても忘るなよ
　わが大君にむかふかたきを
勝ちしときかぶとのをゝばしめよてふ
　ふる諺をつねにわするな
幾千度からきめみても忘るなよ
　君が御楯とおもふこゝろを
もの丶ふは朕が股肱ぞとのたまひし
　大みさとしを忘るなよ人

とあり、扨て老刀自には、此歌約むれば臥薪嘗膽の四字に歸す、軍國の民たるもの此の心掛なくして可ならんや、男子ならぬ我等といへども萬一の場合には、一死以て國に報ひんのみ、と雄々しく申されけるも

▲近江國愛知郡西押立村大字横溝の婦女四十五名は皇

軍の全勝と出征兵士の健康を祈らん爲め、大象をも繋ぐ力ありてふ綠の黑髮、惜氣もなく斷ち切つて、一つ一つに奉書に包み、新善光寺堂に奉納せし趣は、夙に世に喧する所なるが、之を聞きたる陸海の兵士等はいたく其の誠心に感動して、感謝の意を書き送るもの引も切らず、其の數無慮三百餘通と註せられたる中に、近衞第四聯隊第二中隊より送り來れるものあり、

未だ皆々樣の御花顏を拜せし事無之候處昨日大阪每日新聞紙報仕り候に御貴殿樣方四十五名吾等出征軍人の戰勝を祈るとて女子の最も愛惜する毛髮を相斷ち候趣き實に些細に似たりと雖も一髮能く大象を繋ぐ煩惱菩提の別れ道たる大力を有する女子の粧飾物を一念即ち彌陀の信力に打任し我帝國の爲征露軍人の爲め切斷され候は貧者の一燈と難有兩肩に擔ふ背囊よりも重く感謝致候舉國皆兵天孫軍たる我神州必ず露國に打勝て凱旋すべく候間各樣樣方此精神を永久に維持して軍國の女丈夫と後世に稱賛せらるゝ樣家庭教育に力を盡れ立派なる子弟を養成あらん事を

第一軍近衞步兵第四聯隊第二中隊

安田光綸

渡邊喜三郎

小澤善之助

山口廣平

岡田德一

中隊長は大尉吉田晉彥と申す

佛教信者に候

歌一首

綠りなす髮斷ちこめし眞心を

守りとなして國につくさむ

四十五名年長者加藤千代野殿

外四十四名御中

猶右の書面に對し同村婦人一同よりは左の返書を送りたりと

御文賜はり恭く拜見仕候

此度該女等の御國の一大事を思ふて聊か盡さんとの志を深くめでさせられいと嬉しき

あなた樣方より過分の御感賞を蒙り實に難有仕合に存候其嬉しさは身にも餘りて言葉にも盡しがたくよりて左に本願寺大谷籌子裏方の御詠歌をかりて聊か御答禮申上候

たみなとて皇御國の民なれば

つとめさらめやはげまさらめや

御國の御爲め御身御大切に念じ奉り候かしく

滋賀縣愛知郡西押立村大字横溝新善光寺にて

全村婦人　拜

斷髮の可否は兎も角其の意氣の壯烈なる男子をして感奮せしむるものあり、眞に是れ軍國の一佳話。

▲出征の一將校が其家人に送りたる書信中に、軍旅の食物に關する一節あり、曰く「近衞師團は義州東南約里許の宴生堂に陣し當聯隊は更に其の後方松長泉洞と

申す一小寒村に屯營いたし候各中隊に配當せられたる家屋は僅に三戸乃至四戸にして然かも各屋には辛ふじて一分隊を宿營せしめ得るに過ぎず各中隊は藁或ひは松材を採集し極めて粗末なる廠舍を構造し雨露を凌ぎ居候食物は固より充分の供給有之候得共日々の行軍或は勞働にて自然と不足を訴へ居候爲めコツリ〱と附近の村落より大豆小豆蜀黍玉子或は豚の類を買ひ求めて適宜腹を肥し居り候其の料理法も亦一種特得のものにして大豆は大抵煎りて之を食し或は米と共に煮小豆も米に混じ之に鹽若しくは醤油を入れて味をつけ赤飯代りと爲し鷄や豚は鹽煮といたし候其の美味なる事到底東京にては味はい得られざるべき事と噂致し居候醤油は携帶の醤油エキス、鹽は岩鹽にて韓人のを買求め使用致し居候、粟は兵卒の最も好む處にして是れを餅にして食し居り候云々」と、陣中手料理の味は又格別のものなるべし。

▲先頃某運送船が名譽の負傷兵を載せて舞鶴港に來りし折の事なりけり、乘組員の一人は上陸後俥を西舞鶴町の谷口方に走らせ、東郷司令長官よりの傳言なりとて、盆栽一鉢を購ひて持來るやう命じたるに、其人は鎭守府にも出入し東郷中將には眷顧を受け居る事とて中將よりの傳言を自家の名譽としていみじく喜び、早速枝振見事の松の盆栽一鉢を同船に持ち行き、其の歸途鎭守府の官舍に立ち寄りて、云々の御用勤めたりと自慢半分に話せしより、留守居の將校達は今回の便船に何かな慰問の品を贈らんと苦心の折柄斯る事を聞きたりとて、我も我もと盆栽の送達を托せしかば、同船が再び戰地へ出發の際には其數四十餘鉢に及び、千紫萬紅の花の數々葉のいろ〱、甲板上に匂ひ出で、得も言はれず美しかりしと。

▲同じ日本の國民と生れながら、身は口惜しの不具とて、銃を提げ劔を拔持つ事も協はず、唯だ徒らに眼界の見えぬ不自由を嘆じ、物言ふ術なき身を喞ちて、胸を抱き腕を擦しつゝあるは小石川盲啞學校の生徒なりとよ、彼等は同胞の勇しき戰振を聞くに付け、學窓より首差し延べて、見えぬ眼に滿州の野を睨み、聲な

き口に軍歌うたひて、殊勝にも勇立つを常とせり、去れば戰鬪艦初瀬沈沒の報至れりし時の如き、尋常の人よりも口惜しがる事甚しく、無念の涙を湛へて握る拳にデスクを擲き、勝報到れば天に感謝し地に雀躍して喜ぶ有樣は餘所の見る目も仲々にいぢらしきものありと、同じ生徒の中にても女は流石つゝましく、一心に裁縫の道を勵み、其賃金を貯蓄して奉公の資に獻げんとて、先づ研生の臼井チイ（十八才）は五圓を、同じく柴本テヨ（十八才）は三圓を恤兵部に獻金したりとぞ、さるにても奇特なる心掛なる哉。

軍人留守宅

▲武富海軍大佐の夫人

翠雨生

開戰以來數回の旅順攻擊に參加せられた、軍艦磐手の艦長海軍大佐武富邦鼎君の留守宅は、麴町區平川町の六丁目で、丁度北白川御邸の眞向で御座います。

記者が此方を御訪れ致しましたのは、旅順第一海戰より一と月目丁度三月九日の午後で、霙交く雨の降りしきる最中で御在ました。

黑塗の門を入り、直に又扉なしの洋風の門を通り抜けると、玄關まで十間ばかりの間といふもの奇麗に石炭殼を敷き詰めて在て、右手にはい、い、ずらりと植木の植ゑ込み。

取次のお女中に、來意を告げて夫人に面會を乞へば頓て出で來りて「奧樣は御病氣で、お臥て被爲入まするで、實に失禮では御在ますが、御病室の方でも宜しければ、何卒お上りなすつて下さいませ」と申さるゝので、記者は導かるゝまゝ、二階の八疊のお座敷に通りました。

夫人はお年比三十七八の、面長な、人品の如何にも氣高い方の樣に御見受け致しましたが、御病氣の故か何となく御血色も冴江させられず、お寐床の側に端然と座つて居られました。

記者はまづ御挨拶しながら、見ろともなしに向を見ますと、正面には世界地圖の大掛圖が掛けられ、床には山水の彩色の幅、その橫に琴が一張立てかけられ、そしてその前には硝子函入り人形の可愛らしいのが飾て御在ました。

▲その家庭　大佐は舊佐賀鍋島藩の方で、當年五十三歳にお成りださうです、御子樣は夫人須美子（三十九）との間に、長女荻子（十五）次女鞆子（十）三女三千子（五つ）のお三人と、養嗣子邦茂（二十）と都合四人お有なさいます、邦茂氏は現今海軍兵學校に入學して居られ、長女の荻子孃と次女の鞆子孃とは華族女學校へお通ひで御在ます。扨て又三千子と命じられた譯は、大佐と夫人とは一と廻り違ひの子の年でありますのに、不思議と又た三十三年の子の年に、生れたといふ所から、かくは命名されたといふことで御在ます。

▲大佐の履歴と平生　大佐は頗る壯健の質で、殆んど病氣の味を御存知ない程で、海軍に出仕せられて以來といふもの唯の一日たりと缺勤さ

れたことなく、海軍部内にも有名の精勤家で被爲在るといふことです、大佐は以前東宮武官をお勤めでしたが、過る三十四年八月磐手の艦長に補せられ、爾來引續きて今度の御出征と成たのであります。以前日清戰役の時は、丁度横須賀鎭守府の參謀を御勤めで、實戰に臨むことが出來ませんかつたので、當時は髀肉の嘆を抱いてお在でゝしたが、今度といふ今度こそは豫ての志望を遂せられたので、非常に喜んで出征の途にお就きなされたと云ふことです。

御在宅の折などは、獨り書齋に閉ぢ籠つて、讀書に耽られ、夜の明けるをも御知んなさらないかと思はるゝまで、御書見に熱中なさるさうです。そしてその餘暇には令孃達を一室に集めて、種々あどけない談話をなされ、共々笑ひ興ずるを此上ない娛樂としてゐらるゝさうです

▲出征後の音信　大佐が佐世保を出發せられてから、二三回音信があつたさうですが、別に何事も仰言らず「只今〇〇に向つて〇〇中三須少將を始め艦員一同無事、皆々不在をよく守れ」などゝ、何時も短い文言のみであるさうです。

扨て、旅順に第一海戰のあつた當時のこと。我軍艦磐手には沈沒したといふ噂がありましたが、夫人を始め家族一同豫て御覺悟のことゝて別に驚きも騷ぎもなされず、唯々我が艦隊の勝利を喜んでゐられました。が、丁度その時、長女荻子孃が無二の親友武田綱子(故陸軍大將の令孃)と連れ立つて學校より歸られ、玄關の沓脫に來掛つた所へ、電報と呼ばゝりますので、荻子孃は急いで其を受取り綱子孃と共に、御母様の病室へ走つてお行でゝしたが、夫人は俄に病床より跳起きて取る手遲しと電報を讀み下すと「今度戰爭には我海軍大勝利、磐手も無事、三須少將も無事、私も無事」とありましたので、初めて御安心なされ、お子様共々召使一同に至るまで打揃つて芽出度い勝捷を祝はれたさうで御座ます、

▲令夫人の談話　令夫人は女藝百般に通じ、貴婦人社會にも重きをおかるゝ方で、愛國婦人會、彰善會、婦人協會など、あらゆる婦人團体に關係して被爲居ます。記者は戰時の家庭に付て御意見を伺ひましたところ、夫人は唯笑を湛ひながら、「否、とんだことです。私なんかに、そんな立派な意見もなにも御座いますもんですか……ですけれど、唯三須さんの奧様でしたか誰方でしたか新聞の方に被仰つたことを非常に宜いことだと考へて居ります。それは別に他のことでも御座いません、戰時に於ては、別て軍人の家族として留守の任に當てゐるものは、萬事萬端に儉約に儉約を盡すことが一番肝腎なことで御座いませうと思ひまする。こんな場合に十分に、その美風を吹き込んでおきまして、平時になつても失はぬやうに致したいと思ひます」と。仰言いました、

▲令孃荻子　この奧様の御訓育丈あつて、至つて怜悧で、活潑で、そして、華族學校同級中にても學術品行共に優等の聞ゐが高う御座います。また感ずべきは、母君が御病氣で一室に閉ち籠つてゐらるゝので、責めての御心遣りにと、外出の折、綺麗な花など見當るときは、そのまゝ取つて來て、早速母君の枕上に捧げらるゝさうです。何と御優しい御心掛では御座いませんか。また先頃同校に繃帶卷があつた當時は、荻子孃は此の作業を此上ない樂として、朝も早くより起き出でゝ令妹朗子の手を携へて登校なさつたと云ふことです。

▲石橋海軍大佐の家庭

此の方は旅順第一回攻擊以來勇名を轟したる方で、高砂の艦長であります。

大佐の留守宅は麻布今井町の高臺で、南部氏の邸內に御在です、門前

には高砂の名に相應しき老松の緑濃きが數本立ち並んで居ります。

記者が此方をお訪ねしたのは、三月の中旬でしたが、その時一つの感慨が胸を突いて來ました。それは外ではありません、大佐と記者とは同郷人で、自分が幼少の折、丁度日清の戰役後、忘れもせぬ二十八年の秋九月、大佐はその時大尉でしたが、夙に同郷人が海事思想に乏しきを慨して、海員養成の爲め艦を我が金澤へ、黃海海戰談を齎れて遊說に來られました、その時自分等は大佐の宿舍を訪れて倚ほ海戰談を聞き、上京の折には御訪ねする約束まで致しましたが、其ははや一と昔の前となり、今度の戰爭があつて、始て大佐の留守宅を御訪ねすることになつたのですから。

取告の女中に來賓あるよしを聞きましたから、記者は「玄關で、一寸お目に懸りたい」と申出ましたが、すると夫人には間も無く出で來られまして、私を一室に通し、いろ〱とお話し下さいました。

▲大佐の略歷　日清の戰役の時は丁度大尉で松島の航海長を勤められ、殊に黃海の海戰には大層なお働きをなされたのです。その後三十年の春の頃分捕軍艦鎭遠の航海長に轉じ、尋で高砂の廻航員として英吉利へ行かれ、翌三十一年歸朝せられましたが、その航海中少佐に進み、歸朝後間も無く常備艦隊の航海長となり、富士、八島に乘り組み、やがて中佐に昇り。尋で三十二年の九月佐世保鎭守府の副官となり、又海軍省人事局へ轉じ、昨年の七月高砂艦長に補せられたのであります。

▲巴會のポンチ畫



日兵「コリヤオモシロイ的が大きいから狙はずに中る」
露兵「コリヤタマラヌ〱」

▲大佐の平生　資性明敏快活、至つて如才ない方で、老人にも、婦人にも、誰にも話がよく合ひまして、談敵をして思はず愉快に感じさせ、誰でも「此方のお話は何時まで伺つてゐてもちつとも厭かぬ」といふ風です。學問も博く、辨舌は滔々として些のよどみがありませんから、大佐の談話術と航海術とは海軍部内に於て名高いものであるといふことです。

實戰に臨んでは、凜然艦頭に起つて、艦體を操縱し、腕を揮つて、剛勇を現はされますが、平生在宅の折は、如何にも優和な方で、子女を愛せらるゝこと深く、日曜の日などは、令息令孃方を引き連れて、戸外散步に出られ、お子さん方を對手にあどけない遊戯をなさるのを何よりの娛樂とせらるゝさうです。

尙嗜好に就いて夫人に伺ひましたところ、「なに別にこれと申すことも御座いませんけど、骨董、刀劍なども嗜きなやうです、……ハイお酒ですか、これも、まう澤山とは參りませんが、云はゞなる口なんで御座います」と。これから夫人は

▲出征後の音信　に就て「二度あつたきりで、別に格別のことも申して來ず、唯「息災だ」と御在ますばかり、ほんに簡單なもので御在ますよ」と御噺しになりました。

▲その家族　大佐名を甫と云ひ、加賀金澤の藩士で、今年四十三歳になられます。夫人は肥前佐賀の方で三十八歳、お子樣方は長男儀(十四)次男誠(三つ)長女壽子(十三)次女俊子(十一)三女治子(九つ)四女光子(五つ)の二男四女で、長男儀君は麹町區飯田町の曉星中學校に寄宿して御在になり長女壽子次女俊子は麻布鳥居阪の　英和女學校にこれも寄宿して御在になります。三女治子は日々夫人の許より三河臺なる小學校へお通ひなされて居ります。故に不斷は皆さん方別々で御在ますが日曜日とか、祭日とかには令孃も令息も早朝より夫人の許へ御歸りに成て兄弟仲睦しく、終日面白く遊び暮され、夕方になつて夫々寄宿へ歸へらるゝさうです。記者が同家をお訪した日は、丁度日曜の午後でしたから奥の方に令孃達の唱歌の聲を耳にしました、而してまた愛らしい笑ひ聲を。

▲秀島海軍中佐の家庭

三笠副長秀島中佐の御留守宅は京橋區越前堀二丁目に御在ます、記者は四月上旬同邸に夫人幸子殿を御訪れ致し、中佐に就て種々と御話を承りました。

▲中佐の略歴　二十年少尉となり、日清の役の時は大尉で、水雷艇第六號の艇長を勤め、威海衛の海戰に從ひ、三十年中少佐に進み、三十二年軍艦千歳の回航委員として米國に赴き、北清事變の際は臺灣總督府の海軍參謀として同地に勤務中の事とて出征はされなかつた、功により中佐に進み竹敷要港部に勤務し、昨年八月に至り三笠の副長に補せられたといふことです。

▲中佐の平生　君は舊佐賀の藩士で、當年三十九歳の軍人盛りであります、資性は豪放快活にして、酒興に乗ずれば、吟聲朗々劍を拔いて自ら舞はれることもあるさうです。また御在宅の折は專ら心を讀書に潜めて軍事の參考となされ、出でゝ職務に御出精なさるので、勉强家として將た精勤家として評判の高いお方で御在ます、中佐の御家庭には倫一郎君とて、今年四つになる男の子さんが一人ありますが、中佐はこれを掌中の珠といつくしまれ倫一郎君も亦た非常に父樣に親んで居られると云ふことです。中佐は人一倍子煩惱ですから、御在宅の折には晩餐に一盃を傾けながら、倫一郎君を片手に抱いて食卓に對するを無上の樂みとして居られます。

▲「坊の寫眞だ」　記者は夫人に向ひ「坊ちやんのことが、新聞に出てゐましたが、あれは、眞實ですか」と云へば、夫人は微笑みながら「何です、寫眞のことですか、ハイ、あれは、阿父と坊の寫眞だ、といつて、何しても手放しませんのです。そして、朝目が醒めるとすぐそれを持て遊んでゐます。ですから、此間新聞の方に寫眞をお貸申す譯に參りませんでした。」と云はれた、折しも、間の襖より少し顏を出した倫ちやん、やがて、夫人の膝の上に來て倚れかゝれば、夫人は頭を撫でつゝ、「兄樣にお辭儀なさい」と云はれましたので、倫ちやんは、おとなしく挨拶なさいました、記者は透さず「坊ちやんお父さんは、」「お父さん、お艦」「坊ちやん軍人になるの？」と重ねて問ひ返せば、たゞ無言で、首肯れました。

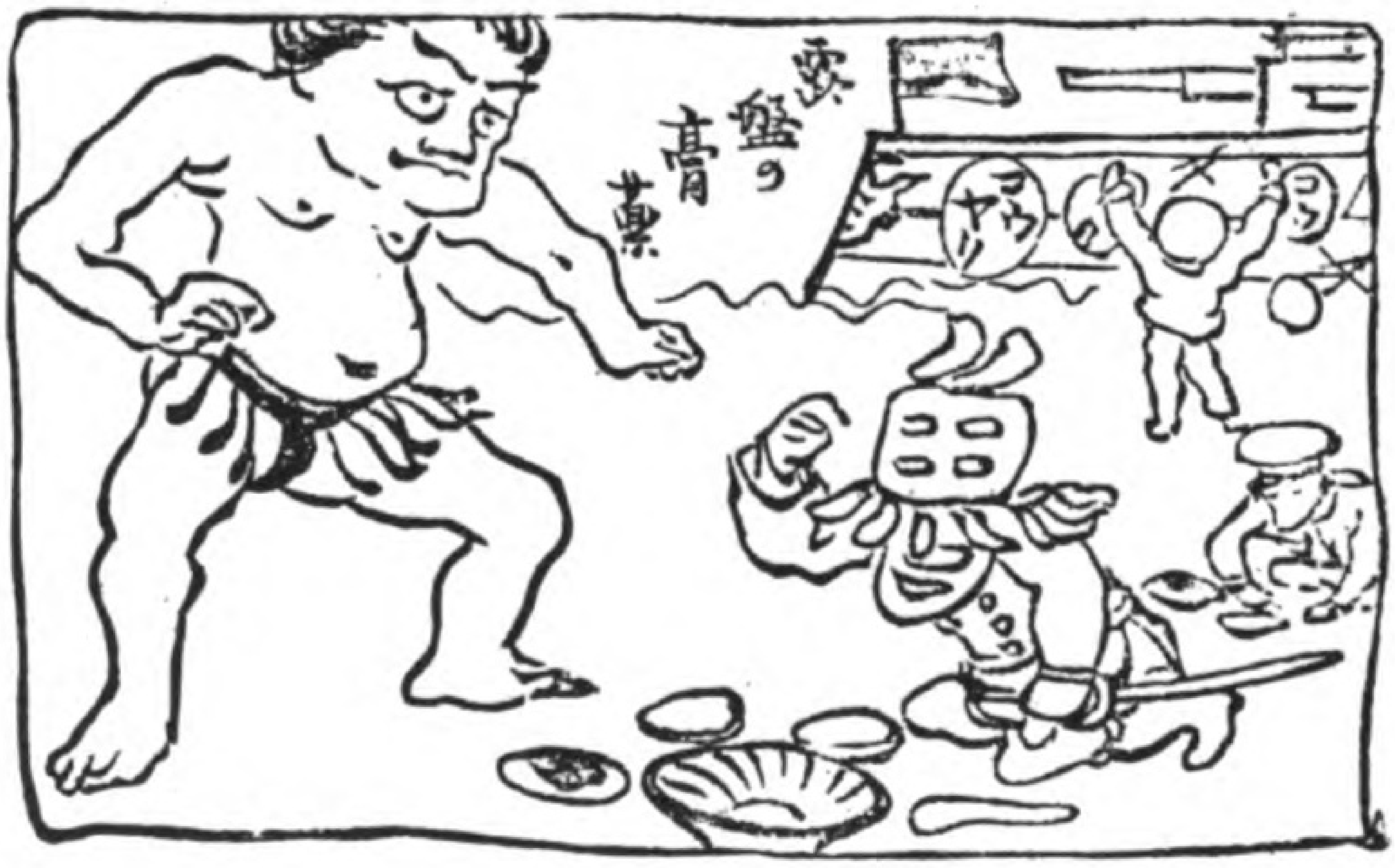
▲出發の際と出征後の音信　中佐は出征の際夫人に對して「男子一たび戰爭に出る以上は、もとより生きて還ることはないものと思はればならぬ、就ては倫一成長の後は、必らず軍人として國家の爲めに御奉公さ

して吳れろやうに……。と云ひ遣されしとか、出征後、夫人の許に二回の音信がおつたさうですが、文意も簡單で只「海戰に列したるも無事、海軍大勝利萬歳」と書き、外に初瀨に乘り組める甥少尉候補生成富政一も無事と報じてあつたさうです。

軍國だより

ふなんど

◉去月八日の夜都下の各新聞雜誌社に依て催されたる提灯行列は近來の壯觀にて御座候、數十万顆の球燈虹の如く棚引き、天漢の如く流れて、爛々たる火光の隊伍陸續として歡呼場裡を練り行く有樣は何とも形容の致しやう無之候、猶ほ當夜の行列に無上の光榮を添へたるものは、畏くも常宮周宮兩内親王殿下の御覽を辱うしたる事に候、兩殿下には國民歡呼の狀況を樹はせ玉ひて至極滿足にや思召されけむ、紀念の爲めにとて左の御詠を末廣に御揮毫の上、山本海軍大臣以下供奉の將校へ御下賜相成りたる由承り及び候。



▲巴會のポンチ畫

力士「オレが專賣の膏藥をなぜ僞造した
露兵「何とも申譯かありません

常宮殿下御詠

國民の喜び祝ふ諸聲は
都大路になりひゞきけり

周宮殿下御詠

ともしびを手に携へて國民の
御代祝ふ聲いさましき哉

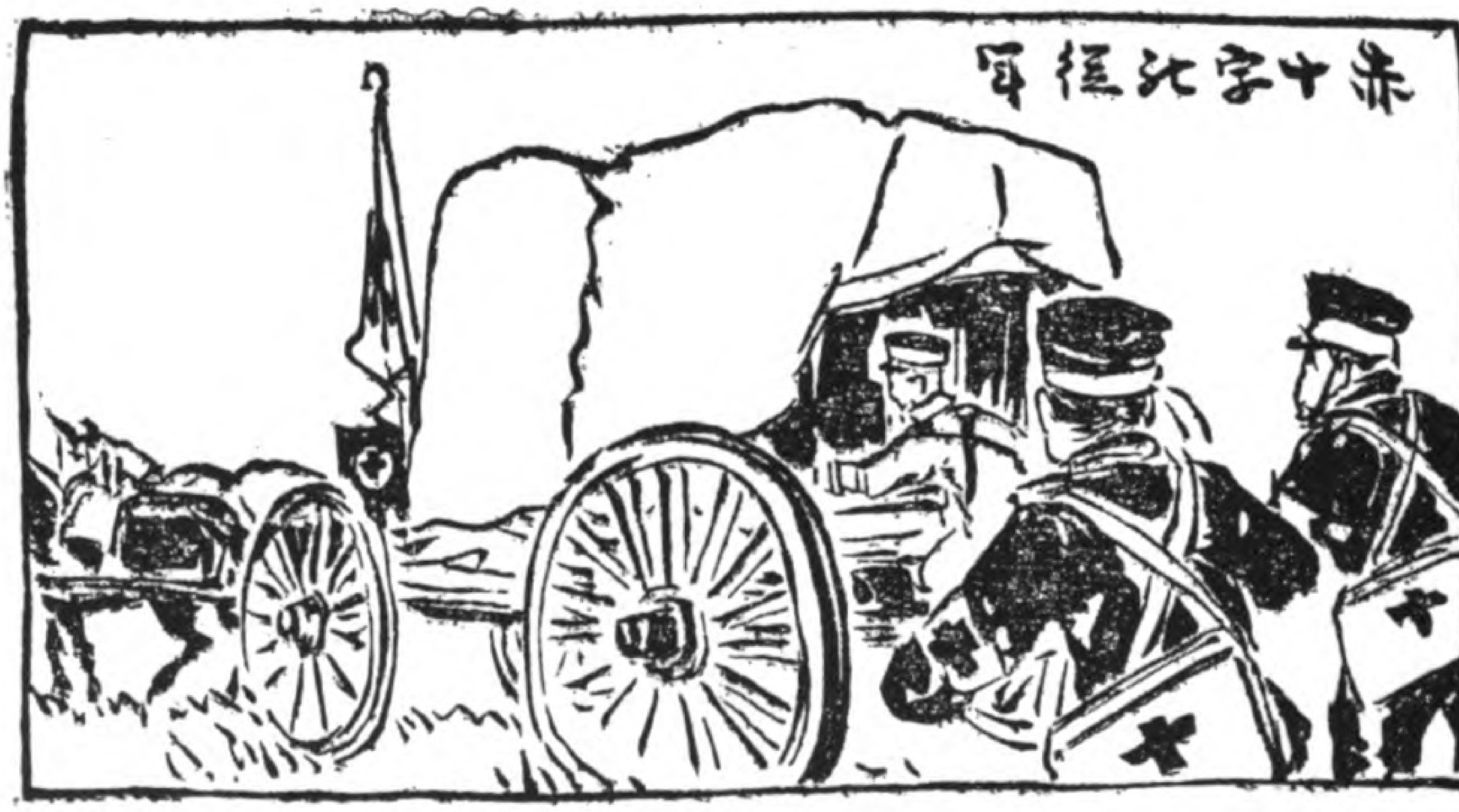
◉先頃矯風看護婦會の主催にてマギー夫人の歡迎會を本郷中央會堂に開かれ候處、來會者の過半は赤十字社、大學病院、東京病院、其他各醫院の看護婦達にて、何れも白衣白帽を着け居り候爲め、會場一帶純白に相成り奇觀を極め申候、式は君ケ代の合唱を以て始り、大關女史の歡迎の辭、マギー女史の日本語答辭あり、次で大關女史は日本看護婦の進歩に就て、高木兼寛氏はマギー女史の經歷に就て演述され候、了つて主催者の希望によりマギー

女史は一行と共に米國々歌を合唱致され候、最後に高木兼寛氏は起つて、「マギー女史は横濱に於ける第一次の歡迎に於て、早く旣に我が國歌を暗誦し、我等と共に合唱されたるにも拘はらず、我等今日此の會に於て、米國々歌を以て答ぶる能はず、却て貴賓方に御願ひ申すやうな次第、何共汗顏に堪えず、之を以ても今後の敎育は大に意を致さゞる可からず」と申され候が、至極同感に御座候、余輩は此の會合に於けるマギー夫人の高尙なる人格、端嚴なる態度が、如何に大なる敎訓を日本婦人に與へたるかを、推察するに難からずと存じ候。

◉鴨綠江畔の大激戰に輦轂の精兵を率ゐて奮鬪突擊、天險を拔き敵兵を走らして、九連城頭に翩翻の旭旗を樹つるに至らしめたるものは、實に我が近衞師團長長谷川好道氏に御座候、將軍は嘉永五年を以て周防國玖珂郡岩國町に生れ、年歯正に五十三、數度の戰功により正三位勳一等功三級男爵の爵位を帶び居られ候、廿七年日清の役には第二軍混成旅團に長として旅順總攻擊を行ひ、側面より椅子山の砲臺に突貫して之を陷落せしめたる事は今尙ほ記臆に新なる所、爾來將軍の驍名は世界に隱なきものと相成候、將軍の平生は能く部下を愛撫し、苟且にも偏頗の處置をなすこと無之候へば、何れも其の恩威に服して神の如く敬ひ居り候、將軍の嗜好は第一圍碁にて、閑あれば非番の將校を自邸に招きて黑白を鬪すに餘念なく、時には只一人盤面に對し敵陣擊破の術を講じ、妙手を案じてはハッタと手を拍ち、愉快と叫で家人を驚かすやうの事も每々有之候由、又た書畫骨董を愛して珍品奇什を蒐め居られ候、其他盆栽に、相撲に多方面の趣味を有し居られ候、邸宅は牛込區早稻田町四十番地に有之、家族は夫人辰子、養子猪三郞、室かつ子、長男東吉、長女よし子、二女たき子の外に雇人數名あり、夫人は大山、寺內、石本、福島各夫人の協議に係る出征軍人家族救護の事に盡力致し居られ候。

◉鴨綠江の役に於て余輩は敬服すべき一幅の佳劇を見出申候、事は東北健兒の第二師團兵が擂鉢山の敵陣を陷れ、逃ぐる敵を追ひ行き候折しも第四聯隊第二中隊の步兵少尉井上健吉氏には、伏屍累々碧血淋漓の間に敵の大尉の負傷したるが、氣息奄々、我と我が血潮を啜りつゝ咽喉の濁を濕し居たるに出遭ひ候より、駈寄りて其の脊を撫でやり豫て素養ある露語を以て『勇敢なる大尉よ、足下は足下の軍隊の爲に名譽ある戰ひ

を致され候よ、某今足下の爲に末期の水を進せ候はん』と申しつゝ、腰の吸筒取出し手早く渠の口中に注ぎやり候處、渠は十分之を嚥下したる後、少尉の手を把りて、身内の苦痛を忍びつゝ『辱けなや、味方も及ばぬ其許の親切、感謝すべき言葉も候はず、斯る情ある武士の手に介抱されて死すること此上なき幸福に存じ候、就ては今生の思出に其許に保存を請ひたきは此の二品、是非に受納め玉ひてよ』とて、肌に付けたる渠が家族團欒の寫眞一葉と腰なる佩劍を解きて少尉の前に差置き候ひければ、百萬の敵を物ともせぬ少尉も之には有繫不愍を催し、言ふがまゝ寫眞を取りてポッケットに納め『足下の衷情を諒して此の一品丈は確と預り申すべけれど、劍は是れ武士の魂なり、某など足下の魂を奪ふに忍びんや』と言ひて之を押戻し、



再び前進を續け候處、幾千もなく件の武者は打仆れて永遠に此世を去り候由、好箇の佳劇に候はずや、斯の如きは實に仁義を以て楯とする我が武士道の精華にして、所謂武士は相救濟の眞意義を遺憾なく發揮したるものと存知候。

◉露兵の食糧は黑パンの至つて粗末なる物の由は豫て噂に聞及ぶ所に御座候が、之に就き某從軍記者は面白き話を通信致候。

五月一日我軍が九連城を占領した時或は負傷し或は捕はれた(寧ろ自ら降つた)露國捕虜兵は無數であつたが其中三十人許のものは銃を擔ふの氣力もなく身を投げ出したなり酒に醉つたやうな有樣で倒れて居るから我軍は定めて重傷を負へるものと思ひ應急手術を施さうとして能く能く見れば負傷どころか彈

片のカスリ傷さへないので偖ては不思議どういふ仔細かと思ふと彼等は蠢めきながら手を合し口許をモグ〳〵するのみで絶て言葉を發し得ぬ（發したとて無論通せぬけれど）併し其樣子が食物が『欲しい』とのことを言外に示すかのやうであるから氣のきいた一卒が試に之が欲しいのかと堅パンの片々を出して見せた、すると乳香兒が乳房を見て無意識に縋り付くやうに滿面に喜びの色を表はしてそれを手に取ると見る間に忽ち口中に抛り込だから我兵卒は偖ては饑餓に瀕せる可憐のものよと一同持合せの堅パンを與へ尙敵の遺した行李から食物を探し出しなどして供養して遣つた、併しそれにしても餘り腹の減りやうがひどいので露語の出來るものから聞いて見ると、さても讀めたり、その朝露兵等は左らぬだに食料の不足な空腹を肥さうとして件の黑パンを食はうとした一刹那、不意の我軍の襲擊に驚かされ狼狽して命よりも大事の糧を捨てたなり戰爭したので見らるゝ如きの有樣とはなつたのだと語つたさうな、なるほど空腹で戰爭をさせられては堪つたものであるまい。

此の一事を以て見ても敵國軍隊の給養が如何に不完全であるか、推察致され候、而も亦た敗後の光景の慘憺なる有樣が想像致され候。

◉第三次旅順閉塞に際し滊船佐倉丸に乘組み、首尾克く任務を果して、生死不明と報ぜられたる海軍機關少監寺島貞太郎氏は、小生の鄕里なる靜岡縣沼津の出身にして、殊に小生は嚴父正利氏とは別懇の間柄に候より、屢々相往來して少監の風貌にも接し候事とて、元より名譽の事とは申しながら、哀惜の感に堪えざるもの有之候、少監は軀幹魁偉なるも容貌は温和の方にて、操行端嚴の聞えあり、別して學殖の挺でたるより、再び得難きの材を以て目され居り候ひしに、今や不朽の名譽をのみ殘して、顯幽其の境を審にせず、哀悼の至りに御座候、少監は二十八年海軍機關學校卒業の砌優等生として陛下より銀時計一個を下賜され候處、後海軍大學卒業の折にも學術優等の故を以て再び銀時計一箇を下賜致され候に付、天恩の優渥なるに感激し、天恩に酬ゆる我一死のみと申され、日夕此の語を口誦し、恩賜の時計なればとて、常に肌身離さず攜帶し、今回旅順口閉塞の壯擧にも身に添へたる由に御座候、少監の平生は酒を嗜まず讀書を唯一の樂とし、又た親思ひの性とて嚴父正利氏に事へて至らざるなく、

亡き母堂の墓參をなすをば樂のやうに致居られ候、偶々賜暇を得れば直ちに歸つて故郷沼津の楊原村に嚴父を省み、母の墓參をせざるなし、忠孝兩全の武士の面影は實に此の少監に於て見るを得る義と存じ候、一昨年末本省勤務を命せられ候より、麻布區霞町に嚴父正利氏と共に寄寓致され候が、時局切迫して淺間艦乘組を命せらる丶や、父正利氏には郷里沼津の靜地に歸臥するとに成りたりとて、暇乞に來りて申さる丶やう『悴か海上勤務を命せられましたので、私に沼津の方に歸つて居ろ、其方が知己もあり氣候もよし、安心で善いからと申しまする故、東京を引拂つて彼方に參ることに致しました、何卒相變らず御交際を願ひます、悴も日頃私を思ふて呉れますから、若し露西亞と戰端を開く



曉にも、卑怯な振舞をして父祖を辱しむる樣な事は斷じて致すまいと存じます、何うか大きな働をさせたいものと私は祈て居ります』と言はれ候には小生も痛く感涙を催し候、然るに今や果して絕大の偉功を建てらる、此の父ありて此の子ある事誠に偶然ならずと存じ候。

◉五月四日朝九時、旅順口の敵軍は、我が閉塞隊員の死体廿六個を收容して、之を日本國旗に包み、軍樂隊に「コーリスラーウエン」の曲を吹奏せしめつ丶、厚く埋葬の禮を營みたる由は、敵の公報の言明する所に御座候が、抑々此の「コーリスラーウエン」と申す曲は露國音樂作家ボルトニヤンスキーの作曲中最も有名なるもの丶由、又た其の歌詞はヘラスコフの作にて露國民の愛誦するもの丶由に候

へば、左に其の譯歌を御覽に供すべく候、

（一）

我等の主がシオンに讚美せらるゝ時は、
言葉をもて云ひ難し、
彼は蒼空の玉座の上に在りても、
地の小さき草の上にありても偉大なり、
主は何所にも至る所に讚美せられ、
晝も夜も均しく光り輝く、

（二）

オゝ神よ汝の住所に、
我聲は微に至り、
我等の悲みは朝の霞の如、
汝の許に立ち昇る、
汝の爲に心の内に、
祭壇を築かん、
主よ我等汝を歌ひて讚め稱へん。

あゝ我が忠烈の勇士が、斯の如くして悲壯なる吹奏に送られ、旅順港頭、彈痕斑々の街を過りゆく當時の光景・宛然目に映ずるが如き心地致候。

◉日本軍が仁川に旅順に鴨綠江に無前の大勝利を博して以來日本の國威の揚りしことは非常なものに御座候世界の人は日本の強さに驚嘆して、何うしてアンナ小さな体軀をして居ながら、アンナに強いのだらうと不思議がり、英國の或る記者の如きは、之を近代の大疑問として熱心に研究を試みたる結果、大なる發見をしたる由にて、其の言草が面白く御座候、曰く日本人の小さくて強い理由は第一食物である、日本人は米を常食とし、肉を喰ふ事が少い、是れ日本人を強くした大原因である、肉を食ふと胃の消化作用を助くる爲めに興奮劑を多く用ひねばならぬ、けれど日本人は肉を喰ふことが少いから、從て酒や煙草を用ふることが少い、之が爲に精神が爽快になり思想が健全になり身体も強健になるのだ、第二に運動が好い、日本人は身体が小さい丈に、大きな國民がノソリ〳〵として居るに比して運動が頗る活潑である、其の結果其の四肢が能く發達して居て、解剖學上から割り出して見ると、チャント立派な躰軀を具えて居る、第三は水を能く利用する事である、日本人の樣に沐浴を取る人種は、世界に其の例を見ない、其の多數は每日湯に入つて汚垢を洗ひ、皮膚を淸淨にする、是は病氣を豫防するに大功が有るので、日本人の健康が特に優れて居る大原因と考えられる、日本人の躰軀は小さくても、其の健康に於ては世界に稀なる所で、死亡の統計などを見ても、大層割合が善い、吾々は歐米諸國の人民が日本人の攝生法に

鑑むる所の多からんことを望む者である、と併し吾々の強きは決して身体の攝生が良い許にては無之、世界無比の健全なる精神を有し居る故にて候、是許は幾干歐米人が眞似んと欲しても眞似可からずと存候、斯ういふ讚辭を聞くに付ても吾々日本國民は益々自重して、最大最强の名譽を長久に持續することに努めたく、是れ家庭教育者の重大責任かと存候。

◉永世不拔と露將の誇り候旅順の天險も今は日本軍隊に前後より通路を絶たれて、孤城落日の觀をなし、日毎に士氣沮喪して守備兵の夢安からず候が、玆に一場の傳ふべき談ありとて「デーリー、テレクラフ」通信員の通信したる所によれば、西伯利亞聯隊に屬する一兵卒にして名をリヤトンコッフと呼ぶものあり、容貌花の如く、女にしても見まほしき好男子とて、其の麗しき優姿は軍隊間の評判物に成居候、然るに頓て選拔されて某少壯士官の從卒となり、日となく夜となく其傍に侍して健々しく立働き居候處、或る日不幸にも途上にて脚部を挫折せし爲め、醫師は之に入院を勸め候へども頑として聽入れず、愈々强いられて入院の已む可からざるに及び、彼は何思ひけむ窃にペンナイフを我と我が左手の腕に突立てゝ、其の動脈を斷ちたるより、雪を欺く膚は忽ち唐紅に染まり、苦痛を忍ぶ体爲に醫師は猶豫ならずと早速病院に送り、今し治療に取掛らんとて衣を脱がしめ候處、何ぞ知らんこは是れ妙齡の一處女にて候ひき、抑も彼女が纎弱き婦人の身を以て兵卒にまで姿を窶し、大膽にも軍中に入込むに至りしは仔細ぞあらめと存じ、詮索致し候處、彼女は正しく戀人の後を追ひたるものにて、其の戀人こそは彼女が主人として仕へし少壯士官其人に御座候本國に在りし頃より二人の事情を知りし友人は、士官に勸めて彼女の請を聽容るべく說き候へども、士官は故ありて之に從はざるに、責ては御傍に侍りて遣る瀨なき思ひの程を訴へもせば、何時かは不便と思召されて、願の協ふ日も無きにあらじと思ふがまゝ、扨てこそ斯くは雄々しき服裝に姿を變へ、本國を後に、西比利亞の野越え山越え、遙る〴〵極東の地にさまよひ來り、戀しき人に逢ひは逢ひながら、事竟に是に至つて彼女は空しく天に逝き申候、士官は之を見て不愍に堪えず、次の日營舍内にて是亦た自ら頭骨を碎きて少女の跡を追ひ、同じ道に旅立ち候由、宛然一幅の悲劇に御座候。

時局手拭もよう（三井呉服店意匠部立案）





香道一席話

翠香女史

夫香は往て以て神佛に供へ或は室内を清め又、衣裳に留て品位を高雅にす、古往物合の事源氏物語に見ゐたり、香會とて客を請じ、禮式を立て爲るは東山義政公に始る、東山殿は風香好故に香具の知きは殊に美麗を極め、其式も風流を專とし和漢の古事詩歌に意匠を採たる物多く尤高尚なる趣向にて茶事よりも文學的なり、是を學べは自然に學者になれるなり、德川時代には京都に家元在て江戸にも米川流在しが、維新の際滅裂に成、諸國に散軼し明治と成て諸藝再興すれど香のみは再振はず、僅に香茶と竝べて稱すれど香道の如何を知る人開花の曇よりも稀となりぬ、岡東山殿に始りてしかも香道を基として立たる茶道は、今日に栄ゐ本家本元なる香は却て衰微を極たるは何故ぞ、之他なし香具は瓦解の際に諸家の什物祕寶にせられたる際、大概は洋人の買去る處となり、偶然殘れるも茶事に用ゐる物の外は更に用なければ、皆塲物と成て全具整はず、新に製造爲者なし又其殘物も極て美麗なる細工物なれば、一品十圓に下らざる高價となれる故に、稀に斯道に志す人有ても其具の全備容易ならざる爲に、之を翫味爲不能、今や香道殆絶なむとす日本美術の一に計へし香道にして如斯は豈可惜事に非ずや、若又洋人が買て持歸を示して是日本にて奈何用るやと問はれし時、外交者答ふる處を不知るも國辱ならずや、予が先代は京都家元の高足にて、宗匠死して、嗣子幼かりしかば、成人迄の代理を勤めたれば其傳書今以て傳て吾筐底に秘たり、情悕に茶道も其始は支那舶來の珍品及高金の物を陳列爲を專とし、貴人豪家ならでは翫び難かりしを、千利休の慧眼之を看破し侘といふ新機軸を出しゝに依て大に流行を來し、明治の今日も隆盛なるは全く利休の偉功也其擧に倣ふと申も嗚呼がましけれど、香とても唯其趣味を專として道具の如きは稍も雅味を帶て卑俗ならざれに足るとし、其要に適べきは採用ゐ、形寸尺の審式に拘はらず何の家にも有合物を撰び、其品に應じて飾法扱ひ方を工夫する事彼利休か草の中の茶事に、馬盥に花を挿し釡を留に取合し、雅量に倣はゞ、何人も容易く翫ぶ事を得て、美術を研究し合せて斯道を永世に傳へくして絶ざらしめんことを。

▲香を翫ふは茶より易き事

○茶は道具の取合せに依て趣味風情を生じ功拙を顯すが故に之に據る人は種々の道具に高金をも擲事あり野狐等と嘲はるれど茶其物を點るは何も同一の紋切形也、香は反對に香其物の組技に種々の變化有從て香元の所作も同一ならず、又詩歌に趣向を採もの多ければ香會と詩歌の會を合して行ふに甚妙也然而其具は多を要せず、一通さへあれば何も同じきを恥とせず其數も茶より餘程少し、況て改正案を實行せば調寄易となるべし、されば香は茶よりも爲易き也、其くせに爲方の多きは茶の薄茶濃茶、七事、切物扱ひ等の比に非ず、從來のみにても百番以上あり、各々の才に任せて之を當世の事柄に取なして、新奇の組方を案出せんも敢て爲がたき事には非ざるべし。

▲香具の名稱及品目

十種香を元として其他種々の組法有、盤物となれば各それ〴〵の盤及盛物人形等を要して随分面倒なるもあれど、盤物に非ざる香は普通一組の道具さへ有れば何香にても為事を得其一組の形名稱左の如し字の通ならぬ讀くせあり。

○香箸(きやうじ)　長さ五寸柴檀黒檀等にて四角に削り先の細き箸也香木をはさむに用う。

○火筋(こじ)　長さ同柄唐木類種は金銀赤銅類俗に云ふ火ばし也

○香匙(かうすくひ)　長さ四寸銀に唐木の柄又塗柄も有香を匕ひも扱ふもの也

○羽箒(はうき)　長さ同上鳴などの羽細長く小さき物香爐の中縁に附着灰を拂ひ又誤て敷紙に灰のこぼるゝ等をはく

○灰押(はいおさへ)　長さ同上銀赤銅類形は扇なるが多し裏に細筋の有も無もあり

○火味(ひあぢ)　長さ三寸種赤銅柄唐木香爐に火を入灰を董ひて後其上方へ火氣の徹る穴をあける為に用う

○鶯串(うぐひす)　長さ三寸五分銀の細き延串金銀のはぎ合なるも有香包紙を一々是に刺留て其順香を改るに必用品也之を鶯と稱するは香を尋てや鶯のなくといへる古歌に依る

○狹(はさみ)　(長さ三寸先二分斗)銀眞鍮等柄に毛彫したる有銀葉とて極薄く小なる物を挾み扱ふ物也

此品々を火道具又七つ道具とも云、數は八あれども香箸は下捨に必用なれど會席にてはいらぬ故勝手に殘して持出ぬ故七道具といふなるべし

○建瓶(たてへい)　(高さ二寸餘三寸斗)銀赤銅眞鍮錫等のかな具也形種々有箸匙等の小なる物を挿へば適はず、上件の七具を挿て飾る物也

○銀葉(ぎんえふ)　形極薄き銀板(板と云よりも紙と云方適當なり)僅に五六分の角取形此上に香木を乗て火穴の上に置火氣適度に徹りてによき薰を發する也(香を火中に焼に非ず)數十三枚を本式とす(十種香は十なれど十二の香も有甚損じ易ければ一はかけ替也)

○香爐(かうろ)　(高さ二寸三分渡り二寸二分)三足の磁器也一對を要す灰は香爐灰と稱して眞白也香具師の店に賣る常の灰にては火具くたもたず

○札箱(ふだはこ)　(長五寸五巾二寸五)此中に十の小箱入子と成り又其小箱に十六枚宛の小札有蓋は即銀葉臺とす黒塗蒔繪又唐木に金粉蒔繪なるも有

○銀葉臺(ぎんえうだい)　青貝を以花形をはめこみたる數十二是は銀葉を並べおく物此中なる臺一枚別に有是には試のを並ぶ故に試臺と云製造は同一也

○札(ふだ)　表面は四季の花を十六枚づゝ一樣に書き裏は一二三客各四枚宛一二三には月と花を印する物一枚宛有是皆其香の組法に依て要ある也

○炭團(たどん)　(長さ七八分渡り五六分)香具店に賣物なれど今は然る物有とだに知らぬが多ければ是非なく手製爲ざるべからず胡桃の皮松毬の二品を黒焼にし鉢中に粉と爲て海布苔を濾て之を練り内渡五六分の竹筒を長さ七八分に切て詰込棒にて押出し充干乾したる物を用う

○重香合(ぢうかうがふ)　形は丸くも四角も好次第三重也又塗蒔繪或は唐木象等にて組付も有上銀葉入中焼入下炭團入高さ三寸斗りの物

○折居(をりすゑ)　七寸五分角を三分一の二寸五分角に折たる物紙は鳥子にて金銀箔又砂子或は蒔絹表も有金紅唐紙種々好次第當札を入るゝ物數は十を一帙としたる物

○總包(そうつゝみ)　長七寸五分巾五寸五分を疊折たる物大は折上竪三寸五巾二寸五小は三寸二分に二寸一分となる香包に限り皆左を上に折一見逆様なるが如し金地極彩色の繪其香の名によりて色々也裏も布目金地又砂子絹摸美麗を盡したる物組香の小包を入る故に總包と云ふ

○思羽(おもひば)　(竪三寸七分横三寸)是も總包の一種也お姫様の五衣の如く色を重ねて都合七枚を一ッに折上は花鳥の極彩色中は砂子の鳥子にて至極美なる物折方法あり（圖は畧し難き故はぶきてかゝず）

○志野袋(しのぶくろ)　古金襴等の錦地にて造る底の渡り二寸八分横迫り九寸緣深さ一寸五分ひだ數十二糸を附紐長さ二尺八寸此結法四季十二月裏表有て秘傳とす是も總包の一種にて席上客の前にて始終の結様を替て其手錬を顯す也志野氏に始る故に名とす

○敷紙(しきがみ)　(長二尺七寸短一尺三寸三)小形は(二尺五寸五一尺一寸五)也金地に極彩色の蓬萊島裏は千賀鹽竈を銀地に金泥にて畫き一分餘の厚紙堅固板の如くす然らざれば香具を飾るに妙ならず

○亂箱(みだればこ)　大小有大は(長一尺五寸巾九寸)小は(長一尺巾八寸)緣の反りたるを蛤端といふ梨子地蒔繪の結構を盡したる物是に上件に出る具共を飾り入れて香木たる人席へ捧げ出る也

如斯香立れば多けれど入子或は重りて　亂箱に飾たる處は七品に過ず是だけあれば何香にても出來る也　是は正式に書連れたる物略式は此內幾分を省く況哉眞法とすれば餘程手輕となるべし

▲十種香大意

○連中四五人より少からず十人より多からざる　人數にて日を定め一席に來會す亭主は兼て其香を組支度を整て俟つ客揃ひて側所に立手水し清淨にして席に着茶菓子は隨意(日式は是も禁ず)煙草は堅く禁ずべし煙室內に滿れば香の氣を妨げ自他共に利き損ずるの恐あれば也此他髮香匂袋香水等を遠慮すべき也主方にも香　氣ある花を挿ず總て薰匂ひある物を忌

○記者　茶の七事に半東と云者あるが如し　香本に從ひて事を爲助手也記錄をかく役なれば惡筆にては見苦し客中に　筆達者あれば主人より乞て勤さするも有記錄の書法は式あれば其通にかくべし　香物馴たる人ならば始てにても決して難事にあらず

○香元は飾立たる亂箱を記者は料紙硯箱を捧げて共に出席をﾒ切て客と輪座し　一禮して敷紙を開延其上へ亂箱の香具を出し配置事法あり扨試の香を炷出し是は一是は二是は三と云ふ一順利き終りて是より　本香となる一香三包二三も又三包宛あり之に客香　一包客は試を出さず奈何薰共知れず)を加へ打交て何が何番に出るとも香元も知らずして唯置並たる順に炷出す客は之を試に思ひ比格て一ならむか又二か三かと考へ試になき薰と思へばウ(客と云字の畧也)札を入る一二三共　三宛の上にウ一包加はりて十種となる也事終て其入札を調べて記し又香元より本香の包紙の薰中に剩たるを拔取渡すを調べ記し是と見合せて其　當れるに點をかく試なきウを當たるは二點をかく當らぬは無　點とし之を卷て上客に奉呈しおき香元は記者のかく間に香具を始の如く　亂箱に取片付

て捧げ記者は硯類を持て從ひ勝手に退き改て兩人共出て客と共に記錄を見其功拙を評し笑ひ合ひ樂しむで事全く畢る

○香元は茶の點者の如く稽古せねば出來ざれどお客になるは茶よりも樂で誰でも出來る上客だけ二三度も稽古せれば不都合です記者は書物に顯た人でさへあればよし　何人にても休日に雨でも降て外出の都合惡き時挿花などに替て此美術を翫び給へ若思召あらば　道具持參にて何方へでも參り爲て御めにかけ申べし

（完）

簡易化粧術

白猫子述

婦人の化粧は容顏を艶美にするのみならず、人に對して不敬にならぬやうにするが爲めに、容貌を粧ひ衣服を改め。而して禮を正ふするものなり、然るに世の婦人多くは之を解せず、唯に化粧は醜を裝ひ、容顏を艶美に作り、男子に愛を求めんと欲するものゝ樣に思ふもの往々あり、之れ大ひなる過事なり、故にまづ化粧の大意を示し、以て世の婦人方に過ちなきやうにする事を教へ、次で化粧の方法を述ぶべし、抑も女子は姿の艶美は扨置き、髮の黑くして艶々として顏の美くしからん事を思ふは凡ての人情なり、故にまづ化粧を成さんと欲するに臨み、鏡に向ひて髮を梳つけ、逆上をしづめ、それより身じまひに取かゝるを本意とするものなり。次に白粉を塗るに骨地の處は艶うるはしけれど剝け易く、肉地の處ろは艶うすけれど白粉は塗易し、額又は口元のあたりには肉地殊に動くこと繁きが故に、自然光澤薄く、又口紅を用ゆるに多く、唇一杯に塗る人あれども、是は口元大きく見へて甚だ見苦しきものなれば、成可く糸目に殘して內より紅を指す方がよろし、一體口紅は唇の色を薄赤く艶ある樣に見せるもの故、成る可く薄く塗けるを以て化粧の仕方とするなり。

▲春の化粧仕方　春は陽氣の盛になり行く時節なれば白粉を濃く塗れば處々にむらの出來て外見惡く且つ春風は顏の色を惡くするもの故まづ化粧をしやうと思ふ時には濟熱湯にて顏を洗ひ、少し冷めたる處ろにて頸筋から耳の後をこつてりと塗り、それより顏にうつり、額と鼻と口元の四方をぴつたりと塗り、中のばしにして眉刷毛にて額よりのばし始め、それより口元の四方を刷き。この餘りにて目の邊を刷くべし、始めより目の邊を刷くはわるし、いづれにしても鼻と口元へは濃く塗り、頰と目の邊りは薄きがよろし、それに紅を少し手掌に取り、眉刷毛にて目尻と眉前の間を薄紅に塗り、又眉刷毛を湯にて塗らし、ザツとごきて額より眼のあたり頰までを刷き、且つ鼻をよけて濡手拭にてソツと押へ、乾きたる時に眉刷毛に浮白粉をつけて鼻と口との邊りを刷きて肉理へ白粉の浸みこむ樣にすれば、次第に美しく艶を出しのぼせても處まだらになる事なしそして耳ばかりへつけ、隨分手掌にて濃く塗るを以て春化粧の仕方とするなり、

▲夏化粧の仕方　夏化粧の仕方は隨分薄くするをよしとす、まづ最初顏をよく洗ひ、顏の少し冷へたるとき顏をまず先へ少しづゝ塗のばし、其手に殘りたるを頸筋へつけ耳の前後にはつけぬ樣にすべし。

▲秋化粧の仕方　秋は時候次第に陰氣となるが故に、人の顏も自然に愛なく見ゆるのみならず、白粉も又色を失ふものなれば、白粉をつける前に薄く下紅粉を引き、濡手拭にてふき取る加減にし、そして目のあたりより眦及び頰の邊りまで紅をほんのりと極く薄くつけ、それより中白粉をこつてりすれば白粉の冷めるに隨ひ、自然に下の紅がうつりて

ハツキリと陽氣に見へて美し、且つ頸筋隨分濃く顏は中位に耳の前後も又塗る方よろし。

▲冬化粧の仕方　冬は時候尤も寒く火鉢に寄添などして火氣の離れる間なき故、隨分厚化粧にするをよしとす、又耳の周に薄く紅を塗る時は殊の外愛嬌を增して顏の色艶を出すが故、自から陽氣を持ちて華かに美しくなるなり乍併あまり濃きをよしとして塗る時は見苦しきものなり、且つ頰の邊まで紅に少し白粉を交せ冷して、眉刷毛にて塗る時は火氣の溫まるに隨ひ紅色を持ちてうるはしく見ゆるものなり。

▲薄化粧の仕方　婦人若し薄化粧を成さんと思へば、まづ熱き湯にてとつくりと顏、頸筋、襟元をよく洗ひ、よく冷まし、其上へ白粉を薄きて顏にすり込み、暫時して濕手拭を絞りてサツト拭き、鼻の先と口の邊りへ白粉を少しすり込み、その乾きたる時眉刷毛にて延ばし、いづれも薄化粧にす、頸筋の濃さは見苦し顏と頸筋との際立ぬ樣にするものなり。

▲湯上り化粧　湯上り後の化粧はまづ風呂へ入るにあまり熱からぬ加減にしてゆつくりと、顏は勿論總身を洗ひ落し、上るに及んで總身をよく拭とり、冷し、汗の出づる內に鏡に向ひて其汗にて白粉をのばし、顏から頸筋までよくすり込んでゐる內に汗も出やみ、身體冷めるに隨て白粉が肉理に浸み込みて自然の色に見へて尤も美しきものなり、若又白粉が浸込まざれば手拭を絞りてサツト拭き、眉刷毛にて鼻と口元ばかりを刷くべし、如何ほど汗が出ても解ける憂なし。

▲即席化粧　即席化粧は杉原紙をよくもみてとつくりと顏を拭きとり、乾かし眉刷毛にて粉おしろいをつけて顏中を刷き手拭に紅をつけて唇をふくばかりなり。

▲娘の化粧　むすめの時分は顏に脂の多く浮くものなれば、極上等の石鹼又は紫屋洗粉の類にて化粧前に顏、又は襟首筋等を洗ひ、そして白粉は中位にすべし、且つ首筋に脚をつけ耳の後生え際をキツパリとして、喉の窪ろは捨置くがよし、始より目の際へ白粉をつければ濃く見へてわるし、目のふちへ白粉を濃くすれば鼻が低く、眼が窪んで外見惡し、且つ額は二割方も薄くつけるがよし、額に白粉を厚くつけたるは俗にオデコと唱ふる如く見苦し、娘の內は成べく優美の裝飾を以て第一とすべし。

▲花嫁の化粧　それは極濃きを以て佳とす、其故はすべて嫁入の夜は白小袖より色直しは縫箔を交へ金色の織物を着るもの故薄化粧にては配合わるし、依て化粧にまで第一の心得とするは兩耳の中と耳の前後を隨分丁寧に濃く化粧すべし、且つ嫁御はその夜何となく恥かしく思ふ者なれば兎角橫向に成たがるものなれば耳の中が人の目にかゝり、且つ當人は恥かしさが爲め逆上するものなれば、耳又は頰の邊り眞赤になる故化粧は成るべく厚くすべし。

▲丸顏の化粧　丸顏にもいろ〳〵あれどあまり丸過ぎたる顏は格好甚だよろしからず、丸ぽちやなど言へどもこれは俗に下膨れと言ひて趣きあり、唯丸顏といへば化粧の仕方餘程念を入れねばならず、まづ丸顏の化粧は耳の後ろより頸すじを中白粉にて髱の下を薄くし、顏を厚く額の生え下りは長く耳の前の生へ下りも長くする方がよろしくわり、若又生ひ下りの短かき人は耳こぶまで生ひ下りのある如くに地をよけて白粉を塗るがよろし、又髮の格好は髷は小く鬢は長く髱に高く結びたるが格好よく見へるものなり。

▲長顏の化粧　顏の長き女を俗に馬顏などゝいひて厭ふものなるが此の如き顏は愛なくして化粧の仕方甚だ難儀なり、故にまづ頸筋より耳までを中白粉にして喉邊までは厚き白粉にし顏は薄化粧がよし、額の

生下りは低く作り、耳の生下りは随分短くそり上げて耳の白粉は顔の通りに薄化粧がよし、又顔と耳とに濃き淡きが出來ては誠に見苦しく見ゆるものなれば、宜しく注意しなければならず又髪は髷、鬢を多く出して髷を低く結ふのがよろし。

▲鼻低き人の化粧　鼻の低き婦人は眉の間より鼻筋ばかりに鬢附をよく練りて摺りこみ、又鼻の兩方へ薄紅を引き暫時して白粉を塗れば生來鼻低の婦人も決して低くは見へぬものなり。

▲鼻高顔の化粧　これはまづ額と口元との端ばかりに油を塗り白粉は厚く且つ鼻ばかりは薄くすべし、然る時は自分鏡に向ふ時は鼻の先が剝けたる様に見ゆるものなれど、人の眼には鼻が通例のやうに見へて格好よし、されば白粉の濃淡にて顔の釣合がよし。

▲圓眼の化粧　眼の大なる人の化粧は上瞼と下瞼にとつくり白粉をつけ、眉を少しそりあげ、そこへ紅を程よく引き且つ針ほどの大さに眼尻へ紅を指す時は陽氣にして釣合よし。

▲唇の厚き人の化粧　此の化粧は下唇ばかりにたつぷりと紅を指し、そして鬢附油をよく〱練りて上下共に口の周りにすりこみ、それより白粉をさしその上にて上唇へ紅を程よくさすべし。

▲高頬の化粧　ほうの高き人の化粧は眼の兩方へ紅粉をたつぷり附て頬と鼻筋口の端ばかりに油を塗り、其上に白粉を塗れば兩の頬が桜色に見へて中白になる故顔の釣合がよく頬の高き處ろが隠れて外見よろしくなるものなり。

▲ソバカスの化粧　雀斑ある婦人の顔に化粧をするには花いかだを用ひ其上厚化粧が尤も宜し、是には最初紅を薄く溶き、化粧を成たる上に其紅を桃色位にひき、其上を眉刷毛にてサツト刷き、頬と額は少薄くすれば雀斑は殆ど見へず、自然失せたる如くに成て美くなる者也。

綠陰の高野山

紀州高野山は日本三靈場の一にして其の開基の著るき其の名蹟の多き又其の地の幽翠浄深なる誠に奇特の名山と稱すべし、其地は海拔三千丈、地幽邃にして蒼鬱たる樹木枝を交へ、溪水潺々として四時盡る事なく、雲霧濃かにして炎熱天を焼く盛夏の候と雖、涼風颯々衣袂を拂ひ、蚊蚋焚くべき勞苦もなく、時鳥は前山後谷に其聲を絶たず、秋風は早くより音づれて翠綠たる樹木の間紅いの色濃きを見るべく、千草のもとに啼く虫の音、つま戀ふる鹿の聲もあはれにて、眞如の月は高く樹梢に懸り、靜寂の感は到底須磨明石の景致と比すべくもあらず、雪は秋の末より降り初め、十一月の末つ頃は動もすれば道路を埋め、三月の始め頃迄は深さ三尺許り降り積み、「降る雪の積ればいとゞ高野山うき世の道やへだて果つらん」と飛鳥井榮雅卿の詠じけん、往き交ふ僧侶は雪裕衣といへるを着け、雪靴の底には鋭利なる釘を打ちつけて歩む、かゝれば寒さも殊に烈しく、厚き瓦も破れて其用を爲さゞるが故、大塔皆或は銅瓦を以て或は檜瓦を以て葺きたり、寛は日に熱湯を以て氷を碎き、陽氣を通ふる室　最中は、大塔層樓より積雪の頽るゝ響恰も磐石の隕るが如く、昔は土室とて塗りこめたる奢室に冬籠せしとか、今も院々の室に大なる爐を切り、火袋を作りて烟を通じ、柚を焚きて寒威を防ぐ、是彼土室の遺風なりとかや、かくて冬去り春の初めとなれば、梅、桃、櫻一時に開きて色香を競ひ、鳥の音の早きは鶺鴒にして、雪中より其幽寂たる聲を放ち、次いで鶯は谷の戸より深い梢に遷りて嬌音を弄す、やがては爛漫たる花岡、百千鳥囀りて、青陽の春の賑はしさ假令ん方なく、詣者亦徐ろに杖を曳き、香烟縷々として天に冲し、梵音梵唄の聲長閑なり、實に是れ現世の浄界、極楽も遠きにあらざるがごとし詳しき事石倉翠嶺氏著高野山名勝圖會中につまびらかなり。こゝには唯其の一節を抜錄して世の樂靜家にしをりす。



才媛詞藻

塚越停春君選

（天）新樹　　和歌山　公井清子

花の上に胡蝶となりてねし夢は
　覺めて青葉のしげる頃かな

評曰。想詞双絶。
花上胡蝶の夢の語、故事を用ゐ得て陳ならず。

（地）山家路　　京都　三の宮　つゆ子

世の中にわすられはてし山家にも
　神代ながらの道はありけり

評曰。「神代ながら」の一句ありて、忽ちに一大眞理の詠出となる。
想高く語健。

（人）牡丹　　大村二葉

深見草宿れる露のくだけしに
　手折りて悔ゆる頃もありしが

評曰。情景兼至るもの。趣味自ら美し。

秀逸

○○新樹　　越後　坪井わか子

花の色もうつればうつる心とて
　青葉若葉のかげもなつかし

人情自ら此くの如し。歌中直理あり。

○○山家路　　駿河　堀内秋子

宮人のうかれ騒ぎし花散りて
　緑滿る志賀の山家路

獨り盛華の移り易きを歎ずるのみならず、「志賀」の二字を點出し來て、緑て今古を俯仰するの意を示す。趣味自ら深きを見る。

○新樹　　越後　荻野てる子

鶯のおくるゝ聲もあはれなり
　若葉になりし月が瀬の里

「月が瀬の里」の一語ありて、趣味限りなし。唯新樹を詠み

しものなりや、將た晩春を詠みしものなりしや、稍分明ならざる所ありて、題意に緊切ならざるを惜むのみ。

▷○牡丹　甲斐　石原豊子

思ひ知る富みたる花の上にさへ
　廿日と限る色のあはれを

▷○新樹　兵庫　小菊

色香をはきそひし枝もきそはぬも
　ひとつ緑りにしげる頃かな

▶○牡丹　東京　田中恭子

深見草ふかく思ひて培ひし
　しるしは花にあらはれにけり

以上三首、異曲同工にして、共に一大教訓歌となすに足る

▷○牡丹　東京　佐藤千代能子

雨に散る牡丹の一ひら手にとりて
　斯くてある身のゆくえぞ思ふ

▷○新樹　長崎　古賀秀子

若葉しげる木の下蔭にやすらひて
　やがては來る木がらしを思ふ

二者共に是れ榮枯消長の感を歌ひたるもの、歌ひ得て趣味多し。

▷○新樹　東京　林芳子

五百年斧入らぬてふ白山の
　若葉の宮居風かをる也

句意雄健にして、眞に五百年斧入らぬ白山の若葉を歌ふに足る。

▷○新樹　河内　大矢たね子

あらし山花の白雲散りはてゝ
　青葉に松も色なかりけり

○○山家路　東京　織原節子

ところ／＼清水流れて蟬鳴きて
　峠路三里風緑りなり

二者共に、題意を歌ひ得て、能く十二分なるもの歟。

▶○牡丹　石見　宮内登美子

一枝は瓶にもさして愛でましと
　思ひ／＼て廿日經にけり

人情眞に此くの如し。

▶○新樹　安藝　松阪梅子

富士の嶺を空に殘して野も山も
　なべて若葉に埋れにけり

蕪村曰。富士ひとつ埋み殘して若葉かな。

▷○新樹　松江　岸崎濤子

時すぎし旅のうらみも忘れけり
　若葉嬉しき嵯峨やみよしの

嵯峨に、芳野に、花を見ずして新緑を見る、亦風流。

人間劃る處佳趣あり。

、○牡丹　石見　青柳秀子

そり〳〵は鑿の音して牡丹咲く
　佛師が庭の午静かなり

光景見るが如し。

、○牡丹　和歌山　久保あい子

御苑生に牡丹摘みます姫宮の
　あけの袴に日は斜なり

富艶の光景、一の「斜」の字を點して、後面に寓意あるを知らしむ。

○新樹　秋田　小堀まつ子

昨日まで花を惜みし木の下に
　若葉をめづる夏は來にけり

無難の作也。

、○新樹　東京　佐藤千代能子

照る月のくまとなりてもなか〳〵に
　庭の葉櫻なつかしきかな

流石は婦人の歌也、何處までも忠厚の意を失はざること喜ぶべし。

、○新樹　津　米澤よし子

花散りて川添一里人もなし
　あはれ葉櫻月たゞ淡し

詩趣饒。

、○新樹　伯耆　柏木清子

ときは木もおなじ緑りに茂りあひて
　いづれ櫻の梢なるらむ

、○新樹　大坂　大高子

野も山もおなじ緑りにしげりあひ
　いづれ櫻の梢なるらむ

二者何ぞ相似たるの甚しき。

、○牡丹　河内　櫻井喜子

露重き牡丹くづれて蝶舞ひて
　垣根まばゆく日はさしのぼる

眞に富艶の光景。

○牡丹　熊本　安田文子

富と云ひ貴しといふ花なれば
　うべまばゆくも咲き匂ふらむ

牡丹を詠ずるの意十分也。

○山家路　大坂　總子

若緑りしげれる山路わけ行けば
　かけひの水の音さやかなり

實況なるべし。

、○新樹　備中　大西美佐尾

村はづれ若葉の蔭に駒とめて

返り見し昔の面影に立つ

好詩なれども、副意却て害となるの恐れなからず。

、○牡丹　東京　菊野花子

ことさらに白き牡丹の花燃えて
精とも見ましき胡蝶たはるゝ

着想奇。

○新樹　信濃　錦織さち子

山鳩のをり〳〵鳴きて卅六里
和田の見渡したゝ若緑り

和田嶽點目。

○新樹　廣島　いち子

限樫のみづ枝しげりて天つ日の
かげさへうとくなれる頃かな

よく題意を詠めり。

ゝ○山家路。　河内　矢寺はぎ子

新らしき道もひらけて新らしき
人も通へり里の中路

文明の風は、山村僻邑にも臻る。

○新樹　東京　三成君子

みづ枝さす木々の緑は春花に
そへても見たく思ほゆるかな

人情自ら餘らまるを得す。

○新樹　上總　齋藤美智代子

水青きみ池に盆の月見えて
若葉涼しき産土の杜

何等清爽の景ぞ。

○牡丹　鳥取　砂川澄子

千よろづの花の色香をおのが身に
集めて咲くか御園の牡丹

極力豐艷を狀す。

○新樹　東京　高宮安子

花になつむ心もとけてなつかしく
しげりにけりなは山しげ山

無難の句と申すべし。

○新樹　京都　川北息枝

野も山もひとつ緑りになりにけり
花の衣のかげものこさで

面白し。

○新樹　尾の道　橋本とよ

釣床に夢をのせつゝぬる稚子の
面かげ青き若葉影かな

着想凡ならず。

○新樹　水戸　榊春子

ゆくてたゝ何鳥かなく聲のして

青葉さびしき木曾の山路

深山の新緑を詠みたるもの。

○新樹　名古屋　湯地くに

しげり行く若葉の梢かげさして
文見る窓も小暗かりけり

好句。

佳調

（新樹、牡丹、山家路）

● 前橋　小林ゆき子
森かげに炊ぐ烟りの立つみえて鶏の聲さへきこゆなりけり

● 相模　田中千賀子
花ちりし庭のこのまの閒ごとにみどりそひつゝ繁くなりゆく

● 相模　藤堂しげ
大かたの花は過ぎにし此頃に今をさかりと咲牡丹かな

● 遠江　比奈地絲子
喘ぎつゝ登る山路はこゞしくも峯に白雲谷に眞清水

● 駿河　菊地武子
江にそへる桃の林に風立ちて青葉がくれに白帆はせ行く

● 備後　木曾霜葉
丸窓の中より琴の音もれて若葉にそゞく雨靜かなり

● 三河　永田きん
新樹の若葉しめりてこの頃はこがひする子や暇なからん

● 兵庫　柳田のぶ子
出征の夫を見送るあまたゝき露のこぼれて牡丹ひらきぬ

● 京都　太田妙子
散る花の風ひもなくて中々に青葉の影は靜なりけけり

● 備後　篤子
深見草春のなごりに咲きにけり誰とながめむ友あらなくに

● 伊勢　石王よし枝
歌によみ文につゞりて今日も又紅にほふ牡丹と遊ぶ

● 備後　黒木武子
樵夫がうたふ鄙歌たね〲に木立かくれに辿り行く道

● 姫路　青山みどり
咲にけり色くれないのふかみ草こぼれて匂ふ花の下露

● 靜岡　鈴木ゆき
庭の面の小暗きまでに若葉してみどり涼しき夏座敷かな

● 京都　四辻清子
水くみてかへる細道つゝらなりそこともしれず時鳥なく

● 長崎　志田てる子
姫君の琴の音たねて廣庭の牡丹くづれて雨しづかなり

● 柳田俊子
またしてもありしむかしの忍ばるゝ遺愛の牡丹花くづれては

● 太田とも子
きゝなれぬ鳥のこゑして御陵のしげれる木々は赤若葉せり

● 本所　天瀬ますね
そよ風に槍の露のかつおちて青葉ゆかしき庭の面哉

● 茨城　大橋夏子

●あばら屋のあれたる庭に咲きいでゝ牡丹の花のたゞ白きかな　下總　石渡つれ子

●咲きいでしすがたは神か乙女子のあかき心かほう丹の花　河内　耳　子

●夏くれば庭の木立のしげりあひてみどり涼しきわか楓かな　奈良　成田鈴子

●麥うれり見ゆつかくれつ山里の繪かける如き畑の中道　岩代　志賀隆子

●山奥に一人すむ身の一つ家も一筋道ふみちはありけり　鎌倉　坂本ふゆ

●なごりなく五月雨はれてうつくしく若葉の露に夕日かゞやく　大阪　田中常子

●美しき姫君立たす庭の面にいろ香きそふか牡丹一本　備中　武藤靜枝

●わかれ路にたてる石ぶみ苔むしていづれたどらんみ山べの村　熊本　安田文子

●世をのがれ人に知られぬ山住みの道へるみちは岩根松が根　安藝　松阪梅子

●不動刻む鑿の音低う響く也牡丹花ちる雨寒き夕　東京　はる子

●釜の湯のたぎる音して主見へずまひろしつかに牡丹花散る　伏見　みき子

●見渡せばかなたこなたも緑して見るからすゞし夏の山邊　芝　きく子

●しろきあかきそのふの牡丹さきにけりいづれを折りてかめにさゝまし　大阪　武田まさ子

●茂りつゝ月だにもらぬ若葉蔭を殘さぬ夏の山影　新潟　前崎照子

●時鳥とひしときゝしそれよりは若葉のかげにしたしまれつゝ　神田　高宮安子

●花にあひし心さまして夕風にわかばすゞしき夏となりけり　栃木　波多野まさ子

●ふる雨に名殘の花も散り果てゝ若葉に夏の早き山里　尾張　森みよ子

●なつかしき花にわかれし此頃はまたなつかしき青葉茂れる　熊本　永田とし子

●右左うねり〳〵し山道をおぼつかなくも獨行くなり　津市　永田和子

●玉だれのおくふかみ草咲きしよりこてふも軒をはなれざりけり　芝　和志田宗子

●木枝さす若葉にくらき堤傳ひ繪日傘一つ見ゆつ隱れつ　麻布　富内緑

●花籠の白き牡丹をたづさへてたてる少女の姿うるはし　小石川　渡部かめ子

●住みなれて見れば都よ山路とて月も日も照り四季の花も咲く　長崎　志田てる子

●公園の紀念碑なかば見えぬ迄青葉しげれりさみだれの頃　長野　中原みつゑ

●みいくさに夫は召されて只一人一人ながめぬ庭の牡丹を　和歌山　森しげ尾

吉野山花の衣をぬぎすてゝ青きひとへになりにけるかな
●伊勢　住子
おしまれし花もいつしか散りはてゝ若葉涼しき庭の面かな
●磐城　水谷茎子
庭の面に一もと咲けるふかみ草くれ行く春のかたみとぞみる
●京都　村上古登
桃櫻散りにしあとの淋しさをなぐさめ顔に牡丹花咲く
●大坂　藤本春子
深みどり窓の若葉の茂りあひて夕暮早く成りにける哉
●大坂　星みよし
茂りあふ若葉のもとに立ちよればみどりすゞしき風ぞふき來る
●千葉　中村玉子
手折らむか手折るもをしゝふかみ草もはやはつかになりにけるかな
●本所　酒井すゞ
春もやゝ暮れなん頃の庭のもにひとり時めきさく深見草
●麹町　本多ひろ子
たまほこのまかりまかれる山路を先行く乙女見ねつかくれつ
●横濱　寺田光子
しづ／＼と月昇る見ゆ我窓の茂き若葉のひまにもれつゝ
●上毛　若葉子
傷に病める兄に送らん玉草に寫して遂ねん國の牡丹花
●備後　本村政子
家とせし十万石の城趾も若葉しげりて春の雨ふる
●岐阜　すや子
山櫻散りてし後ははつか草はつかに咲めばしく花もなし

●河内　大矢たれ子
夢にうみてそゞろ見いだす前栽の牡丹にひろの雨しつかなり
●越後　佐藤榮子
しげりあふ若葉の蔭に只だ一人筵へ出し草に坐して書讀む・
●本郷　横田よしの
咲き匂ふ色香も深きふかみ草しばし胡蝶も夢まとかなり
●丹後　藤原政子
朝な／＼露のむすびし深見草むつるゝ蝶にとくる一ひら
●長門　船越由崙
いけ花にせんとて植ゑし白牡丹咲けばさすがに折られざりけり
●靜岡　牧野静子
雫の音のしばしとだべて池のへに牡丹ちるなり五月雨のそら
●大坂　平生よし子
時めける人にたとへんふかみ草いつしか色のさめぬものかは
●大阪　島君代
馬の上の我背我乳子うちまもり父の待ちます家路急かむ
●京都　永松八千代
わさ率へて歸る野山は若葉なりたれとむかしの春や語らむ
●深川　遠藤たみ子
いたつきの師にまゐらすとまなび子が兄のひぞうの牡丹手折りぬ
●伊勢　佐々木らく子
つま木こる人はかへりて夕まぐれ小雨さびしく山ばとのなく
●周防　益森うた子
都なる夫の歸りはなほ五日あはれ園生の牡丹な散りそ
●埼玉　安孫子梅子

山居してましばかりにと朝な夕なかよひなれたる苔の下みち
●　芝　綱康館

はゝきめののこりて清き朝庭に重げに落ちし緋牡丹の花
●　長崎　廣瀬政子

花はちり青葉は茂る山路に昔ほのぐらく迷ふ人もなし
●　京橋　土屋綾子

とことはに苔かみ魂や眠るらん青葉涼しきおくつきところ
●　埼玉　松本るゑ子

日は落てかすむ遠山こくうすくひゞく鐘の音いとかすかなり
●　京都　渡部愛子

きのふまで霞とまがひしおち山も今日はみどりの色のゆかしき
●　木挽　佐藤ふぢ

大方の木々のわかばのしげり合ひてとなりのいへも見へずなりけり
●　麹町　加藤やす

何となう青葉のかげのしたはれて日毎友なき園をさまよふ
●　博多　大田てふ

袂して下る保津の木そこも若葉にそひて涼さ増さりけり
●　横濱　岡竹子

花はとく散りはてぬれど生ひ茂る青葉に山もうるはしきかな
●　兵庫　青葉

花ぶさに蝶もいこひてゑ師去りぬ牡丹畑はたゞ春のかげ
●　駒込　林芳子

十二年心をこめてそだてつる牡丹さきたり白きが一つ
●　愛媛　高橋寅子

風なきも見るから涼しみづむます庭のわか葉のしげり〳〵て
●　名古屋　平野ひで

新みどり庭にみちては消す青の露まよひ入るあかつきの窓
●　近江　外村喜賀子

雨や晴る庭の木立の若みどりしたゝらむまでいろ深うして
●　京都　中西美智子

雲の名をなげゝるこゑすなり若葉しげれる森のはやしに
●　栃木　横山ぎん子

瀧の音右手に聞て雲に入る山路けはしき叡山の里
●　京都　中川あい

見渡せばはてしもしらに東山目もはる〳〵に青葉してけり
●　赤坂　山村久真子

培ひし主人あらず牡丹の花の色香はいや深くして
●　長門　斎藤芳子

痍手負ひし武夫ねむる病の窓に庭の若葉の緑さし添ふ
●　牛込　武久二枝

窓の外に若葉しげりて天ゆ日のかげさへうすくなりにけるかな
●　大坂　篠田いく子

大方のさくらはちりて此頃は春ふかみ草さかりなりけり
●　越後　吉岡梅子

庭の木立雨の名残りの露ちりてわか葉そよ〳〵朝風渡る
●　大阪　稲賀光子

背子とわがふたり眺めしにはのそれよ思ひ出多き深見草かな
●　宮城　渡邊しげ子

しげりあふ木の下山路たどりゆけば里のひとつ屋山吹のちる
●　岩手　大竹ます

山里は春こそよけれのとかなる道の行手やすみれ蒲公英　備中　林　榮子

只一人ひとりよりそふをはしまに牡丹くずれて夕しつかなり　伊豆　白井　芳子

おさな子の足もとをかし若葉さすいてふの蔭の母を尋れて　愛知　中川　しゆう

まど近くよむ文青く見ゆる迄やなぎ楓も若緑せり　本郷　古川　すゝ子

ふみ迷ふ山家の路に雉子立ちてさびしさそふる入相の鐘　滋賀　田中　とみ子

折々はほとゝぎすなく聲のして猶しづかなる郷の路かな　岡山　鵜上　政子

花の寺は若葉の雨に人たえて經の音きよくみとりこぼるゝ　山梨　岡　久代子

村家いでゝ林をめぐる路一里すみれたんぽゝ花吹きつゞく　伯耆　柏木　幸子

日にそへて軒端のさくらみどりして風にくからぬなつは來にけり　香川　前田　君子

笑まひつゝかたりし君をしのびつゝ若葉か本にしばしたゝすむ　茨城　菊地　みれ子

あづまやに花みる人のかけ消えて牡丹香迷ふ夕くれの庭　長野　飯塚　八重子

家ひとつまたいへひとつ見えそめぬ青葉がくれの山の下路　備後　猪原　常子

旅宿にしられぬほとの吹風も若葉のうへに見ゆる凉しさ

思ひかね窓の戸あけてながむれば朧月夜に牡丹くつるゝ　石見　宮内　登美

桃さくら散にしあとをほこりがに色さね〳〵と牡丹花のさく　京都　かゞみ

くすし迎へ急ぐ山路の夜はふけてともし火消えぬ馬つまつきぬ　大阪　田中　常子

花よりもうるはしけれどわが岡の若葉見にとて訪ふ人もなし　長門　梅田　せい子

色も香もふかき心をそのまゝに幾日か匂ふ牡丹の花　秋田　梅田　くに子

七曲り廻り盡せば九折杣か家路のおもしろき哉　近江　外村　すか子

あかす見し花はいつこか影もなし梢はなへて若葉しけりて　眞弓　涙子

傷手受けしせこが知らせのゆめさめてぼたんにほそき春の雨見る　群馬　黒岩　星子

をすの内にふえもきこえて高からぬ綾の檜垣に牡丹咲きみだる　湖南　築山　しげ子

今ぞとてすみれたんぽゝ咲き出でゝ行手になやむ山家路の春　長野　松本　薔薇子

露をだにあらず思ひてはぐゝめる心の色はいや深み草　京都　松田　きく子

いつしかと春の日數もふかみ草ふかき色香に露こぼれけり　甲斐　波木井　常子

兵庫　すゞ子

たつけふりいやまさりけりのぼりゆく馬子の姿の見ねすなるころ

● 熊本 鶴子

若葉ごしとなりの姫がはなれやに文よむこゑのあいらしきかな

● 埼玉 小林恒子

遠く嶺登る人影供の子もうする山家路霧の雲る

● 東京 坂西數代

風かほる檜の若葉の下かげに露ちる玉を小蝶爲ふ

● 麹町 熱田達枝

我友の家見へてより山里は曲れる路の遠くもあるかな

● 大阪 森戸初子

今年生の園の若竹青々と茂るころにもなりにける哉

● 下野 とし子

亡き姉のめで居し庭の深見草つゆおもたげに二つひらきぬ

● 山口 江本しか子

征きし君を慕ふ心のふかみ草主なき宿に獨り咲きけり

● 山口 佐藤君江

山ふかく如何なる人のこもるらん一筋見ゆる谷のかけみち

● 河内 竹内敏子

ゆくりなく思ひ出多き夕まぐれ蝶の羽かげに牡丹くづれぬ

● 埼玉 小笹ちよ子

ふかみどり軒ばもくらく夏木立わかばみつねもなつかしきかな

● 三河 荒川よし子

御社は若葉の中に埋もれてさやかにもるゝ拍手の音

● 前橋 宮内りき子

白牡丹咲ける庭の窓さきにいつしかくれて月の影さす

和歌兼題

夏　海　（〆切六月十五日）（披露七月五日）

綠蔭讀書

軍隊慰問狀の端に

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲家庭日記

▲寫生文　（〆切六月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は原紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙繊にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

からにしき

在杭州　伊藤稱子

此大御代に生れあへる幸多さは、女も八重の汐路の外に夫と共に事に隨ふ事たやすければ、領巾ふる憾も聞えずなれるに、伊藤大人の頑迷なる唐人を教化せはや、と杭洲にものさせつるに隨ひて、緣げるやがて、夫の業をも助くべく伴なはれし稱子の君の彼風土文物の異なれるに、目に見耳に觸るゝごとに、書ておくれるが、いと珍らしくも、めでたくもおぼねて、このまゝに又かへし遣らんもあたらし、と惜しみおぼゆる程、おのれに何にまれ物かけと人のせむるを、よき序とて、あや織みだる此唐錦の一片二片ほころしくもききあたへて、見物がほなるはうしろめたくもおぼねて、頭ねがましき業なりや

三宅龍子しるす

萬のものよしといふとも、いかでこれを限りと見べきやはある、天か下に絶てなき樂土と昔も今も持囃すめる杭の湖も、言ひ出でたらんには、何程のことなるふしあるらむ、たぶふと見たらむに、山と水とのたゝずまひ、いと深からず、また餘り高からで、よき程にとゝなはりたりと云ふばかりぞかし。

年月を高き壁のもとにうち圍まれ折かゞみて、日も月もたゞに小さう大空にかゝりたらむものとのみ、ながむる身には、月一度の湖畔の逍遙、眞に餘のべつべき心地するも、嬉しかりけり。

こゝのみにもあらざめれど、なべて、をみなはよき見物にせらるゝ、煩しきの限りなれば、彼處此處、文の上にのみ知りたるくまぐ\、むかしの跡なども、まのあたり探り知り難きぞ、いと口惜しき業なりける、

唐錦立出て見れば町中おのがじゝなる朝げやものすらむ、賑々しき程なり、犬の子などの様に何處と定めたる宿もなくて、さしあたり日落ちたる所に、身を横たへて、あしたは物の聲する程に、漸う起きたちて茶舘といふに目押しぬぐひ、長き管していと物うげに、烟ふき鳴らして、さて折にふれたる朝餉どもとるなるべし、明るらずば何といふらむ打見は味噌に似たるものなど彼處の限此處の店などによりて賣る、饅頭菓子様のもの蓮葉に盛りたるを、持ち歩きたる、瓜はす様など長やかなるを、其の儘に喰ひ且つ行くなど、人のさまぐ\、手爽にゆらるゝ小籠ごしには得見ぬもあるべし。

滿洲營といふは一街のかぎりにいと異境に入りたらむ様なり、扇子どももてあそびて門に立ちていと長閑なるさまなる多し、女は衣長うて足先ありのまゝに、化粧もいとこちたからで、髮などは耳あらはに引結ひなして、長き廣き竿さしたるなどいちじるし。

事とある折ならでは、用なききむらひどもにて、着たるきぬも破れがちに、めぐりの檣も、あらはにて住みなしたり。

此邊くる所、やがて城門の外なり、かたへは果もなき墓原にて、一つ二つばかり昨日今日のとみゆる新しき棺もあるに、ひとかたは側の苔の上に、葛かつら生ひのぼれる城壁高う連ねたるあたり、人跡せらるゝ所とかや、鳥くろは廿日余といへばいつかは還見もやせむと物おそろしげなるあたりなり。

何となき垣根に夕顏のはひまつはりたる、芽萱ぶきの田舍屋などは千住田甫あたりにも得見つべし、たゝ大なる小なる野豚の、沼の中、道のほとり、などに、鼻打ち鳴らしつゝ居るに、今更こと所なりけりと、覺ねてめざまし。

先づ目に入るは寶淑塔のそゝりたてるさま、今めかしき洋館は似つかはしからずながら、猫岩のきりぎしに、眞白う唐ぶり少し打ませて、塔を

も我庭のものに取てなしたるは、古き畫見る心地す。

此程めづらしき事どもの聞ゆる、故鄕の山の上の湖に比べたらば、少し大きくや、あれはたゞ山懷の奥に、海などの樣にひろ〳〵と、見渡されてげに物深くなど、思ひ入らむ人の、こと心をも起しつべき樣したるを、これはさしもあらず、いづこまでもいと上手の繪めきて、堤の内外いづことすてむかたもなく、とゝのひたるなりける、一つ〳〵の名ところも、さるものから、なほ大方の眺めこそまさりたらめ、ことにいつとなき中にも、あなたの紫道紅葉する程ぞ似るものなき心地するや、氷砕きつゝ舟やりて斷橋のもと殘雪めづるもよし、うち霞みたる蘇堤の春の曙は、みかどの一とほめおき置き給ひし、いと理りとのみ見やらる、猶そことはなく此方の汀に立ちて、晴れてはかゝる夕立雲の景色ながめたる、大和の畫にはいとつき〴〵しかるべく、此程こゝに遊びける人も、いみじう愛でつゝ見たりしとかや、都わたりには、何處といはず人尋ぬべきあたりには、あだめかしく化粧したるが多きを、さはなくて皆自ら慎み靜なる者、あるは布衣にやつれたる僧どもにて、名ある所々守りつゝ、茶さては、たゞ一つの名物なる、藕の粉ども運ぶなり。

昔よりの跡ならでそここゝによき人の莊ども多かり、大かた一とせ莊守のみの家なれば、夏を避けたらむにも、又折々の宴設けむなどに、假りあり、おはしま高う色々に塗りわけたる西の國ぶりなるは、今好みなのみすなる人の目には、いとこよなかるべきも、かゝる山と水との境に立て並べて見たらむには、なほ此國ぶりのみやびたらむに、目とゞめやせむ。

御殿の口など、つたかつら生ひ茂りて折戸もふたげられたるに、よけてつと岩窟めきたるに入りて道のまゝ行けば、木の根を疊きなして椅子にしたるあづまやめきたるがありて、八重一重つぼみ薔花清げなる籬越見下すべうつくりなしたるなどもあり、高う低う處どころ〳〵に透かせたる築地のあなた、廊長うすき見にたるに芭蕉の廣葉風にゆくも、いと靜けし、そこら古き跡たづねにと行きたる人まちて、歸るほどは、莊より湖にとつゞく沼の眞菰に夕風よき程なり。

小簾の外に風布ひるがへしつゝ汀行くほど雷峯に夕照見る、またいとことなり。

此國の暦にて年毎の六月十八日は此ほとりの城門みなとざゝず、水の上に宵月ながむるをなむ許されたる、夜のけはいに如何あらむ、まだ試みぬ樂ながら、朽ちたる塔を側にして、眺めたる水の上の月のかげ實にたぐひあらじとこそ。

門を入る程にかへりみすれば淨慈寺の鐘つきいでたる、そこはかとなう霧迷ひたる夕暮の浪の上を、中は水底にとひゞきわたる音、もの思ひしめる人の心などもぞ、果は沈みはつべう。

此の湖に此ものゝ音ならましかば、あかぬ景色とはいへ、中はそがれたらましを、いでや、ゆきゝ假りある代にあひたる甲斐は、人づてならで天が下の十景とも云ひつべきを、見定め置きてしがな、其程はあやまたず、この晩鐘をこの湖のものにとりきめつべしなど思ふも井の内の蛙の見るかぎりをあげつらふ例にて、これを猫みと思ふひが心にや、いとおぼつかなしかし。

旅行日記

在旭川　藤本鳥羽子

三月四日、金曜、今日と云ふ今日はいよ〳〵住みなれし故鄕を離れ、戀しき懷かしき父君母君、優しの妹、親しき友垣などゝ惜しき袂を別つ事

とはなりぬ。見なれし向ひの山。裏の小川のせゝらぎも昨日に變りて何となふ物悲しげにさながら我に名殘を惜むが如く。軒端に囀づる小鳥の聲もいつになく心ありげに聞ゆるは、あゝ彼れも我と別れを惜むにや。日頃愛でにし圃の白梅の香をり床しく 匂へるも旅立つ身には心苦しく見る物聞くものいづれ涙の種ならぬはなし。されど情け深き背の君の暖かき愛のみ手に導かれ、はろけき北海の山地に趣く妾。前途を望めば何となく心床しく喜ばし。慈愛深き母君は當分の別れなればとて日頃なし給はぬ料理さへ自らなし給ふ有がたさ。兎角なす間に柱時計の十二時を報ぜしに驚き一同晝飯の膳に向ひぬ。母君の心づくしの御料理頂かんとて箸とり上げしが胸こみ上げて食す能はず。そこ〳〵に食事終へ背の君と共に仕度整へ皆々停車場に趣く。頓て親しき友垣數名妾を見送らんとて待合せ給ふ、友情厚き事いと嬉し、されど又別るゝ事の悲しくて何と云ひ出づべき言の葉もなし。間もなく汽車はゴーゴーと走り來りぬ。さらばさらばと互に惜しき袂を別ち。 妾は君と列車に乘りぬ。

窓押開き母君の御顏拜せば言葉もなく唯我顏をのみ打守り給ふ。親愛なる妹は妾が顏をまたゝきもせず打眺め凉しき眼には 露の玉さへきらめきて。プラットホームに佇む姿。あゝいかに別れの苦しかりしよ。されど妾は君の手前を憚りて涙一滴だにこぼさゞりき、汽笛一聲つれなくも車は直に動き初めぬ。見送りの人々さらばさらばと別れを告げて。 見る見る變り行く故鄕の山川いつか眺めむよしもがな。五日午前十時過ぎ恙なく京都に着す。京都に二泊なし。 七日午前十時發の列車に乘り込み翌朝八時過ぎ無事に新橋停車場につく。東京に一週間余滯在なし所々見物して、同十六日上野停車場を午後二時發の列車にのり翌朝八時仙臺に着す仙臺にて休息なし午後八時發の青森行に乘り 翌十八日午後二時過ぎ恙なく青森驛につく。それより旅館に宿り翌朝三時出帆の田子浦丸に乘りぬ。雲氣の空に風いと強く吹き出でたり。 彼方此方、人のうめく聲いといと心細し。兎角なす間にはや自分も心地惡しくて塲へ臥く。 今ははや藥出して呑むべき勇氣さへなく唯苦しさに床の内にてもがくのみ。折しもボーイの食堂へと案内なすも苦しき時には心にくきこゝちぞする。背の君も同じく苦しげに折々といきを洩し給ふのみ。十時頃漸く函館につく。風いと荒きため船出でずとの事務員の報告に。 さらば上陸なさんと相客の一人口を出せば一同贊成なして上陸なす、

翌廿日午前十時函館を出帆なし午後六時頃漸く室蘭に着す。其夜は旅館に宿り翌朝一番列車にて恙なく此旭川に來る。初めての事なれば先づ何より雪の多きに驚く。されど此地にすまふ事と思へば一と先づ落つきし心地して、夜は樂しく背の君と共にゆる〳〵旅行のつかれを休む、

日記の一節

京都帝國大學病院内　福島たづ子

―日愈京都帝國大學病院看護婦見習試驗期日 明午前九時と云ふ前日十八日朝まだきより父母の君は元より 家内一同起き出でゝ妾が此度の固き決心を容れ玉ひ 今午後三時半の列車にかしまたちの用意にいそがはしくさすがに 心しめやかに父母君が前途をいましめ玉へる厚き御言の葉を打きゝ彼是晝飯したゝめ等する間に 車は來りぬれば千萬無量の心をこめたる御機嫌よくとの 一言をかはして我宿を立ち出ぬ二丁斗りも行きて車は右に回れるとたん思はずふりむけば 母君はいとけなき妹を抱きて猶も此方をながめ玉ふ御目には露をや 宿し玉ふらむかゝろく御顏をさけ隠へり今しも妾が車はいかめしき 司令部陸軍病院を左に右には昔に名高き姫路城五重の天主は徐に遠き 天正の昔を忍ばすの價あり

其北にかすかにみゆるは我戀しき亡父君のおくつき所　東光寺山なるに心ひそかに妾が此度の門出の　御暇乞ひ扨は一方ならず生前は愛し玉はりし亡父君今よりは　一人孤立の頼なき身を守り玉へと打拜み思はず落す露しづく人やみるらんと袂ふり上げれば車ははや　停車場へとつきて止まりぬやがて　車夫の深切に切符購ひくれしまゝいと心安く數多の人とゝもに三時半の上り列車にはのりこみけり　扨も古年の雪も消なくに春くれば先づきゝ　初むる鶯の初音垂枝の梅に殘してはるばると馴れぬ旅路の後や先覺束なくも開けゆく　御世の心安き滊車の煙に送られて十年餘り廿年に近き長の春秋風につけ雨につけ御心なやませ　まゐらせたるたらちれの元朝夕に共にうたひ笑ひ　折々は四つの袂思はぬ雨に絞りし事さへある義姉妹のちぎり淺からぬみよ子の　君を後にみて樂しき今よりは古郷名さへやさしき姫路の町も　再び妾をむかへくるゝ時は何時なるらん如何なる樣に妾をむかふらむ等思ひ至れば　何となくはげみてはげみし心さへあやしく動きて　父母君の愛にみちたるやさしき御言葉さては女の身の殊に今迄は何事も唯　父母君が四つの御袂の影に世を忍び浮世の荒波知らぬ　身の明日は最早見るもの聞くもの新敷花の都とは言ひながら住めば同じき　憂世の中紙より薄き人心とやら元より人やりの道にもあらぬ今日の旅路たらちれの君は　强ても止め玉ひしを人誰か理想なからん唯其多くは空想に　終るものゝ幾人の末は面白からぬ結果のみ妾も其一人か　定めなき世に定めなき人の命思はぬにもあられども深くも決せし此度の門出今更　何をか思ふべきと心とりなはせし時は此思ひ雖に明石の町も過ぎ天女の羽衣さがしたき　舞子の松原も黑き煙に名殘やとゞむらん夕暮の鐘の音ひゞく須磨寺の　彼方の森に三つ二つきらめく星の數そいて沖より歸る漁士がいざり　火今日の得物や如何ならん入合告る鐘の音のかすかにつゞく彼方の松林に　はからすやさはぐらむやがてちはやふる神戸の　驛へ着し時は晝をあざむく電燈の光まばゆき頃なりき此里には絶へて　久敷叔母君の居ます處と知るらのから殊に此度の門出再び相見る事はあるとも心のまゝならればと滊車を下りてはるばるとたづれたづれて三の宮なる　叔母君の許へたどりつきし時の嬉しさいとも深切なる一家の人のもてなしに夜の更るも　不知十二時の時計の音に驚きて　明日は六時半の一番滊車にて上京の心組なれば話はつきれどそこそこに臥床に入りぬ扨もうつらうつらと　寐る暇さへも曉の雀の聲に眼をさませば　既に叔母君は朝飯の仕度も整ひ居ればとの事にとび起き時計を見れば　五時四十分心も心ならず御心をこめたる叔母君が厚き情の食膳に向ひてはしとるひまも　急がれそこそこに濟まし叔母君に送られて三の宮驛へ道をいそぎしに　甲斐ありてたどりつきし時はなほ六時には　十分をあますほどなりし一番列車の事なれば乘客も多からずやがて上りくる滊車にのりて　ホツト息をつきぬ常ならば別るゝ積のさすがに驛けかるべきを九時には受驗の覺悟な　ればさきの事のみ考へられて分時も　早く滊車の出づるを願ひぬさるうちに滊笛一聲三の宮を出でゝ情ふかき叔母君にわかれ　八時半と云ふに京都七條驛に着し大學病院へ車の走りつきしは九時に幾　らかを殘す頃なりし其後九時となり十時となりし頃　二階の大學生の講堂にて試驗をすまし体格試驗も濟みし時は午後三時頃是より　病院前の淡路屋方へ身を落ちつけ此日は馴れぬ旅路の一方ならずつかれをおぼゆるまゝ　宵のくちより愛らしき小女がのべ吳れし臥床へ入りぬ此日は妾が生涯の　誠に紀念日なるよ一月十九日吁々今宵は父母君の　定めて妾の身の上話にや夜をふかし玉ふらん夜毎にのぶる臥床の數一つ足らぬ事よ　等情つよき母君の御口よりは出でぬか暫時は樣々なる思につかれし身を　忘れじもいつしか夢の境に入りぬ

歸省日記

大阪　藤田春江

參月卅日、目覺めて空仰ぐ、あけの空漸く澄みて明星の光淡く輝いて居る、「お天氣ですよ」といつのまに來られたやら伯母上は後ろから輕く肩のあたりをたゝかれた、暇乞いもそこ〳〵にして湊町停車場へ、早く早くと車夫に促がされて急いでとび乘つた同時に汽笛一聲、自分はほつと息をついた、夢心地の間に王寺へつくこゝにてのり替へた列車に之も歸省の一人、室島女學校生か居られた。種々談話の中に奈良へ着、下車す、三條通の眺も公園の風景も目にとまらない、松並木をはづれると手貝町又は今小路とう〳〵今在家町の、我家で車は止まつた第一出むかへたのはばあや（之は我等り）それから弟と妹、弟妹等の背長のいたくのびたのはうれしいが祖母上が餘りに年よられた樣な氣がして何とのう心細い。父上母上は少しもお變りはない。久しぶりて樂しい夕食に遇なつた「今宵れて何をか見まし古里の夢は現となれる枕に」と某先生のよまれた歌を今思い出した。

三十一日、快晴、親友、花子さんが來られた。

四月一日、青い青い空には弟が自慢の紙鳳か平然とすまして居る、祖母上は御氣色、殊の外美し、嫁し給へる姉上の許より雞肉玉ふ程なく姉上もこられた、もう寐よとの玉ふ母上のみ聲を幾度となくきゝながら更くるまで語り相つた。

四月四日、風無く雲なし、妹と共に増し近く打出で　暖かな春日に浴した、庭の桃は今盛りである、ふと亡き妹の事を思ひ出した、今年までながらへて居つたならば十四である、五年前、恰ど今日の樣な日であつた今の樣に春日を浴びて人形の衣服縫ふべく　我が鋏ちやりしを辛ふじて縫ひ上げ折から來玉ひし祖母上に見せ參らせて、自ら着せやるべしと人形取り上げたのに袖付縫ひ合せし　故いかに細き人形の手も通らすあたら心づくしの衣なげすてゝ泣き出した時の有樣、ありありと目前に顯はれるやう、自分は咲き揃ふた枝を手折りて妹と共に裏口から出た、我りの小草を縫ふて流れて居る小川に添ふて眞直に東へ行く、杉木立深き所さゝやかなる墓標あゝ之がわが妹の化身である、墓守の心づくしで椿の花が花筒にさゝれてある、携へ來し桃の花をさし添へた、「ものいはぬ花を手むけてものいはぬ、石にぬかつき、われひとりなく、」今年六つになつた妹はいぶかしげに我泣顔をさしのぞく。

四月三日、神武天皇祭で賑ふ花子さんと散歩に出かけた。途ゞ花子さんの從妹にあつて一枝の椿をもらつた自分は最少さ　なそして最色の濃い花を來もてくゝつた少女のかしらに　かざしたうれしげに笑ふた口元ふるひつく程愛らしい花子さんの　自慢せらるゝも無理でない公園へ來た芝生の一部分は師範校の運動場で、今日は在奈良の郡、中、生、がしきりに打球を始めて居た、學校前の八重櫻まだ蕾も見ゑぬ、公園の南端藤の棚の下に休んだこゝに池がある　つのゝ短く切られた鹿がのこ〳〵と出て來た、少女にもらつた椿落れなはてぞと水に浸して取り上げたこぼれし笑それからそれへと小波傳へた、緋鯉が見ゑた、自分は、花の一片を浮べた、集まつた多くの鯉は今紅い小舟をなして行く、若草山の頂から薄黑い小さな雲があらはれただんだん廣がつて　日光は恰ど覆こめたやうにどんよりとなつた。降られては大變と急いで歸つた。

四月四日、八時過沈日影薄く雨の放射たが直くに降つた。花子さんより水仙に歌一首添へて贈りこされた、床に活けて、返歌をしやうと考へたけれど出來ない。

四月五日、午前八時母妹に起さるる麗かな日影が枕元の　障子に當つて居

る、餘り、疲過て極りがわるい、恐る／＼祖母上の御機嫌を伺つた、父上はもう出勤せられて、母上はお針仕事、弟は外出妹は自分につきまとうて居る、明日出立の用意にとりかゝつた、直ぐ出來た。あゝ日は暮れた。明日からはまたあの塵の巷へ行かねばならぬ。夕飯後花子さんは來られた祖母上も妹も一室に集まつた妹は突然立ち 上つてふとんをくるくるとまきそれを、背負つて覺束ない口元できゝかじりの守唄をうたい始めた、「明日はお立か、お名殘り惜ちいや、雨の十日もふればよい、」一座大笑ひ自分はさすがに苦笑した。九時頃妹はねた花子さんは歸られた祖母上は幾度も同じ事を繰々ときさとされてお居間へ歸られた。自分は伏床へもぐりこんだあゝねられるだらふか滊車の音がする、大佛十時の鐘がなつた、四隣漸く靜まる、目はさえて來た、遠くに犬がほへる、うと／＼とれむると思ふと又滊車の音がして目がさめた 犬のなき聲もきこえぬ、忽ち庭の木の葉がばさ／＼と音した、雨かと思ふてふし戸を出て窓の障子をはづした、風だつた様だ芭蕉の非常にゆり動かされて春月が思ひの外にさえて居る、

再びふし戸へ入つたがねられない、折から大佛の十二時の鐘、風の音も途絶えて鼠のさわぐ音が聞えた。それもやんで天地は極めて靜かになつた、あゝねられない、明日の今頃はまたあのせまい室でねなければならぬか、もし今宵一夜の中にあの箱根トンネルがくづれて仕まへばいゝのにと思つてぞつと身ぶるいをした。

竹柏會大會の記

ちま子

竹柏園主人は、南の方清の國の山河をありきめぐり、ねもころに、興り廢りたる國のあと、人情、風俗などを見あきらめて、恙なく歸り給ひぬ。主人の君がこたびの旅行につきて、心をなやましたること三つあり。一つは、主人の君が病後未だ本にかへらざるを强いてたちましゝ事なり。一つは、未だ開けざる國のわからず人に理なきことといひかけられて、いるかひなどおこりはせずやといふことなり。今一つはいかに、黒雲西比利亞に湧起りて滿州の野を蔽ひ、やう／＼に高麗に及ぼし今にも雷をおこし疾風をおこして、海に山になりはためき、吹すさばんといふこと是れなり。さるを旅ゆきを好み給ふ君は、出でてゆくまに／＼健かになりゆき、かなたにものし給ひて後は、珍らしきまろうどとして歡び迎へられ、ゆくさ來さ共に雷なく疾風もおこらずて、三つの憂はたゞ憂にとゞまり、出立ち給ひしよりも肥太りたまひて、出立ちましゝ折の蒼白き面わに引かへ、豐やかなる頰にたゝへし笑をもて、われらにむかひ玉ひし嬉しさ、歡しさ、何物かこれに如かむ。家なる人々をはじめ、友どち、教子らは、みな手の舞足の蹈むところも知らざりき。

後の世は知らず、古へいまだあらざりし壯なるこの企をなし本へましゝ主人の君を迎へて、大にことほがざるべからずと、人々相はかりて其會ひらくことゝなしぬ。日はいつ、皇御祖が皇國の基を常磐堅磐にいはひ定め玉ひし二月十一日。處はいづこ、九段なる偕行社。

前一日醜の露西亞うちきたむべしとの大御言は下されぬ。その前一日はやく仁川にて、旅順口にて、わが軍艦はかの軍艦とたゝかひて大に捷ちぬと傳へられぬ。陸軍には動員令下り、軍夫は募られぬとやうにて、世はまたく軍の装せざるなきに、われ人ともに心勇みて、しらず／＼人ごとに打はやす萬歳といふことを心の中に唱へらるゝにつけても、御歸りの今一月おくれまさむか、いかにとおもひやらるゝなりけり。

長き土間の廊下になれる中ほどに、折れまがりたる梯段あり。のぼりて、

左と右とに分れたる二間は、やがて今日の會場なり。美といふことには極めて縁遠き陸軍士官のあそび場といふことは一目にもしるく、装飾などに心を用ゐたるあともなし。中央には大將の職におはしつるなにがしの宮の御筆のあとかけたる外には、寫眞の額並べかけたるのみ。されど、けふは主人の君の土產に持て來玉ひしよき人の筆のあと、名だたる碑の石ずり、地圖、所々の見とり圖など、四方の壁に所せくかけつられたれば、とみに光いでたる心地ぞせらるゝ。

時來りて、先づ披講より會はひらかれぬ。一歌よめば一椅みち、一歌よめは一椅子みちとやうに、ならべたる椅子の大方ふさがりたる頃、披講は果てぬ。大宮の大御うたげにつらなりましての歸さなればと、石黑の君はいかめしき裝して、胸にあまれる勳章は、脇にも及ばむとせり。中にも淸國のが、けふのこの席にはふさひたるをおぼゆ。その演說ありて、次は人みな待ちのぞみたる主人の君の漫遊談なり。あるは湖南に、あるは三峽に、あるは揚州に、あるは西湖に、至る所として、目に見耳に聞きつることの、一つとして感をひかぬものなく、其感をひきたるものは、大かた今日の談にいでぬはなければ、さながら鶴にのりてまのあたり見たらむが如き心地して、おもしろさ樂しさはいもいはれず。

本館の中に酒ほがひしたる士官あり。手に幅にモール二線まきたる中尉より、四筋の少佐まで十幾人、今日のよき日をことほがむとにか、その中の人にて戰に出でたゝむ人あるにか、そも〳〵また海戰の捷をよろこべるものか。盛に軍歌うたひめぐりありくあり。口笛して音樂にかふるあり。足拍子とるあり。椅子擔ぐあり。皿たゝくあり。果には外廊に出でて、北にむひて千三百メートルの高塔を目ざして、砲うつになぞらふるあり。千態萬狀變化きはまりなく、醉ひて狂ふかと見れば、凛々しく犯すへからさる威風あたりをはらひて、肯はり皆まくる旗の、その音響、その身振にあふれいでゝ、勇ましとも勇ましければ、人々の多くは、今上こす人なき水滸傳の讀手伯山の、心づくしの講談にも耳かさずて、この活劇に見とるゝなりけり。

大きなる木、くねり曲める木、石の火ぶくろ、芝生などある所を下れば、丸く珠の如くなれる小松くばり植られたる、切なせる芝山に出づ。その下はやがて又廣庭なり。そこに集まりて、紀念にと例の寫眞とる。

再び歸りて右の室に入り、二列につらられたる卓を圍みて、ことほぎの盃くみかはさむとするに、もと比叡艦に乘組めりし土屋某の、黄海の戰ばなし、室を動かすが如き大聲に語るに、折から人々みな喜びて手拍ちあふ。

いづれもこのよき日を千代の思出と、帝國の萬歲を唱へ、次に竹柏園の萬歲を唱へつゝわかれちりしは、かの高ぎ燈籠の火かゞやきての後なりき。騒がしかりし本館はた人去りて、森として物の音もなし。立出づれば新らしく塗立てる假家の方に、新らしくよせられたる軍馬の嘶高し。あはれいつまでも忘れじ。日露戰をひらきし年。やがてわが竹柏園主人の君が淸國に遊びし年。

夕窓の二十分間

大坂東區淸堀　ウヰルミナ女學校　岡崎龜鶴子

日の女神の還御のみ車が西の山に隱れてしまふと東の方から、御靈の影を蔽ふやうに紫の帷が下り初めて見る間にずうッと一面に擴がつて遙に見ねて居る大和や河内の山々からすぐ眼の下まで續いて恰度靑毛氈を敷いたやうな麥畑や菜畑や苗代や又あそこ、こゝにある黑ずんだ林

や、山の麓にある氏神の石鳥居も、まばらな村家も不風流に黒い煙を吐いて居る工場の煙突迄皆淡白な靄の薄衣に紫の上衣を重ねて實に美しく粧ふて居る、昼に汚れた人の手が住むで居る下界の景色とは思はれない位、突然南の方に灰色の雨雲が現れた、恰も河内の山と形の競べつこでもするやうに、そして其の上方に夕映の色がうつツて五色の彩をかけたやうで恰度太陽が昇る前の景色のやうだ、不意に温い何んとも云へぬ芳はし微風が頬を撫でたので氣が付くとやさしい聲のひな歌が聞ゆるので主や何所と向ふを見ると麥畑の間を白の手拭に赤いたすき着物は何んだか解らぬがたすきと同じ色の裾除けをした里の小女がチヤン籠に刈草を一ぱい盛つたのを負つて牛を追ひながら向の林の方へ急いで居る、ミユウズの神のさゝやきの様な音をたてゝ麥畑の間をくれり／＼チヨロ／＼と流れて居る小川の土橋を渡つたと思ふと、もう其影は灌木の中に隠れてしまつた、何んだか名殘り惜しいやうな氣がして彼の備正運頭の歌を思ひ浮べて今暫し其姿が止めたかつた、海老茶袴に紫の包み抱えて日々學び舍に通ふ都乙女より蓬屑倍被の女の姿が靜々しく我眼に映じたか知れない、恐らく何んな名手でも此自然の配合を好く描出す る事はできないだらう、こんな空想にふけつて居るといつの間にか靄は消えてしまつて紫の幕はしだいに濃く黒くなつて下界の燈を促すやうに宵の明星が西の空にまたゝき初めた、するともう向ふの山などは見えなくなつてしまつて、あちらこちらに一點、二點、又一點、現はれる燈火か青葉茂つた庭の木立を通して恰度草葉にとまる螢火のやうである、空氣は次第にシツトリとなつて時々吹いて來る温い風は又折ふし畑の方から怪しい香ひを運ぶのである、其度びに垣根の白ばらがぼろ／＼とこぼれて大きな雪片のやうである、もう影は見えぬが軍事でもして居るのであらう、町の童が歌ふ征露軍歌の聲が絶えつ續きつ聞えて居る、不意に此幽僻たる景色を破つて一聲高い汽笛吹き鳴らしつゝ何所行きの列車か匆々として過ぎ去つた、其ひゞきが遠雷のやうに消えて行くと後はヒツソリとしてもう夜の黒幕は全く世を蔽ふてしまつて只見えるものは空に輝く無數の星、家々から漏るゝ螢火のやうな燈火、近きあたりの土藏の白かべ、築山の白つゝじ聞ゆるものは音樂室の重調なオルガンの音と誦むやうに又訴ふるやうにシン／＼とすだくみゝずの単調な聲のみである、窓を閉ぢかけると兵營の軍樂の音が林を越えて何だかシンメリとした物哀れな音色で高く低くひゞいて來る、心ある身には温かな春の夕でも哀れなものである。

夏の蟲

和歌山市新通七丁目森靜方　森しげ尾

九十の春の光もはかなう消え失せて、青葉がくれに、郭公の名のる夏となりぬれば、おほかたの人はいと寂しう思ふめれど、さにはあらず、なか／＼にゆかしき蟲こそ、多かめれ。灌佛の頃、夏草茂き小川の岸邊に螢火のちらほら光りそめしより日にそひて、その數もいやまし、汀の草にすだき、あるは涼しき風のまにまに遠近の水の上をとびちがひて、そが面に百千の黄金の玉をゝどらしたる、いみじうなまめかしきに、五月雨のそぼ降る夜などみ寺の奥に、絶えつ續きつ又絶えつ、三つ四つ二つとび迷ひたる、一入あはれ深し、遣水の涼しう置き渡せし庭に若葉の茂りあへる木の間より一つ二つ光を漏したるもまた捨てがたし、あはれこのものなからましかば、月なき頃の夏の夜いかにいぶせからまし。蟲はその姿の麗はしく、その聲のいみじといふにはあられぞ、古今の序にか

かれしより、歌よむ人の種となりたるこそ、又なくめでたけれ。早苗とる頃、田植の群も散りゆきて、夜もやう〳〵更けゆく程こそあれ。その聲の遠く聞こゆるはいとゆかし、一しきり降りそゝぎたる夕立の空、晴なう晴れ渡りて、名殘の露の清けき蓮の葉の上を、雨蛙のいみじう青きがとびありきて、白がねの玉をみだしたる、趣あるもよし、されどなきは一入ゆかしくなつかし、杜若花の咲き出でたる池の汀に節面白く歌ひそめたる、又なくこそ。五月雨の晴れ間はれ間に初蟬の鳴きそめたる、氣も心もすが〳〵しうて、いひしらず涼し、夏もやうやう深くなりて、日の光いやてりに照りはたゝき草木はみな打ち萎れて、暑さたへがたき日ざかりに蜩の時を得顔に鳴きさかる程こそ、なか〳〵に暑をます心地せらるれ。然はあれど暮れかゝる夏となりて、秋覺ねたる楢になく音もたね〳〵にきこゆるは、こよなうあはれなり。蟋蟀こそ、名を聞くだになつかしけれ。いかでその聲のやさしからぬかは、絲の孤打ち寄する稲葉の上に、涼しげにすみゐたるが、餌など目ざとに見つけて、つと飛びゆきたる、いとらふたし、夕榮の空高くこゝら集ひ遊べるは、いとけだかくてなむ。さはれ夕立の一しづく二しづく降りそめて、あやしき風のあらく〳〵しう吹くにゐたへで、羽もしどろに飛ゆくは、心弱くも又あはれなり。この外草間にすだく名も知らぬ蟲のあはれにゆかしく、菫の君に見すてられたるふるべなき胡蝶のおぼつかなき様したるなど、すべて思すてがたきものゝ多くて、あげなばいまだつきざらむもさのみはとて。

澄ちやん

牛込區若松町百三十七田山方　岡田美知代

思ひ出るも涙の種！　私がまだ故郷の小學校に通つて居た時の事です

私の家の西隣りに、鈴木醫院といふがありまして、そ處に澄ちやんと云つて、それは〳〵可愛い少女がありました。

色白の頰は豊かで、長いまつげの心持目じりの下つた鼻もさう高くは無い、口元にこぼるゝ程の愛嬌を持つた、極めて快活で無邪氣で、ともすれば人に含笑ます顔容！

けれ共もう其れを見る事は出來ないので、澄ちやんは六年以前の夏、專敎寺の墓地に葬られたのです。けれ共屹度今は天使と成つて、かゞやいたエデンの御園に面白く遊んで居ませう。實ら情無い財様でも、よもや彼の憂い可愛ゆい澄ちやんを、冷たい石の下に、獨りぼつちれんれさせる等、そんな事はなさらないでせう。

だが澄ちやんは私が戀しいだらうと思ひます、私はもう懐かしさに氣も狂ふ程なので。

私は酷く澄ちやんが好きでした、澄ちやんも「私姉さんが一番好きよ」と云ひ〳〵しました。

それで一日でも、何かの都合で顔でも見せない時は、何と無く物足らぬ心地がして、果ては怪しきまで、懐しいやうな慕しいやうな、變な心地がするのです。

澄ちやんも亦左様でした、一度お隣りの小母さんが、ま夜中に澄ちやんをだつこして來られた事がありましたが、それは丁度私が學校の運動會で、一日家に居なかつた日でした。

澄ちやんはいつも、私が學校から歸るやいなや「姉ちやん」と云ひながら、さも〳〵待ちかねたといつた樣子で、私の袂にすがるのでした、けれ共其頃私はそれからすぐに、お箏のおさらへに取りかゝるさだめでしたので、心ならずも澄ちやんを待たせて置きました。ですから六段を調べて居ながら、よく友千鳥の手に成つたり等して、又しては母様からお

小言を頂きました思ひ出せば悲しい事ばかり！

澄ちやんがまだ病氣に成らない前でした。私は其頃丁度夏休で歸つて居た兄さん等と一所に、天女濱へ海水浴に行く事に成りましたので、澄ちやんと別れるのは嫌でしたけれど、

「澄ちやん姉さんはね、明日海へ行くから音無しくして待つてらつしやいね」

と、思ひ切つて申ました、澄ちやんはいそがしくいやいやをしながら、

「姉ちやん、澄ちやんもよう、連れてつて頂戴よう」

「澄ちやんは怜悧もんだからそんな事云はないわね、姉ちやん其代りにお土産どつさり買つて來ませう」

「いや！ 澄ちやんは姉ちやんの袂にソッと這入つて行くわ、ね姉ちやんいけなくて？」

私はひしと抱き〆めて、りんごのやうな頬に、熱い唇をつけました、

「私はつれて行き度いのだけれどね……」

思はず云ひますと、

「ね、眼鏡の兄さんがいけないつて？」

眼鏡の兄さんとは一番上の兄さんで、澄ちやんは其眼鏡をこわいものゝ一つにして居るのでした。

私はハッとしました、實は澄ちやんを一所にと、私は申たのですが、他家の小供をつれて行つて、萬一の事でもあつた日には、どう申譯も無いぢやないかと、此兄から叱られたので。

「さうぢやないわ、だがね澄ちやん海へは十才から下の小供は行けないんだよ、もし行くとね、海の中から海神が出て來て食つて了うよ」

罪とは知りながら私は口から出まかせのうそを吐いたのです。

「ぢやよしませうね、澄ちやん海神にとられちや、姉さんに逢へなくなるわね」

何と云う可愛ゆい心でせう！ 私はもう恥かしくて、いつそよそうかとも思ひました、けれども事情は免しませんでした。

それからまた夕かた、涼みがてらに澄ちやんと二人で河原を散歩した時でした。

「姉ちやん人間は死ぬもの？」

「さうよ」

私は僅か五才の澄ちやんにしては餘りにませた質問だとは思ひながら、

「姉ちやんも死ぬのよ」

「何時？」

「澄ちやんより先きに」

「嫌よ、澄ちやんが先きだ」

「だつて澄ちやん、年寄りが先きに死ぬとしたもんだわ、だから私が先きよ」

「嫌々、ぢや一所に、ねね姉ちやん」

「いけませんよ、姉ちやんが先だともう神樣がお定めなんだもの」

「神樣が……ぢやこうしよせう、姉ちやんが今晩死ねば、澄ちやんは明日の朝、ね姉ちやん、神樣は叱らないでせう」

目を細くかぎのやうにして私の膝に乗るのです、私は泣きました、ま何と云ふいぢらしさでせう！

澄ちやんは死んだのです、そして先きに死ぬ筈の私はまだ！ 神樣は何故こう不公平でいらつしやるのでせう。 吁、澄ちやんは嘸私を戀しがつて居るでせう！

初夏の花

和歌山　郭　こてふ

春の光りの花の袖などいへるもはかなうすぎゆきて、緑色ます夏の初めとなりぬれば、おほかたの人は、いと寂しう思ふめれど、さにはあらず、却りてめづらしげなる花の、様々に咲きいづるをや、試に己が目にふれし、艶しく、優しげなるものをとりて、一々その花の色香を語らなむ。床しき梅の香、櫻のねならぬだぐひにはあらねど、うら紫に咲きいでたる藤の花、またなくあはれになむ、其房ながくやさしうかゝれる様などねもいはずめでたし、名處とて角だゝしう咲かせたるは、己が心のまゝにさきかゝれる、野山の花にくらべては興うすし、されど、かゝらむも玉のごとき清水たゝへたる、池の面に影を宿したるは、水底よりやさきいでけんとおもはれて、捨てがたき心地ぞせらる、まして、入江の奥湖の岸邊など、ちりもなきほとりに、こゝしうたてる岩のひまより、若松の枝さし出したるに、紫の色も見ぬめまでさきかゝれる、何にかはたとへつべき、まして心なき海人の、綱引く手休めて、其下陰に舟とゞめたるは、畫によく似たらん心地ぞせらる、また谷一谷藤の咲きおほひたるを高きより見たるも、あはれなるに、吹く風のまに〳〵うちなびきゆく様、紫の波やたつとひとしほうれし、また深き谷のあやふき岩が根を、力にさきみだれたる、紫の花のひまより、白糸かけたらんがごとき瀧つ瀬の、つきいでたる岩に當りては碎け、くだけては當りて、流れ下るなど、見るさへ心地清々し、まして、其花のこぼれたるが、瀧壺に浮きては沈み、しづみては浮き、果ては水瀬にそひて、石のひま〳〵をめぐりつゝ、流れゆくなど、かゝる山奥にこのうつくしきながめありと、いかなる人に知らする心なるらむ、といとゆかしうなむ、あるは、滴る雫もらす紫の、色あるかとあやまたるゝ雨の日のしなび、あるは、さす光りにうら表の、あるかとばかりおもはるゝ月の夕のながめなど、うるはしき姿、數へつくすべくもあらず、いとなんゆかし。

花菖蒲、さてもこの花は、きは立ちて品高かられど賑やかなる庭の面に、幾はたとなくなし並べ、うゑわたしたるさま、いとはねあり、ことに、曉の眺めかずよし、朝の露ほのうすらくひまより、峨眉山月霓裳羽衣、御幸の傘なんど、けふはきのふより、きのふはおとゝひよりも、目新らしう咲き出たる、はた露白く花紫に、八ツ橋をわたるたをやめが、裳裾の匂ひ目出度き、いづれか優ならざらん、沼池などに生立ちて、にごりにしまざるは、只花蓮のみかは、さても、花のかたち、葉のありさま正しくて、臨婀めかず、婀娜ぶるの色なく、ひたすらにりゝしく咲きたるいとめざまし、又大きやかなる花瓶に、おびたゞしく挿したるも、いと目出たし。

卯の花、雨ふりてものしめやかなるあした、うづきの青やかに茂りたるやれ垣のあたりをそゞろあゆめば、雪か綿かと見まがふばかりなる白き花の、をちこちに咲き出でゝ、枝もたわゝにみゆる、いとうつくしうなまめかし、折こそよけれ、花やかなる旭日の、うらゝらと、置きそふ露を照しぬれば、花の色は、一入いみじう覺へてなむ、紫陽花こそすが〳〵しき花はあらじ、雨もちながら空色にさきたる、いとをかしげに、此花は幾度となく、いろかはれど、手毬のやうにまろまろと、小さき花の若干となく集りてさけど、つゆ暑くるしき姿なく、色涼やかにして、夏の花にたがはざんめり、鉢植などにはたけつめの花の大なるよろこべど、垣のきしなどに、おのづからつくろはで咲きたる、打すてがたく詠めやらるゝ也。

唐土の花の王てふふかみ草、今をさかりと咲きみだれたる花の風情こそけだかくもまたうるはしけれ、大きやかなるはなの輪の紅きがあり、白きがあり、あるは淡き、あるは濃きなどとり〳〵なるに、胡蝶の二ツ三

り、香り高ふて舞ふ姿は得もいはれず、風の吹き渡るごとに、軟けき香りの衣に透るこそまたなうゆかしけれ、折しも一雨さとふりたるに、露に粧ふ花の色香は、いやまして、いみじともいみじ。このほかあくがれぬべき花のいと多く、八重山吹の花さかり、こがれもてとりかざりたらんやうなる見れば、去にしむかし、道灌ぬしのこうじたりし、七重八重てふ句のしのばれてをもしろし、露にぬれたる朝ぼらけの欄にも劣らずと云ひけむ、たち花の白く咲き匂ふぞが中より、實のこがれの玉か、とあやまたるゝほど、いみじくさはやかに見ゆるなど、何れもあはれにゆかしからぬはなし。

わかれ

麹町區　加藤やす

(一)いつまでなげき悲しむも
　盡きぬ名殘はつくるまじ
さらばよるさく學ひたへ
　いざや別れん君よ今。

(二)とはいへ三年の其昔
　初めて君を知りしより
花に紅葉に睦びてし
　昔しのべばたゞ涙。

(三)何の氣もなくたち上り
　そと窓おせばおゝ今宵
朧ろにくもる春の月
　鳴きつれ渡る雁一列。

(四)はしめて君と手をとれば
　肩に落ち散る櫻花
櫻樹の下の摘草は
　今も床しきこの菫。

(五)再び君と手をとりて
　樂しき家にかへりにし
嬉しき旅路今もなほ
　忘れぬための此日記。

(六)一と夜そは月清き夜に
　空ゆく雁を眺めつゝ
故郷こひしともろ共に
　なきし涙のそれなくに。

(七)ゆかりの色の菫花
　色もかはらでバイブルを
守りをれどもいかにせむ
　共によし知る君ぞなき。

(八)すぎし日記は今もなほ
　文の手箱に殘れども
今更すぎし樂しさを
　くり返さんもうたてくて。

(九)今し渡りしかりがねは
　我家を經たふにやあらん
親子同胞むつましく
　友もありなんあゝ鳥すら。

(十)今は返らぬ事ながら
　三年の契りあだにして
海山遠くかけへだて
　君は東にわれは西。

(十一)朝夕向ひしこの文机
　あすは誰が手に渡るらむ
共にそだてし菊ばたけ
　ことしは誰か眺むらむ。

(十二)さらばよ君よわかれなむ
　さらば文机別れなむ
なつかしの菊いざさらば
　うつくしかれよ主なくとも。

文苑

家の櫻

巖谷小波

上　恤兵園遊會

永田町なる鹿島侯爵の邸を借りうけて、芝生勝のその廣庭を、園遊會の場所に當て、去年新築のその舞踏室を、餘興の舞臺に當て丶、四月の末の土曜日曜を、此所に開かれた日本婦人會の總會は、今年に限つて切符を賣り出し、その上り高一切を、例の恤兵部に献金する趣向であつた。

總裁宮殿下、其他高貴の方々も御臨場に付き、服裝も其心得あるべく、また履物は男女共、靴或は草履の事と、切符の裏に注意の刷込み、何とやら窮屈さうに聞えるが、其所へ行つては學生の難有さ、袴を仕立卸のにして、リボンの新らしいのを挿して置けば、別に紋付白襟にも及ばずと、氣輕に本郷の寄宿舍を出で、途中も均一の三錢以上は使はず、參謀本部前から此所までは歩いて、少しは埃を被つた靴を、門前で一寸拂いて、受附に切符を渡したのは、有隣女學校の生徒で、杉谷直子、平松操と云ふ、この二人であつた。

直子と操とが、その紫紺の日傘を並べ、海老茶の裳を列ねて、さながら姉妹でもあるかの樣に、連れ立つて歩くのは、蓋し今日が初度では無いので、常から校内でも評判の仲好し、教科書も揃つて買いに行けば、

半襟も對のを見立て、此頃では手蹟まで互ひに似せて、口癖までが傳染るほどの間柄。而もその生國はと聞くと、直子の中國出なるに反して、操は東北の產なのである。

『操さん！　まだ早いと思つたら、もう皆さん來て入らつしやるのねエ。』

『それに今日は、會員の方ばかりぢや無いのだから、それでこんなに賑かなんでせうよ。』

『それはさうですとも。學校へも切符が澤山來てた樣ですから、乾度知つてる方が入らつしやる事よ。』

こんな會話をして居る中に、植込の間の通路を過ぎて、はや廣い芝生へ出た。

見渡せば、一重はゝや若葉に代つて居るが、八重は今を眞盛りの、老木の櫻其所此所に見えて、その間には松の綠、山吹の黃、昨日の雨に一入染まつて、目の覺める樣な芝生の色、是ばかりでも氣は淸々とするのに、南に面した崖の上からは、近く愛宕、山內の木立、果は品川の海まで見渡せて、パノラマでも見る樣な景色。

二人は我知らず步を運ばせて、崖の此方の小山まで來たが、此所には見晴しの爲めの小茶屋が設けられて、はや大分詰めかけて居るので、心怯れて內には入らず、只其邊に彳んで、暫時眺望を貪つて居たが、やがて踵を旋らすと、今度は來衆の各自に就いて、私かに人物觀を初めたのである。

かう云ふ場所では何時でも見る顏の、而も見る度に、服裝を變へて、それをまた見て呉れがしに、彼方此方練つて步くのがあれば、今日が初度の花見でもあるまいに、流行おくれの一調羅を、而も甚だ無器用に着て、何を見ても勿体無げに、キヨト〳〵見廻はつて居るのもある。彼を孔雀と見立てれば、是は旅烏でもあらうか。その中にまた燕とも云ふべきは、忙しげに誰彼と挨拶して、その廣い交際を、鼻にかけた摘眼鏡、それさへ實は素通しと云ふ、例のハイカラ紳士であらう。

來る程の老若男女、見る程に千差萬別、それも正に

一興なので、只さへ餘所珍らしい二人は、つひそれにのみ見惚れて居た。

不意に横間から聲をかけるものがある。

『まア、操さんでは無いか？』

驚いて振り向いた操は、その人をちッと見ると、さも驚つた樣に、

『まア……梅田の叔母さん！……久濶で御座いましたねエ。』

と、一二歩その側へ進んで、丁寧に挨拶をした。

梅田の叔母さんと呼ばれた人は、五十格好の品の好い切髪の婦人で、色は黒いが福々しいその顔に、愛嬌のある笑を湛へて、

『まア、やつぱり操さんでしたナ。どうも先刻から、さうらしいと思つて居ましたが、すつかり東京風に成つてお居でだから、……ホヽヽ。然しまア御機嫌よう！』『叔母さんこそ御變りも御座いませんで、御目出度う存じます。……さうして、あの……何時此方へお出でに成りました？』

『實は去年の夏から來て居ますが、何分邊鄙な所に住んで居るので、何方へも御無沙汰ばかり。……貴女へも御知らせしたいと思つて居ましたが、學校がよく解りませんので……然しまア、好い所で會ひました。』

と、まだ嬉しさうな顔をして、つれ〳〵と操を見て居る。

『まア、私こそちつとも存じませんで、ほんとに申譯が御座いません。で、邊鄙と仰有いますと、あの、何の邊で御座います？』

『大久保に居りますよ。伜の學校の近い所へと思ひまして。』

『アラ、薫さんはまた學校へ入らつしやるんですか？』

『はア、暫時仙臺で隊附に成つて居りましたが、去年から砲工學校へ入りまして。……然しそれも今度の事で、學校は閉鎖に成りましたから、また何處へまゐるか知れません。』

と、云ふ時初めて伏目に成つて、縮珍の鼻緒のすがつて居る、その艸履の褄先を見た。

「アラ、それでは薫さんも、定めし御出征に成るんでせうね？」

「さうだと宜しいのですけれど……何だかまた極まらんと云つて、獨りで焦思て居るのです。」

「まア……」

と云ひかけたが、操は其儘口籠つて、何故かこれも下を向いてしまつた。

側には手持無沙汰さうな直子が、足元に咲いて居る蒲公英の花に、貝殼の樣な少さな蝶の、立ッては止まり、立つては止まりして居るのを、余念なく見入つて居る風をして、實は聞耳を立てゝ居る。



何思つたか切髮の婦人は急に氣を變へて、

「操さん！　幾才にお成りでしたねエ？」

「私？　もう十九で御坐いますよ。」

「オヽ、もうそんなですか……ほんに私の知つて居たのは、まだ十二三の時分で、あれから五

六年は經つて居るから、成る程左樣でせう。で、お國では皆さんお達者ですか？」

「はい、難有う御坐ます。」

「兄さんも御無事で？」

「はい、兄も達者で御坐います。」

「貴女の所は御兄妹が多いから、ほんとに御樂みだけども、私の所は、今では薫一人に成つてしまつたので……」

「左樣で御坐いましたかねエ……。然し、薫さんはあの通り、立派な方に成つて居らしやるんですから、それこそお樂みで御座いますワ。」

「けれども只一人では……」

と、折角擡げられたその顏も、此時また沈みかけて來た。

　此時同伴の者と見えて、四十斗りの律義さうな男が、仙臺平の袴の裳と、牛靴の底を鳴らしながら、急ぎ足で來かゝつて、

「お待たせ申して濟みません。」



と、切髪に向つて會釋をしながら、

「あの……貴女にも何か御話があるとか仰有いまして、奥様が御待ち受けで御坐りますから、今の間に一寸御出でに成つては如何です？」

「さうですか、では一寸伺ひませう。まだよく御挨拶もしなかつたから。」

と、云ひさしてまた操を振り向き、

「では操さん！　失禮ですが私は、一寸お目に掛る方がありますから……アノ、何れまた後刻……今に歸るも參りませう。」

と、言葉を殘して行つてしまつた。

その五六間行き過ぎた後で、直子は漸く進み寄て、

「操さん！」

「なんです？」

「今の方貴女の叔母さん？」

「いゝえ、眞實の叔母ぢやアありません。只鄕國の知つてる方なんですよ。」

「さう、そんなら可いけども、貴女が叔母さんだと云つてるのに、何故私を紹介して下ださらないかと思つて、私ちつと不平だつたのよ。」

「ホヽヽ。貴女も神經質ねエ。私だつて紹介しようと思つたんですけども、其中に行つておしまひ成すつたから……後にまたお目に掛つたら。」

「そりやア何うでも可う御坐いますけども、それぢやアその紹介して貰ふ前に、何う云ふ方だか敎へて下ださいな！」

「あの方梅田さんと云つて、鄕國では家老の次の家柄なんですよ。ですから御維新に成つてから後も、御亭主は梅田貞武と云つて、永い事縣廳に居らしつたんですけども、その方が亡つてからは、利子さんと云ふあの後家さんが、自家で裁縫や琴の稽古をして居らしつたんです。その時分私はまだ子供で、稽古半分によく遊びに行つてましたが、大勢女の子の行く中で、一番私を可愛がつて下だすつたもんですから、それで私の方からも、叔母さん〳〵とよく懷いて、ほんとにいろんな世話を燒かしたんですよ。それに、この五六年以來

は、段々御無沙汰に成つてしまつて、去年から東京へ來て居ると云ふのに、まるで知らないで、一度もお尋ねしなかつたのだから、ほんとに私濟まないんだワ。』

『まア、さうなの？　道理で私も、何所か品のある方だと思つたとよ。で、後から呼びに來た方は？』

『あれは私知りません。』

『何だかあの樣子を見ると、矢張り御國の方らしいのねエ。』

『大方さうでせうよ。それに奧樣ッて云つたのは、多分舊知事の奧樣の事でせう。』

『あゝ、乾度さうよ。貴女ン所の舊知事さんは、富田伯でせう。富田伯の夫人は、丁度この會の委員長ですもの。』

『成る程左樣ねエ。貴女の方が委しい事！』

『そんな事は何うでも可として、それから今の話に薫さんとか云ふのは梅田さんの息子さんですの？』

『はア！』

『陸軍の方と見えてねエ。』

『はア、士官學校を卒業して、もう今中尉に成つてるンでせう。』

『今、何だか砲工學校へ入らしつた樣なお話でしたが、そんなら乾度出來の好い方なのよ。』

『さうでせうとも……昔からよく出來る方で、私達が下の級に居る時分、一番優等で卒業なすつた位ですもの。』

『そんなら貴女よく知つてるのねエ。』

『はア……でも年齡が差つてるから。』

『何の位？』

『多分今年二十五でせう。』

『二十五……貴女は十九ねエ？』

『はア！』

何の氣も無く點頭た操を、橫からちよッと覗き込んで、直子は無言でニッと笑つた。

『まア、をかしな直子さんねエ。』

操は又顏を反向けたが、何の爲めかその頰の色は染つて、折から風に誘はれつゝ、ヒラ〳〵と其所へ歸つ

て來た、緋櫻の花瓣のそれよりも、更に紅く見えたのである。

折から彼方の西洋館で、響き渡る鈴の音は、兼て定められた餘興の合圖。

今まで廣庭に散らばつて居た來衆、皆一齊に鈴の音の方を向いて、甘きに寄る蟻の如くである。

『さ、行きませうよ。』

輕く肩を叩かれた操は、今の鈴の音を聞いたか何うだか？

花あふぎ

糸南泉

今より百十年程前、即ち寛政二年頃、江戸の淺草に、藝妓の花扇といふ者があつた。賤しい業で世を送つたけれど、其の文學、其の技藝、其の孝道に至つては、學者も舌を捲き、德行者も敬意を加へたといふ話しを、某氏が愛藏せらるゝ古い寫本に、事詳しく書いてある。某氏は又其の花扇の眞蹟をも有つてゐらる。頗る見事であるから、余は請うて、これを臨寫した、今其の傳記をかい摘んで、貴女方にお目に懸くるのである。

又當時吉原五明樓に、同じ名の娼妓があつた。そこで遊冶郎どもは、其を幸として、眞の花扇の美事を其の遊女に附會した、それが爲に、多くの人は、今に至るまで、玉と石とを間違へてゐるとは、實に惜いことである、何處までも質さねばならぬ。

人皇第百十六代桃園天皇の御代に、浪士武內式部といふ仲々の學者が、京師で數多の學生を集め、經學詩文を講じながら、機に觸れ折に應じ、勤王の大義を仄めかした。それで無くても、長らくの間、武門の壓制に不平を堪へてゐる公卿達は、硫黃に火といふ程の勢は無くも、いつか同氣相求むといふ道理で、此の式部と、互に手を執ては、唇寒し秋の風といふ按排であつた。

ところが王室の事に就ては、陽に之を尊び、陰では皿

眼の様に睨んでゐる徳川氏の家法として、何條之を見逃さうぞ、惡くい木葉浪士、小癪な長袖輩めと、直に式部を追放ひ、月卿雲客十七人を、夫々譴責した。けれど夫等の人の正義の心は、其から其へと傳つて、遂に山縣大貳藤井右門などの輩が、式部等よりも一層大袈裟に、諸國の大名までも煽ぎ立てゝ、勤王の焔を盛んにした、されば幕府は烈火の如くに怒つて、二人は言ふに及ばず、其の黨を悉く捕へて、或は焰魔の廳に訴へ、或は三途の大河に流すといふ恐ろしい處罰。時に右門の弟藤井回風といふ詩人も、兄の心を詠じたものと見え、憐むべし四十二年の命、最愛の妻が腹には、我が氣象を受繼ぐか繼がぬか知れぬ心殘の胤を遣して、斷頭臺上の露と消えた。

ところで此の胤が即ち本篇の話の種、初めの名は詳かならねど、後に「藤は花回風は扇の異名」といふ因縁で、花扇と名乘つたのである。

清貧場裏に人知らぬ樂地のあつた詩人の家、今や心細い一條の烟も立兼ぬる女の手一つ、一年二年は積善の家に餘慶ありで、或は書物を賣り、或は書畫幅を鬻いで、滴たる涙を、三度の粥に落しては居たれど、餘慶はさう續くものでは無い、斯うなつて見ると、嵐山の櫻も鴨川の水も、昔こそ戀しい夫が詩の友となつたれ、今は却つて、散りて墓なく往いて歸らぬ人を、思ひ出の憂の種、嗚呼迚も暮さねばならぬ恥なら、一層のこと旅の空で、賃仕事なり、洗ひ濯ぎなりして、せめて此の娘が、十五六の年まで、育て上られぬことも、よもやあるまい、然うぢや〳〵と、道も緣も遠い東の親戚を指して出た心細さ。寢兒の守は何處へ行く山越えて里越えて、憐れな母子は江戸は淺草の從兄某を便つたのである。

某は鳶の親方、豫想外の男。「お前達は能まあ便つてくれた、及ばずながら、力にもならうよ、當分二三年は此所を我が家と思つて遠慮にや及ばねい、其の中に又棚から牡丹餅が落ちねいものでもねい。」と此方が半分も言はぬ中に何の心配が何處の國にあるものか、といふ樣な嬉しい言葉、果して此の母子の爲に天幸を與ふ

る時があらうか。

「牡丹餅棚に無し、棚に入れて始て有り」と誰やらが言つた通り、天は自ら助くる人を助くるので、唯徒らに幸を待つてゐても、決して來るものでは無い、啻に幸の來らぬばかりで無く、色々の不仕合が打續くものである。此の母子は唯空しく幸を待つたわけでは無いが、如何なる天の惡みであらうか、此の娘が五歳といふ春に親とも兄とも賴む某は空しく此世を去つた。今は誰に賴らん人も無い、勿論何を賣る物も無い、儲何うしたら善からうかと、途方に暮れ、思案に明すその中に、不圖思ひ就いたのは、外でも無い、世が世で有つた折、何の氣なしに覺えておいた活花の稽古今は二人の露命を繫ぐ助けにしようといふ決心で、藤花庵といふ細々とした看板を揭げた。幕府の衰運疾に兆してはゐるけれど、世は太平打續き、上も下も花鳥風月を樂むといふ狀態、それに連れて茶の湯活花は日を追うて盛んになり、從つて藤花庵の門人も次第に增して、今は娘を敎育しながら、何うか斯うか心配の要らぬ樣になつた。娘は日增に美しくなり、咲かば匂はん計の顏色、それで才氣學問は一を聞いて十を知り、十を知つて十を行ふ。であるから母に對しての孝行は又格別である、七歳八歳の惡まれ盛りから、既に大人も及ばぬ德行は、此の娘の天性であつて、如何に不愉快な時でも、喜ばしい顏色と婉しい言葉とを以て親の心を和らげてゐた、朝は母の起き出でぬ中に拭掃除から炊爨の事まで、整然と濟して、母の顏を覗く、この覗くのは千萬無量の誠が籠つてゐるので、母をして一分時でも長く眠らせておきたい、と言つて又一分時も早く母と樂しい話しがして見たいからである、母は覗かるれば、其の誠が通ずるものと見え、何となく心が淸々として目が覺むる、覺むれば互に抱き附きたい程の懷かしさ、否抱きしむることも屢あるのである。晩は又飮食器一切の物さつぱりと洗ひ、明日の仕掛など殘る隈なく齊うて、其から又母の肩を叩き、母の足を擦りながら、或は母が來し方の話を聽き、或は己れが行末の樂しさを語る。母眠りに就けば、淋しい燈火を挑げて

古今の聖賢を友とする。これが一日か二日の事なら誰でも行ふかは知れぬが此の女は續くばかりでなく、日に増し其の度を高むるばかりであつた。

歳月は駿馬激流の進むが如くに進み、娘は早鬼も十八といふ年になつた、澄る丶計の美しさ、母は嘸や樂しく眺むるであらう。然るに世は思ふ通りに行かぬもので、不幸は又二人の身に降つて來て、母は今の世ならば、肺結核とでもいふやうな、重い病にかゝる、生來健康な質で無い其の身が、斯うなつては、何うして花の稽古が出來よう、唯床の間には、心無しの燕子花が客待顔に散り殘つてをれど、弟子は次第に足を遠ざけ病は益々重くなる。醫者は生魚の類をどし〱食はせ、高價の藥を惜まず服すれば、或は治らぬとも限らぬと言ふ。して見れば、望みの綱が切れ果たといふ譯では無いが、其の綱繋ぐ物が無くてはならぬ、赤誠全身に滿ちてゐる此の孝女が心の中果して如何に〱。嗚呼何うしたら善からう斯うしたら善からうと、千々に思ひを碎いた末、まゝよ白拍子となつてゝも、其の生魚其の藥奉らずばあるべからずと、金剛の心を以て決した。此時からして、花扇と名乘つたのである。

如何に覺悟はしたとは言ひながら、一點浮かれた心の無い花扇何うして有觸れた猥がはしい歌や、褻らはしい舞を奏づることが出來よう、迸らうとする涙を飲んで亡き父を慕ひ、病む母を思ふ情を、自ら今様に作り例の嚠喨たる聲で、悲しむが如く、訴ふるが如く、或は琴、或は琵琶に彈じ出せば縉紳の膽を寒からしめ、君子の同情を想き起さした。數多ある客の中には、其の窈窕たる姿ばかりを愛で、其の袖引いで見る者もある、されど彼女は、襟を正うして、母あるを語る、其の凛としたる樣、其の氣高い風、如何なる者も、取り附く島が無い、であるから誰も鬱晴しに彼女を招くのでは無くて、唯其の孝情を訴へさする爲である。或日の事招かるゝが儘に、或る料理亭に到れば、色黒な眼光鋭い男が聞くところに依れば、汝は孝心深い女であると、いざ一曲思ふ節を歌へよと言ふ。して君は何くの御方に候やと問へば、我は上毛の高山彦九郎なりと

答ふ。さらばと花扇は聲慄はして、父が正義に斃れし
を訴ふ、其の音愴々、其の聲悲し、彦九郎はら〳〵と
泣く、花扇もさめ〴〵と泣く、無骨なる大丈夫、嬋妍
たる女丈夫、互に手を執つて、其心を慰めたといふ、
斯樣な風であつたから、仁者義人の惠みを受けて、多
少の金錢を得たけれども、彼女が口腹を肥すこと更に
無く、唯悉く生魚と藥との料にして了つた。月日は
早いものとは言ひながら、五年といふ長い間、一日の
如くに、倦まず撓まず、誠を盡せども、病は刻一刻に
進みて、身体は瘦せ衰へ、時は寛政七年の秋の暮、萬
木枯れ凋むと共に、永い眠りに就いた、彼女は何程覗
いたとて、其の目は覺めぬ、嗚呼今は誰が爲に歌はん、
誰が爲に彈せんや。

其後彼女は、矢張母の流を續いで、藤花庵の看板を掲
げ、詩を賦し歌を詠み、折に觸ては、勤王愛國の志
をも洩したといふことである。

母が倘病床にあつた節、外國人より贈つた詩、

綽約氷姿似紫雲　清歌妙舞更能文　脩行孝道
無雙侶　聲擧京華得上聞

江戶有名妓花扇者、美有姿、客涉獵文藝、家
有老親、更能曲盡孝道、余來崎陽十餘年
矣。嬌麗靜美風流跌宕之輩雖不乏人、獨難其
孝而能文也、余聞之不勝神往、因賦一
絕郵寄云　苕溪　費晴湖□□

伊人道阻長、邦媛溯清揚、國色嫻閑雅、神娥羨淡粧、
花嬌王氏美、扇詠婕好章、莫謂東都遠　崎陽
一葦航
長崎客館題寄江都花扇美人五律一章
古虞　姚中一□□

右の詩に依れば、其の孝道の譽れが、外國の天子にま
で聞えたものと見ゆ、今や交通頻繁電信は蜘蛛の巣の
如く、鐵道は西比利亞の平原にまで敷かれたり。一人
の孝子あつて、異國の皇帝を感ぜしめつゝあるか、問
かまほしく〳〵。

倘花扇の一句を左に錄す。

忍べよとかたみにかへて見し春の
俤さらぬ秋の夜の月

彙報

▲華族女學校運動會と皇后陛下行啓

華族女學校にては去月十日第十八回春季運動會を擧行したり、皇后陛下には當日御臨御あらせらるゝ由仰出されたるに付同校にては是より先櫻花紋章の紫幕を打廻し各般奉迎の準備を整へ御先着の常宮、周宮、富美宮、泰宮四内親王殿下、東伏見宮依仁親王妃周子、山階宮菊麿王妃常子、伏見宮博恭王妃經子、梨本宮守正王妃伊都子の四殿下を始め細川校長、下田學監等玄關に奉迎し、陛下には君が代吹奏中に御降車あり校長の御先導にて樓上便殿に入らせられ各内親王及各宮妃殿下に御對顔校長學監幹事及び來賓英國人マッコール嬢、同隨員に拜謁仰付けられ御少憩あり運動場正面(東向)の御高覧所に成らせられ當日の次第第六軍艦遊びより第十二迄御覧あり正午一先づ御退場、樓上便殿にて各殿下と御晝餐を食しめされ午後一時より又第十三ローンテニス以下順次御覧の上御氣色麗はしく四時頃還啓仰出されたり當日　陛下よりは生徒一同に御菓子を賜はり東宮妃殿下よりは錦小路主事心得を御差遣に相成り御菓子料を御下賜ありたり來賓の重なるは德川、島津公爵夫人、鍋島、木戸侯爵夫人、板垣、廣澤伯、稻葉子等各有爵者並に英國公使マクドナルド夫人、マッコール嬢、同隨員セント、オバーン嬢、マギー夫人等數十名、學校職員生徒の家族參觀者は百餘名頗る盛況なりし。

▲日本女子大學校春季運動會

同校の內規は每年秋季に於て公開運動を催す定めなるが、本年より春秋の二回とし且つ春季の會は生徒催主となり單に學校內部の教職員のみを聘して催すことゝなり、其第一回を五月十四日に擧行せしが、生憎く當日は微雨ありしため中止して更に同月十八日に更めて行はれたり前に云へる如く此會は生徒が主となりて行ふものなれば運動準備委員も各學級より二三名づゝ撰出して當日の演技を定め、戲場の設備運動用具の整頓等少しも教師の補助を假らずして擔當遂行し、殊に樂隊は秋季のは恒に陸軍軍樂隊を聘する定めなるが、其れとても生徒中の有志を以て一つの樂隊を組織し出入の行進に吹奏せしめたり、扨て當日の番組は左の如し。

第一部

開會奏樂、楊楓音樂隊(一)徒手体操(二)徒步競走(三)鐵飛び競走(四)夕立競走(五)旗順闘爭(六)綱引(七)仕度競爭(八)自轉車(九)當日競走(一〇)輪体操(一一)綱引(一二)帆の御旗(一三)野戰病院(一四)虹宮舞(一五)桑摘競爭(一六)二人三脚(一七)ベースボール(一八)綱引(一九)自轉車(二〇)デルサート。

第二部

(二一)球竿体操(二二)千鳥競爭(二三)ダンス(二四)陸上短艇(二五)洗布競爭(二六)架橋競爭(二七)海戰(二八)薙刀(二九)自轉車(三〇)萬國旅行(三一)盲啞競爭(三二)兵式体操(三三)センターボール(三四)買物競爭(三五)啞鈴体操(三六)達磨(三七)花合戰(三八)自轉車(三九)和歌の浦(四〇)ダンス(四一)カーメン(四二)兒島高德(四三)木環体操(四四)春秋競爭(四五)バスケットボール。

▲篤志看護婦人會行啓

皇后陛下には澁谷村日本赤十字社內篤志看護婦人會繃帶等の作業御覧の爲め五月廿三日午前十時行啓小松宮後室、有栖川宮妃閑院宮妃伏見宮若宮妃、山階宮妃、梨本宮妃各殿下を始め奉り松方赤十字社長以下各職員英人リチャルドソン夫人米人マッギー夫人等奉迎日本赤十字救護事業の現況を奏上し繃帶製造場に臨御繃帶製造及實地の作業を御覧相成り種々御下問あり尙御手づから繃帶の材料及完製品を執らせ玉ひ二三回

御着京あらせられ扨て右繃帶製造所御覽後其隣室に陳列したる戰地に輸送すべき看護婦用の帽子御覽あらせられ御氣色麗しく御説明を聽召されし由承る尚ほ陛下には當日思召を以て金五百圓を赤十字社篤志看護婦人會に御下賜相成りたりと。

▲本願寺裏方の巡諭

本派本願寺裏方籌子と申すは九條大勳位の第二女にて、東宮妃殿下の御姉上に當らせ玉ふ御方なり、同夫人には此度露國と戰爭の事起りて以來、各地に巡錫せられ、門末其他有緣の婦人に時局に對する心得方を諭す所ありしが、四月十五日を以て上京せられ、天機を伺ひ奉り、且つ各皇族貴婦人方を訪問あらせられたり、又た滯京中令女教會婦人會に臨み一場の御演述あり、其槪略に曰く、

今度の時局に就ては畏くも天皇陛下に於かせられても日夜に宸襟を惱まさせらるゝ御事、誠に恐れ多き次第なれば我々國民たる者は婦人たりとて敢て傍觀すべきに非ず男子にも劣るまじと心がけ報國の赤誠を抽んでざるべからざる事と存じ萬一心得違ひの者なき樣に門末の婦女子を諭し且は國家の爲に死傷せられし軍人方の遺族を弔問し出征者の家族達をも訪ひ慰めばやと思ひ立西國中國より北國邊まで巡回せし事なるが當教會は當下に在りて有數なる方々の組織せられし教會なれば益す本宗二諦の教旨を重んじ國家の爲め法門の爲め全國信徒の模範となる樣盡力せられんことを希望すとの趣意なりし因に記す同裏方には深閨に生長し未だ曾て社會の風潮に接觸せられたることなき人なれども今度の時局に對し報國の誠衷禁じかたく責ては門末各寺及び信徒の婦人に對し法主の教諭せらるゝ趣旨の一層貫徹せんことに努められ客月初旬を以て佐世保に赴かれ其より佐賀長崎山口吳港廣島等を經て一旦歸山の上北陸諸縣を巡回せられしに到る處官民の歡迎をうけ、殊に隨喜の門末は一入裏方の親諭に於て感奮興起する所ありしといふ。

▲軍人家族授産婦人會

麻布廣尾なる出征軍人家族授産婦人會にては發起人賛成者交る〳〵出張して職工を取締り熱心に事業を運ばせつゝあるが職工は皆悲慘者家の妻氣に救はれたる上の仕事なれば何れも誠實に働き居れり、先頃總會を開き議決したる所によれば會の入費を月々百五十圓と見て此の金を株にて持つ事とし全株を三百株、一株を五十錢とし(此は月々の支出なり)發起人にて數十株を買請し殘の二百株は賛成者を募り割當る事となしたりと。

▲軍人家族授産場

横濱奬兵義會にては廣く有志者より寄附金を募集し此際授産場を設けて、洗濯、裁縫、其他婦人小兒等になし得らるゝ職業を軍人家族に授くるの目的を以て其方法を講究し居れりと。

▲神田共立女學校開校式

松浦伯、松井子爵等の顧問により此度元神田橋外東京府第一高等女學校跡に設立せし共立女學校は來る廿八日午後一時開校式を擧行すべしと。

▲愛國女學校の美擧

麹町區元園町の愛國女學校は昨年五月の創立にして開校日尚ほ淺きにも拘らず教授上の成績頗る良く、好評の聞ゆあり、聞く所によれば本校にては大に事局に鑑むる所あり、軍人の士女並に遺族に限り相當の職業を與へ、無月謝無束脩にて入學を許可する由、目下新入生徒募集中なり。

▲女子高等師範生徒募集

女子高等師範學校にては本年九月入學せしむべき數學、物理の專修科生徒二十六名を募集するが願書提出期は八月二十日までなり。

女學世界
夏季增刊

婦人壯烈譚

六月十五日發行

我が國民今や世界有數の大國を敵として戰ふ、出師二十萬、遼東の野到る處ろ砲火の巷ならざるなし、是れ實に空前の大役にして又非常の時たり、この非常の時に當ツて尋常の家事を營み得るもの偏に我が勇士壯烈の結果に依らすんばあらず、婦人必らずしも劍を把ツて立つを要せず、又必らずしも武邊に役するを要せず、然れども國民的戰爭の裏面には婦人も又家に在つて軍務に役するの覺悟なかるべからず、本篇壯烈譚話料陳なりと雖も此際聊か軍國の婦人に資する處あらば編者の微志酬ひたりといふべし。

記事要目

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…	金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

（内定刊數十二册 増刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	四十四錢	三十六錢	二十九錢
半頁（卅二行）	……	十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓二十八錢
一頁（六十四行）	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年六月五日發行　第四卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館發行　**日露戰爭實記**　定期增刊

第參卷

日露戰爭寫眞畫報

六月八日發行

大判（縱八寸五分 横六寸）美本

口繪卅八頁

石版色刷二枚 光澤版四頁 寫眞版及石版三十二 本文記事豐富 挿入數十

寫眞版

第一軍旅團長 淺田渡邊松永木越の四少將

第四師團長

第二軍旅團長 松村山口西島中村兒玉安東六少將

下閑院宮妃殿下 本派本願寺裏方

海戰圖 旅順と浦潮斯德及ペトロポーロスク艦の轟沈

團參謀長

第二軍 參謀長落合少將及第一第三第四師團參謀長

旅順

勝要害 川島大佐中川宮地矢代丹羽栃内奧宮六中佐井手大山二少佐ダルニー市街淮瀨中佐及定州戰の聯隊將校、韓國三開港場閉塞隊將校叢

雲參乘組員

廿四聯隊と死傷將校 奇禍に罹りし帝國軍艦韓國に於ける祝捷會と招魂祭其他重要なる寫眞十三面

第一軍司令官 奥大將大島第三師團長小川

愛國貴婦人 北白川宮妃殿下

第一軍 參謀長藤井少將及第二第十二師

韓國 京城全景

清國 文武大官

滿洲名

正價（毎月八日發行）一冊金二拾錢、六冊一圓十錢、十二冊二圓十五錢、郵税一冊二錢五厘ツヽ

畫報

- ●第二軍掩護陸戰隊上陸（着色石版）……松岡壽
- ●第三回閉塞隊之猛戰……中澤弘光
- ●敵の猾策……木村光太郎
- ●決死隊敵壘に斬込む……山中古洞
- ●最近活劇……木村光太郎
- ●敵將中猶此人あり……武内桂舟
- ●蛤蟆塘の激戰……渡邊審也
- ●普蘭店停車場破壞……桐谷洗鱗
- ●鴨綠江の壯觀……渡邊金秋

記事梗概

- ●鴨綠江の渡河戰
- ●九連城陷落
- ●鳳凰城占領
- ●第二軍遼東上陸
- ●普蘭店占領
- ●旅順口第三回封鎖
- ●大窰口掃海

戰爭實記共通前金（一ヶ月）四十七錢（三ヶ月）一圓三十五錢（六ヶ月）二圓六十五錢（一ヶ年）五圓二十錢郵税（一ヶ月）六錢五厘宛

（後付の一）

主筆 竹貫登代多君

本講義錄は三十七年度新學期より專ら中學々生の參考書たらしめ傍ら師範學生の好伴侶となり自修者には唯一の指南車たるべし平易なる言文一致體を以て。代數學は二年、三年、四年、補習の四欄に幾何學は三年、四年、五年、補習の四欄に算術と三角は之を合して一年、二年、五年、補習の四欄に分ち各學年の何れにあれば

中學課程

數學

算術及三角 全十二册

赤堀又次郎先生校訂

心學叢書

（博文館發兌）

全六册

大判和裝
正價一冊四拾錢
三冊壹圓拾五錢
全部二圓廿錢
郵稅一冊八錢

第壹編
寶卜先生安樂傳授……脇坂義堂
寶卜先生稼傳……虛白齋
齊家論……石田梅巖
里俗教誡錢湯新話……伊藤單朴
民の繁榮……脇坂義堂

第貳編
松翁道話……布施矩道
雨やどり……虛白齋
孝行になる傳授……脇坂義堂
福相になる傳授……脇坂義堂
目の前……虛白齋
勸善小路……山東指月

近日第三編發行
御代の恩澤……脇坂義堂
銀のなる木の傳授……脇坂義堂
和合長久の傳授……脇坂義堂
都鄙問答……石田梅巖

倫理學大系

獨逸パウルセン氏原著 蟹江文學博士藤井文學士深作文學士合譯（博文館發兌）

全壹冊洋裝上製
總クロース金字入
正價一圓八十錢
小包料金十五錢

序論 倫理學とは何ぞや
第一編 倫理學史
第一章●希臘人の人生觀及倫理學……
第六章●利己主義及び利他主義……
第七章●德及び幸福……
第八章●道德と宗教との關係……

（後付の二）

第二編　倫理原理

第三編　德論及本務論

家庭の讀み物

巖谷小波山人著（五十七編）

世界お伽ばなし **二子草紙**

正價八錢―郵稅二錢

二人の兄弟は、罪もないのに地に埋められ、そこから生へた柳の木は、伐つて燒かれて灰になり、その粉が川で金魚になり、金魚は、露を吸て又兄弟となる、其變幻の奇にして妙なる、一度讀めば寢食を忘れ、再讀三讀終に吾あるを忘れん

木村小舟君著（廿二編）

敎訓繪ばなし **衛生の卷**

正價五錢―郵稅二錢

これから追々夏向になりまして色々惡い病氣が流行ります、殊に軍國の少年讀者は衛生を重んじて、身体の壯健でなければはなりません、本書は夏期の衛生心得をおもしろく書いたものです

山本九馬亭著

竹本攝津大椽　竹本彌太夫贊助

淨瑠璃通解

近日　第六編發行

●卅三間堂棟由來（平太郞住家の段）
●攝津合邦辻（合邦住家の段）
●加賀見山舊錦繪（草履打の段）
●加賀見山舊錦繪（長局の段）
●加賀見山舊錦繪（又助住家の段）
●彦山權現誓助劒（お菊返り討の段）
●彦山權現誓助劒（瓢簞棚の段）
●彦山權現誓助劒（毛谷村の段）
●四ッ谷怪談（伊右衛門住家の段）
●岸姫轡鏁（朝夷奈上使の殿）

第一編　壇浦兜軍記―伊賀越道中双六―伊賀越乘掛合羽―染模樣妹脊門松―新版歌祭文
第二編　菅原傳授手習鑑―近頃河原の逢引―傾城戀飛脚
第三編　桂川連理柵―源平布引の瀧―形名歌島臺―本朝二十四孝―關取千兩幟
第四編　近江源氏先陣舘―義經腰越狀―鎌倉三代記―日本賢女鑑―八陣守護城―姫子松子の日の遊
第五編　奧州安達ヶ原―金毘羅御利生記―花の上野譽の石碑―薫樹累物語―増補比翼塚―伽羅千代萩

全部十二冊和裝
正價一冊卅五錢
全部三圓八十錢
郵稅一册六錢宛

（博文館發兌）

文學士 久

近日 第

東洋通史

中古＝漢族繁榮時代

唐の末世　五代十國の世
德宗の失政　梁唐の交爭
二王の變　後唐莊宗の末運
憲宗の治　契丹の勃興

第一卷＝三皇五帝の世―三代の興亡―春秋の世……
第二卷＝國の世―先秦漢の人文―秦の帝業楚漢の角逐……
第三卷＝西漢の世―兩漢の

全部十二冊和裝
正價一冊五十錢
全部五圓
郵稅一冊八錢宛

（後付の五）

（後付の六）

つ算術の最も卑近なる者より始め漸次其奥義に達せしむるの方針に依り諸學者の講習に資給せり、故に本書は材料を專ら算術の範圍に採り其中最も重大なる問題を撰み問題の解釋は最も少く普通に知られたる方法に依り其說明は通俗平易を主とせり且つ本書の特點は數學專門以外の讀者を得んと務めたるにあり由來數學は兎角世人に喜はれさるが如し是れ數學なる者丶眞相か世に誤解されつゝあるに由れり本書は此誤解を正さん爲め極めて一般の健全なる理解力、成熟せる判斷力に訴ふ所頗る多し是れ本書を購讀する人の大に留意すべき所なりとす

理學士藤田外次君著

新撰數學講義

上卷正價卅八錢　郵稅六錢

發兌元　東京本町　博文館

科全書

の規則方針等は時に變化あるを以て往々にして舊時の規則狀況等を錄して誤謬を傳ふるものあり此書は最近學界の趨勢に見て遊學者出京前后の注意、學校の撰擇、入學成功の訣、卒業後處世上の方針、等を懇切に指導し又遍ねく官私の諸學校を歷訪し各校の狀況規則學課等より入學試驗問題に至る迄盡く最近のものを收錄したれば現下の遊學者に取りて無上の案內書たり……（博文館發兌）

前田默鳳道人著

吟香居士、學海居士、鴻齋居士、藍田老僊、鐵軒居士、各先生　批評

東亞新字

全壹冊洋裝大判
正價金三十錢
郵稅金六錢

歐洲の文物東漸以來東亞の文學益多事にして殊に二十世紀に至りては世人皆東亞文學の一大進運を企望して息まざる所なり默鳳道人は今世の一奇人にして其金石學に精通し書法に熟達せらるゝは世人の普く認むる所なり然れ共道人は只能書のみを以て足れりにする者にあらず其志たる從來東亞に行はるゝ所の數萬の漢字を悉く改省して其作法を簡易にし以て東洋文學の一大進運を企圖せらるゝにあり是を以て十數年間蟄默して專ら其改造に從事し今や其稿粗ぼ成る本館請ふて之を世に公にす我東亞の文學に志ある士人は勿論荷も公私の實務に從事せらるゝ諸君は此書に依て作字の方法を講究せらるれば東亞文學の一大進步を圖るに於て其益する所鮮少ならざるのみならず實務を敏捷ならしむる上に於て其裨益あるや大なるべし此を二十世紀の一大著書と謂ふも敢て過言にあらざるべし……（博文館發兌）

（後付の七）

女學世界
（明治参拾七年六月五日發行）第四巻第七號（明治卅参年十弐月廿五日第参種郵便物認可）

（定價金弐拾錢）